

maximum-repeats="300"

吾輩は猫である

吾輩は猫である

夏目漱石

【テキスト中に現れる記号について】

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、底本のページと行数）

（例）へっつい「#へっつい」に傍点

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始である。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つている。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽せばくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのが自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。い。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考へ付いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであると決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しむ。そこを我慢して無理やりに行つて行くとようやくの事で何とか人間臭い所へ出た。ここへ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなくなつたなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れぬのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつてゐる。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて来るといふ始末でもう一刻の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へとあるいて行く。今から考へるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいなながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ

向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても御台所へ上つて来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せぬ事がない。職業は教師だそうだが、学校から帰ると終日書齋に這入つたがりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せてゐる。しかし実際はうちのような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない不活潑な徴候をあらわしている。その癖は大飯を食う。大飯を食つた後でタカジャスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひるげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないと。彼は友達に来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構ひ手がなかつたからやむを得ないのである。その後いろいろの経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い日は縁側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょに寝る事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一箇へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出してどうか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますが最後大変な事になる。小供は、ことに小さい方が質がわるい。猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出して来る。現にせんだつてなどは物指で尻をたたき叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればするほど、彼等是我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。ことに吾輩が時々同食する小供のごときに至つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつつい「#へつつい」に傍点の中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出ししようものなら家内総がかりで追い廻して迫書を加える。この間もちよつと置で爪を磨いたら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が願えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言つておられる。白君は先日玉のような子猫を四産産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行って四産ながら棄てて来たそうだが、白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとも議論と思つた。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解してないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鰻の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴へて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食ひ得べきものを奪つてしまつてゐる。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩は教師の家に住んでゐるだけ、こんな事に関するやうな君よりもむむしうの楽天である。ただその日その日がかうにか送られればよい。いくら人間だつて、そういうつても采える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したが。俳句をやつてほととぎす「#ほととぎす」に傍点へ投書をしたり、新体詩を明星「#明星」に傍点へ出したり、間違いだらけの英文をいかたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられてゐるにも聞せず一向平気なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰つて来た。何を買つて来たのかと思つと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から自分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいてゐる。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思つたものか、ある日その友人で美字とかをやつてゐる人が来た時に下のような話をしているのを聞いた。

「どうも甘くかけないものだね。人を見ると何でもないようだが自ら筆をとつて見ると今更のようにならずに感ずる。これは主人の述懐である。なるほど詐りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越しに主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで画がかける訳のものではない。昔し以太利の大家アンドレア・デル・サルトルが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思つたらちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトルがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。なるほどこりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗に感心してゐる。金縁の裏には嘲けるような笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側に出て心持善く昼寝をしていたら、主人が例になく書斎から出て来て吾輩の後ろで何かしきりにやっている。ふと眼が覚めて何をしてるかといふばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んでいた。吾輩はこの有様を見て覚え失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲擧せられた結果としてまず手初めに吾輩を写生しつづつあるのである。吾輩はすでに十分寝た。欠伸がしたくてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執っているのを動いては気の毒だと思つて、じつと辛棒しておつた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つてゐる。吾輩は猫として決して上乗の出来ではない。背といふ毛並といふ顔の造作といふあえて他の猫に勝るとは決して思つておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつあるような妙な姿とは、どうしても思われぬ。第一色が違つた。吾輩は波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に漆のごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑つべからざる事実と思つた。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もつともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思つた。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおつてやりたいと思つたが、さつきから小便が催つてゐる。身内の筋肉はむずむずする。最早一分も猶予が出来ぬ仕儀となつたから、やむをえず失敬して両足を前へ存分にして、首を低く押し出してあゝと大なる欠伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしくしていても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊したのだから、ついでに裏へ行って用を足そうと思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜたような声をし、座敷の中から「この馬鹿野郎」と怒鳴つた。この主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わりは失敬だと思つた。それも平生吾輩が彼の背中へ乗る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれなかつた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て来て寝てやらずにこの先どこまで増長するか分らない。

我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園がある。広くはないが瀟洒とした心持ち好く日の当る所だ。うちの小供があまり騒いで案々昼寝の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつでもここへ出て浩然の氣を養つのが例である。ある小春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快よく一睡した後、運動かたがたこの茶園へと歩を運ばした。茶の木を一本一本嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づくのも一向心付かざるごとく、また心付くも無頓着なると、大きな躰をして長々と体を横へて眠つてゐる。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平気に睡られるものかと、吾輩は窃かにその大胆なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に投げかけて、きらきらする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出すように思われた。彼は猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して余念もなく眺めてゐると、静かなる小春の風が、杉垣の上から出たる梧桐の枝を軽く誘つてばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真丸の眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重する琥珀というものよりも遙かに美しく輝いてゐた。彼は身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、御めえ「#「御めえ」に傍点」は一体何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠つてゐるので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶をしないと険呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を装つて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動しておつた。彼は大に輕蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきらめらあ。全てどこに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこの教師の家にいるのだ」「どうせそんな事だろ」と思つた。いやに瘠せてるらしい、豊かに暮しただけに氣焔を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われぬ。しかしその膏切つて肥満してゐるところを見ると御馳走を食つてゐるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかつた。「これあ車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いはかりでちつとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつてゐる奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを試してみよつと思つて左の問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどつちがえらいだろつ」

「車屋の方が強いに極つていらあな。御めえ」#「御めえ」に傍点」のうち」#「うち」に傍点」の主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強そうだ。車屋にいろと御馳走が食えると見えるね」

「何におれ」#「おれ」に傍点」なんざ、どこの国へ行つたつて食い物に不自由はしねえつもりだ。御めえ」#「御めえ」に傍点」なんかも茶島ばかりぐるぐる廻つていねえで、ちつと」のの後へくつ付いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違へるよつに太れるぜ」

「追つてそつ願う事にしよう。しかし家は教師の方が車屋より大きいのに住んでゐるよつに思われる」

「籠棒め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

彼は大に肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだよつな耳をしきりとびく付かせてあららかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。

その後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相当の気焔を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶盅の中で寝転びながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話しをさも新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の「ごとく質問した。「御めえ」#「御めえ」に傍点」は今までに鼠を何匹とつた事がある。智識は黒よりも余程発達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この間に接した時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事実は事実で詐る訳には行かないから、吾輩は「実はとうとうとろつと思つてまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先からびんと突張つて長い髭をびりびりと震わせて非常に笑つた。元来黒は自慢をする丈にどこか足りないところがあつて、彼の気焔を感じたように咽喉をころころ鳴らして謹聴していればなほはだ御しやすかたである。吾輩は彼と近付になつてから直にこの呼吸を飲み込んだからこの場合にもなまじい己れを弁護してますます形勢をわるくするのも愚である、いつその事彼に自分の手柄話をしゃべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこでおとなしく「君などは年が年であるから大分とつたろつ」とそそのかして見た。果然彼は墙壁の欠所に呐喊して来た。「たんとでもねえが三四十はとつたろつ」とは得意なる彼の答であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるがいたち」#「いたち」に傍点」つてえ奴は手に合ねえ。一度いたち」#「いたち」に傍点」に向つて酷い目に逢つた。「へえなるほど」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云つ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這い込んだら御めえ」#「御めえ」に傍点」大きないたち」#「いたち」に傍点」の野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ。「ふん」と感心して見せる。「いたち」#「いたち」に傍点」つてけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生つて気で追つかけてとつと泥溝の中へ追い込んだと思ひねえ。「うまくやつたね」と喝采してやる。「ところが御めえ」#「御めえ」に傍点」いさつてえ段になると奴め最後つ尻をこきやがつた。臭えの臭くねえのつてそれからつてえものはいたち」#「いたち」に傍点」を見る胸が悪くならあ。彼はここに至つてあかかも去年の臭気を今なお感ずることく前足を揚げて鼻の頭を二三遍まで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやると思つて「しかし鼠なら君に睨まれては百年目だろつ。君はあまり鼠を捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろつ。黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を呈出した。彼は啜然として大息して「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて一てえ人間ほどぶてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番じゃ誰が捕つたか分らねえからそのたんび」#「たんび」に傍点」に五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹円五十銭くらい儲けていやがる癖に、碌なものを食わせた事もありやしねえ。おい人間てもあ体の善い泥棒だぜ」さすが無学の黒もこのくらいは理窟はわかると見えてすこぶる怒つた容子で背中の毛を逆立てている。吾輩は少々気味が悪くなつたから善い加減にその場を胡魔化して家へ歸つた。この時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食うよりも寝ていた方が氣楽でいい。教師の家にいると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩画において望のない事を悟つたものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

と云う人に今日の会で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云うがなるほど通人らしい風采をしている。こう云う質の人は女に好かれるものだから放蕩をしたと云うよりも放蕩をするべく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あの人の妻君は芸者だそうだが、羨ましい事である。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないので無理に進んでやるのである。あかかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので到底卒業する氣づかいはない。しかるにも聞せず、自分だけは通人だと思つて済んでいる。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るといふ論が立つたら、吾輩も一廉の水彩画家になり得る理窟だ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がましであると同じように、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

「#引用文、(一)のまま」

通人論はちよつと首肯しかねる。また芸者の妻君を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく自知の明あるにも聞せずその自惚心はなかなか抜けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いている。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、そこらに抛つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けてくれた夢を見た。さて額になつたところを見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。これなら立派なものだと独りで眺め暮らしていると、夜が明けて眼が覚めてやはり元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつてしまつた。

「#引用文、(一)のまま」

主人は夢の裡まで水彩画の未練を背負つてあるいて見ると見える。これでは水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡の美字者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈頭第一に「画はどうかね」と口を切つた。主人は平気な顔をして「君の忠告に従つて写生を力めているが、なるほど写生をする今まで氣のつかなかつた物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔しから写生を主張した結果今日のように発達したものとされる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくび「#「おくび」に傍点」にも出さないで、またアンドレア・デ

ル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ「#「嘘」の「口へん」の代わりに「言べん」、「やべん」わられた事に気がつかない。「何が」君のしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造した話だ。君がそんなに真面目に信じようとは思わなかつた八八八八」と大喜悦の体である。吾輩は椽側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる事が記さるであろうかと予め想像せざるを得なかつた。この美学者はこんな好加減な事を吹き散らして人を担ぐのを唯一の樂にしている男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線にいかなる響を伝えたかを毫も顧慮せざるものごとく得意になつて下のような事を饒舌した。「いや時々冗談を言う人と人が真に受けるので大に滑稽的美感を挑撥するのは面白い。せんだつてある学生にニコラス・ニツクルペーがギボンに忠告して彼の一世の大著述する伝国革命史を伝説で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話しを通り返したのは滑稽であつた。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであつたが、皆熱心にそれを傾聴しておつた。それからまだ面白い話がある。せんだつて或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーンの話が出たから僕はあれは歴史小説の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬところは鬼気人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐つてゐる知らんと云つた事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だと言つた。それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおられないという事を知つた。神経胃弱性の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな出鱈目をいつてもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くのは差支ない、ただ化の皮があらわれた時は困るじやないかと感じたものごとくである。美学者は少しも動じない。「なにその時や別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云つてけらけら笑つてゐる。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙つて日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから画をいかにも駄目だという目付で「しかし冗談は冗談だが画というものは實際むずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみ「#「しみ」に傍点」を写せと教えた事があるそうさ。なるほど雪隠などに這入つて雨の漏る壁を余念なく眺めてゐると、なかなかうまい模様画が自然に出来てゐるぜ。君注意して写生して見給えきつと面白いものが出来るから」「また欺すのだから」「いえこれだけはたしかだよ。實際奇警な話じやないか、ダ・ヴィンチでもいいそんな事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後跋になつた。彼の光沢ある毛は漸々色が褪めて抜けて来る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつてゐる。ことに著るしく吾輩の注意を惹いたのは彼の元気の消沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら「いたち」「#「いたち」に傍点」の最後尻と肴屋の天秤棒には懲々だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢のごとく散つてつくばい「#「つくばい」に傍点」に近く代る代る花卉をこぼした紅白の山茶花も残りなく落ち尽した。三間半の南向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯の吹かない日はほとんど稀になつてから吾輩の昼寝の時間も狭められたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書齋へ立て籠る。人が来ると、教師が厭だ厭だという。水彩画も滅多にかかない。タカジャスターゼも機能がないつてやめてしまつた。小供は感心に休まないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食わないから別段肥りもしないが、まずまず健康で跛にもならずその日その日を暮してゐる。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌いである。名前はまだつけてくれないが、欲をいつても際限がないから生涯この教師の家で無名の猫で終るつもりだ。

二

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が高く感ぜらるるのがあるがたい。

元朝早々主人の許へ一枚の絵端書が来た。これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、下部を深緑りで塗つて、その真中に一の動物が蹲踞してゐるところをパステルで書いてある。主人は例の書齋でこの絵を、横から見たり、豎から見たりして、うまい色だなという。すでに一応感服したものだから、もうやめにするかと思つとやはり横から見たり、豎から見たりしてゐる。からだを拗じ向けたり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来たりして見ている。早くやめてくれないと膝が揺れて險呑でたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇しくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだらうと云う。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書かと思ひながら、寝ていた眼を上品に半ば開いて、落ちつき払つて見ると紛れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちゃんと整つて出来ている。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じやない吾輩である事が判然とわかるように立派に描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思つと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると言ふ事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは到底吾輩猫属の言語を解し得るくらいに天の恵に浴しておらん動物であるから、残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断つておきたいが、元來人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもつて吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の槽から牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはありがちな事でもあろうが、はたから見てもあまり見つともいい者じやない。いくら猫だつて、その粗末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一列、平等無差別、どの猫も自家固有の特色などはないようであるが、猫の社会に這入つて見るとなかなか複雑なもので十人十色という人間界の話はそのままここにも応用が出来るのである。目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違つ。鬚の

張り具合から耳の立ち挨拶、尻尾の垂れ加減に至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌い、粹無粋の数を悉くして千差万別と云つても差支えないくらいである。そのように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいつて、空ばかり見ているものだから、吾輩の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出来ぬのは気の毒だ。同類相求むとは昔しからある語だ。餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事ならやはり猫でなくてはならぬ。いくら人間が発達したつてこればかりは駄目である。いわんや實際をいうと彼等が自ら信じていることくらゐも何ともないのだからなおさらむずかしい。またいわんや同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解するというのが愛の第一義であるということすら分らない男なのだ。彼は性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向つて口を開いた事がない。それで自分だけはすこぶる達観したような面構をして居るのはちよつとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた様子もなく今年も征露の第二回目だから大方熊の画だろつなどと気の知れぬことをいつてすましているのもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら考へて居ると、やがて下女が第二の絵端書を持って来た。見ると活版で舶来の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫じゃ猫じゃを躍つて居る。その上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々と書いて、右の側に書を読むや猫の春一日という俳句さえ認められてある。これは主人の旧門下生より来たので誰が見たつて一見して意味がわかるはずであるのに、迂闊な主人はまだ悟らないと見えて不思議そうに首を捻つて、はてな今年も猫の年かなと独言を言った。吾輩がこれほど有名になつたのを未だ気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持って来る。今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らに乍恐縮かの猫へも宜しく御伝声奉願上候とある。いかに迂闊な主人でもこう明らかに書いてあれば分るものと見えてようやく気が付いたようにフンと言いながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までは違つて多少尊敬の意を含んで居るよりに思われた。今まで世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新局面を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へばこのくらいの眼付は至当だろつと考へる。

おりから門の格子がチリン、チリン、チリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次に出る。吾輩は着屋の梅公がくる時のほかは出ない事に極めているのだから、平気で、ものごとく主人の膝に坐つておつた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄關の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれほどの勇氣も無い。いよいよ牡蠣の根性をあらわしている。しばらくすると下女が来て寒月さんがおいでになりましたという。この寒月という男はやはり主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。この男がどういふ訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋つて居る女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそうな、凄いな文句ばかり並べては帰る。主人のようなしなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話しをしに来るのからして合点が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのはなお面白い。

「しばしば御無沙汰をしました。実は去年の暮から大に活動しているのですから、出ようと思つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見たよな事をいう。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引張る。この羽織は木綿でゆき「#」ゆき「#」に傍点「#」が短かい、下からべんべら者が左右へ五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違つた方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて?」「その、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前歯で噛み切つたつたらぼろりと齒が欠けましたよ」「椎茸で前歯が欠けるなんぞ、何だか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「ああその猫が例ですか、なかなか肥つて居るじゃありませんか、それなら車屋の黒にだつて負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒月君は大に吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢そうに頭をぼかぼかなくる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話をもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピアノの伴奏でなかなか面白かつたです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものですね。二人は女で私の中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思ひました」「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は羨ましそうに問いかける。元来主人は平常枯木寒巖のような顔付はしているものゝ実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中に一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱「#」七割弱「#」に傍点「#」には恋着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは真理だと感心したくない男である。そんな浮気な男が何故牡蠣の生涯を送つて居るか云うのは吾輩猫などには到底分らない。或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなくて臆病な性質だからだとも云う。どつちにしたつて明治の歴史に關係するほどな人物でもないのだから構わない。しかし寒月君の女連れを羨ましが尋ねた事だけは事実である。寒月君は面白そうに口取の蒲鋒を箸で挟んで半分前歯で食い切つた。吾輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方じゃありません」と余所余所しい返事をする。「ナル」と主人は引張つたが「ほど」を略して考へている。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか「どうも好い天気ですな、御閑ならごいっしょに散歩でもしましょうか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と促がして見る。主人は旅順の陥落より女連の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたがようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出るとしよう」と思ひ切つて立つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の記念とかいふ二十年來着古した結城紬の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だつて、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつて日に透かして見ると裏からつぎ「#」つぎ「#」に傍点「#」を当てた針の目が見える。主人の服装には師走も正月もない。ふだん着も余所ゆきもない。出るときは懷手をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、有つても面倒だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われぬ。

兩人が出て行ったあとで、吾輩はちよつと失敬して寒月君の食い切った蒲鉾の残りを頂戴した。吾輩もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕以後の猫が、グレイの金魚を偷んだ猫くらいの資格は充分あると思う。車屋の黒などは固より眼中にない。蒲鉾の一切くらい頂戴したって人からこれ云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間食をするという癖は、何も吾等猫族に限つた事ではない。うちの御三などはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬してゐる。御三ばかりじゃない現に上品な仕付を受けつつあると細君から吹聴せられてゐる小児ですらこの傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間に對い合つて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う麵麩の幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちよつと砂糖壺が卓の上に置かれて匙さえ添えてあつた。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少らく兩人は睨み合つていたが、大きいのがまた匙をとつて一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見てゐる間に一杯一杯と重なつて、ついには兩人の皿には山盛の砂糖が堆くたつて、壺の中には一匙の砂糖も余つておらんようになったとき、主人が寝ぼけ眼を擦りながら寢室を出て来てせつかくしゃくい出した砂糖を元のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見ると、人間は利己主義から割り出した公平という念は猫より優つてゐるかも知れぬが、智慧はかえつて猫より劣つてゐるようだ。そんなに山盛にしないうちに早く嘗めてしまえばいいと思つたが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から黙つて見物してゐた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩行いたものか、その晩遅く歸つて来て、翌日食卓に就いたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拝見していると、主人はだまつて雑煮を食つてゐる。代えては食ひ、代えては食つ。餅の切れは小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切れを椀の中へ残して、もうよそつと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り廻つて得意なる彼は、濁つた汁の中に焦げ爛れた餅の死骸を見て平氣ですましてゐる。妻君が袋戸の奥からタカジャスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」といふ。「でもあなた澱粉質のものには大變功能があるそうですから、召し上つたらいいでしょう」と飲ませたが、主人は「澱粉だつて何だろつが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつばい」と細君が独言のようにつつ。「厭きつばいのじゃない薬が利かんのだ」とそれだつてせんだつてじゅうは大變によく利くとおつしやつて毎日毎日上つたじやありませんか」「こないだうちが利いたのだよ、この頃は利かないのだよ」と對句のような返事をする。「そんなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある薬でも利く氣遣いはありません、もう少し辛防がよくなくつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣た違つて直らないわねえ」とお盆を持つて控えた御三を顧みる。「それは本当のところでございます。もう少し召し上つてご覧にならないと、とても善い薬か悪い薬かわかりません」と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいい、飲まんのだから飲まんのだ、女なんか何がわかるものか、黙つていゝ」「ごつせ女ですわ」と細君がタカジャスターゼを主人の前へ突き付けて是非詰腹を切らせようとする。主人は何にも云わず立つて書齋へ這入る。細君と御三は顔を見合せてにやにやと笑つ。こんなとき後からくつ付いて行つて膝の上へ乗ると、大變な目に逢わされるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云う人の本を披いて見ておつた。もしそれが平常の通りわかるならちよつとえらいところがある。五六分するとその本を叩き付けるように机の上へ抛り出す。大方そんな事だろつと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して下のよつな事を書きつけた。

「#(こ)より引用文、本文より2字下げ」

寒月と、根津、上野、池の端、神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様の春着をきて羽根をついてゐた。衣装は美しいが顔はすこぶるまずい。何となくうちの猫に似てゐた。

「#引用文、(こ)より」

何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よさそうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さえ刺つて貰やあ、そんなに人間と異つたところはありやしない。人間はこつ自惚れてゐるから困る。

「#(こ)より引用文、本文より2字下げ」

宝丹の角を曲るとまた一人芸者が来た。これは背のすらりとした撫肩の恰好よく出来上つた女で、着ている薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひながら「源ちゃん昨夕は つい忙がしかつたもんだから」と云つた。ただしその声は旅鴉のごとく皸枯れておつたので、せつかくの風采も大に下落したように感ぜられたから、いわゆる源ちゃんなるものいかなる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手のまま御成道へ出た。寒月は何となくそわそわしてゐることく見えた。

「#引用文、(こ)より」

人間の心理ほど解し難いものはない。この主人の今の心は怒つてゐるのだから、浮かれてゐるのだから、または哲人の遺書に一道の慰安を求めつつあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑してゐるのか、世の中へ交りたいのだから、くだらぬ事に肝癢を起してゐるのだからさつぱり見当が付かぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。食いたければ食ひ、寝たければ寝る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されぬ自己の面目を暗室内に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫属に至

ると行住坐臥、行屎送尿ことごとく真正の日記であるから、別段そんな面倒な手数をして、己れの真面目を保存するには及ばぬと思つ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事だ。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

神田の某亭で晚餐を食う。久し振りで正宗を二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩酌が一番だと思つ。タカジャスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

「#引用文、(一)まで」

無暗にタカジャスターゼを攻撃する。独りで喧嘩をしているよつだ。今朝の肝癪がちよつとこへ尾を出す。人間の日記の本色はこつこつ辺に存するのもかも知れない。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

せんだつて は朝飯を廃すると胃がよくになると云つたから二三日朝飯をやめて見たが腹がぐくぐく鳴るばかりで機能はない。 は是非香の物を断てと忠告した。彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物にある。漬物さえ断れば胃病の源を涸らす訳だから本復は疑なしという論法であつた。それから一週間ばかり香の物に箸を触れなかつたが別段の験も見えなかつたから近頃はまた食ひ出した。×に聞くとそれは按腹揉療治に限る。ただし普通のはゆかぬ。皆川流という古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出来る。安井息軒も大変この按摩術を愛していた。坂本竜馬のような豪傑でも時々治療を受けたと云うから、早速上根岸まで出掛けて揉まして見た。ところが骨を揉まなければ癒らぬとか、臟腑の位置を一度顛倒しなければ根治がしにくいとかいつて、それはそれは残酷な揉み方をやる。後で身体が綿のようになつて昏睡病にかつたような心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかつた。B氏は横膈膜で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやつて御覧という。これも多少やつたが何となく腹中が不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまつ。忘れまいとする横膈膜が気になつて本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭がこの体を見て、産氣のついた男じゃあるまいし止すがいいと冷かしたからこの頃は廃してしまつた。C先生は蕎麦を食つたらよからうと云うから、早速かけ「#「かけ」に傍点」ともり「#「もり」に傍点」をかわるがわる食つたが、これは腹が下るばかりで何等の機能もなかつた。余は年来の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて駄目である。ただ昨夜寒月と傾けた三杯の正宗はたしかに利目がある。これからは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

「#引用文、(一)まで」

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球のように間断なく変化している。何をやつても永持のしない男である。その上日記の上で胃病をこんな心配している癖に、表向は大に瘦我慢をするからおかしい。せんだつてその友人で某という学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならぬと云う議論をした。大分研究したものと見えて、条理が明晰で秩序が整然として立派な説であつた。氣の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほどの頭脳も学問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでいる際だから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保つと思つた者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つたような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたので主人は黙然としていた。かくのごとく虚栄心に富んでいるもの、実際にはやはり胃弱でない方がいいと見えて、今夜から晩酌を始めるといふのはちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をあんなにたくさん食つたのも昨夜寒月君と正宗をひつくり返した影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒のように横丁の肴屋まで遠征をする氣力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛のように贅沢は無論云える身分でない。従つて存外嫌は少ない方だ。小供の食いこぼした麵麩も食うし、餅菓子の「#「餡」のつくりが「溜」の右部分、ちよつともなめる。香の物はすこぶるまずいが経験のため沢庵を二切ばかりやつた事がある。食つて見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌だと言つのは贅沢な我儘で到底教師の家にいる猫などの口にすべきところでない。主人の話によると仏蘭西にバルザックという小説家があつたさうだ。この男が大の贅沢屋で、もつともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いてある小説中の人間の名をつけよつと思つていろいろつけて見たが、どうしても氣に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼ねて自分の苦心している名を目付やうという考えだから往來へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩いている。ところがやはり氣に入つた名がない。友人を連れて無暗にある。友人は訳がわからずにくつ付いて行く。彼等はずいぶん朝から晩まで巴理を探索した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看板に「カーカス」という名がかいてある。バルザックは手を拍つて「これだこれだこれに限る。カーカスは好い名じゃないか。カーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分のない名が出る。Zでなくてはいいかん。Z Marcusは実にうまい。どうも自分で作つた名はうまくつたつもりでも何となく故意とらしいところがあつて面白くない。ようやくの事で氣に入つた名が出来た」と友人の迷惑はまるで忘れて、一人嬉しがつたというが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理を探索しなくてはならぬようでは随分手数のかかる話だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣の主人を持つ身の上ではとてもそんな氣は出ない。何でもいい、食えさえすれば、という氣になる

のも境遇のしからしむるところである。だから今雑煮が食いたくなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に食つておこうという考から、主人の食い剩した雑煮がもしや台所に残つてはいはずまいかと思ひ出したからである。……台所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着している。白状するが餅というものは今まで一辺も口に入れた事がない。見るとうまそうにもあるし、また少しは気味がわるくもある。前足で上にかかつている菜葉を掻き寄せ、爪を見ると餅の上皮が引き掛つてねばねばする。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時のような香がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。御三は暮も春も同じような顔をして羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおつしやる宛さん」を歌っている。食つとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅というものを知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫ながらの真理を感得した。「得難き機はすべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。否椀底の様子を熟視すればするほど気味が悪くなつて、食つのが厭になつたのである。この時も御三でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜気もなく椀を見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかつたらう。ところが誰も来ない、いくら「#」の「壽」の代わりに「厨」、カニ「踏」していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗き込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体を重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸ばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、大抵なものなら噛み切れる訳だが、驚いた！もうよかろうと思つて歯を引こうとすると引けない。もう一辺噛み直そうとすると動きがとれない。餅は魔物だなど瘡ついた時はすでに遅かつた。沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦慮するたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動かなくなる。歯がえはあるが、歯がえがあるだけでどうしても始末をつけない。美学者迷亭先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといった事があるが、なるほどうまい事をいつたものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごとく尽末来際方のつく期はあるまいと思われ。この煩悶の際吾輩は覚えず第二の真理に達した。「すべての動物は直覺的に事物の不適を予知す」真理はすでに二つまで発明したが、餅がくつ付いているので毫も愉快を感じない。歯が餅の肉に吸収されて、抜けるように痛い。早く食い切つて逃げないと御三が来る。小供の唱歌もやんだようだが、きつと台所へ駆け出して来るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐるぐる振つて見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾は餅と何等の関係もない。要するに振り損の立て損の、寝かし損である気が付いたからやめた。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周囲を撫で廻す。撫でたくらいで割り切れる訳のものではない。今度は左の方を伸して口を中心として急劇に円を劃して見る。そんな呪いで魔は落ちない。辛防が肝心だと思つて左右交る交るに動かしたがやはり依然として歯は餅の中にぶら下つている。ええ面倒だと両足を一度に使つて、すると不思議な事にこの時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じがする。猫であるが、あるまいがこうなつた日にあつたものか、何でも餅の魔が落ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中引つ掻き廻す。前足の運動が猛烈なのでややとすると中心を失つて倒れかかる。倒れかかるたびに後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳にも行かなくて、台所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つていられたものだと思つた。第三の真理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能わざるところのものを為し能う。之を天祐という」幸に天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦つていて、何だか足音が少し足りない。とつとつ小供に見付かれた。「あら猫が大変だと思つて、いよいよ躍起となつて台所を駆け廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念だが天祐が少し足りない。とつとつ小供に見付かれた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊つている」と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云つのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せてやうにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱つた。ようやく笑いがやみそうになつたら、五つになる女の子が「御があ様、猫も随分ね」といったので狂瀾を既倒に何とかするといふ勢でまた大変笑われた。人間の同情に乏しい実行も大分見聞したが、この時ほど恨めしく感じた事はなかつた。ついに天祐もどつかへ消え失せて、在来の通り四つ這になつて、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすがに見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつてやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせようじやありませんかかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまつている。「取つてやらんと死んでしまつ、早くとつてやれ」と主人は再び下女を顧みる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起きた時のように、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君じやないが前歯がみんな折れるかと思つた。どうも痛い痛くないのつて、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けるけるとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入つてしまつておつた。

こんな失敗をした時には内にて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いっその事を易えて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようとして台所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦しい顔を見たり、御三の険突を食つて気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問しているいろいろな話をする。すると、いつの間にか心が晴々として今までの心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ変わったような心持になる。女性の影響というものは実に莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椀側に坐つてくる。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよいちよい振る景色なども到底形容が出来ん。ことによく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも聞らず、天鷲毛を欺くほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動することくに思われる。吾輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椀を下りる。赤い首輪につけた鈴がちらちらと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心

している間に、吾輩の傍に来て「あら先生、おめでとう」と尾を左りへ振る。吾等猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断つた通りまだ名はないのであるが、教師の家にいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云われて満更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧が出来ましたね」「ええ去年の暮御師匠さんに買って頂いたの、宜いでしょう」とちやらちやら鳴らして見せる。「なるほど善い音ですな、吾輩などは生れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げのよ」とまたちやらちやら鳴らす。「いい音でしょう、あたし嬉しいわ」とちやらちやらちやら鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がっていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪気なものである。「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だつて笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものが無いように思っているのは間違いない。吾輩が笑うのは鼻の孔を三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なね。御師匠さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知っていますかね。その御身分は何なんです。いずれ昔は立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾き出す。「宜い声でしょう」と三毛子は自慢する。「宜いよのだが、吾輩にはよくわからん。全体何というものでですか」「あれ？あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの……………御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きていくくらいだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間が抜けたようだが別に名答も出て来なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かつたんだつて。いつでもそうおつしやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて？」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいつた……………」なるほど。少し待つて下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……………」「あつた、あつた、御祐筆の……………」「よしよし分りました天璋院様のでしよう」「ええ」「御祐筆の……………」「そうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「そうそう間違つた。妹の御嫁に入つた先きの」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分つたでしょう」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰るところ天璋院様の何になるんですか」「あなたもよつぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだつて、先つきつから言つてらんじゃありませんか」「それはすつかり分つているんですがね」「それが分りさえすればいいでしょう」「ええ」と仕方がないから降参をした。吾々は時とすると理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱつたりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらつしやるから、私し帰るわ、よくつて？」わるいと云つたつて仕方がない。「それじゃまた遊びにいらつしやい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くつてよ。どうかしやしなくつて」と心配そうに問いかける。まさか雑煮を食つて踊りを踊つたとも云われぬいから、何別段の事もありませんが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話してもしたら直るだろうと思つて実は出掛けて来たのですよ」「そつ。御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元氣もさつぱりと回復した。いい心持になつた。帰りに例の茶園を通り抜けようと思つて霜柱の融けかかつたのを踏みつけながら建仁寺の崩れから顔を出すとまた車屋の黒が枯菊の上に背を山にして欠伸をしている。近頃は黒を見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質として他が己れを軽侮したと認むるや否や決して黙つていない。「おい、名なしの権兵衛、近頃じゃ乙う高く留つて居るじゃあねえか。いくら教師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面らあるねえ。人つけ面白くもねえ。黒は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到底分る奴ではないから、まず一心の挨拶をして出来得る限り早く御免蒙るに若くはしないと決心した。いや黒君おめでとう。不相変元気がいいね」と尻尾を立てて左へぐるりと廻す。黒は尻尾を立てたがり挨拶もしない。「何おめでたえ？」正月でおめでたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでたえ方だろう。気をつけるい、この吹い子の向う面め、吹い子の向うづらという句は罵詈の言語であるよのだが、吾輩には了解が出来なかつた。「ちよつと何が吹い子の向うづらと云うのはどう云う意味かね」「へん、手めえが悪体をつかれてる癖に、その詈を聞きや世話あねえ、だから正月野郎だつて事よ」正月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のためちよつと聞いておきたいが、聞いたつて明瞭な答弁は得られぬに極まつているから、面と對つたまま無言で立つておつた。いささか手持無沙汰の体でありやあしない。今に帰つて来たら、どうするか見ていやがれ」と怒鳴る。初春の閑静な空気を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大に俗にしてしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだけ怒鳴つておくれと云わぬばかりに横着な顔をして、四角な顔の前へ出しながら、あれを聞いたかと合図をする。今までは黒との応対がつかなくかつたが、見ると彼の足の下には一切二錢三厘に相当する鮭の骨が泥だらけになつて転がつて居る。「君不相変やつてるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒はそのくらしい下事ではなかなか機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、この野郎。しゃけ」「#「しゃけ」に傍点」の一切や二切で相変らずたあ何だ。人を見繼びつた事をいうねえ。憚りながら車屋の黒だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の辺まで掻き上げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知つてるさ」「知つてるのに、相変らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間なら胸倉をとられて小突き廻されるところである。少々辟易して内心困つた事になつたなと思つて居ると、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよいと西川さん、おい西川さんては、用があるんだよこの人あ。牛肉を一斤すぐ持つて来るんだよ。いいかい、分つたかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文の音が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂えると思つて、いやに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ阿魔だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏張る。吾輩は挨拶のしようもないから黙つて見ている。「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取つときや、今に食つてやらあ」と自分のために誂えたもののごとくいう。「今度は本場の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく

彼を帰そうとする。「御めつちの知つた事じゃねえ。黙っている。うるせえや」と云いながら突然後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている間に黒は垣根を潜つて、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛を尻に行つたものである。

家へ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽側から上つて主人の傍へ寄つて見ると見馴れぬ客が来ている。頭を奇麗に分けて、木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着けて至極真面目そつな書生体の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗りの巻煙草入れと並んで越智東風君を紹介候水島寒月という名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。主客の対話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に聞いているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いつしよに来いとおっしゃるので」と客は落ちついて云つた。「何ですか、その西洋料理へ行つて午飯を食うのについて趣向があるというのですか」と主人は茶を續ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」いつしよに行きましたか、なるほど」とところが驚いたのです。主人はそれ見たかと云わぬばかりに、膝の上に乗つた吾輩の頭をぽかと叩く。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たよつな事なんですよ。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思い出す。「へへ。君何か変つたものを食おうじやないかとおっしゃるので、何を食いました」「まず献立を見ながらいろいろ料理についての御話しがありました」「誂らえない前にですか」「ええ」「それから」「それから首を捻つてポイの方を御覧になつて、どうも変つたものもないよつなとおっしゃるとポイは負けぬ気味で鴨の口スか小牛のチャップなどは如何ですと云つと、先生は、そんな月並を食いにわざわざここまで来やしないとおっしゃるんで、ポイは月並という意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていましたよ」「そうでしょう」「それから私の方を御向きになつて、君仏蘭西や英吉利へ行くと随分天調や万葉調が食えるんだが、日本じゃどこへ行つたつて版で圧したよつで、どうも西洋料理へ這入る気がしないと云うよつな大気」「#「炎」に「餡」の右部分が「へん」に付く、usg」で 全体あの方は洋行なつた事があるのですかな」「何迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落なんですよ」と主人は自分ながらうまい事を言つたつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そつですか、私はまたいつの間にか洋行なつたかと思つて、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たよつになめくじ」「#「なめくじ」に「傍点」のソップの御話や蛙のシチュウの形容をなさるものですか」「そりや誰かに聞いたんでしよう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそのよつで」と花瓶の水仙を眺める。少しく残念の気色にも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんです」と主人が念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからのなんです」「ふん」と主人は好奇的な感投詞を挟む。「それから、とてもなめくじ」「#「なめくじ」に「傍点」や蛙は食おうつても食えやしないから、まあトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」くらいなところで負けとく事にしようじやないか君と御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、といつてしまつたので」「へへ、とちめんぼうは妙ですね」「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面目だものですから、つい気がつきませんでした」とあたかも主人に向つて寵忽を詫びているように見える。「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表しておらん。「それからポイにおいトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」を二人前持つて来いという、ポイがメンチボー」「#「メンチボー」に「傍点」ですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目な顔でメンチボー」「#「メンチボー」に「傍点」じやないトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」だと訂正されました」「なる。そのトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」という料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしとは思ひましたがいかにも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらつしやるし、ことにその時は洋行なつたものと信じ切つていたものだから、私も口を添えてトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」だトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」だとポイに教えてやりました」「ポイはどうしました」「ポイがね、今考えろと実に滑稽なんですがね、しばらく思索してしまつてね、はなはだ御気の毒様ですが今日はトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」は御生憎様でメンチボー」「#「メンチボー」に「傍点」なら御二人前すぐに出来ますと云つと、先生は非常に残念な様子で、それじゃせつかくここまで来た甲斐がない。どうかトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」を都合して食わせてもらつては行くまいかと、ポイに二十錢銀貨をやられると、ポイはそれではともかくも料理番と相談して参りましようと思ひましたよ」「大変トチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」が食いたかつたと見えますね」「しばらくしてポイが出て来て真に御生憎で、御誂ならしいらえますが少々時間がかります、と云つと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待つて食つて行こうじやないかと云いながらポツケツトから葉巻を出してぶかりぶかり吹かし始められたので、私も仕方がないから、懐から日本新聞を出して読み出しました、するとポイはまた奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数が掛りますな」と主人は戦争の通信を読むくらの意気込で席を前める。「するとポイがまた出て来て、近頃はトチメンボー」「#「トチメンボー」に「傍点」の材料が拵底で亀屋へ行つても横浜の十五番へ行つても買われせんから自分の間は御生憎様でと気の毒そうに云つと、先生はそりや困つたな、せつかく来たのになあと私の方を御覧になつてしきりに繰り返さるので、私も黙つて居る訳にも参りませんから、どうも遺憾ですな、遺憾極るですなと調子を合せたのです」「こもつともで」と主人が賛成する。何がこもつともだが吾輩にはわからん。「するとポイも気の毒だと思つて、その内材料が参りましたら、どうか願いますつてんでしよう。先生が材料は何を使うかねと問われるとポイはへへへへと笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人だつと先生が押し返して聞くとポイはへえさよつで、それだものだから近頃は横濱へ行つても買われせんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」「アハハ八それが落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。膝が揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着なく笑つた。アンドレア・デル・サルトに罹つたのは自分一人でないよつと云う事を知つたので急に愉快になつたものと見える。「それから一人で表へ出ると、どうだ君つまく行つたらう、椽面坊を種に使つたところが面白かつと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れしたよつなものは午飯の時刻が延びたので大変空腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表す。これには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉を鳴らす音が主客の耳に入る。

東風君は冷めなくなった茶をぐつと飲み干して「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに済ます。「御承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注す。「同志だけがよりましてせんだつてから朗読会といふのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」「ちよつと伺つておきますが、朗読会と云うと何か節奏でも附けて、詩歌文章の類を読むように聞えますが、一体どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々は同人の創作なんかもやるつもりです」「古人の作といふと白楽天の琵琶行のようなものでもあるんですか」「いいえ」「蕪村の春風馬堤曲の種類ですか」「いいえ」「それじゃ、どんなものをやつたんです」「せんだつては近松の心中物をやりました」「近松？ ああ浄瑠璃の近松ですか」「近松に一人はない。近松といへば戯曲家の近松に極つてゐる。それを聞き直す主人はよほど愚だと思つてゐると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮嚀に撫でている。藪眺みから惚れられたと自認してゐる人間もある世の中だからこのくらいの誤謬は決して驚くに足らんと撫でられるがままにすましていた。「ええ」と答えて東風子は主人の顔色を窺つ。「それじゃ一人で朗読するのですか、または役割を極めてやるんですか」「役を極めて懸合でやつて見ました。その主意はなるべく作中の人物に同情を持つてその性格を發揮するのを第一として、それに手真似や身振りを添えます。白はなるべくその時代の人を写し出すのが主で、御嬢さんでも丁稚でも、その人物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃありませんか」「ええ衣装と書割がないくらいなものですか」「失礼ながらうまく行きますか」「まあ第一回としては成功した方だと思ひます」「それでこの前やつたとおつしやる心中物といふと」「その、船頭が御客を乗せて芳原へ行く所なんです」「大変な幕をやりましたな」と教師だけにちよつと首を傾げる。鼻から吹き出した日の出「#、日の出」に傍点」の煙りが耳を掠めて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大変な事もないんです。登場の人物は御客と、船頭と、花魁と仲居と遣手と見番だけです」「と東風子は平気なものである。主人は花魁といふ名をきいてちよつと苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番という術語について明瞭の智識がなかつたと見えてます質問を呈出した。「仲居といふのは娼家の下婢にあたるものですか」「まだよく研究はして見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手といふのが女部屋の助役見たようなものだろうと思ひます」「東風子はさつき、その人物が出て来るように仮色を使うと云つた癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほど仲居は茶屋に隸属するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番」「#、見番」に傍点」と云つのは人間ですかまたは一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひます」「何を司どつてゐるんですか」「さあそこまではまだ調べが届いておりません。その内調べて見ましよう」これで懸合をやつた日には頓珍漢なものが出るだろうと吾輩は主人の顔をちよつと見上げた。主人は存外真面目である。「それで朗読家は君のほかにどんな人が加つたんですか」「いろいろおりました。花魁が法学士のK君でしたが、口髯を生やして、女の甘つたるいせりふを使つかうのですからちよつと妙でした。それにその花魁が癩を起すところがあるので……」「朗読でも癩を起さなくつちや、いけないんですか」と主人は心配そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」と東風子はどこまでも文芸家の氣でゐる。「うまく癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩だけは第一回は、ちと無理でした」と東風子も警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞く。「私は船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるものなら僕にも見番くらいはやれると云つたような語氣を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癩に障つた様子もない。やはり沈着な口調で「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾に終りました。実は会場の隣りに女学生が四五人下宿してしまつてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるといふ事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴してゐたものと見えます。私が船頭の仮色を使って、ようやく調子づいてこれなら大丈夫と思つて得意にやつてゐると……つまり身振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐らえてゐた女学生が一度にわつと笑ひだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極りが悪る事も悪るいし、それで腰を折られてから、どうしても後がつづけられないので、とうとうそれ限りで散会しました」第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。覚えぬ咽喉仏がころころ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭を撫でてくれる。人を笑つて可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々甲詞を述べている。「第二回からは、もっと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くそのためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癩なんか起せませんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癩などは起していただくでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事そうに小菊版の帳面を出す。「これへどうか御署名の上御捺印を願ひたいので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文学士連中の名が行儀よく勢揃をしてゐる。「はあ賛成員ならん事もありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の体に見える。「義務と申して別段是非願ふ事もないくらいで、ただ御名前だけを御記入下さつて賛成の意ええ御表示被下ればそれで結構です」「そんなら這入りませう」と義務のかからぬ事を知るや否や主人は急に氣軽になる。責任さえないと云つ事が分つておれば謀叛の連判状へでも名を書き入れますと云う顔付をする。加之こつ知名の学者が名前を列ねてゐる中に姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出合つた事のない主人にとっては無上の光栄であるから返事の勢のあるも無理はない。「ちよつと失敬」と主人は書齋へ印をとりに這入る。吾輩はぼたりと畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る。モゴモゴしばらくは苦しそである。吾輩は今朝の雑煮事件をちよつと思ひ出す。主人が書齋から印形を持って出て来た時は、東風子の胃の中にカステラ「#、カステラ」に傍点」が落ちついた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切足りなくなつた事には氣が着かぬらしい。もし氣がつくとすれば第一に疑われるものは吾輩であるつ。

東風子が帰つてから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が來ている。

「#こつより引用文、本文より2字下げ」

「新年の御慶目出度申納候。……」

「#引用文こつまで」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生の手紙に真面目なのはほとんどないので、この間などは「其後別に恋着せる婦人も無之、いず方より艶書も参らず、先ず先ず無事に消光罷り在り候間、乍憚御休心可被下候」と云うのが来たくらいである。それに較べるとこの年始状は例外にも世間的である。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「一寸参堂仕り度候えども、大兄の消極主義に反して、出来得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有の新年を迎うる計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、御推察願上候……」

「#引用文(ここまで)」

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙がしいに違いないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「昨日は一刻のひまを偷み、東風子にトチメンボー」「#「トチメンボー」に傍点」の御馳走を致さんと存じ候処、生憎材料払底のため其意を果さず、遺憾千万に存候。……」

「#引用文(ここまで)」

そろそろ例の通りになって来た主人は無言で微笑する。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「明日は其男爵の歌留多会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は……」

「#引用文(ここまで)」

うるさいなど、主人は読みとばす。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候為め、不得已賀状を以て拝趨の礼に易え候段不恵御宥被下度候。……」

「#引用文(ここまで)」

別段くるにも及ばんと、主人は手紙に返事をする。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候えども、せめてはトチメンボー」「#「トチメンボー」に傍点」でもと只今より心掛居候。……」

「#引用文(ここまで)」

またトチメンボー「#「トチメンボー」に傍点」を振り廻している。失敬など主人はちよつとむつとする。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「然しトチメンボー」「#「トチメンボー」に傍点」は近頃材料払底の為め、ことに依ると間に合い兼候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

「#引用文(ここまで)」

両天秤をかけたなと主人は、あとが読みたくなる。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃囊を充たす為には……」

「#引用文(ここまで)」

うそをつけと主人は打ち遣ったようにいう。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可らずと存候。然る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちらほら見受け候えども、普通の鳥屋杯には一向見当り不申、苦心此事に御座候。……」

「#引用文(ここまで)」

独りで勝手に苦心しているのじゃないかと主人は毫も感謝の意を表さない。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第御諒察可被下候。……」

「#引用文(ここまで)」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人はすこぶる冷淡である。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「降つて十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と相成居候。レストラン伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候様記憶致候。有名なるレンブランドが画き候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘卓上に横わり居り候……」

「#引用文(ここまで)」

孔雀の料理史をかくくらしいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」

「#引用文(ここまで)」

大兄のごときは余計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても済むと主人はつぶやいた。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴会を開き候由。日に二度も三度も方丈の食饌に就き候えば如何なる健胃の人にて消化機能に不調を醸すべく、従つて自然は大兄の如く……」

「#引用文(ここまで)」

また大兄のごとくか、失敬な。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋味を食ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を案出致し候……」

「#引用文(ここまで)」

はてねと主人は急に熱心になる。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嘔下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候。かくの如くすれば好物は食ばり次第貪り候も毫も内臓の諸機能に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を可申かと愚考致候……」

「#引用文(ここまで)」

なるほど一挙兩得に相違ない。主人は羨ましそつな顔をする。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「廿世紀の今日交通の頻繁、宴会の増加は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄、吾人戦勝国の国民は、是非共羅馬人に倣つて此入浴嘔吐の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事と自信致候。左もなくば切角の大国民も近き将来に於て悉く大兄の如く胃病患者と相成る事と窃かに心痛罷りあり候……」

「#引用文(こ)まで」

また大兄のごとくか、癩に障る男だと主人が思つ。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究し、既に廃絶せる秘法を發見し、之を明治の社会に應用致し候わば所謂禍を未萌に防ぐの功德にも相成り平素逸楽を擅に致し候御恩返も相立可申と存候……」

「#引用文(こ)まで」

何だか妙だなと首を捻る。

「#ここより引用文、本文より2字下げ」

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を涉獵致し居候えども未だに發見の端緒をも見出し得ざるは残念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思い立ち候事は成功するまでは決して中絶仕らざる性質に候えば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右は發見次第御報道可仕候につき、左様御承知可被下候。就てはさきに申上候トチメンボー「#トチメンボー」に傍点」及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右發見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に悩み居らる大兄の爲にも御便宜かと存候草々不備」

「#引用文(こ)まで」

何だとうとう担がれたのか、あまり書き方が真面目なものだからつい仕舞まで本氣にして読んでいた。新年勿々こんな悪戯をやる迷亭はよつぽどひま人だなあと主人は笑いながら云つた。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去つた。白磁の水仙がだんだん凋んで、青軸の梅が瓶ながらだんだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつまらなと思つて、一兩度三毛子を訪問して見たが逢われない。最初は留守だと思つたが、二返目には病気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話をしてゐるのを手水鉢の葉蘭の影に隠れて聞いているところであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ何にも食べません、あつたかにして御火燵に寝かしておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛している猫がかくまで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どつも困るね、御飯をたべないと、身体が疲れるばかりだからね」「そつでございませよ、私共でさえ一日御「#膳」の「月へん」の代わりに「食へん」の旧字体「餼」のへん、6618」をいただかないと、明るる日はとても働かせませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。實際この家では下女より猫の方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「ええ、あの御医者はよつぽど妙でございませよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかつて私の脈をとろうとするんでしょ。いえ病人は私ではございません。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にやにや笑いながら、猫の病氣はわしにも分らん、抛つておいたら今に癒るだろつてんですもの、あんまり苛いじゃございませんか。腹が立つたから、それじゃ見ていただかなくつてもよつございませよ、これでも大事の猫なんですつて、三毛を懐へ入れてさつさと歸つて参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底吾輩のうちなどで聞かれる言葉ではない。やはり天璋院様の何とかの何とかでなくては使えない、はなはだ雅であると感心した。

「何だかしくしく云つよつだが……」「ええきつと風邪を引いて咽喉が痛むんでございませよ。風邪を引くと、どなたでも御咳が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿丁寧な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのって新しい病気がかり殖えた日にゃ油断も隙もなりやしませんのでございませよ」「旧幕時代に無い者に碌な者はないから御前も気を付けなといかんよ」「そうございませよつかねえ」

下女は大に感動している。

「風邪を引くといつてもあまり出あるきもしないようだったに……」「いえね、あなた、それが近頃は悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達？」「ええあの表通りの教師の所にいる薄ぎたない雄猫でございますよ」「教師と云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「ええ顔を洗うたんびに鵜鳥が絞め殺されるような声を出す人でござんす」

鵜鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつつ突いて妙な声を無遠慮に出す癖がある。機嫌の悪い時はやけにがあがやる、機嫌の好い時は元氣づいてなおがあがやる。つまり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくがあがやる。細君の話してはここへ引越す前まではこんな癖はなかったそうだが、ある時ふとやり出してから今日まで一日もやめた事がないという。ちよつと厄介な癖であるが、なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫などには到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとお耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いになるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相應の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらんかったよ」「そうでございませよともねえ」

下女は無暗に感服しては、無暗にねえ「#「ねえ」に傍点」を使用する。

「あんな主人を持つている猫だから、どうせ野良猫さ、今度来たら少し叩いておやり」「叩いてやりますとも、三毛の病気になったのも全くあいつの御蔭に相違ございませんもの、きつと鬻をとつてやります」

飛んだ冤罪を蒙つたものだ。こいつは滅多に近か寄れないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

帰つて見ると主人は書齋の中で何か沈吟の体で筆を執っている。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましていく。

ところへ当分多忙で行かれなれと云つて、わざわざ年始状をよこした迷亭君が飄然とやって来る。「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよつとつまい文章だと思つたから今翻訳して見ようと思つてね」と主人は重たそうに口を開く。「文章？誰れの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分善いがあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあつたのか」と問う。「第一読本」と主人は落ちつきはらつて答える。「第二読本？第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文と云うのは第二読本の中にあると云う事さ」「冗談じゃない。孔雀の舌の鬻を際どいところで討とうと云う寸法なんだから」「僕は君のような法螺吹きとは違つた」と口髯を捻る。泰然たるものだ。「昔しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといつたら、山陽が馬子の書いた借金催状を示して近來の名文はまずこれでしょうと云つたという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の本家のような事を云う。主人は禅坊主が大燈国師の遺誡を読むような声を出して読み始める。「巨人、引力」「何だいその巨人引力と云うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持つている巨人といつてもりさ」「少し無理なつもり」「#「つもり」に傍点」だが表題だからまず負けておくとしよう。それから早々本文を読むさ、君は声が善いからなかなか面白い」「雑ぜかえしてはいかんよ」と予じめ念を押してまた読み始める。

「#「」より引用文、本文より2字下げ」

ケートは窓から外面を眺める。小児が球を投げて遊んでいる。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとみよのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまふ。小児も飛んでしまふ。葉が落ちるのを見たら。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事がある。巨人引力が来いといつからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「#引用文、「」」

「それぎりかい」「むむ、甘いじゃないか」「いやこれは恐れ入つた。飛んだところでトチメンボー」「#「トチメンボー」に傍点」の御返礼に預つた。「御返礼でもなんでもないさ、實際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚いたね。君にしてこの伎倆あらんとは、全く此度という今度は担がれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降参させる考えはないさ。ただ面白い文章だと思つたから訳して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なくつちや本ものでない。凄いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめたから、その代りに文章でもやること思つてね」「どうして遠近無差別黒白平等の水彩画の比じゃない。感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも矛盾いをしていく。

ところへ寒月君が先日失礼しましたと這入って来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴してトチメンボー」#「トチメンボー」に傍点の亡魂を退治されたところで、と迷亭先生は訳のわからぬ事をほめめかす。「はあ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左のみ浮かれた気色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云う人が来たよ」「ああ上りましたか、あの越智東風と云う男は至って正直な男ですが少し変っているところがあるので、あるいは御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですから……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上っても自分の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」「いいえ、そんな話もなかつたよ」「うだ、そうですか、どこへ行っても初対面の人には自分の名前の講釈をするのが癖でしてね」「どんな講釈をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は口を入れた。「あの東風と云うのを音で読まれると大変気にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮の煙草入から煙草をつまみ出す。「私しの名は越智東風ではありません、越智こち」#「こち」に傍点ですと必ず断りますよ」「妙だね」と雲井を腹の底まで呑み込む。「それが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近」#「遠近」に傍点」と云う成語になる、のみならずその姓名が韻を踏んでいると云うのが得意なんです。それだから東風を音で読むと僕がせつかくの苦心を人が買ってくれないといつて不平を云うのです」「こりやなるほど変つてゐる」と迷亭先生は図に乗って腹の底から雲井を鼻の孔まで吐き返す。途中で煙が戸迷いをして咽喉の出口へ引きかかる。先生は煙管を握つてごほんごほん咽び返る。「先日来た時は朗読会で船頭になつて女学生に笑われたといつていたよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれそれ」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。吾輩は除香になつたから少し傍を離れる。「その朗読会さ。せんだつてトチメンボー」#「トチメンボー」に傍点を御馳走した時にね。その話が出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、先生にも是非御臨席を願ひたい。それから僕が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、いえこの次はずつと新しい者を撰んで金色夜叉にしましたと云うから、君にや何の役が当つてるか聞いたら私は御宮ですといつたのさ。東風の御宮は面白がる。僕は是非出席して喝采しようと思つてゐるよ」「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところが無いから好い。迷亭などは大違ひだ」と主人はアンドレア・デル・サルと孔雀の舌とトチメンボー」#「トチメンボー」に傍点の復讐を一度にとる。迷亭君は氣にも留めない様子で「どうせ僕などは行徳の俎と云う格だからなあ」と笑つて「まずそんなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎と云う語を主人は解さないのであるが、さすが永年教師をして胡魔化しつけているものだから、こんな時には教場の経験を社交上にも応用するのである。「行徳の俎というのは何の事ですか」と寒月が真率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の帰りがけに買つて来て挿したのだが、よく持つじゃないか」と行徳の俎を無理にねじ伏せる。「暮といえは、去年の暮に僕は実に不思議な経験をしたよ」と迷亭が煙管を大神楽のごとく指の尖で廻らす。「どんな経験か、聞かし玉え」と主人は行徳の俎を遠く後に見捨てた氣で、ほつと息をつく。迷亭先生の不思議な経験といふのを聞くと左のごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから御在宿を願うと云う先き触れがあつたので、朝から心待ちに待つてゐると先生なかなか来ないやね。昼飯を食つてストロブの前でバリー・ペインの滑稽物を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思つてね。寒中は夜間外出をするとか、冷水浴もいいがストロブを焚いて室を暖かにしてやらないと風邪を引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいかないと、呑気な僕もその時だけは大に感動した。それにつけても、こんなにのらくらしてゐては勿体ない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならぬ。母の生きてゐるうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云う氣になつた。それからなお読んで行く」と御前なんぞは実に仕合せ者だ。露西亞と戦争が始まつて若い人達は大変な辛苦をして御国のために働らいてゐるのに節季師走でもお正月のように氣楽に遊んでゐると書いてあるのさ。その名前を一つ読んだ時には何だか世の中が味氣なくなつて人間もつまらないと云う氣が起つたよ。一番仕舞にね。私も取る年に候えば初春の御雑煮を祝ひ候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、なおのこと氣がくさくさしてしまつて早く東風が来れば好いと思つたが、先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯になつたから、母へ返事で書こうと思つてちよいと十三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免蒙る事に極めてあるのさ。すると一日動かずにおつたものだから、胃の具合が妙で苦しい。東風が来たらず待たせておけと云う氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我れ知らず出でしまつた。ちよとどその晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。神楽坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大変淋しい感じがする。暮、戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる駆け廻る。よく人が首を縊ると云うがこんな時にふと誘われて死ぬ氣になるのじゃないかと思ひ出す。ちよいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間にか例の松の真下に来てゐるのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句を投げ入れる。

「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

「首懸の松は鴻の台でしょう」寒月が波紋をひろげる。

「鴻の台のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜかう云う名が付いたかと云うと、昔しからの言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が縊りたくなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら首縊りだとして見ると必ずこの松へぶら下がつてゐる。年に二三返はきつとぶら下がつてゐる。どうしても他の松では死ぬ氣にならん。見ると、うまい具合に枝が往來の方へ横に出ている。ああ好い枝振りだ。あのままにしておくのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ないかしらと、四辺を見渡すと生憎誰も来ない。仕方がない、自分で下がるうか知らん。いやいや自分が下がつては命がない、危ないからよそう。しかし昔の希臘人は宴会の席で首縊りの真似をして余興を添えたと云う話がある。一人が台の上へ登つて繩の結び目へ首を入れる途端に他のものが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引か

れると同時に縄をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれが事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思つたが、もし東風が来て待つて見ると好い具合に撓る。撓り按排が実に美的である。首がかかつてふわふわするところを想像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が来て待つて見ると気の毒だと考え出した。それではまず東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直そうと云う氣になつてついにうちへ帰つたのさ」

「それで市が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月にやにやしながら云つた。

「うちへ帰つて見ると東風は来ていない。しかし今日は無抛処差支えがあつて出られぬ、いずれ永日御面晤を期すといふ端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がつてゐる。たつた一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考えると何でもその時は死神に取り着かれたんだね。ゼームスなどに云わせると副意識下の幽冥界と僕が存在している現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう。実に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすまし返つてゐる。

主人はまたやられたと思ひながら何も云わずに空也餅を頬張つて口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧な搔き馴らして、俯向いてやにや笑つていたが、やがて口を開く。極めて静かな調子である。

「なるほど何つて見ると不思議な事ぢよつと有りそうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう氣になりません」

「おや君も首を縊りたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちよつと明ければ昨年暮の暮の事でも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家で忘年会兼合奏会がありまして、私もそれへヴァイオリンを携えて行きました。十五六人令嬢やら令夫人が集つてなかなか盛会で、近來の快事と思つてうちに万事が整つていました。晚餐もすみ合奏もすんで四方の話が出て時刻も大分遅くなつたから、もう暇乞いをして帰ろうかと思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあなたは、子さんの御病氣を御承知ですかと小声で聞きますので、実はその両三日前に逢つた時は平常の通りどころも悪いようには見受けませんでしたから、私も驚ろいて精しく様子を聞いて見ますと、私しの逢つたその晩から急に発熱して、いろいろな譚話を絶間なく口走るそうで、それだけなら宜いですがその譚話のうちに私の名が時々出て来るといふのです」

主人は無論、迷亭先生も「御安くないね」などという月並は云わず、静肅に謹聴している。

「医者呼んで見てもらうと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇しいので脳を犯しているから、もし睡眠剤が思つたように功を奏しないと危険であると云う診断だそつて私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起つたのです。ちよつと夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空氣が急に固形体になつて四方から吾が身をしめつけるごとく思われました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な、子さんが……」

「ちよつと失敬だが待つてくれ給え。さつきから伺つてゐると、子さんと云つのが二返ばかり聞えるようだが、もし差支えがなければ承わりたいね、君」と主人を顧みると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れませんがから廢しましよつ」

「すべて曖々然として昧々然たるかたで行くつもりかね」

「冷笑なさつてはいけません、極真面目な話しなんですから……とにかくあの婦人が急にそんな病氣になつた事を考えると、実に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、総身の活氣が一度にストライキを起したように元氣がにわか滅入つてしまひまして、ただ踰々として跟々という形で吾妻橋へきかかつたのです。欄干に倚つて下を見ると満潮が干潮が分りませんが、黒い水がかたまつてただ動いてゐるように見えます。花川戸の方から人力車が一台馳けて来て橋の上を通りました。その提灯の火を見送つてゐると、だんだん小くなつて札幌ビールの処で消えました。私はまた水を見る。すると遙かの川上の方で私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だらうと水の面をすかして見ましたが暗くて何にも分りません。氣のせいに違ひない早々帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、また微かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留つて耳を立てて聞きました。二度目に呼ばれた時には欄干に捕まつていなながら膝頭ががくがく慄え出したのです。その声は遠くの方が、

川の底から出るようですが紛れもない。子の声なんでしょう。私は覚えず「はい」と返事をしたので。その返事が大きかったものですから静かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡しました。人も犬も何にも見えません。その時に私はこの「夜」の中に巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う気がむらむらと起つたのです。子の声がまた苦しうに、訴えるように、救を求めするように私の耳を刺し通したので、今度は「今直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪の下から無理に洩れて来るように思われましてね。この水の下だと思ひながら私はとうとう欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめてみるとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思つて力を込めて一反飛び上がったおいて、そして小石が何ぞのように未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行くとは思わなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭をちよいとつまむ。

「飛び込んだ後は気が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何も無い、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりや変だとなつて付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と後ろの間違ひだけであの声の出る所へ行く事が出来なかつたのです」寒月ははにやにや笑いながら例のごとく羽織の紐を荷厄介にしている。

「八八八八これは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感心と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその 子さんの病氣はどうなつたかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年に行きましたら、門の内下女と羽根を突いていましたから病氣は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑つ。欠けた前歯のうちに空也餅が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまげ返す。

「いや日は違つたよ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに摂津大塚を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して鰻谷だと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそつと細君がまた新聞を持って来て今日は堀川だからいいでしょうと云う。堀川は三味線もので賑やかなばかりで実がないからよそつと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂です。私は是非摂津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞かせるのだからいっしょに行つて下すつても宜いでしよう」と手詰の談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜ろしい、しかし一世一代と云うので大変な大入だから到底突懸けに行つたつて這入れる氣遣ひはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云うものが在つてそれと交渉して相当の席を予約するのが正當の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめよう」と云うと、細君は凄じい眼付をして、私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木のお代さんも正當の手続きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いくらあなたが教師だからつて、そう手数のかかる見物をしないで済ませよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくつちやいけません、そんなくずくずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行つて場所をとらなくちゃ這入れないからだと鈴木のお代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はびんぴんしていらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に萎縮する感じが起ると思つと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困つた事になつた。細君が年に一度の願だから是非叶えてやりたい。平生叱りついたり、口を聞かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日は幸い時間もある、囊中には四五枚の堵物もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだろう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやりたいがこつ悪寒がして眼がぐらぐらでは電車へ乗るところか、靴脱へ降りる事も出来ない。ああ気の毒だ気毒だと思つとまあ悪寒がしてなお眼がぐらぐらしてくる。早く医者に見てもらつて服薬でもしたら四時前には全快するだろうと、それから細君と相談をして甘木医学士を迎いにやると生憎昨夜が当番で

まだ大学から帰らない。二時頃には御帰りになりますから、帰り次第すぐ上げますと云う返事である。困ったなあ、今杏仁水でも飲めば四時前にはきつと癒るに極つてい
るんだが、運の悪い時には何事も思つように行かんもので、たまさか妻君の喜ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、がらりと外れそうになつて来る。細君は恨めしい顔付を
して、到底いらつしやれませんかと聞く。行くよ必ず行くよ。四時までにはきつと直つて見せるから安心していい。早く顔でも洗つて着物でも着換えて待つてい
るがいい、と口では云つたようなものの胸中は無限の感慨である。悪寒はますます劇しくなる、眼はいよいよぐらぐらする。もしや四時までに全快して約束を履行する事が
出来なかつたら、気の狭い女の事だから何をするかも知れない。情けない仕儀になつて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考えると今の内に有為転変の理、生者必滅
の道を説き聞かして、もしもの変が起つた時取り乱さないくらの覚悟をさせるのも、夫の妻に対する義務ではあるまいかと考え出した。僕は速かに細君を書斎へ呼んだ
よ。呼んで御前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云う西洋の諺くらいは心得ているだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは
人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使って人にかからうのだから、宜しゅうございませう、どうせ英語なんかは出来ないんですから、そんなに英語が御好き
なら、なぜ耶蘇学校の卒業生かなんかをお貰いなさなかつたんです。あなたくらい冷酷な人はありはしないと非常な権幕なんで、僕もせつかくの計画の腰を折られてし
まった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意で使つた訳じゃない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬がない。それに
さつきからの悪寒と眩暈で少し脳が乱れていたところへもつて来て、早く有為転変、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急ぎ込んだものだから、つい細君の英語を知ら
ないと云う事を忘れて、何の気も付かずに使つてしまつた訳さ。考えるとこれは僕が悪い、全く手落ちであつた。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐ
らぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両肌を脱いで御化粧をして、筆筒から着物を出して着換える。もついつでも出掛けられますと云う風情で待ち構えてい
る。僕は気が気でない。早く甘木君が来てくれれば善いかと思つて時計を見るともう二時だ。四時にはもつ一時間しかない。「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書斎の
開き戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒めるのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど細君を美しいと思つた事はなかつた。もる肌を脱いで石鹸で磨き上げた皮膚がび
かついて黒縮緬の羽織と反映している。その顔が石鹸と損津大掾を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させ
て出掛けてやるよと云う気になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ぶくふかしているとうやく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなすと、甘木
先生は僕の舌を眺めて、手を握つて、胸を敲いて背を撫でて、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすつて、しばらく考え込んでいられる。「どうも少し陰呑のような気がしまし
て」と僕が云つと、先生は落ちついて、「いえ格別の事もございませう」と云う。「あのちよつとくらゐ外出致しても差支えはございませう」と細君が聞く。「さよ
う」と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなければ……」「気分は悪いですよ」と僕がいう。「じゃともかくも頓服と水薬を上げますから」「へえどうか、何だかち
と、危ないようになりそつですな」「いや決して御心配になるほどの事じゃございませぬ、神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。三時は三十分過ぎた。下女
を薬取りにやる。細君の致命で馳け出して行つて、馳け出して返つてくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無
かつたのに、急に嘔気を催おして来た。細君は水薬を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲むとすると、胃の中からげと云う者が唸鳴して出
てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。細君は「早く御飲みになつたら宜いでしよう」と通る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切つて飲んでしまおうとま
た茶碗を唇へつけるとまたゲーが執念深く妨害をする。飲むよとすると茶碗を置き、飲むよとすると茶碗を置いておくと茶の間の柱時計がチンチンチンと四時を打つ
た。さあ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろ、四時の音と共に吐き気がすつかり留まつて水薬が何
の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢
のように消えて、当分立つ事も出来まいと思つた病気がたちまち全快したのは嬉しかつた。

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかつたが四時を過ぎちゃ、這入れないと云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の義理も立つ
し、妻も満足したるうちに、わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶないところだつたと今でも思つたさ。」

語り了つた主人はようやく自分の義務をすましたよな風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた歯を出して笑いながら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとほけた顔をして「君のような親切な夫を持つた妻君は実に仕合せだな」と独り言のようについて。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていたがおかしくも悲しくもなかつた。人間というものは時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしくもない事を笑つ
たり、面白くもない事を嬉しがつたりするほかに能もない者だと思つた。吾輩の主人の我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言葉数を使わないので何だか了解
しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと云う感じもあつたが、今話を聞いてから急に軽蔑したくなつた。かれはなぜ兩人の話しを
沈黙して聞いていられないのだから。負けぬ気になつて愚にもつかぬ駄弁を弄すれば何の所得があるだろう。エビクテタスにそんな事をしると書いてあるのか知らん。要
するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は糸瓜のごとく風に吹かれて超然と澄し切つていようなもの、その実はやはり娑婆婆気もあり慾気もある。競争の念、勝
とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒している俗骨共と一ツ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。
ただその言語動作が普通の半可通のごとく、文切り形の厭味を帯びてないのはいささかの取り得でもあつた。

こう考えると急に三人の談話が面白くなくなつたので、三毛子の様子でも見て来ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りはすでに取り払われて正月も早や十日となつたが、うららかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮かな活気を呈している。椽側に座蒲団が一つあって人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜い方か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合もしないから、泥足のまま椽側へ上つて座蒲団の真中へ寝転んで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

御苦労だつた。出来たかえ。御師匠さんはやはり留守ではなかつたのだ。

「はい遅くなりまして、仏師屋へ参りましたらちよつと出来上つたところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。金は剥げる事はあるまいね」「ええ念を押ししましたら上等を使つたからこれなら人間の位牌よりも持つと申しております。……それから猫養信女の誉の字は崩した方が恰好がいいから少し劃を易えたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変だと蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫養信女、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

「御前も回向をしておやりなさい」

チーン南無猫養信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と今度は下女の声がある。吾輩は急に動悸がして来た。座蒲団の上に立つたまま、木彫の猫のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪を引いたんでございませうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかつたかも知れないよ」「一体あの甘木さんが悪つこざいますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませえね」「そう人様の事を悪く云うものではない。これも寿命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰つたものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫が無暗に誘い出したからだ、わたしは思つよ」「ええあの畜生が三毛のかたきでございますよ」

少し弁解したかつたが、ここが我慢のしどころと唾を呑んで聞いている。話しはしばし途切れる。

「世の中は自由にならん者でつ。三毛のよつな器量よしは早死をするし。不器量な野良猫は達者でいたずらをしてるし……」「その通りでございますよ。三毛のよつな可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたつて、二人とはおりませんからね」

二匹と云う代りに二たりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思つてゐるらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等猫属とはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の野良が死ぬと御誂え通りに参つたんでございませうがねえ」

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きとも嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺の中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも知らんで上から蓋をした事があつた。その時の苦しさは考えても恐くなるほどであつた。白君の説明によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそつだ。三毛子の身代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらつたり、戒名をこしらえてもらつたのだから心残りはあるまい」「そつでございませうと、全く果報者でございませうよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があまり軽少だつたよつでございませうね」「少し短か過ぎたよつだつたから、大変御早うございませうと御尋ねしたら、月桂寺さんは、ええ利目のあるところをちよとやっておきました、なに猫だからあのくらいで充分浄土へ行かれますとおつしやつたよ」「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断つておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつて浮かばれる事はございませぬよ」

吾輩はその後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を中途で聞き棄てて、布団をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震いをした。その後二絃琴の御師匠さんの近所へは寄りついた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な御回向を受けているだらう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵つく感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫となつた。主人が書齋にのみ閉じ籠つてゐるのを人が失念だ失念だと評するのにも無理はないと思つたよつになつた。

鼠はまだ取つた事がないので、一時は御三から放逐論さえ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知つてゐるものだから吾輩はやはりのらくらしてこの家に起臥している。この点については深く主人の恩を感謝すると同時にその活眼に対して敬服の意を表するに躊躇しないつもりである。御三が吾輩を知ら

ずして虐待するのは別に腹も立たない。今に左甚五郎が出て来て、吾輩の肖像を樓門の柱に刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顔をカングラスの上に描くようになったら、彼等鈍瞶漢は始めて自己の不明を恥するであらう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂寞の感はあるが、幸い人間に知己が出来たのでさほど退屈とも思わぬ。せんだつては主人の許へ吾輩の写真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間は岡山の名産吉備団子をわざわざ吾輩の名宛で届けてくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従つて、己が猫である事はようやく忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して来たような心持になつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しようなどと云う量見は昨今のところ毛頭ない。そのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思つ折さえあるくらいに進化したのはたのしい。あえて同族を軽蔑する次第ではない。ただ性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢のしからしむるところで、これを変心とか、軽薄とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を弄して人を罵詈するものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多いようだ。こつ猫の習癖を脱化して見ると三毛子「#」三毛子「#」三毛子「#」に傍点「#」や黒「#」黒「#」に傍点「#」の事ばかり荷厄介にしている訳には行かん。やはり人間同等の気位で彼等の思想、言行を評隲したくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫児の毛の生えたものくらいに思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備団子をわが物顔に喰ひ尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮つて送らぬ容子だ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしてもちよいと筆に上りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙る事に致す。

今日は上天氣の日曜なので、主人はそのそ書斎から出て来て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて腹這になつて、しきりに何か唸つている。大方草稿を書き卸す序開きとして妙な声を発するのだからと注目していると、ややしばらくして筆太に「香一」「#」主「#」に「火へん」が付く、93-6」とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一「#」主「#」に「火へん」が付く、93-7」とは、主人にしては少し洒落過ぎているがと思つ間もなく、彼は香一「#」主「#」に「火へん」が付く、93-8」を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかこうと考へている」と筆を走らせた。筆はそれだけではたと留つたぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻つたが別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗めた。唇が真黒になつたと見ると、今度はその下へちよいと丸をかけた。丸の中へ点を一つつて眼をつける。真中へ小鼻の開いた鼻をかけた、真一文字に口を横へ引張つた、これでは文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想が尽きたと見えて、そこそこに顔を塗り消してしまつた。主人はまた行を改める。彼の考によると行さえ改めれば詩か語か録か何かになるだろうとただ宛もなく考へているらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を讀み、焼芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致体で一気に成に書き流した、何となくこたごたごたした文章である。それから主人はこれを遠慮なく朗讀して、いつになく「ハハハハ面白」と笑つたが「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消そう」とその句だけへ棒を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な併行線を描く線がほかの行まで食み出して構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭を捻つて見る。文章を髭から捻り出して御覽に入れますと云う見幕で猛烈に捻つてはねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、茶の間から妻君が出て来てびたりと主人の鼻の先へ坐わる。「あなたちよつ」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼を叩くような声を出す。返事が気に入らないと見えて妻君はまた「あなたちよつ」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「今月はちよつと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも薬礼はしましたし、本屋へも先月払つたじゃないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取つた鼻毛を天下の奇觀のごとく眺めている。「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵麩を御食へになつたり、ジャムを御舐めになるものですか」「元来ジャムは幾缶舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？ そんなに舐めた覚えはない」「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」と主人は平氣な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴんと針を立てたごとくに立つ。主人は思わぬ発見を感じ入つた体で、ふつと吹いて見る。粘着力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャムばかりじゃありません、ほかに買わなければ、ならない物もあります」と妻君は大に不平な氣色を両頬に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人はまた指を突つ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いや、黒いや、種々の色が交る中に一本真白なのがある。大に驚いた様子で穴の開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手を突き戻す。「ちよつと見る、鼻毛の白髪だ」と主人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這入る。経済問題は断念したらしい。主人はまた天然居士に取り懸る。

鼻毛で妻君を追つた主人は、まずこれで安心と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦る体であるがなかなか筆は動かない。「焼芋を食つ」「#」焼芋を食つ「に傍点」も蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺する。「香一」「#」主「#」に「火へん」が付く、93-11」に傍点「#」もあまり唐突だから已める」と惜氣もなく筆誅する。余す所は「天然居士は空間を研究し論語を讀む人である」と云う一句になつてしまつた。主人はこれでは何だか簡単過ぎるようだと考へていたが、ええ面倒臭い、文章は御廃しにして、銘だけにしろと、筆を十文字に揮つて原稿紙の上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せつかくの苦心も一字残らず落第となつた。それから裏を返して「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士臆」と意味不明な語を連ねているところへ例のごとく迷亭が這入つて来る。迷亭は人の家も自分の家も同じものと心得ているのか案内もえわず、ずかすか上つてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞い込む事もある、心配、遠慮、氣兼、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力」「#」巨人引力「に傍点」かね」と立つたまま主人に聞く。「そう、いつでも巨人引力」「#」巨人引力「に傍点」ばかり書いてはおらんさ。天然居士「#」天然居士「に傍点」の墓銘を撰しているところなんだ」と大袈裟な事を云う。「天然居士」「#」天然居士「に傍点」と云つたあやほり偶然童子」「#」偶然童子「に傍点」

のような戒名かね」と迷亭は不相変出鱈目を云う。「偶然童子」#「偶然童子」に傍点」と云つのもあるのかい。「なに有りやしないがまずその見当だろうと思つていらね」「偶然童子」#「偶然童子」に傍点」と云つのは僕のものじゃないよだが天然居士」#「天然居士」に傍点」と云つのは、君の知つてる男だぜ」「一休だれが天然居士」#「天然居士」に傍点」なんて名を付けてすましているんだい」「例の曾呂崎の事だ。卒業して大学院へ這入つて空間論」#「空間論」に傍点」と云う題目で研究していたが、あまり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の所作だい」「僕さ、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名ほど俗なものはないからな」と天然居士はよほど雅な名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあその墓碑銘と云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士噫」と大きな声で読み上げる。「なるほどこりやあ善い、天然居士相当のところだ。主人は嬉しそうに「善いだらう」と云う。「この墓碑を沢庵石へ彫り付けて本堂の裏手へ力石のように抛り出して置くんだね。雅でいいや、天然居士も浮かばれる訳だ」「僕もそうしようと思つているのさ」と主人は至極真面目に答えたが「僕あちよつと失敬するよ、じき帰るから猫にでもからかつていてくれ給え」と迷亭の返事も待たず風然と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顔もしていらねないから、ニヤーニヤーと愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這いつて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥つたな、どれ」と無作法にも吾輩の襟髪を攫んで宙へ釣る。「あと足をこつら下げては、鼠は取れそうもない、……どうです奥さんこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だと見えて、隣の室の妻君に話しかける。「鼠どころじゃございませぬ。御雑煮を食べて踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところで旧悪を暴く。吾輩は宙乗りをしながらも少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩を卸してくれない。「なるほど踊りでもおどりそう顔だ。奥さんこの猫は油断のならない相好ですぜ。昔しの草双紙にある猫又に似ていますよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君に話しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どつちも御退屈様、もう帰りますしよ」と茶を注ぎ易えて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ参るにも断つて行つた事のない男ですから分りかねます。大方御医者へでも行つたんでしよ」「甘木さんですか、甘木さんもある病人に捕まっちゃ災難ですな」「へえ」と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一向頓着しない。「近頃はどつちです、少しは胃の加減が能いんですか」「能いか悪いか頓と分りませぬ、いくら甘木さんにかつたつて、あんなにジャムばかり管めては胃病の直る訳がないと思います」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを管めるんですかまるで小供のようですね」「ジャムばかりじゃありません、この頃は胃病の薬だとか云つて大根卸しを無暗に管めますので……」「驚いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸の中にはジャスターゼが有るとか云う話しを新聞で読んでからです」「なるほどそれでジャムの損害を償おうと云う趣向ですか」「いいえ大根卸を……あなた、坊や御父様がうまいものをやるからおいでつて、……」の間の間は赤ん坊にまで管めさせまして……」「ジャムですか」「いいえ大根卸を……あなた、坊や御父様がうまいものをやるからおいでつて、……」

愛がつてくれるかと思つとそんな馬鹿な事ばかりするんです。「三日前には中の娘を抱いて筆筒の上へあげましてね……」「どう云う趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釈する。「なに趣向も何も有りやしません、ただその上から飛び下りて見ると云うんですわ、三つや四つの子ですもの、そんな御転婆な事が出来るはずがないです」「なるほどこりや趣向が無過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、辛防は出来せんわ」と細君は大に気焰を揚げる。「まあそんなに不平を云わんでも善いであらう。こつちで不足なくその日その日が暮らして行かれれば上の分ですよ。苦沙弥君などは道楽はせず、服装にも構わず、地味に世帯向きに出来上つた人であらう」と迷亭は柄にない説教を陽気な調子でやつて行く。「ところがあなた大違いで……」「何か内々でやりませぬか。油断のならない世の中だからね」と飄然とふわふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、無暗に読みもしない本ばかり買ひましてね。それも善い加減に見計らつて買つてくれると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何冊でも取つて来て、月末になると知らん顔をして居るんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜つて大変困りました」「なあに書物なんか取つて来るだけ取つて来て構わんですよ。払いをとりに来たなら今にやるよと云つていりや帰つてしまひませぬ」「それでも、そういつまでも引張る訳にも参りませぬから」と妻君は憮然として居る。「それじゃ、訳を話して書籍費を削減させるさ」「どうして、そんな言を云つたつて、なかなか聞くものですか、この間などは貴様は学者の妻にも似合わん、毫も書籍の価値を解しておらん、昔し羅馬にこつち云う話がある。後学のため聞いておけと云うんです」「そりや面白い、どんな話ですか」「迷亭は乗気になる。細君に同情を表しているというよりむしろ好奇心に駆られて居る。「何んでも昔し羅馬に樽金とか云う王様が……」「樽金？樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人の名なんかむずかしくて覚えられませぬわ。何でも七代目樽金はどうですか」「なるほど七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金はどうかしましたか」「あら、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知つていらつちやるなら教えて下さればいいじゃありませんか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食つて掛る。「何冷かすなんて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は振つてると思つてね……ええお待ちなさいよ羅馬の七代目の王様ですね、こつちとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・プラウドの事でしょう。まあ誰でもいい、その王様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持つて来て買つてくれなにかと云つたんだらうです」「なるほど」「王様がいくならなら売るといつて聞いたら大変な高い事を云うんですつて、あまり高いもんだから少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊の内三冊を火にくべて焚いてしまつたそうです」「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かで見られない事が書いてあるんですつて」「へえ」「王様は九冊が六冊になつたから少しは価も減つたろうと思つて六冊でいくらだと聞くと、やはり元の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとつて火にくべてたそうです。王様はまだ未練があつたと見えて、余つた三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても代価は、元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、残つて三冊も火にくべるかも知れないので、王様はどうとう高い御金を出して焚け余りの三冊を買つたんですつて……どうだこの話で少しは書物のありがた味が分つたろう、どうだと力味むのですけれど、私にや何があつたいんだか、まあ分りませぬ」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促がす。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじゃらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考へついたように大きな声を出す。「あんなに本を買つて矢鱈に詰め込むものだから人から少しは学者だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学雑

誌を見たら苦沙弥君の評が出ていましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。「何とかいてあつたんです」「なあに三行ばかりですがね。苦沙弥君の文は行雲流水のごとしとありましたよ」細君は少しにこにこして「それぎりですか」「その次にね。出ずるかと思えば忽ち消え、逝いては長えに帰るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞めたんでしょか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でしょうな」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方ござんすまいが、よっぽど偏屈してねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような不即不離の妙答をする。「せんだつてなどは学校から帰つてすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だものですか、あなた外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳を火燵櫓の上へ乗せまして、私に御櫃を抱えて坐つておりましたがおかしくつて……」「何だかハイカラの首実検のようですね。しかしそんなところが苦沙弥君の苦沙弥君たるところで、とにかく月並でない」と切ない褒め方をします。「月並が月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あまり乱暴ですわ」「しかし月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体、月並月並と皆さんが、よくおっしゃいますが、どんなのが月並なんですか」と聞き直つて月並の定義を質問する。「月並ですか、月並と云つて、さようちと説明しにくいのですが……」「そんな曖昧なものなら月並だつて好きそつなものじゃありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分つています、ただ説明しにくいだけの事ですさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしょ」と細君は我知らず穿つた事を云う。迷亭もこうなると何と月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬ、#「年は二八か二九からぬ」に傍点」と言わず語らず物思い「#「言わず語らず物思い」に傍点」の間に寝転んでいて、「この日や天気晴朗」#「この日や天気晴朗」に傍点」とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ「#「一瓢を携えて墨堤に遊ぶ」に傍点」連中を云うんで「そんな連中があるでしようか」と細君は分らんものだから好加減な挨拶をする。「何だかごたごたして私には分りませんわ」とついに我を折る。「それじゃ馬琴の胸へマジョオ・ペンデニスの首をつけて二年欧州の空気で包んでおくんですね」「そうすると月並が出来るでしようか」「迷亭は返事をしないで笑つている。「何そんな手数のかかる事をしないで出来ませう。中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうでしようか」と細君は首を捻つたまま納得し兼ねたと云う風情に見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間にか帰つて来て迷亭の傍へ坐わる。「まだいるのかはちと酷だな、すぐ帰るから待つてい給えと言つたじゃなにか」「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧みる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまつたぜ」「女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫くらい沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を撫でてくれる。「君は赤ん坊に大根卸しを管めさせたそうだな」「ふむ」と主人は笑つたが、赤ん坊でも近頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や辛いいのはどこと聞くとときと舌を出すから妙だ」「まるで犬に芸を仕込む気であるから残酷だ。時に寒月はもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時までに苦沙弥の家へ来いと端書を出しておいたから」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をやるんだい」「なあに今日の苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にしておいたのさ。なあに君はひま人だからちよつとどいいやね。差支えなんぞある男じゃな、聞かぬがいいさ」と迷亭は独りで呑み込んでゐる。「物理学の演説なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の専断を憤つたもののごとくに云う。「ところがその問題がマグネ付けられたノズルについてなど云う乾燥無味なものじゃないんだ。首縊りの力学」「#「首縊りの力学」に傍点」と云う脱俗超凡な演説なのだから傾聴する価値があるさ」「君は首を縊り損つた男だから傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞伎座で悪寒がするくらいの人間だから聞かれないと云う結論は出そうも無いぜ」と例のごとく軽口を叩く。妻君はホホと笑つて主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のまま吾輩の頭を撫でる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらゐすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌をするというので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての白襟を簪やかにして、男振りをして方上げて、「少し後れまして」と落ちつき払つて、挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つたところなんだ。早速願おう、なあ君」と主人を見る。主人もやむを得ず「つむ」と生返事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しましょう」と云う。「いよー本式にやるのか次には拍手の請求とおいでなさるだらう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠しから草稿を取り出して徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌の御後い始める。

「罪人を絞罪の刑に処すると云う事は重にアングロサクソン民族間に行われた方法でありまして、それより古代に溯つて考えますと首縊りは重に自殺の方法として行われた者であります。猶太人中に在つては罪人を石を投げつけて殺す習慣であつたそうでございます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハンギングなる語は罪人の死体を釣るして野獣または肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタスの説に従つて見ますと猶太人はエジプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つたように思われます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴だけを十字架に釘付けにして夜中曝し物にしたそうでございます。波斯人は……」「寒月君首縊りと縁がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が口を入る。「これから本論に這入るところですから、少々御辛防を願います。……さて波斯人はどうかと申しますとこれもやはり処刑には磔を用いたようでございます。但し生きてゐるうちに張付けに致したものが、死んでから釘を打つたものかその辺はちと分りかねます……」「そんな事は分らんでもいいさ」と主人は退屈そうに欠伸をする。「まだいるいる御話し致したい事もございませうが、御迷惑であらうしやいませうから……」「あらつしやいませうより、いらつしやいませうの方が聞きいよ、ねえ苦沙弥君」とまた迷亭が咎め立をすると主人は「どつちでも同じ事だ」と気のない返事をする。「さていよいよ本題に入りまして弁じます」「弁じます」「#「弁じます」に傍点」なんか講師の云い草だ。演舌家はもつと上品な詞を使って貰いたいね」と迷亭先生また交ぜ返す。「弁じます」「#「弁じます」に傍点」が下品なら何と云つたらいいでしょう」と寒月君は少々むつとした調子で問いかける。「迷亭のは聴いているのか、交ぜ返しているのか判然しない。寒月君そんな弥次馬に構わず、さつきとやるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むつとして弁じましたる柳かな、かね」と迷亭はいかかわらず飄然たる事を云う。寒月は思はず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いましたのは、私の調べました結果によりますと、オディセイの二十二巻目に出ております。即ち彼のテ

レマカスがベネロビーの十二人の侍女を絞殺するという条りでございます。希臘語で本文を朗読しても宜しゅうございませう、ちと銜つような気味にもなりますからやめに致します。四百六十五行から、四百七十三行を御覧になると分ります。「希臘語云々はよした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わんばかりだ、ねえ苦沙弥君」「それは僕も賛成だ、そんな物欲しそうな事は言わん方が奥床しくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。両人は毫も希臘語が読めないのである。「それではこの両三句は今晩抜く事に致しまして次を弁じ、ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、彼のテレマカスがユーミアス及びフヒリーシャス「#」は下付き小文字」の援を藉りて繩の一端を柱へ括りつけます。そしてその繩の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の端をぐいと引張って釣し上げたものと見るのです。「つまり西洋洗濯屋のシャツのように女がぶら下つたと見れば好いんだらう」「その通りで、それから第二は繩の一端を前のごとく柱へ括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そしてその高い繩から何本か別の繩を下げて、それに結び目の輪になったのを付けて女の頭を入れておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずすと云う趣向なのです。「たとえて云うと繩暖簾の先へ提灯玉を釣したような景色と思えば間違はあるまい」「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすればその辺のところかと思ひます。それでこれから力学的に第一の場合は到底成立すべきものでないと言ふ事を証拠立てて御覧に入れませう」「面白いな」と迷亭が云つと、「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を繋いでいる繩はホリゾンタルと仮定します。そこで「#」数字は下付き小文字」を繩が地平線と形づくる角度とし、 $T_1 T_2 \dots T_n$ 「#」数字は下付き小文字」を繩の各部が受ける力と見做し、 T_1 「#」下付き小文字」 X は繩のもつとも低い部分の受ける力とします。Wは勿論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分つた」と云つ。但しこの大抵と云う度合は両人が勝手に作つたのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりますと、下のごとく十二の方程式が立ちます。 $T_{10} \cos 1 = T_{20} \cos 2 \dots (1)$ $T_{20} \cos 2 = T_{30} \cos 3 \dots (2)$ ……」#添字の数字は下付き小文字」「方程式はそのくらいで沢山だらう」と主人は乱暴な事を云つ。「実はこの式が演説の首脳なんです」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐つて伺う事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の体に見受けられる。「この式を略してしまつとせつかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」と主人は平気で云つ。「それでは仰せに従つて、無理ですが略しましょう」「それがよかるらう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われませう。ブラクス・トーンの説によるともし絞罪に処せられる罪人が、万一繩の具合で死に切れぬ時は再度同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には仮令兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどつちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルド「#」は下付き小文字」と云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに繩が切れてしまつたのです。またやり直すと今度は繩が長過ぎて足が地面へ着いたのでやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見物人が手伝つて往生させたと言つ話です。「やれやれ」と迷亭はこんなところへくると急に元気が出る。「本当に死に損いだな」と主人まで浮かれ出す。「まだ面白い事があります首を縊ると背が一寸ばかり延びるそうです。これはたしかに医者が計つて見たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、どうだい苦沙弥などはちと釣つて貰つちゃあ、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背が延びて生き返る事があるだらうか」と聞く。「それは駄目に極つています。釣られて脊髄が延びるからなくて、早く云つと背が延びると云うより壊れるんですからね」「それじゃ、まあ止めよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでしたが、迷亭が無暗に風来坊のような珍話を挟むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をするので、ついに途中でやめて帰つてしまつた。その晩は寒月君がいかなる態度で、いかなる雄弁を振つたか遠方で起つた出来事の事だから吾輩には知れよう訳がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃また迷亭先生は例のごとく空々として偶然童子のごとく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、越智東風の高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の号外を知らせに来たほどの勢を示す。「知らん、近頃は合わんから」と主人は平生の通り陰気である。「きょうはその東風子の失策物語を御報道に及ぼうと思つて忙しいところをわざわざ来たんだよ」「またそんな仰山な事を云う、君は全体不埒な男だ」「八八八八八不埒と云わんよりむしろ無埒の方だらう。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと名譽に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いている。純然たる天然居士の再来だ。「この前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行つたんだぞうだ。この寒いのによせばいいのに、第一今時泉岳寺などへ参るのはさも東京を知らない、田舎者のようじゃないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める権利はない」「なるほど権利は正にない。権利はどうでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見世物があるだらう。君知つてるか」「うんにや」「知らない?」「だつて泉岳寺へ行つた事はあるだらう」「いいや」「ない?」「こりや驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思つた。江戸っ子が泉岳寺を知らないのは情けない」「知らなくても教師は務まるからな」と主人はいよいよ天然居士になる。「そりや好いが、その展覽場へ東風が這入つて見物している、そこへ独逸人が夫婦連で来たんだつて。それが最初は日本語で東風に何か質問したぞうだ。ところが先生例の通り独逸語が使つて見たくてたまらん男だらう。そら二口三口べらべらやつて見たとき。すると存外うまく出来たんだ。あとで考えるとそれが災の本さね」「それからどうした」と主人はついに釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾の時絵の印籠を見て、これを買いた

る。「じゃあ寒月の方では是非買いたいとでも云つたのですか」と主人が正面から鉄砲を喰わせる。「買いたいと云つたんじゃないんですけれど……」「買いたいだろうと思つていらつしやるんですか」と主人はこの婦人鉄砲に限ると覺つたらしい。「話しはそんなに運んでるんじゃないやありませんが、寒月さんだつて満更嬉しくない事も無いでしょう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に恋着したというふうな事でもありませんか、あるなら云つて見ると云う権幕で主人は反り返る。「まあ、そんな見当でしようね、今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。今まで面白に行司気取りで見物していた迷亭も鼻子の一言に好奇心を挑撥されたものと見えて、煙管を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付け文でもしたんですか、こりや愉快だ、新年になつて逸話がまた一つ殖えて話し的好材料になる」と一人で喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もつと烈しいんです、御二人とも御承知じゃありませんか」と鼻子は乙にからまつて来る。「君知つてるか」と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿氣た調子で「僕は知らん、知つていりや君だ」とつまらんとこで謙遜する。「いえ御両人共御存じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえ」と御両人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私から御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けたいやありませんか、その晩歸りに吾妻橋で何かあつたでしょう。詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑になるかも知れませんが、あれだけの証拠がありや充分だと思ひますが、どんなものでしょう」と金剛石入りの指環の嵌つた指を、膝の上へ併べて、つんと居すまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃には胆を抜かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘧の落ちた病人のように坐つていたが、驚愕の籠がゆるんでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云う感じが一度に呐喊してくる。両人は申し合せたごとく「ハハハハ」と笑い崩れる。鼻子は少し当てがはずれて、この際笑うのはなはだ失礼だと両人を睨みつける。「あれが御嬢さんですか、なるほどこりやいい、おっしゃる通りだ、ねえ苦沙弥君、全く寒月はお嬢さんを恋つてるに相違ないね……もう隠したつてしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云つたままである。「本当に御隠しなつてもいけませんよ、ちゃんと種は上つてるんですから」と鼻子はまた得意になる。「こつなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、そう、にやにや笑つていては埒があかんじやないか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見するからな。しかし不思議と云えば不思議ですねえ、金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になつたんです。実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌る。「私の方だつて、ぬかりはありませぬやね」と鼻子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが無過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになつたんです。「じきこの裏にいる車屋の神さんからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「ええ、寒月さんの事じゃ、よほど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話をするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせさせて貰うんです」「そりや苛い」と主人は大きな声を出す。「なあに、あなたが何をなさろうとおっしゃるかと、それな構つてるんじゃないんです。寒月さんの事だつて、誰の事だつて、全体あの車屋の神さんは氣に食わん奴だ」と主人は一人怒り出す。「しかしあなたの垣根のそこへ来て立つてゐるのは向うの勝手じゃありませんか、話しが聞えてわけるけりやもつと小さい声でなさるか、もつと大きなうちへ御這入んなさるがいいでしょう」と鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじゃありません。新道の二絃琴の師匠からも大分いろいろな事を聞いています」「寒月の事をですか」「寒月さんばかりの事じゃありません」と少し凄じ事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分だけ人間らしい顔をしてゐる、馬鹿野郎です」「憚り様、女ですよ。野郎は御門違いです」と鼻子の言葉使いはますます御里をあらわして来る。これではまるで喧嘩をしに來たようなものであるが、そこへ行く迷亭はやはり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。鉄拐仙人が軍鶏の蹴合いを見るような顔をして平氣で聞いている。

悪口の交換では到底鼻子の敵でないと自覺した主人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおつしやるが、私の聞いたんじや、少し違ひますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじゃ御嬢さんの方が、始め病氣になつて、何だか諍語をいつたように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに、博士の夫人から聞いたと云つていましたぜ」「それがこつちの手なんださあ、博士の奥さんを頼んで寒月さんの氣を引いて見たんでさあね」「で引き受けたんですか」「ええ、引き受けて貰つたつて、ただじゃ出来ませぬやね、それやこれやでゐる物を使つてゐるんですから」「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなくつちや御歸りにならないと云う決心ですかね」と迷亭も少し氣持を悪くしたと見えて、いつになく手障りのあら言葉を使つ。「いいや君、話したつて損の行く事じゃなし、話そうじやないか苦沙弥君、奥さん、私も苦沙弥でも寒月君に関する事実で差支えのない事は、みんな話しますからね、そんな話を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいですね」

鼻子はようやく納得してそろそろ質問を呈出する。「時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたものごとく叮嚀になる。「寒月さんも理学士だそうですが、全体どんな事を専門にしているのをごさいます」「大学院では地球の磁氣の研究」「#地球の磁氣の研究」「#地球の磁氣の研究」に傍点をやっています」と主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから「へえ」とは云つたが怪訝な顔をしてゐる。「それを勉強すると博士になれましようか」と聞く。「博士にならなければやれないとおつしやるんですか」と主人は不愉快そうに尋ねる。「ええ、ただの学士じゃね、いくらでもありますからね」と鼻子は平氣で答える。主人は迷亭を見ていよいよいやな顔をする。「博士になるかならんかは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でもその地球の、何かを勉強しているのをごさいますようか」「三日前は首縊りの力学」「#首縊りの力学」「#首縊りの力学」に傍点」と云う研究の結果を理學協會で演説しました」と主人は何の氣も付かずに云う。「おやいやだ、首縊り」「#首縊り」に傍点」だなんて、よほど変人ですねえ。そんな首縊り」「#首縊り」に傍点」や何かやつてたんじや、とても博士にはなれませぬまいね」「本人が首を縊つちやあむずかしいですが、首縊りの力学」「#首縊りの力学」に傍点」なら成れないとも限らんです」「それでしようか」と今度は主人の方を見て顔色を窺う。悲しい事に力学」「#力学」に傍点」と云う意味がわからんので落ちつきかねてゐる。しかしこれしきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で八卦を立てて見る。主人の顔は洪い。「そのほかになにか、分り易いものを勉強しておりますまいか」「そうですね、せんだつて団栗のスタビリチー

を論じて併せて天体の運行に及ぶ「#「団栗の」から「及ぶ」まで傍点」と云う論文を書いた事があります。「団栗なんぞでも大学校で勉強するものでしょうか」「さあ僕も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する価値があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが、この御正月に椎茸を食べて前歯を一枚折ったそうじゃございませぬか」「ええその欠けたところに空也餅がくっ付いてしましてね」と迷亭はこの質問こそ吾輩張内だと急に浮かれ出す。「色気のない人じゃございませぬか、何だつて楊子を使わないうでしよう」「今度逢つたら注意しておきましょう」と主人がくすくす笑う。「椎茸で歯がかけられるくらいじゃ、よほど歯の性が悪いと思われませんが、如何なものでしょう」「善いとは言われますまいな。ねえ迷亭」「善い事はないがちよつと愛嬌があるよ。あれぎり、まだ填めないところが妙だ。今だに空也餅引掛所になつてゐるなあ奇観だぜ」「歯を填める小遣がないので欠けなりにしておくんですか、または物好きで欠けなりにしておくんですか」「何も永く前歯欠成を名乗る訳でもないでしようから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございませぬらちよつと拝見したいもんでございませぬか」「端書なら沢山あります、御覧なさい」と主人は書齋から三四十枚持つて来る。「そんなに沢山拝見しないで、その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰つてやろう」と迷亭先生は「これなぞ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございませぬか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていた人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧曆の歳の夜、山の狸が園遊会をやつて盛に舞踏します。その歌に曰く、来いさ、としの夜で、御山婦美も来まいぞ。スッポコボンノボン」「何ですこりや、人を馬鹿にしているじゃございませぬか」と鼻子は不平の体である。「この天女は御氣に入りませぬか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が羽衣を着て琵琶を弾いている。「この天女の鼻が少し小さ過ぎるようですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を読んで御覧なさい」文句にはこうある。「昔しある所に一人の天文学者がありました。ある夜いつものように高い台に登つて、一心に星を見ていますと、空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れてしまいました。朝見るとその天文学者の死骸に霜が真白に降っていました。これは本当の嘶だと、あのうそつきの爺やが申しました」「何の事ですか、意味も何もありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちつと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君さんさんにやられる。迷亭は面白半分「こりやどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあつて、例のごとくその下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寝覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるじゃありませんか」「話せますかな」「ええこれなら三味線に乗りますよ」「三味線に乗りや本物だ。こりや如何です」と迷亭は無暗に出す。「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山で、そんなに野暮でないんだと云う事は分りましたから」と一人で合点している。鼻子はこれで寒月君さんへは内々に願います。「と得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をする。「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いがら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君が唸え切れなかつたと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあのくらいになるとなかなか振つていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口気で「第一氣に喰わん顔だ」と悪らしそうに云うと、迷亭はすぐ引きつけて「鼻が顔の中央に陣取つて乙に構えているなあ」とあとを付ける。「しかも曲つていらあ、少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇抜過ぎる」と面白そうに笑う。「夫を剋する顔だ」と主人はなお口惜しそつである。「十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝しに逢うと云う相だ」と迷亭は妙な事ばかり云つ。ところへ妻君が奥の間から出て来て、女だけに「あんまり悪口をおつしやると、また車屋の神さんにいつけ」「いつけ」に傍点「られますよ」と注意する。「少しいつけ」「#「いつけ」に傍点」の方が薬ですよ、奥さん」「しかし顔の讒訴などをなさるのには、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる訳でもありませんから。それに相手が婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻の鼻を弁護すると、同時に自分の容貌も間接に弁護しておく。「何ひどいものか、あんなのは婦人じゃなく、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかええら者だ、大分引き搔かれたじゃないか」「全体教師を何と心得ているんだらう」「裏の車屋くらいに心得ているのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに限るよ、一体博士になつておかんのが君の不了見さ、ねえ奥さん、それでしよう」と迷亭は笑いながら細君を顧みる。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君にまで見離される。「これでも今になるかも知れん、軽蔑するな。貴様などは知るまいが昔しアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作つた。おれだつて……」「馬鹿馬鹿しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。「失敬な、甘木さんへ行つて聞いて見る。元来御前がこんな皺苦茶な黒木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけて、あんな立派な御召はござんせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀になつたのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎じやございませぬ」と細君つまく責任を逃がれる。

主人は伯父さん「#「伯父さん」に傍点」と云う言葉聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、今日始めて聞いた。今までついに噂をした事がないじゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬鹿に頑物でねえ。やはりその十九世紀から連綿と今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホオホホ面白事ばかりおつしやつて、どこに生きていらつしやるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじゃないです。頭にちよん鬚を頂いて生きてるんだから恐縮しますさあ。帽子を被れてえと、おれはこの年になるが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張つてるんです。寒いから、もつと寝ていらつしやいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間以上寝るのは贅沢の沙汰だつて朝暗いうちから起き

てくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちはどうしても眠たくていかなんだが、近頃に至って始めて随処任意の庶境に入ってはなはだ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ当り前です。修業も糸瓜も入つたものじゃないのに当人は全く克己の力で成功したと思つてるんですからね。それで外出する時には、きつと鉄扇をもつて出るんですがね、「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持つて出るんだね。まあ又テッキの代りくらいに考へてるかも知れんよ。ところがせんだつて妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえ」と細君が差し合のない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートに至急送れと云うんです。ちよつと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会があるからそれまでに間に合うように、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかしいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な大きさを買つてくれ、洋服も寸法を見計らつて大丸へ注文してくれ……」「近頃は丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋と間違えたんだあね」「寸法を見計らつてくれたつて無理じゃないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どうした？」「仕方がないから見計らつて送つてやった」「君も乱暴だな。それで間に合つたのかい」「まあ、どうにか、こつにかあつたんだらう。国の新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートにて、例の鉄扇を持ち……」「鉄扇だけは離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは入れてやろつと思つていようよ」「それでも帽子も洋服も、つまみ具合に着られて善かつた」「ところが大間違さ。僕も無事に持つてありがたいと思つてると、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、手紙が添えてあつてね、せつかく御求め被下候えども少々大きく候間、帽子屋へ御遣わしの上、御縮め被下度候。縮め賃は小為替にて此方より御送可申上候とあるのさ」「なるほど迂闊だな」と主人は己れより迂闊なもの天下にある事を発見して大に満足の体に見える。やがて「それから、どうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴して被つていらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやにや笑つて、「その方が男爵でいらつしやるんですか」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」「その鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、若い時聖堂で朱子学か、何かにこり固まつたものだから、電気灯の下で恭しくちよん」「#「ちよん」に傍点」鬚を頂いていられるんです。仕方がありません」とやたらに顔を撫で廻す。「それでも君は、さつきの方に牧山男爵と云つたようだぜ」「そうおつしやいましたよ、私も茶の間で聞いておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同意する。「それで君は、さつきの方に牧山男爵と云つたようだぜ」「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長くらいになつていませあ」と平気なものである。「何だか変だと思つた」と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付けますねえ。あなたもよつぱど法螺が御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上わ手さあ」「あなただつて御負けなざる氣遣いはありません」「しかし奥さん、僕の方法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰く付きの嘘ですぜ。たちが悪いです。猿智慧から割り出した術数と、天来の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディの神様も活眼の土なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至りますからな」と主人は俯目になつて、「どうだか」と云つ、「妻君は笑いながら、同じ事ですわ」と云つ。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。聞いた事さえ今が初めてである。主人の家で実業家が話頭に上つた事は一返もないので、主人の飯を食つ吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻図らずも鼻子の訪問を受けて、余所ながらその談話を拝聴し、その令嬢の艶美を想像し、またその富貴、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側に寝転んでいらなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ同情の至りに堪へん。先方では博士の奥さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院まで買取して知らぬ間に、前歯の欠けたのさえ探偵してゐるのに、寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかりに氣にしているのは、いかに卒業したての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つて、ああ云う偉大な鼻を顔の中に安置してゐる女の事だから、滅多な者では寄り付けられない。こつ云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつあまりに錢がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを与える便宜は少からう。して見ると可哀相なのは首縊りの力学「#「首縊りの力学」を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エピックテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の家に寄寓する猫で、世間一般の痴猫、愚猫とは少しく撰を殊にしては、この冒険をあえてするくらい義侠心は固より尻尾の先に畳み込んである。何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが、これはただに個人のためにする血氣躁狂の沙汰ではない。大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現実にする天晴な美拳だ。人の許諾を経ずして吾妻橋事件などを至る処に振り廻す以上は、人の軒下に犬を忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴する以上は、車夫、馬丁、無頼漢、ごろつき書生、日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至るまでを使用して国家有用の材に煩を及ぼして顧みざる以上は、猫にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解は少々閉口するが道のためには一命もする。足の裏へ泥が着いて、椽側へ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ御三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されな。翌日とも云わずこれから出掛けようと勇猛精進の大決心を起して台所まで飛んで出たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達しているのみならず、腦力の発達においてはあえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな咽喉の構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、肝心の寒月君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の口を受け

て光らぬと同じ事で、せつかくの智識も無用の長物となる。これは愚だ、やめよつかしらんと上り口で佇んで見た。

しかし一度思い立つた事を中途でやめるのは、白雨が来るかと待つてゐる時黒雲共隣国へ通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のためなら、たとい無駄死をやるまでも進むのが、義務を知る男児の本懐であらう。無駄骨を折り、無駄足を汚すくらいは猫として適當のところである。猫と生れた因果で寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技術はないが、猫だけに忍びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を成就するのはそれ自身において愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのには、誰も知らぬより愉快である。人に告げられなくても人に知られてゐると云う自覚を彼等に与つるだけが愉快である。こんな愉快が続々出て来ては行かすにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋館のごとく傲慢に構えているんだらうと、門を這入ってその建築を眺めて見たがただ人を威圧しようとして、一階作りが無意味に突っ立っているほかに何等の能もない構造であった。迷亭のいわゆる月並とはこれであろうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生の台所の十倍はたしかにある。せんだって日本新聞に詳しく書いてあった大隈伯の勝手にも劣るまいと思つてくらい整然とびかびかしている。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪ほどの土間に、例の車屋の神さんが立ちながら、御飯焚きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こいつは剣呑だと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚きが云う。「知らねえ事があるもんか、この界限で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」これは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変人なんだからねえ。旦那の事を少しも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供の歳さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐変木だ。構あ事あねえ、みんな威嚇かしてやるうじやねえか」「それが好いよ。奥様の鼻が大きい過ぎるの、顔が気に喰わないのって、そりやあ酷い事を云うんだよ。自分の面あ今戸焼の狸見たような癖に、あれで一人前だと思つてゐるんだからやれ切れないじやないか」「顔ばかりじやない、手拭を提げて湯に行くところからして、いやに高慢ちきじやないか。自分くらいえらい者は無いつもりでゐるんだよ」と苦沙弥先生は飯焚にも大に不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の傍へ行つて悪口をさんざんいってやるんだね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「しかしこつちの姿を見せちゃあ面白くないから、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしやれつて、さつき奥様が言い付けておいでなすつたぜ」「そりや分つてゐるよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほどこの手が苦沙弥先生を冷やかに来るなと三人の横を、そつと通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いても不器用な音のした試しがない。空を踏むがごとく、雲を行くがごとく、水中に磬を打つがごとく、洞裏に瑟を鼓するがごとく、醍醐の妙味を嘗めて言詮のほかに冷暖を自知するがごとし。月並な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助も、飯焚も、御嬢さまも、仲働きも、鼻子夫人も、夫人の旦那様もない。行きたいところへ行つて聞きたい話を聞いて、舌を出し尻尾を掉つて、髭をぴんと立てて悠々と帰るのみである。ことに吾輩はこの道に掛けては日本一の堪能である。草双紙にある猫又の血脈を受けておりはせぬかと自ら疑うくらいである。暮の顔には夜光の明珠があると云うが、吾輩の尻尾には神祇釈教恋無常は無論の事、満天下の人間を馬鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである。金田家の廊下を人の知らぬ間に横行するくらいは、仁王様が心太を踏み潰すよりも容易である。この時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、これも普段大事にする尻尾の御蔭だと気が付いて見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝してニヤン運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見たが、どうも少し見当が違つたようである。なるほど天地玄黄を三寸裏に収めるほどの霊物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を環る事七度半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこにゐるのだからちよつと方角が分らなくなる。構うものかと滅茶苦茶にありき廻る。障子の裏で鼻の音がする。ここだと立ち留まつて、左右の耳をはずして切つて、息を凝らす。「貧乏教師の癖に生意氣じやありませんか」と例の金切り声を振り立てる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲らしめのためにいじめてやるう。あの学校にや国のものもゐるからな」「誰がゐるの?」「津木ピン助や福地キシャゴがゐるから、頼んでからかわしてやるう」吾輩は金田君の生国は分らんが、妙な名前前の人間ばかり揃つた所だと少々驚いた。金田君はなお話をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだつて云います」「どうせ碌な教師じやあるめえ、あるめえ」「#」「あるめえ」「に傍点」にも妙なならず感心した。「この間ピン助に遇つたら、私の学校にや妙な奴がおります。生徒から先生番茶」「#」「番茶」に傍点」は英語で何と云いますと聞かれて、番茶」「#」「番茶」に傍点」は Savage tea であると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなつてゐます。どうもあんな教員があるから、ほかのもの、迷惑になつて困りますと云つたが、大方あいつの事だぜ」「あいつに極つていませあ、そんな事を云いそつな面構えですよ、いやに髭なんか生やして」「怪しからん奴だ」「髭を生やして怪しからなければ猫などは一疋だつて怪しかりようがない。」「それにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返りなんでしょう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんぞ、有るはずがないと思つたんですもの。」「御前がどこの馬の骨だか分らんもの言つ事を真に受けるのも悪い」「悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじやありませんか」と大変残念そうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句も出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が極つて念頭のないものが、その辺は懸念もあるが仕方がない。しばらく佇んでゐると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬ先に、とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独りで何か大声で話している。その声が鼻とよく似てゐるところをもつて推すと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂入水をあえてせしめたる代物だらう。惜哉障子越しで玉の御姿を拝する事が出来ない。従つて顔の真中に大きな鼻を祭り込んでゐるか、どうだか受合えない。しかし談話の模様から鼻息の荒いところなどを総合して考へて見ると、満更人の注意を惹かぬ獅鼻とも思われぬ。女はしきりに喋舌つてゐるが相手の声が少しも聞えないのは、噂にきく電話というものである。「御前は大和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取つておいておくれ、いいかえ、分つたかい、なに分らない?」「おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。なんだつて、取れない?」「取れないはずはない、とるんだよ。へへへへ御冗談をだつて、何が御冗談なんだよ。いやに人をおひやらかすよ。全体御前は誰だい。長吉だ?」「長吉なんぞじゃ訳が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云いな。なに?」「私して何でも弁じます?」「お前は失敬だよ。妾しを誰だか知つてゐるのかい。金田だよ。へへへへ善く存じておりますだつて。ほんとに馬鹿だよこの人あ。金田だつてえはさ。なに?」「お前は通らだつて?」「あんまり人を馬鹿にする」と電話を切つてしまふ。いいの、困らないのかよ。黙つてちや分らないじやないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の

返事もないらしい。令嬢は痲癩を起してやけにベル」#「ベル」に傍点」をジャラジャラと廻す。足元で狎が驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶に出来ない、急に飛び下りて椽の下へもぐり込む。

折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音がする。誰か来たなと一生懸命に聞いてみると、「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらつしやいます」と小間使らしい声がする。「知らないよ」と令嬢は剣突を食わせる。「ちよつと用があるから嬢を呼んで来いとおつしやいました」「うるさいね、知らないでば」と令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの顔で御用があるんだそつてございます」と小間使は気を利かして機嫌を直そつとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ、大嫌いだわ、糸瓜が戸迷いをしたよつな顔をして、第三の剣突は、憐れなる寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髪に結つたの、小間使はほつと一息ついて、今日」となるべく単簡な挨拶をする。「生意気だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。「そつて新しい半襟を掛けたじやないか」「へえ、せんだつて御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体ないと思つて行李の中へしまつておきました、今までのがあまり汚れましたからかけ易えしました」「いつ、そんなものを上げた事があるの、この御正月、白木屋へいらつしやいまして、御求め遊ばしたので、驚茶へ相撲の番附を染め出したのでございます。妾しには地味過ぎていやだから御前に上げようとおつしやつた、あれでございます」「あらいやだ、善く似合つたのね。にくらしいわ、恐れ入ります、褒めたんじやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合つたものをなぜだまつて貰つたんだい」「へえ」「御前にさへ、そのくらい似合つたら、妾しにだつておかしい事はないだらうじやないか」「きつとよく御似合い遊ばします」「似あうのが分つてる癖になぜ黙つていらんだい。そつてすまして掛けていらんだよ、人の悪い、剣突は留めどもなく連発される。このさき、事務局はどう発展するかと謹聴している時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狎が顔の中心に眼と口を引き集めたよつな面をして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績である。

帰つて見ると、奇麗な家から急に汚ない所へ移つたので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟の中へ入り込んだよつな心持ちがする。探険中は、ほかの事に気を奪われて部屋の裝飾、襖、障子の具合などには眼も留らなかつたが、わが住居の中等なるを感じると同時に彼のいわゆる月並が恋しくなる。教師よりもやはり実業家らしいように思われる。吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾に伺いを立てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宣があつた。座敷へ這入つて見ると驚いたのは迷亭先生まだ帰らない、巻煙草の吸い殻を蜂の巣のごとく火鉢の中へ突き立てて、大胡坐で何か話し立てている。いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして天井の雨洩を余念もなく眺めている。あいかわらず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事を論語にまで言つた婦人の名は、当時秘密であつたよつだが、もう話しても善かろつ」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけに関する事なら差支えないんですが、先方の迷惑になる事ですから、まだ駄目かなあ」「それに、博士夫人に約束をしてしまつたもんですから」「他言をしないと云つ約束かね」「ええ」と寒月君は例のごとく羽織の紐をひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などには無頓着である。「そつと、到底日露戦争時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の付いたぶつ、割き羽織でも着なくつちや納まりの付かない紐だ。織田信長が智入するとき頭の髪を茶筌に結つたと云つがその節用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「實際これは爺が長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。「もつとい加減に博物館へでも献納してはどうだ。首縊りの力学」#「首縊りの力学」に傍点」の演者、理学士水島寒月君ともあるもの、売れ残りの旗本のような立てをするのはちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合つと云つてくれる人もありますので、い、そんな趣味のない事を云つのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじやないんで」「御存じでなくてもいいや、一体誰だ」「去る女性なんです」「ハハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返御駄仏を極め込んで、毒々しい鼻だぜ」「へえ？」と寒月君は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、こゝへ、実に僕等一人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「へえ？」と迷亭が誰の事です」「君の親愛なる久遠の女性の御母堂様だ」「へえ」「金田の妻という女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺つて見ると別段の事も無い。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰つてくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねくる。「ところが大違さ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね……」迷亭が半ば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻について俳体詩を考えているんだがね」と木に竹を接いだよつな事を云う。隣の室で妻君がくすくす笑い出す。「随分君も呑気だなあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこの顔に鼻祭り」#「この顔に鼻祭り」に傍点」と云うのだ。「それから？」「次へ穴二つ幽かなり」#「この鼻に神酒供え」に傍点」といふのさ。「次の句は？」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですが、奥深く毛も見えず」「奥深く毛も見えず」に傍点」はいけますまいかと、と各々出鱈目を並べていると、垣根に近く、往来で「今戸焼の狸今戸焼の狸」と四五人わいわい云う声がする。主人も迷亭もちよつと驚ろいて表の方を、垣の隙からすかして見ると「ワハハハハ」と笑つて遠くへ散る足の音がする。「今戸焼の狸という何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答える。「なかなか振つていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上つて「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございますから、その一斑を披瀝して、御両君の清聴を煩わしたいと思います」と演舌の真似をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見てゐる。寒月は「是非承りたいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたくさんである。何もこんなに横風に真中から突き出して見る必用がないのである。ところがどうしてだんだん御覧のごとく斯様にせり出して参つたか」と自分の鼻を掴んで見せる。「あんまりせり出してもおらんじやないか」と主人は御世辞のないところを云う。「とにかく引つ込んではおられませんから。ただ二個の孔が併んでいる状態と混同なすつては、誤解を生ずるに至るかも計られませんか、予め御注意を

しておきます。で愚見によりますと鼻の発達は何々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したものでございます。「伴りのない愚見だ」とまた主人が寸評を挿入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を掴みます、鼻を掴んで、ことにこの局部だけに刺激を与えますと、進化論の大原則によつて、この局部はこの刺激に応ずるがために他に比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなり、肉も次第に硬くなり、ついに凝って骨となり、それは少し、その自由肉が骨に一定飛に变化は出来ませぬ」と理学士だけあって寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳べ続ける。「いや御不審はごもつともですが論より証拠この通り骨があるから仕方がありません。すでに骨が出来る。骨は出来ても鼻汁は出ますな。出ればかまらずにはいられます。この作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と変化して参ります。実に恐ろしい作用です。点滴の石を穿つがごとく、賓頭顱の頭が自から光明を放つがごとく、不思議不思議の喩のごとく、斯様に鼻筋が通つて堅くなり、それで君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部は回護の恐れがありますから、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、もつとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思ひます。寒月君は思はずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達しますと偉観には相違ございませぬが何となく怖しくて近づき難いものであります。あの鼻梁などは素晴らしいに違ひございませぬが、少々峻嶒過ぎるかと思われませぬ。古人のうちにもソクラテス、ゴルドスミスもしくはサッカレーの鼻などは構造の上から云うと随分申し分はございませぬが、その申し分のあるところに愛嬌がございませぬ。鼻高きが故に貴からず、奇なるがために貴しとはこの故でもございませぬ。下世話にも鼻より団子と申しますれば美的価値から申しますと迷亭くらのいところが適当かと存じます。寒月と主人は「フフフ」と笑い出す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ今まで弁じましたのは、先生弁じました」「弁じました」「傍点」は少し講師のよう下品ですから、よしていただきませう」と寒月君は先日の復讐をやる。「さようしからは顔を洗つて出直しましようかな。ええ、これから鼻と顔の権衡に一言論及したいと思ひます。他に關係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂などはどこへ出しても恥ずかしからぬ鼻。鞍馬山で展覽会があつても恐らく一等賞だろつと思われぬ鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来上つた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したもの相違ございませぬ。しかしシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、当家の猫の顔へ安置したらどんな者でございませうか。喩えにも猫の額と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大仏を据え付けたようなもので、少しく比例を失するの極、その美的価値を落す事だろつと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそのごとく、正しく英姿颯爽たる隆起に相違ございませぬ。しかしその周囲を圍繞する顔面的条件は如何なる者でありませぬ。無論当家の猫のごとく劣等ではない。しかし癩癩病みの御かめ」「御かめ」「傍点」のごとく眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆ぜざるを得んではありませぬか。迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話をしてるんだよ。何てえ剛突く張だろつ」と云う声が聞える。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあつて、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思つてあります。ことに宛転たる嬌音をもつて、乾燥なる講筵に一点の艶味を添えられたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する訳でありますが、これからは少々力学上の問題に立ち入りますので、勢御婦人方には御分りにくいかも知れませぬ、どうか御辛防を願ひます。寒月君は力学と云う語を聞いてまたにやにする。「私の証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツアイシングの黄金律」「黄金律」に傍点」を失していると云う事なんで、それを嚴格に力学上の公式から演繹して御覧に入れよう」と云うのであります。まずHを鼻の高さとします。は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困つたな。苦沙弥はとにかく、君は理学士だから分るだろつと思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやつた甲斐がないのだが。まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演説は、デザートのない西洋料理のようなものだ、いいか両君能く聞き給え、これから結論だけ。さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺傳は無論の事許さねばなりません。またこの形体に追陪して起る心意的状況は、たとい後天性は遺傳するものにあらずとの有力なる説あるにも聞せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなりません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませぬが、かかる遺傳は潜伏期の長いものでありますから、いつ何時気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそのごとく、咄嗟の間に膨脹するかも知れませぬ、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になつた方が安全かと思われませぬ、これには当家の御主人は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿にも御異存は無かるうと存じます。主人はようよう起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。寒月君もちやいかにんよ」と大變熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表するために「やー」と二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく、「先生方の御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、もし当人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから」「ハハハハ八艶罪と云う訳だ。主人だけは太にむきになつて、そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極つてらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込めに掛つた奴だ。傲慢な奴だ」と独りでぶんぶんする。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハハ」と云う声がする。一人が「高慢ちきな唐変木だ」と云うと一人が「もつと大きな家へ這入りてえだろつ」と云う。また一人が「御氣の毒だが、いくら威張つたつて陰弁慶だ」と大きな声をする。主人は椽側へ出て負けないような声で「やがましい、何だわざわそんな塀の下へ来て」と怒鳴る。「ワハハハハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大に逆鱗の体で突然起つてステッキを持って、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍つて「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を擦つてにやにやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立っている。人通りは一人もない、ちよつと狐に抓まれた体である。

四

例によつて金田邸へ忍び込む。

「ところが何だか要領を得ないので」

「ええ苦沙弥じゃ要領を得ない訳で　あの男は私がいつしよに下宿をしている時分から実に煮え切らない　そりゃ御困りでございましたらう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのってあなた、私じゃこの年になるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱を受けた事はありやしません」と鼻子は例によつて鼻風を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔から頑固な性分　何しろ十年一日のごくりードル専門の教師をしているので大体御分りになりましょう」と御客さんは体よく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻が何か聞くともまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪しからん訳で　一体少し学問をしているとかく慢心が萌すもので、その上貧乏をすると負け惜しみが出ますから　いえ世の中には随分無法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が付かないで、無暗に財産のあるものに喰つて掛るなんてえのが　まるで彼等の財産でも捲き上げたような気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さんは大恐悦の体である。

「いや、まことに言語同断で、ああ云うのは必竟世間見ずの我儘から起るのだから、ちつと懲らしめのためにいじめてやるが好かるうと思つて、少し当つてやったよ」「なるほどそれでは大分答えましたらう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる当り方「#」に傍点「#」か承らぬ先からすでに金田君に同意してゐる。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでしょう。学校へ出て福地さんや、津木さんには口も利かないんだそうです。恐れ入つて黙つて居るのかと思つたらこの間は罪もない、宅の書生をステッキを持って追つ懸けたつてんです　三十面さげて、よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじゃありませんか、全くやけ」「#」やけに傍点「#」で少し気が変になつて居るんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやつたんで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つたんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持って跣足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ちつとやそつと何か云つたつて小供じゃありませんか、髯面の大僧の癖にしかも教師じゃありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云つと、金田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はいかなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくしておらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した論点と見える。

「それに、あの迷亭つて男はよつばどな酔興人ですね。役にも立たない嘘八百を並べ立てて。私じゃあんな変挺な人じゃ初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺を吹くと見えますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになつたんですか。あれに掛つちやたまりません。あれも昔し自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですから能く喧嘩をしましたよ」

「誰だつて怒りませあね、あんなじや。そりゃ嘘をつくのも宜つござんしょうさ、ね、義理が悪うとか、ばつを合せなくつちやあならないとか　そんな時には誰しも心ない事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐かなくなつてすむのに矢鱈に吐くんだから始末に了えないじゃありませんか。何が欲しくつて、あんな出鱈目を　よくまあ、しらじらしく云えると思つますよ」

「もつとでも、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せつかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も滅茶滅茶になつてしまいました。私や剛腹で忌々しくつて　それでも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。ところがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理由がない、持つて帰つて云うんだそうです。いえ御礼だから、どうか御取り下さいつて車夫が云つたら　悪くいじやありませんか、俺はジャムは毎日舐めるがビールのような苦しい者は飲んだ事がないつて、ふいと奥へ這入つてしまつたつて　言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じゃありませんか」

「そりゃ、ひどい」と御客さんも今度は本気に苛いと感ぜたらしく。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者は陰から、からかつてさえいれればすむよつなもの、少々それでも困る事があるじやて……」と鮎の刺身を食つ時のごとく禿頭をびちゃびちゃ叩く。もつとも吾輩は椽の下にいるから實際叩いたか叩かないか見えようはずがないが、この禿頭の音は近來大分聞馴れている。比丘尼が木魚の音を聞き分けるごとく、椽の下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だなど出所を鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君を煩わしいと思つてな……」

「私に出来ませぬ事なら何でも御遠慮なくどうか。今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますから」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する。「この口調で見るとこの御客さんはやはり金田君の世話になる人に見える。いやだんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天気が宜いので、来る気もなしに来たのであるが、こつこつ好材料を得ようとは全く思い掛けなんだ。御彼岸にお寺詣りをして偶然方丈で牡丹餅の御馳走になるような者だ。金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。」

「あの苦沙弥と云う変物が、どう云う訳か水島に入れ智慧をするので、あの金田の娘を買っては行かんなどとほめかすそうだな。なあ鼻子そうだな。」

「ほめかすどころじゃありません。あんな奴の娘を買つ馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して買つちやいかんよつて云うんです。」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云つたのか。」

「云つたどころじゃありません、ちゃんと車屋の神さんが知らせに来てくれたんです。」

「鈴木君どうだい、御間の通りの次第さ、随分厄介だろつが？」

「困りますね、ほかの事と違つて、こつこつ事には他人が妄りに容喙するべきはずの者ではありませんから。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得ているはずですが、一体どうした訳なんでしょう。」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をしていて、今はとにかく、昔は親密な間柄であつたさうだから御依頼するのだが、君当人に逢つてな、よく利害を論じて見てくれんか。何か怒っているかも知れんが、怒るのは向が悪るいからで、先方がおとなしくしてさえいれば一身上の便宜も充分計つてやるし、気に障るような事もやめてやる。しかし向が向ならこつこつちもこつこつち云う気になるからな。つまりそんな我を張るのは当人の損だからな。」

「ええ全くおつしやる通り愚な抵抗するのは本人の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましよう。」

「それから娘はいろいと申し込もある事だから、必ず水島にやると極める訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなつたらあるいはもう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほめかしても構わん。」

「そつ云つてやつたら当人も励みになつて勉強する事でしょう。宜しゅうございます。」

「それから、あの妙な事だが、水島にも似合はん事だと思つが、あの変物の苦沙弥を先生先生と云つて苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なにそりや何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙弥が何と云つて邪魔をしようつと、わしの方は別に差支えませんが……。」

「水島さんが可哀そうですからね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢つた事もございせんが、とにかくこちらと御縁組が出来れば生涯の幸福で、本人は無論異存はないのでしよう。」

「ええ水島さんは貰いたがつてゐるんですが、苦沙弥だの迷亭だのつて変り者が何だとか、かんだとか云うものですか。」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合はん所作ですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましよう。」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳しいのだがせんだつて妻が行つた時は今の始末で碌々聞く事も出来なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて。」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻つたら、もう帰つておりましよう。近頃はどこに住んでおりますか知らん。」

「ここの前を右へ突き當つて、左へ一丁ばかり行くと崩れかかつた黒塀のあるうちです」と鼻子が教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。歸りにちよつと寄つて見ましよう。なあに、大体分りましよう標札を見れば。」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を御饌粒で門へ貼り付けるのでしよう。雨がふると剥がれてしまいましよう。すると御天気の日にもまた貼り付けるのです。だから標札は当にやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札でも懸けたらよさそうなものですかねえ。ほんとうにどこまでお気の知れない人ですよ。」

「どつも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしよう。」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、好い事がある。何でも屋根に草が生えたうちを探して行けば間違つてありませんよ。」

「よほど特色のある家ですなアハハハハ。」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。椽の下を伝わって雪隠を西へ廻って築山の陰から往来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ帰って来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布を敷いて、腹這になつて麗かな春日に甲羅を干している。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋でも、金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、気の毒な事には毛布だけが春らしくない。製造元では白のつもりで織り出して、唐物屋でも白の気で売り捌いたのみならず、主人も白と云う注文で買つて来たのであるが、何しろ二十三年以前の事だから白の時代はとくに通り越してた今は濃灰色なる変色の時期に遭遇しつゝある。この時期を經過して他の暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、疑問である。今でもすでに万遍なく擦り切れて、豎横の筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称するのはもはや僭上の沙汰であつて、毛の字は省いて単に「ツト」に「傍点」とでも申すのが適当である。しかし主人の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った以上は生涯持たねばならぬと思つていらしい。随分呑気な事である。さてその因縁のある毛布の上へ前申す通り腹這になつて何をしているかと思つと両手で出張つた願を支えて、右手の指の股に巻煙草を挟んでいる。ただそれだけである。もつとも彼がフケ「#」フケ「#」に傍点「#」に傍点「#」に傍点「#」だから頭の裏には宇宙の大真理が火の車のごとく廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝見したところでは、そんな事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ逼つて、一寸ばかり燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるのも構わず主人は一生懸命に煙草から立ち上る煙の行末を見詰めていゝる。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を幾重にも描いて、紫深き細君の洗髪の本根へ吹き寄せつゝある。 おや、細君の事を話しておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻を向けて、なに失礼な細君だ？ 別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のところへ頬杖を突き、細君は平気で主人の顔の先へ莊嚴なる尻を据えたまでの事でも無礼も糸瓜もないのである。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間に礼儀作法などと窮屈な境遇を脱却せられた超然たる夫婦である。 さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう云う見か、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒髪を、黚海苔と生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけて、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。実はその洗髪を乾かすために唐縮緬の布団と針箱を椽側へ出して、恭しく主人に尻を向けたのである。あるいは主人の方で尻のある見当へ顔を持って来たのかも知れない。そこで先刻御話しをした煙草の煙りが、豊かに靡く黒髪の間流れ流れて、時ならぬ陽炎の燃えるところを主人は余念もなく眺めている。しかしながら煙は固より一所に停まるものではない、その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の眼もこの煙りの髪の毛と纏れ合う奇觀を落ちなく見ようとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。主人はまず腰の辺から觀察を始めて徐々と背中を伝つて、肩から頸筋に掛つたが、それを通り過ぎてようよう脳天に達した時、覚えずあつと驚いた。主人が偕老同穴を契つた夫人の脳天の真中には真丸な大きな禿がある。しかもその禿が暖かい日光を反射して、今や時を得顔に輝いている。思わざる辺にこの不思議な大発見をなした時の主人の眼は眩ゆい中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔の開くのも構わず一心不乱に見つめている。主人がこの禿を見た時、第一彼の脳裏に浮んだのはかの家伝来の仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿である。彼の一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の倉の中に、薄暗く飾り付けられたる金箔厚き厨子があつて、その厨子の中にはいつでも真鍮の灯明皿がぶら下つて、その灯明皿には昼でもぼんやりした灯がついていた事を記憶している。周囲が暗い中にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やっていたので小供心にこの灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿に喚び起されて突然飛び出したものであつた。灯明皿は一分立たぬ間に消えた。この度は観音様の鳩の事を思い出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の關係もないようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必ず鳩に豆を買つてやつた。豆は一皿が文久二つで、赤い土器へ這入つていた。その土器が、色と云い大さと云いこの禿によく似ている。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云つと、「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だつて、御前の頭にも大きな禿があるぜ。知つてるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げているなら欺されたのであると口へは出さないが心の中で思つ。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだつて宜いじゃありませんか」と大に悟つたものである。

「どうだつて宜いつて、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだつて宜いんだわ」と云つたが、さすが少しは気になると見えて、右の手を頭に乘せて、くるくる禿を撫でて見る。「おや大分大きくなった事、こんなじゃ無いと思つていた」と言つたところをもつて見ると、年に合わして禿があまり大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は鬘に結つと、こゝが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく弁護します。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から薬缶ばかり出来なければならぬ。そりゃ病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫で廻して見る。

「そんなに人の事をおっしゃるが、あなただつて鼻の孔へ白髪が生えてるじゃありませんか。禿が伝染するなら白髪だつて伝染しますわ」と細君少々ぶりぶりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が　ことに若い女の脳天がそんなに禿げちゃ見苦しい。不具だ」

「不具なら、なぜ御貴いになったのです。御自分が好きで貰っておいで不具だなんて……」

「知らなかつたからさ。全く今日まで知らなかつたんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見せなかつたんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢するが、御前は背いが人並外れて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじやありませんか、背の低いのは最初から承知で御貴いになつたんじゃないやありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思つたから貰つたのさ」

「廿にもなつて背いが延びるなんて　あなたもよっぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖なしを抛り出して主人の方に擦り向く。返答次第ではその分にはすまさんと云つ権幕である。

「廿になつたつて背いが延びてならんと云う法はあるまい。嫁に来てから滋養分でも食わしたら、少しは延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔をして妙な理窟を述べていると門口のベルが勢よく鳴り立てて頼むと云う大きな声がある。いよいよ鈴木君がペンペン草を目的に苦沙弥先生の臥龍窟を尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲つて、倉皇針箱と袖なしを抱えて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の毛布を丸めて書齋へ投げ込む。やがて下女が持つて来た名刺を見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であつたが、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握つたまふ後架へ這入つた。何のために後架へ急に這入つたか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君の名刺を後架まで持つて行つたのかなおさら説明に苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜられた名刺君である。

下女が更紗の座布団を床の前へ直して、どうぞこれへと引き下がつた、跡で、鈴木君は一応室内を見廻す。床に掛けた花開万国春とある木菴の贖物や、京製の安青磁に活けた彼岸桜などを一々順番に点検したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るといつの間にか一疋の猫がすまして坐つて居る。申すまでもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と蹲踞している。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が勧められたまま、主なくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君はわざと謙遜の意を表して、主人がさあどうぞと云うまでは堅い雪の上で我慢していたかも知れない。しかし早晩自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗つたものは誰であろう。人間なら譲る事もあろうが猫とは怪しからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもつとも癪に障る。少しは気の毒そうにでもしている事か、乗る権利もない布団の上に、傲然と構えて、丸い無愛嬌な眼をぱちつかせて、御前は誰だと言わぬばかりに鈴木君の顔を見つめて居る。これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平があるなら、吾輩の頸根つこを捉えて引きずり卸したら宜さうなものだが、鈴木君はだまつて見ている。堂々たる人間が猫に恐れを手にしをせぬと云う事は有るはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩らさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自尊心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが、体面を重んずる点より考るといかに金田君の股肱たる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮座します猫大明神を如何ともする事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをしたとあつてはいささか人間の威厳に関する。真面目に猫を相手にして曲直を争うのはいかにも大人気ない。滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不便は忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばならぬだけ猫に對する憎悪の念は増す訳であるから、鈴木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔をする。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は衣紋をつくるつて後架から出て来て、「やあ」と席に着いたが、手に持つていた名刺の影さえ見えぬところをもつて見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際会したものだと思ふ間もなく、主人はこの野郎と吾輩の襟がみを攫んでいといとばかりに椽側へ擲きつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君はちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかつたが、実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになってね……」

「それは結構だ、大分長く逢わなかつたな。君が田舎へ行つてから、始めてじゃないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪く思つてくれたもうな。会社の方は君の職業とは違つて随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違つもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は頭を美麗に分けて、英国仕立のトウィードを着て、派手な襟飾りをして、胸に金鎖りさへび力つかせている体裁、どつしても苦沙弥君の旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんようになってね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気にして見せる。

「そりゃ本ものかい」と主人は無作法な質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが、「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはずだったが一人かい」

「いいや」

「二人？」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云ってるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよっぽどだろう」

「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つかだろう」

「八八八教師は呑気がいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なつて見る、三日で嫌になるから」

「そうかな、何だか上品で、気楽で、閑暇があつて、すぎな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になるならずっと上にならなくっちゃいかん。下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒いたり、好かん猪口をいただきにしたり随分愚なもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば素町人だからな」と実業家を前に控えて太平洋を並べる。

「まさか そつばかりも云えんがね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく金と情死をする覚悟でなければやり通せないから ところがその金と云つ奴が曲者で、今もある実業家の所へ行つて聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなくちゃいけないと云つたさ 義理をかく」「#」「かく」「に傍点」「#」「かく」「に傍点」「人情をかく」「#」「かく」「に傍点」「恥をかく」「#」「かく」「に傍点」「これで三角になるそつだ面白いじゃないかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちょっと有名だがね、君知らんかしら、ついこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何んだあんな奴」

「大変怒ってるね。なあに、そりゃ、ほんの冗談だろうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云つ諭さ。君のようにそつ真面目に解釈しちゃ困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行つたんなら見て来たろつ、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云ってるんだ。せんだつて僕はあの鼻について俳体詩を作つたがね」

「何だい俳体詩と云つのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目さ。それに以前からあまり数奇でない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好を知ってるか」

「アハハハ八随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名をつけられていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじゃないか鼻なんか丸くても尖んがってても」

「決してそうでない。君パスカルを知ってるか」

「また知ってるるか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かったならば世界の表面に大変化を来したろうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雑作に鼻を馬鹿にしてはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりゃそうとして、今日来たのは、少し君に用事があって来たんだがね
ちよっと思い出せない。 そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

あの元君の教えたとか云う、水島 ええ水島ええ

「寒月か」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよっと聞きたい事があって来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行ったら……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ。苦沙弥さんに、よく伺おうと思って上ったら、生憎迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分からなくしてしまつたて」

「あんな鼻をつけて来るから悪いや」

「いえ君の事を云つんじゃないよ。あの迷亭君がおつたもんだから、そう立ち入つた事を聞く訳にも行かなかつたので残念だつたから、もう一遍僕に行つてよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士が嫌やでないなら中へ立つて纏めるのも、決して悪い事はないからね
それでやって来たのさ」

「御苦勞様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士「#」当人同士「に傍点」と云う語を聞いて、どう云う訳か分らんが、ちよつと心を動かしたのである。蒸し暑い夏の夜に一縷の冷風が袖口を潜つたような気分になる。元來この主人はぶつ切ら棒の、頑固光沢消しを旨として製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情な文明の産物とは自からその撰を異にしている。彼が何ぞと云うと、むかつ腹をたててぶんぶんするのでも這裏の消息は会得できる。先日鼻と喧嘩したのは鼻が気に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない話である。実業家は嫌いだから、実業家の片割れなる金田某も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨みもなく、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生である。もし鈴木君の云うごとく、当人同士が好いた仲なら、間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき所作でない。苦沙弥先生はこれでも自分を君子と思つている。もし当人同士が好いていゝなら、しかしそれが問題である。この事件に対して自己の態度を改めるには、まずその真相から確めなければならぬ。

「君その娘は寒月の所へ来たがどうなのか。金田や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりゃ、その 何だね 何でも え、来たがつてるんだろつじゃないか」鈴木君の挨拶は少々曖昧である。実は寒月君の事だけ聞いて復命さえすればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて来なかつたのである。従つて円転滑脱の鈴木君もちよつと狼狽の気味に見える。

「だろつ」「#」「だろつ」「に傍点」た判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわかるかつた。令嬢の方でもたしかに意があるんだよ。いえ全くだよ え？ 細君が僕にそう云つたよ。何でも時々寒月君の悪口を云ふ事もあるそつだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじゃ寒月に意がないんじゃないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いている人の悪口などは殊更云つて見る事もあるからね」

「そんな愚な奴がどこの国にいるものか」と主人は斯様な人情の機微に立ち入った事を云われても頓と感じがしない。

「その愚な奴が随分世の中にもあるから仕方がない。現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑いをした糸瓜のようだなんで、時々寒月さんの悪口を云いますから、よっぽど心の中では思ってるに相違ありません」と

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり悪い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顔を、大道易者のように昵と見つめている。鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと痛づいたと見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話題を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相応の家へやれるだろうじゃないか。寒月だつてえらい」「#「えらい」に傍点」かも知れんが身分から云や いや身分と云つちや失礼かも知れない。財産と云う点から云や、まあ、だれが見たつて釣り合はんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気を揉んでるのは本人が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにまごまごしているとなまた唖喊を喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて、一刻も早く使命を完つする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云つ通りの訳であるから、先方で云つには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい 資格と云つと、まあ肩書だね、博士になつたらやつてもいいなんて威張つてる次第じゃない 誤解しちゃいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから いや君が悪いのじゃない。細君も君の事を御世辞のない正直ない方だと賞めていたよ。全く迷亭君がわるかつたんだらう。それでさ本人が博士にでもなつてくれれば先方も世間へ対して肩身が広い、面目があると云うんだがね、どうだらう、近々の内水島君は博士論文でも呈出して、博士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあに 金田だけなら博士も字士もいらんさ、ただ世間と云う者があるとな、そつ手軽にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りにしてやりたくなる。主人を活かすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰つつもりかどうだか、それからまず問い正して見なくちゃいからな」

「問い正すなんて、君そんな角張つた事をして物が纏まるものじゃない。やつぱり普通の談話の際にそれとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云つと語弊があるかも知れん。なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊すのは善くないと思う。仮令勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはすものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどつか邪魔をしないようにしてくれ給え。いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかると到底助かりつこないんだから」と主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂をすれば陰の喩に洩れず迷亭先生例のごとく勝手口から飄然と春風に乗じて舞い込んで来る。

「いやー珍客だね。僕のような狎客になると苦沙弥はとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥のうちへは十年に一遍くらいに限る。この菓子はいつてもより上等じゃないか」と藤村の羊羹を無雑作に頬張る。鈴木君はもじもじしている。主人はにやにやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾輩はこの瞬時の光景を縁側から拝見して無言劇と云うものは優に成立し得ると思つた。禅家で無言の問答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれどもすこぶる鋭い幕である。

「君は一生旅鳥かと思つてたら、いつの間にか舞い戻つたね。長生はしたいもんだな。どんな僥倖に廻り合はんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対して主人に対することく毫も遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何となく気おけるものだが迷亭君に限つて、そんな素振も見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は当らず障らずの返事はしたが、何となく落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗つたか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を發する。

「今日は諸君からひやかされに来たようなものだ。なんぼ田舎者だつて これでも街鉄を六十株持つてるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持つていたが、惜しい事に大方虫が喰つてしまつて、今じゃ半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりやるところだつたが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、ああ云う株は持ってて損はないよ、年々高くなるばかりだから」

「そつだ飯令半株だつて千年も持つてゐるうちにや倉が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考へてゐるんだから」とまた羊羹をつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の食いが伝染して自ずから菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎に一度でいいから電車へ乗らしてやりたかつた」と主人は喰い欠けた羊羹の齒痕を撫然として眺める。

「曾呂崎が電車へ乗つたら、乗るたびに品川まで行つてしまふは、それよりやっぱり天然居士で沢庵石へ彫り付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそつだな。気の毒だねえ、いい頭の男だつたが惜しい事をした」と鈴木君が云つと、迷亭は直ちに引き受けて

「頭は善かつたが、飯を焚く事は一番下手だつたぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎麦で凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくつて心があつて僕も弱つた。御負けに御菜に必ず豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚び起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩いっしょに汁粉を食ひに出たが、その祟りで今じゃ慢性胃弱になつて苦しんでゐるんだ。実を云つと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食つてるから曾呂崎「#」兄は「呂」の誤り？」より先へ死んで宜い訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と弓して、毎晩竹刀を持って裏の卵塔婆へ出て、石塔を叩いてるところを坊主に見つかつて剣突を食つたじゃないか」と主人も負けぬ氣になつて迷亭の旧悪を曝く。

「アハハ八そつ坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれつて言つたつて。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴だぜ。石塔と相撲をとつて大小三個ばかり転がしてしまつたんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかつた。是非元のように起せと云うから人足を備うまで待つてくれと云つたら人足じゃいかん懺悔の意を表するためにあなたが自身で起さなくては仏の意に背くと云つたんだからな」

「その時の君の風采はなかつたぜ、金巾のしゃつに越中褌で雨上りの水溜りの中でつんつん唸つて……」

「それを君がすました顔で写生するんだから苛い。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時はかりは失敬だと心から思つたよ。あの時の君の言草をまだ覚えてゐるが君は知つてるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えてゐるものか、しかしあの石塔に帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰正月と彫つてあつただけはいまだに記憶してゐる。あの石塔は古雅に出ていたよ。引き越す時に盗んで行きたかつたくらいだ。実に美学上の原理に叶つて、ゴシック趣味な石塔だつた」と迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりゃいいが、君の言草がさ。こつだぜ。吾輩は美学を専攻するつもりだから天地間の面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなければならん、氣の毒だが、可哀相だのと云う私情は學問に忠実なる吾輩」ときもの口にすべきところでないと思つた。僕もあんまりな不人情な男だと思つたから泥だらけの手で君の写生帖を引き裂いてしまつた」

「僕の有望な画才が頓挫して一向振わなくなつたのも全くあの時からだ。君に機鋒を折られたのだね。僕は君に恨がある」

「馬鹿にしちゃいけない。こつちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から法螺吹だつたな」と主人は羊羹を食ひ了つて再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか履行した事がない。それで詰問を受けると決して詫びた事がない何とか蚊とか云う。あの寺の境内に百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云つ著述をする」と云つから、駄目だ、到底出来る氣遣はないと云つたのさ。すると迷亭の答へに僕はこつ見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑つたら賭をしよう」と云つから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理を奢りつこかなにかに極めた。きつと書物なんか書く氣遣はないと思つたから賭をしたよつなもの内心は少々恐ろしかつた。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだからな。ところが先生一向稿を起す景色がない。七日立つても二十日立つても一枚も書かない。いよいよ百日紅が散つて一輪の花もなくつても当人平氣でゐるから、いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行を逼ると迷亭すまして取り合はない」

「また何とか理窟をつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能はないが意志だけは決して君方に負けはせん」と剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云つたぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて何人にも一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおらぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒っている様子である。

「それは御気の毒様、それだからその理合せをするために孔雀の舌なんかを金と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒らずに待っているさ。しかし著書と云えば君、今日は一大珍報を齎らして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起したのを知っているか。寒月はあんな妙に見識張つた男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思つたら、あれでやっぱり色気があるからおかしいじゃないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃は団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬと願と眼で主人に合図する。主人には一向意味が通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になつたが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事を思い出す。思ひ出すと滑稽でもあり、また少々は悪らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの御見やげで、こればかりは迷亭先生自贊のごとくまずまず近來の珍報である。啻に珍報のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分のように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで白木のまま燻つていても遺憾はないが、これは旨く仕上がつたと思つ彫刻には一日も早く箔を塗つてやりたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図はそつち除けにして、熱心に聞く。

「よく人の云つた事を疑ぐる男だ。もつとも問題は団栗だか首縊りの力学だか確と分らんがね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違いない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云つのを聞いたんに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリストラム・シャンデーの中に鼻論があるのを発見した。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料になつたら残念な事だ。鼻名を千載に垂れる資格は充分ありながら、あのままで朽ち果つるとは不憫千万だ。今度ここへ来たたら美学上の参考のために写生してやるつ」と相変らず口から出任せに喋舌り立てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそつだ」と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君はこれは迷惑だと云つ顔付をしてしきりに主人に目くばせをするが、主人は不導体のごとく一向電気に感染しない。

「ちよつとごだな、あんな者の子でも恋をするところが、しかし大した恋じゃなかつ、大方鼻恋くらいなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいが、君は先日大反対だつたじゃないか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどうにか」「#」「どうか」に傍点したんだらう。ねえ鈴木、君も実業家の末席を汚す一人だから参考のために言つて聞かせるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるもの息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉るの、少々提灯と釣鐘と云つ次第で、我々朋友たる者が冷々黙過する訳に行かん事だと思つんだが、たとい実業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と容子が少しも變つていないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡麻化そつとする。

「えらいと褒めるなら、もう少し博学なところを御目にかけるがね。昔しの希臘人は非常に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事には学者の智識」「#」「智識」に傍点」に対してのみは何等の褒美も与えたと云つ記録がなかつたので、今日まで実は大に怪しんでいたつてや」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるにいつい西三日前に至つて、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑團は一度に氷解。漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歡天喜地の至境に達したのや」

あまり迷亭の言葉が仰山なので、さすが御上手者の鈴木君も、こりゃ手に合わないと云う顔付をする。主人はまた始まつたなと云わぬばかりに、象牙の箸で菓子皿の縁をかんかん叩いて俯つ向いている。迷亭だけは大得意で弁じつづける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒の淵から吾人の疑を千載の下に救い出してくれた者は誰だと思つ。学問あつて以来の学者と称せらるる彼の希臘の哲人、逍遙派の元祖アリストートルその人である。彼の説明に曰くさ おい菓子皿などを叩かんで謹聴してはやくちやいかん。彼等希臘人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美にもなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至つてはどうかである。もし智識に対する報酬として何物をか与えんとするならば智識以上の価値あるものを与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の中にあるか。無論あるはずがない。下手なものをやれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等は智識「#」智識」に傍点」に対して千両箱をオリムパスの山ほど積み、クリーサスの富を傾け尽しても相当の報酬を与えんとしたのであるが、いかに考えても到底釣り合はずがないと云う事を観破して、それより以来と云うものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまった。黄白青銭が智識の匹敵でない事はこれで十分理解出来るだろう。さてこの原理を服膺した上で時事問題に臨んで見るがいい。金田某は何だれ紙幣に眼鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語をもつて形容するならば彼は一個の活動紙幣に過ぎないのである。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところだろう。翻つて寒月君は如何と見ればどうだ。辱けなくも学問最高の府を第一位に卒業して毫も倦怠の念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜団栗のスタビリチーを研究し、それでもなお満足する様子もなく、近々の中ロッド・ケルヴィンを圧倒するほどの大論文を発表しようとしつつあるではないか。たまたま吾妻橋を通り掛つて身投げの芸を仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りがちな発作的所為で毫も彼が智識の問題たるに煩いを及ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流の諭をもつて寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識をもつて捏ね上げたる二十八冊の弾丸である。この弾丸が一たび時機を得て学界に爆発するならば、もし爆発して見給え 爆発するだろう」迷亭はここに至つて迷亭一流と自称する形容詞が思うように出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾の感に多少ひるんで見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あつたつて粉な微塵になつてしまふさ。それだから寒月には、あんな釣り合わない女性は駄目だ。僕が不承知だ、百獣の中でもっとも聡明なる大象と、もっとも貪婪なる小豚と結婚するようなものだ。そつだろつ苦沙弥君」と云つて退けると、主人はまた黙つて菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹んだ気味で

「そんな事も無かつ」と術なげに答える。さつきまで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗な事を云つと、主人のような無法者はどんな事を素つ破抜くか知れない。なるべくこは好加減に迷亭の鋭鋒をあしらつて無事に切り抜けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得ている。人生の目的は口舌ではない実行にある。自己の思い通りに着々事件が進捗すれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は極楽流に達せられるのである。鈴木君は卒業後この極楽主義によつて成功し、この極楽主義によつて金時計をぶら下げ、この極楽主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極楽主義でまんまと首尾よく苦沙弥君を説き落して当該事件が十中八九まで成就したところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風來坊が飛び込んで来たので少々その突然なるに面喰つてるところである。極楽主義を發明したものは明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義で困却しつづけるものもまた鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからそつでもなかつ」と「#」そつでもなかつ」に傍点」などと澄し返つて、例になく言葉寡々に上品に控え込むが、せんだつてあの鼻の主が来た時の容子を見たらいかに実業家鼻負の尊公でも辟易するに極つてるよ、ねえ苦沙弥君、君大に奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそつだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちゃいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らなつもりだが、そんなに図太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚言つたつて何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家であるが巴里大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に應ずるため外出の際必ずし首を袖の下に持つて防禦の具となした事がある。ブルヌチエルがやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は……」

「だつて君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑魚が鯨をもつて自ら喩えるようなもんだ、そんな事を云つとなおからかわれるぜ」

「黙つていろ。サントブーヴだつて俺だつて同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもつて歩行くだけはあぶないから真似ない方がいいよ。大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあ小刀くらいなところだな。しかしそれにしても刃物は剣呑だから仲見世へ行つておもちゃの空気銃を買つて来て背負つてあるくがよかつ。愛嬌があつていい。ねえ鈴木君」と云つと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほつと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りり始めて君等に逢つたんで何だか窮屈な路次から広い野原へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がならなくてね。何を云うにも気をおかなくちゃならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔の書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくていい。ああ今日は図らず迷亭君に遇つて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸けると、迷亭も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会に行かなくっちゃならんから、そこまでいっしょに行こう」「そりゃちようどいい久し振りいっしょに散歩しよう」と両君は手を携えて帰る。

五

二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくも二十四時間かかるだろう、いくら写生文を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従つていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇行を弄するにも関らず逐一これを読者に報知するの能力と根気のないのはなほ遺憾である。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要である。鈴木君と迷亭君の帰つたあとは木枯しのはたと吹き息んで、しんしんと降る雪の夜のごとく静かになった。主人は例のごとく書齋へ引き籠る。小供は六畳の間へ枕をならべて寝る。一間半の襖を隔てて南向の室には細君が数え年三つになる、めん子さんと添乳して横になる。花曇りに暮れを急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取るように茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり続いたりして眠い耳底に折々鈍い刺激を与える。外面は大方臙である。晚餐に半べんの煮汁で鮑貝をからにした腹ではどうしても休養が必要である。

ほのかに承われば世間には猫の恋とか称する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮かれ歩く夜もあるとか云うが、吾輩はまだかかる心的変化に遭逢した事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓、おけらに至るまでこの道にかけて浮身を糞すのが万物の習いであるから、吾輩もが臙つれしと、物騒な風流気を出すのも無理のない話である。回顧すればかく云う吾輩も三毛子に思い焦がれた事もある。三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う噂である。それだから千金の春宵を心も空に満天下の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと軽蔑する念は毛頭ないのであるが、いかにせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も出来ぬ。のそのそと小供の布団の裾へ廻つて心地快く眠る。……

ふと眼を開いて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ来て細君の隣に延べである布団の中にいつの間にか潜り込んでゐる。主人の癖として寝る時は必ず横文字の小本を書齋から携えて来る。しかし横になつてこの本を二頁と続けて読んだ事はない。ある時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ提げてくる必要もなさそうなのだが、そこが主人の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つて三四冊も抱えて来る。せんだつてじゅうは毎晩ウエブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病気で驚沢な人が竜文堂に鳴る松風の音を聞かないと寝つたれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのである。う、して見ると主人に取つては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髭の先につかえるくらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の指が本の間に挟まつたままであるところから推すと奇特にも今夜は五六行読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニツケルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

細君は乳呑児を一尺ばかり先へ放り出して口を開いていびきをかいて枕を外している。およそ人間において何が見苦しいと云つて口を開けて寝るほどの不体裁はあるまいと思ふ。猫などは生涯こんな恥をかいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を吐吞するための道具である。もつとも北の方へ行くと人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使うようなズーゾーもあるが、鼻を閉塞して口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーゾーよりも見ともないと思ふ。第一天井から鼠の糞でも落ちた時危険である。

小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体たらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利はこんなものだと言わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐に姉の腹の上に片足をあげて踏反り返っている。双方共寢た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ両人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の灯火は格別である。天真爛漫ながら無風流極まるこの光景の裏に良夜を惜しめとばかり床しげに輝やいて見える。もう何時だろつと室の中を見廻すと四隣はしんとしたただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の歯軋りをする音のみである。この下女は人から歯軋りをすると言われるといつてもこれを否定する女である。私は生れてから今日に至るまで歯軋りをした覚はございませんと強情を張つて決して直しましうとも御気の毒でございませうとも云わず、ただそんな覚はございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚はないに違ない。しかし事実は覚がなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこまでも善人だと考えているものがある。これは自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事実はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思つた。夜は大分更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中つた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の鼠だろつ、鼠なら捕らん事に極めているから勝手にあばれるが宜しい。またトントンと中る。どうも鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。主人の内の鼠は、主人の出る学校生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、憫然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せんだつてなどは主

人の寢室にまで闖入して高からぬ主人の鼻の頭を嚙んで凱歌を奏して引き上げたらしい鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出来るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わず戸締を外して御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに極まっている。御高名だけはかねて承わっている泥棒陰士ではないから。いよいよ陰士とすれば早く尊顔を拝したいものだ。陰士は今や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ばかり進んだ模様である。三足目と思う頃揚板に蹴いてか、ガタリと夜に響くような音を立てた。吾輩の背中の毛が靴刷毛で逆に擦すられたような心持がする。しばらくは足音もしない。細君を見ると未だ口をあいて太平の空気を夢中に吐き吐きしている。主人は赤い本に拇指を挟まれた夢でも見ているのだろうか。やがて台所でマチを擦る音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合だらう。

この時吾輩は躊躇りながら考えた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであるうか、または左へ折れ玄関を通過して書齋へと抜けるであろうか。足音は襖の音と共に椽側へ出た。陰士はいよいよ書齋へ這入った。それぎり音も沙汰もない。

吾輩はこの間に早く主人夫婦を起してやりたいものだとうやく気が付いたが、さてどうしたら起きるやら、一向要領を得ん考のみが頭の中に水車の勢で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団の裾を脚で振って見たらと思つて、二三度やってみたら少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦り付けたらと思つて、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否やと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事おびたしい。此度は仕方がないからにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉に物が痞えて思うような声が出ない。やつとの思いで泣きながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心の主人は覚める気色もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチリミチリと椽側を伝つて近づいて来る。いよいよ来たな、こうなつてはもう駄目だと諦めて、襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺がう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てびたりと已む。吾輩は息を凝らして、この次は何をするだろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕る時は、こんな気分になれば訳はないのだ、魂が両方の眼から飛び出しそうな勢である。陰士の御蔭で二度とない悟を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧の三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それを透して薄紅なものがだんだん濃く写つたと思つと、紙はいつか破れて、赤い舌がべりりと見えた。舌はしばしの間に暗い中に消える。入れ代つて何だか恐ろしく光るものが一つ、破れた孔の向側にあらわれる。疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後に隠れていた吾輩のみを見つめてるように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあつたが、こう睨まれては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をおのづから御紹介するの榮譽を有する訳であるが、その前ちよつと卑見を開陳してご高慮を煩わしい事がある。古代の神は全智全能と崇められている。ことに耶穌教の神は二十世紀の今日までもこの全智全能の面を被っている。しかし俗人の考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。しかるにこのパラドックスを道破した者は天地開闢以来吾輩のみであるうと考えると、自分ながら満更な猫でもないとう虚栄心も出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと云う事を、高慢なる人間諸君の脳裏に叩き込みたいと考える。天地万有は神が作ったそう、して見れば人間も神の御製作であらう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそう。さてこの人間について、人間自身が数千年来の観察を積んで、大に玄妙不思議だと同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外でもない、人間もかようにうじやうじやいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は無論極つて、大さも大概は似たり寄つたりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関わらず一人も同じ結果に出来上つておらん。よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔をついてきた者だと思つと、製造家の伎倆に感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来んのである。一代の画工が精力を消耗して変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んのもつて推せば、人間の製造を一手で受負つた神の手際は格別な者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差し支えないだらう。人間はこの点において大に神に恐れ入つていようである、なるほど人間の観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。しかし猫の立場から云つると同一の事実がかえつて神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだらうと思つ。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示したものが、または猫も杓子も同じ顔に造らうと思つてやりかけて見たが、とうてい行く行かなくて出来るのも出来るのも作り損ねてこの乱雑な状態に陥つたものか、分らぬではないか。彼等顔面の構造は神の成功の記念と見らると同時に失敗の痕跡とも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と評したつて差し支へはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいて左を右を一時に見る事が出来んから事物の半面だけしか視線内に這入らぬのは気の毒な次第である。立場を換えて見ればこのくらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく起りつづつあるのだが、本人逆せ上がつて、神に呑まれていから悟りようがない。製作の上に変化をあらわすのが困難であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣を示すのも同様に困難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せると通ると同じく、ラファエルにとつては迷惑であらう、否同じ物を二枚かく方がかえつて困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書体を換えてと注文されるよりも苦しいかも分らん。人間の用うる国語は全然模倣主義で伝習するものである。彼等人間が母から、乳母から、他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年と立つつち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣の能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣はかくのごとく至難なものである。従つて神が彼等人間を区別の出来ぬよう、悉皆焼印の御かめ「#「御かめ」に傍点」のごとく作り得たならばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今日のごとく勝手次第な顔を日に曝らさして、目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえつてその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れてしまった。本を忘却するのは人間にさえありがちな事であるから猫には当然の事さ大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にくつと現われた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出たのである。なぜ湧いた？　なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならぬ。ええと、その訳はこつである。

吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が　　平常神の製作についてその出来栄をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑つていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜二つであると言ふ事である。吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬが、その行為の乱暴なところから平常想像して私かに胸中に描いていた顔はないでもない。小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけ、毬栗頭にきまつていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えると天地の相違、想像は決して遠くするものではない。この陰士は背のすらりとした、色の浅黒い一丁の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際があるとなれば、決して無能をもつて目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になつて深夜に飛び出して来たものではあるまいかと、はつと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒く髭の芽生えが植え付けてないのでしては別人だと気が付いた。寒月君は苦味ばつた好男子で、活動小切手と迷亭から称せられた、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどの念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相から観察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷つたのなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚れ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云つた才気のある、何でも早分りのする性質だからこのくらい的事は人から聞かなくてもきつと分るのであろう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調和の実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をこつまで予想して、富子嬢のために、やつと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人が書齋へ放り込んだ古毛布である。唐棧の半纏に、御納戸の博多の帯を尻の上にもすんで、生白い脛は膝から下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ入れる。先刻から赤い本に指を晒された夢を見ていた、主人はこの時寝返りを堂と打ちながら「寒月だ」と大きな声を出す。陰士は毛布を落して、出した足を急に引き込ます。障子の影に細長い向脛が二本立つたまま微かに動くのが見える。主人はうーん、むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕を皮膚癬病みのようにぼりぼり掻く。そのあとは静まり返つて、枕をはずしたなり寝てしまふ。寒月だと云つたのは全く我知らずの寝言と見える。陰士はしばらく椽側に立つたまま室内の動静をうかがつていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済してまた片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穗の春灯で豊かに照らされていた六畳の間は、陰士の影に鋭く二分せられて柳行李の辺から吾輩の頭の上を越えて壁の半ばが真黒になる。振り向いて見ると陰士の顔の影がちよと壁の高さの三分の二の所に漠然と動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭の化け物のごとくまことに妙な恰好である。陰士は細君の寝顔を上から覗き込んで見たが何のためかにやにやと笑つた。笑い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の国は唐津の住人多々良三平君が先日帰省した時御土産に持つて来た山の芋である。山の芋を枕元へ飾つて寝るのはあまり例のない話ではあるがこの細君は煮物に使う三盆用筆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寢室に在つても平気かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうはずがない。かくまで鄭重に肌身に近く置いてある以上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。陰士はちよと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうなのですこぶる満足の体である。いよいよ山の芋を盗むなと思つたら、しかもこの好男子にして山の芋を盗むなと思つたら急にやかしくなつた。しかし滅多に声を立てると危険であるからじつと忪えている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげられるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしつかり括つて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好く体裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて青大将が蛙を飲んだような。あるいは青大将の臨月と云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な恰好になつた。嘘だと思つたら試しにやつて見るがよらしい。陰士はめり安をぐるぐる首つ環へ捲きつけた。その次はどうするかと思つたと主人の袖の上着を大風呂敷のように広げてこれに細君の帯と主人の羽織と繻絹とその他あらゆる雑物を綺麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちよと感心した。それから細君の帯上げとしごきとを結び合わせてこの包みを括つて片手にさげる。まだ頂戴するものは無いかなど、あたりを見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋があるのを見付けて、ちよと袂へ投げ込む。またその袋の中から一本出してランプに繋いで火を点ける。旨まそうに深く吸つて吐き出した煙りが、乳色のホヤを繞つてまだ消えぬ間に、陰士の足音は椽側を次第に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡している。人間も存外迂濶なものである。

吾輩はまた暫時の休養を要する。のべつに喋舌つていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めた時は弥生の空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入つて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中一向気がつかなくつたのですな」
「ええ」と主人は少し極りがわるそうである。

「それで盗難に罹ったのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何にも盗まれる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思っているらしい。

「あなたは夕べ何時に御休みになつたんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私しの伏せつたのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だつたかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の這入つたのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりである。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入つたところが一向痛痒を感じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜いと思つているのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦れたくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですか」と云うと、主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせず

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行つたから右告訴及候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴です。名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです」

いや這入つて見たつて仕方がない。盗られたあとなんだから」と平気な事を云つて歸つて行く。

主人は筆硯を座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云つ。

「あら厭だ、さあ云えだなんて、そんな権柄づくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどつかと腰を据える。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりや仕方がないじゃありませんか」

「帯までとつて行つたのか、苛い奴だ。それじゃ帯から書き付けてやるう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯つて、そんなに何本もあるもんですか、黒縹子と縮緬の腹合せの帯です」

「黒縹子と縮緬の腹合せの帯一筋 価はいくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意氣に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房などは、どんな汚ない風をしていても、自分さい宜けりや、構わないでしょう」

「まあいいや、それから何だ」

「系織の羽織です、あれは河野の叔母さんの形身にもらつたんで、同じ系織でも今の系織とは、たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただきゃあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行ったのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行って聞いていらっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら唐津から掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは 俺の着物は一向出て来んじやないか」

「あとは何でも宜うござんす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴」

「意味も何にもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじゃありませんか、あなたはよつぱど私を馬鹿にしていらっしやるのね。きっと人が英語を知らないと云って悪口をおっしやっただよ」

「愚な事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

「頑愚だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数を教えて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いていただかないでも困りません」

「それじゃ麩そつ」と主人は例のごとくふいと立って書齋へ這入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙って障子を睨め付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平君が上ってくる。多々良三平君はもこの家の書生であつたが今では法科大学を卒業してある会社の鉱山部に雇われている。これも実業家の芽生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前の関係から時々旧先生の草廬を訪問して日曜などには一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない間柄である。

「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛りか何かで細君の前にズボン」#「ズボン」に傍点」のまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすつたか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言つても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間からとん」#「とん」に傍点」子とすん」#「すん」に傍点」子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御寿司を持って来て？」と姉のとん子」#「とん子」に傍点」は先日約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を掻きながら

「よつ覚えているのう、この次はきつと持つて来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直つて少々笑顔になる。

「寿司は持つて来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなすつたか」

「山の芋つてなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋つてなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母あさんに煮て御貰い。唐津の山の芋は東京のとは違つてうまかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとつ」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたらう」

「ところがせつかく下すつた山の芋を夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす盗が？ 馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大に感心している。

「御母あさま、夕べ泥棒が這入つたの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入つて　そうして　泥棒が這入つて　どんな顔をして這入つたの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんので

「恐い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔つて多々良さん見たような顔なの」と姉が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですな。そんな失礼な事を」

「八八八私の顔はそんなに恐いですか。困つたな」と頭を掻く。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの禿がある。一月前から出来だして医者に見て貰つたが、まだ容易に癒りそうもない。「この禿を第一番に見付けたのは姉のとん子である。」

「あら多々良さんの頭は御母さまのように光かつてよ」

「だまつていらっしやいと云つたの」

「御母あさまタベの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わしくて話も何も出来ぬので、「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食つなんて、そりゃ蝨で釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですよ」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりゃ奥さん意地張りしたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もっと長い名があるでしょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私はボールドより知りませんが。長かつて、どげんですか」

「オタンチン・パレオガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオガスが頭なんですよ」

「そうかも知れせんたい。今に先生の書齋へ行つてウエプスターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど変っていませんな。この天氣の好いのに、うちにじつとして 奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさい」と勧めなさい

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐めなさるか」

「ええ相変わらずです」

「せんだつて、先生ごぼしていなさいました。どうも妻が俺のジャムの舐め方が烈しいと云つて困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりゃ御嬢さんや奥さんがいっしょに舐めなさいに違ない」

「いやな多々良さんだ、何だつてそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだつて舐めそうな顔をしていなさるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばつてんが それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」

「そりゃ少しは舐めますさ。舐めたつて好いじゃありませんか。うちのものだもの」

「八八八八そうだろうと思つた しかし本の事、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持つて行たのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしませんか、不断着をみんな取つて行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかつたに 惜しい事をしたなあ。奥さん犬の犬が奴を是非一丁飼いなさい。猫は駄目ですばい、飯を食つばかりで ちつとは鼠でも捕りますか」

「一匹もつた事はありません。本当に横着な図々図々しい猫ですよ」

「いやそりゃ、どうもこうもならん。早々棄てなさい。私が貰つて行つて煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨いじやります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人がある由はかねて伝聞したが、吾輩が平生眷顧を辱うする多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今まで夢にも知らなかった。いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日は浅きにも係わらず堂々たる一個の法学士で、六つ井物産会社の役員であるのだから吾輩の驚愕もまた一通りではない。人を見たら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によつてすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思えとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得した真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなくなる。狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌なものがないのはこの理だ、吾輩などもあるいは今のうちに多々良君の鍋の中で玉葱と共に成仏する方が得策かも知れんと考えて隅の方に小さくなつてゐると、最前細君と喧嘩をして一反書齋へ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、そのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさつたそつですな。なんちゆ愚な事です」と劈頭一番にやり込める。

「這入る奴が愚なんだ」と主人はどこまでも賢人をもつて自任している。

「這入る方も愚だばつてんが、取られた方もあまり賢くはなかつた」

「何にも取られるもの無い多々良さんのようなのが一番賢いんでしよう」と細君が此度は良人の肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云つて見じやろう。鼠は捕らず泥棒が来ても知らん顔をしている。先生この猫を私にくんなさらんか。こつしておいたつちや何の役にも立ちませんばい」

「やつても好い。何にするんだ」

「煮て喰へます」

主人は猛烈なるこの一言を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を洩らしたが、別段の返事もしないので、多々良君も是非食いたいとも云わなかつたのは吾輩にとつて望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大に銷沈の体である。なるほど寒いはずである。昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は袷に半袖のシャツだけで、朝から運動もせず枯坐したぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておつたつちやとつていあかんですばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る。一丁今から考を換えて実業家になんさらんか」

「先生は実業家は嫌だから、そんな事を言つたつて駄目よ」

「と細君が傍から多々良君に返事をする。細君は無論実業家になつて貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんさらんか」

「今年で九年目でしょう」と細君は主人を顧みる。主人はそつだとも、そつで無いとも云わない。

「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても人は褒めちゃくれず、郎君独寂寞ですたい」と中学時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちよつと分かぬたものだから返事をしない。

「教師は無論嫌だが、実業家はなお嫌いだ」と主人は何が好きだか心の裏で考へてゐるらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけです」と多々良君柄に似合わぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細君は横を向いてちよつと澄したが再び主人の方を見て、

「生きていらつしやるのも御嫌なんでしょう」と充分主人を凹ましたつもりで云う。

「あまり好いてはあらん」と存外呑気な返事をする。これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑に散歩でもしなさんと、からだを壊してしまいますばい。　　そうして実業家になんなさい。金なんか儲けるのは、ほんに造作もない事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やつと会社へ這入ったばかりですもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もつ五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの。これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛会社の方で預って積んでおいて、いざと云つ時にやります。　　奥さん小遣錢で外濠線の株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢つたつて困りゃしないわ」

「それだから実業家に限ると云つんです。先生も法科でもやつて会社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。

先生あの鈴木藤十郎と云つ工學士を知つてなざるか」

「うん昨日来た」

「そつでござんすか、せんだつてある宴会で逢いました時先生の御話をしたら、そつか君は苦沙弥君のところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔し小石川の寺でいつしよに自炊をしておつた事がある、今度行つたら宜しく云つてくれ、僕もその内尋ねるからと云つていました」

「近頃東京へ来たそつだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京詰になりました。なかなか旨いです。私なぞにでも朋友のように話します。　　先生あの男がいくら貰つてると思ひなやね」

「知らん」

「月給が二百五十円で益壽に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、よかしこ取つておるのに、先生はリーダー専門で十年一狐裘じゃ馬鹿氣ておりますなあ」

「實際馬鹿氣ているな」と主人のような超然主義の人でも金錢の觀念は普通の人間と異なるところはない。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴してもつ云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云つ人が来ますか」

「ええ、善くいらつしゃいます」

「どげんな人物ですか」

「大変學問の出来る方だそつです」

「好男子ですか」

「ホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そつですか、私くらいなものですか」と多々良君真面目である。

「どうして寒月の名を知つてゐるのかい」と主人が聞く。

「せんだつて或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そつでございますか、私よりえらいですか」と笑いもせず怒りもせぬ。これが多々良君の特色である。

「近々博士になりますか」

「今論文を書いているそつだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思つたら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云つた。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があるうか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどまだと云つてやりました」

「だれに」

「私に水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんは蔭弁慶ね。うちへなんぞ来ちゃ大変威張つても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつてるでしょう」

「ええ。そつせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云つた。先刻から裕一枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。行き当りばつたりの多々良君は無論逡巡する訳がない。

「行きましよう。上野にしますか。芋坂へ行つて団子を食べましようか。先生あすこの団子を食べた事がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔らかくて安いで。酒も飲ませます」と例によつて秩序のない駄弁を揮つてるうちに主人はもう帽子を被つて沓脱へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食つたかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行する勇氣もないからずつと略してその間休養せんければならん。休養は万物の旻天から要求してしかるべき権利である。この世に生息すべき義務を有して蠢動する者は、生息の義務を果すために休養を得ねばならぬ。もし神ありて汝は働くために生れたり寝るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答えて云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れたり故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に不平を吹き込んだまでの木強漢ですら、時々日曜以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして日夜心神を勞する吾輩ごとき者は仮令猫といえども主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もない贅物のごとくに罵つたのは少々氣掛りである。とかく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評価するでも形骸以外に涉らんのは厄介である。何でも尻でも端折つて、汗でも出さないと働らいていないように考えている。達磨と云う坊さんは足の腐るまで座禅をして澄ましていたと云うが、仮令壁の隙から薫が這い込んで大師の眼口を塞ぐまで動かないにしろ、寝ているんでも死んでいるんでもない。頭の中には常に活動して、廓然無聖などと乙な理窟を考え込んでいる。儒家にも静坐の工夫と云うのがあるそつだ。これだつて一室の中に閉居して安閑と燈の修行をするのではない。脳中の活力は人一倍熾に燃えている。ただ外見上は至極沈静端肅の態であるから、天下の凡眼はこれらの知識巨匠をもつて昏睡仮死の庸人と見做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の声を立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、しかも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざる第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を目して乾屎「木へん」に「厥、21617」《かんじけつ》同等に心得るのももつともだが、恨むらくは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に「一も二もなく同意して、猫鍋に故障を挟む景色のない事である。しかし一歩退いて考えて見ると、かくまでに彼等が吾輩を輕蔑するの、あながち無理ではない。大声は俚耳に入らず、陽春白雪の詩には和するもの少なしの喩も古い昔からある事だ。形体以外の活動を見る能わざる者に向つて己靈の光輝を見よと強ゆるは、坊主に髪を結えと逼るのごとく、鮪に演説をして見ると云うのごとく、電鉄に脱線を要求するのごとく、主人に辞職を勧告するのごとく、三平に金の事を考へると云うのごときものである。必竟無理な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的動物である以上はいかに高く自ら標置するとも、或る程度までは社会と調和して行かねばならん。主人や細君や乃至御さん、三平連が吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上すような無分別をやられては由々しき大事である。吾輩は頭をもつて活動すべき天命を受けてこの娑婆に出現したほどの古今来の猫であれば、非常に大事な身体である。千金の子は堂座に坐せずとの諺もある事なれば、好んで超邁を宗として、徒らに吾身の危険を求むるのは単に自己の災なるのみならず、また大いに天意に背く訳である。猛虎も動物園に入れば糞豚の隣りに居を占め、鴻雁も鳥屋に生擒らるれば雛鶏と俎を同じゆす。庸人と相互する以上は下つて庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべからず。吾輩はついつつ鼠をとる事に極めた。

せんだつてじゆうから日本は露西亜と大戦争をしているそつだ。吾輩は日本の猫だから無論日本鼻負である。出来得べくんば混成猫旅団を組織して露西亜兵を引つ掻いてやりたいと思うくらいである。かくまでに元氣旺盛な吾輩の事であるから鼠の一疋や二疋はとろつとする意志さえあれば、寝ていても訳なく捕れる。昔しある人當時有

名な禪師に向つて、どうしたら悟れましようか聞いたら、猫が鼠を鼠うようにさしやれと答えたそうだ。猫が鼠をとるようには、かくさえすれば外れつこはござらぬと云う意味である。女賢しゅうしてと云う諺はあるが猫賢しゅうして鼠捕り損うと云う格言はまだ無いはずだ。して見ればいかに賢い吾輩のごときも鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまいどころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんのは、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのごとく暮れて、折々の風に誘われる花吹雪が台所の腰障子の破れから飛び込んで手桶の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻つて地形を飲み込んでおく必要がある。戦闘線は勿論あまり広かるうはずがない。畳敷にしたら四畳敷もあるうか、その一畳を仕切つて半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつついには貧乏勝手に似合わぬ立派な赤の銅壺がびかびかして、後ろは羽目板の間を二尺遣して吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は膳碗皿鉢を入れた戸棚となつて狭き台所をいとは狭く仕切つて、横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さになつてゐる。その下に摺鉢が仰向けに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いてゐる。大根卸し、摺小木が並んで懸けてある傍らに火消壺だけが悄然と控えてゐる。真黒になつた樽木の交叉した真中から一本の自在を下ろして、先へは平たい大きな籠をかける。その籠が時々風に揺られて鷹揚に動いてゐる。この籠は何のために釣るすのか、この家へ来たてには一向要領を得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をここへ入れると云う事を知つてから、人間の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつちへ便宜な地形だからと云つて一人で待ち構えていてはでんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口を研究する必要がある。どの方面から来るかなと台所の真中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻つて来ん。小供はとくに寝てゐる。主人は芋坂の団子を喰つて帰つて来て相変らず書齋に引き籠つてゐる。細君は細君は何をしてゐるか知らない。大方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだらう。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は一段と淋しい。わが決心と云い、わが意気と云い台所の光景と云い、四辺の寂寞と云い、全体の感じが悉く悲壮である。どうしても猫中の東郷大将としか思われぬ。こつちう境界に入るやと物凄いな一種の愉快を覚えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配が横わつてゐるのを発見した。鼠と戦争するのは覚悟の前だから何足来ても恐くはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密なる観察から得た材料を綜合して見ると鼠賊の逸出するのには三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば土管に沿つて流しから、へつつい裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶つてやる。あるいは溝へ湯を抜く漆喰の穴より風呂場を迂回して勝手へ不意に飛び出すかも知れない。そうしたら釜の蓋の上に陣取つて眼の下に來た時上から飛び下りて一攫みにする。それからまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が半月形に喰ひ破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻を付けて臭いで見ると少々鼠臭い。もしこつちから吶喊して出たら、柱を楯にやり過つておいて、横合からあつと爪をかける。もし天井から來たらと上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝やいて、地獄を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の手際では上る事も、下る事も出来ん。まさかあんな高い処から落ちてくる事もなかるうからとこの方面だけは警戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにか、こつちにかやつてのける自信がある。しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕るべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。さればと云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に關する。どうしたら好かるうと考へて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣はないと決めるのが一番安心を得る近道である。また法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。まず世間を見渡して見給え。きのう貰つた花嫁も今日死なるとも限らぬではないか、しかし智殿は玉椿千代も八千代もなど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したつて法が付かんからである。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考へて見るとよつちやく分つた。三個の計略のうちいずれを選んだのがもつとも得策であるかの問題に対して、自ら明瞭なる答弁を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出るときには吾輩これに應ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに対する計がある、また流しから這い上るときはこれを迎うる成算もあるが、そのうちどれか一つに極めねばならぬと大に当惑する。東郷大将はバルチック艦隊が対馬海峡を通るか、津軽海峡へ出るか、あるいは遠く宗谷海峡を廻るかについて大に心配されたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像して見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩は全体の状況において東郷閣下に似てゐるのみならず、この格段なる地位においてもまた東郷閣下とよく苦心を同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開いて御三の顔がぬうと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分は夜目よく見えぬのに、顔だけが著るしく強い色をして判然眸底に落つるからである。御三はその平常より赤き頬をますます赤くして洗湯から帰つたついでに、昨夜に懲りてか、早くから勝手の戸締をする。書齋で主人が俺のステッキを枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。まさか易水の壮士を氣取つて、竜鳴を聞こうと云う酔狂でもあるまい。きのうは山の芋、今日はステッキ、明日は何になるだらう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間と云うような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めてゐる。惜し気もなく散る彼岸桜を誘つて、颯と吹き込む風に驚ろいて眼を覚ますと、朧月さえいつの間にか差してか、籠の影は斜めに揚板の上にかかる。寝過ごしはせぬかと二三度耳を振つて家内の容子を窺うと、しんとして昨夜のごとく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でことごとく音がしだす。小皿の縁を足で抑えて、中をあらわしてゐるらしい。こつちから出るわいと穴の横へすくんで待つてゐる。なかなか出て来る景色はない。血の音はやがてやんだが今度はどんぶりか何かに掛つたらしい、重い音が時々こつちとこつちとする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやつてゐる、吾輩の鼻づらと距離にし

たら三寸も離れておらん。時々はちよるちよると穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一枚向うに現在敵が暴行を逞しくしているのに、吾輩はじつと穴の出口で待つておらねばならん随分気の長い話だ。鼠は旅順砲の中盛に舞踏会を催うしている。せめて吾輩の這入るだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、氣の利かめ山出した。

今度はへつつい影で吾輩の鮑貝がごとりと鳴る。敵はこの方面へも来たなと、そーつと忍び足で近寄ると手桶の間から尻尾がちらと見えたざり流しの下へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場であうがい茶碗が金盃にかちりと当る。今度は後方だと振りむく途端に、五寸近くある大な奴がひらりと齒磨の袋を落して椽の下へ馳け込む。逃がすものかと続いて飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に頑張っている。三方面共少々ずつ騒ぎ立てる。小癩と云おうか、卑怯と云おうかとうい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと氣を疲らし心を勞らして奔走努力して見たがついに一度も成功しない。残念ではあるがかかる小人を敵にはいかなる東郷大將も施すべき策がない。始めは勇氣もあり敵愾心もあり悲壯と云う崇高な美感さえあつたがついには面倒と馬鹿氣しているのと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事になった。しかし動かんでも八方睨みを極め込んでいれば敵は小人だから大した事は出来ないのである。目ざす敵と思つた奴が、存外けちな野郎だと、戦争が名譽だと云う感じが消えて悪くいと云う念だけ残る。悪くいと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼーとする。ぼーとしたあとは勝手にしる、どうせ氣の利いた事は出来ないのだからと輕蔑の極眠たくなる。吾輩は以上の径路をたどつて、ついに眠くなった。吾輩は眠る。休養は敵中に在つても必要である。

横向に庇を向いて開いた引窓から、また花吹雪を一塊りなげ込んで、烈しき風の吾を遠ると思えば、戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避くる間もあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰いつく。これに続く黒い影は後ろに廻るかと思つ間もなく吾輩の尻尾へぶら下がる。瞬く間の出来事である。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上る。満身の力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳に喰い下がつたのは中心を失つてだらりと吾が横顔に懸る。護謨管のごとき柔かき尻尾の先が思い掛なく吾輩の口に這入る。屈算の手懸りに、砕けよとばかり尾を叩えながら左右にふるると、尾のみは前歯の間に残つて胴体は古新聞で張つた壁に当つて、揚板の上に跳ね返る。起き上がるころを隙間なく乗し掛れば、毬を蹴たると、吾輩の鼻づらを掠めて釣り段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上げる。距離は五尺。その中に月の光りが、大幅の帯を空に張るごとく横に差し込む。吾輩は前足を力を入れて、やつとばかり棚の上に飛び上がるうとした。前足だけは首尾よく棚の縁にかつたが後足は宙にもがいて居る。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰いつつて居る。吾輩は危うい。前足を懸け易えて足懸りを深くしようとす。懸け易える度に尻尾の重みで浅くなる。二三分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔きむしる音ががりがりと聞える。これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下つた。自分と尻尾に喰いつくもの重みで吾輩のからだがりぎりと廻る。この時まで身動きもせずと覗いていた棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投げるがごとく飛び下りる。吾輩の爪は一縷のかかりを失う。三つの塊まりが一つとなつて月の光を豎に切つて下へ落ちる。次の段に乗せてあつた摺鉢と、摺鉢の中の小桶とジャムの空缶が同じく一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上へ転がり出す。すべてが深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさえ寒からしめた。

「泥棒！」と主人は胸間声を張り上げて寢室から飛び出して来る。見ると片手にはランプを掲げ、片手にはステッキを持って、寝ぼけ眼よりは身分相応の炯々たる光を放つて居る。吾輩は鮑貝の傍におとなしくして蹲踞る。一疋の怪物は戸棚の中へ姿をかくす。主人は手持無沙汰に、「何だ誰だ、大きな音をさせたのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いて居る。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切ほどに細くなった。

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだと思ふと英吉利のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の毛衣だけはちよつと洗い張りでもするか、もしくは当分の中質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて単純な無事な銭のかからない生涯を送つて居るに思われるかも知れないが、いくら猫だつて相心に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度くらいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使つた日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は団扇でも使つて見ようと思つても起らないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを思うと人間は驚沢なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで余計な手数を懸けて御互に恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮さなくてもの事だ。羊の御厄介になつたり、蚕の御世話になつたり、綿蟲の御情けさえ受けるに至つては驚沢は無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大目に見て勘弁するところ、生存上直接の利害もないところまでこの調子で押し行けるのは毫も合点が行かぬ。第一頭の毛など云うものは自然に生えるものだから、放つておく方がもつとも簡便で当人のためになるだらうと思つのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらえて得意である。坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くしている。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。これでは何のために青い物を出しているのか主意が立たんではないか。そうかと思つと櫛とか称する無意味な鋸様の道具を用いて頭の毛を左右に等分して嬉しがつて居るのがある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人為的の区劃を立てる。中にはこの仕切りがつむじ「#」つむじ「に傍点」を通り過して後ろまで食み出しているのがある。まるで鷹造の芭蕉葉のようだ。その次には脳天を平らに刈つて左右は真直に切り落す。丸い頭へ四角な枠をはめて居るから、植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあ

ると云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに憂身を憂してどうするつもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから驚沢だ。四本であるけばそれだけかも行くだのに、いつでも二本ですまして、残る二本は到来の棒鱈のように手持無沙汰にぶら下げておられるのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほど猫より閑なもので退屈のあまりかやうないたずらを考案して楽しんでるものと察せられる。ただおかしなのはこの閑人がよると障わりと多忙だ多忙だと触れ廻るのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されるはしまいかと思われるほどこせついい「#こせついい」に傍点」ている。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣楽でよかるうなどと云うが、氣楽でよければなるが好い。そんなにこせつこせつしてくれと誰も頼んだ訳でもなかるう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかかんか起して暑い暑いと云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こゝ氣楽にしてはおられんさ。氣楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣を着て通されるだけの修業をするがよらしい。とは云うものの少々熱い。毛衣では全く熱い過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の觀察を怠つたから、今日は久し振りで彼等が酔興に醜態する様子を拝見しようかと考えて見たが、生憎主人はこの点に關してすこぶる猫に近い性分である。昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせないので、いくら觀察しても一向觀察する張合がない。こんな時に迷亭でも来るや弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるるに、先生も来てても好い時だと思つていても、誰とも知らず風呂場まであざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな声で相の手を入れてる。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中に響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大きな声と、こんな無作法な真似をやるものはほかにはない。迷亭に極つてい

いよいよ来たな、これで今日半日は潰せると思つていると、先生汗を拭いて肩を入れて例のごとく座敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はどうしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がしたのではつと驚ろいて、醒めぬ眼をわざと「#瞳」の「堂」の代わりに「争」、2306」つて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使いをしている。

「おやいらしゃいまし」と云つたが少々狼狽の氣味で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかけたまま御辭儀をする。「いえ、今来たばかりなんです。今風呂場で御三に水を掛けて貰つてね。ようやく生き帰つたところで、どうも暑いじゃありませんか」「この両三日は、ただじつとしておりまして汗が出るくらいで、大変御暑うございます。でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがと。なに暑いくらいでそんなに変りやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくつてね」「私なども、ついに昼寝などを致した事がないのでございますが、こゝ暑いとつい「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりや、こんな結構な事はないですか」とあいかわらず呑気な事を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「私なんぞ、寝たくない、質でね。苦沙弥君などのように来るたんびに寝ている人を見ると羨しいですよ。もっとも胃弱にこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩の上に載せてるのが退儀でさあ。さればと云つて載つてゐる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している。「奥さんなんぞ首の上へまだ載つておくものがあるんだから、坐つちやいられないはずだ。鬚の重みだけでも横になりたくありませんよ」と云うと細君は今まで寝ていたのが鬚の恰好から露見したと思つて「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじつて見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日はね、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云う。「フライをどうなさつたんですか」「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから、ただ置くのも勿体ないと思つてね。バタを溶かして玉子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやっぱり天日は思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおいて新聞を読んでると客が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつて急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見たらね」「どうなつておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ。せんだつてじゅうは単衣では寒いくらいでございますましたのに、一日から急に暑くなりましてね」「蟹なら横に這つところだが今年の氣候はあとびさり」「#あとびさり」に傍点」をするんですよ。倒行して逆施すまた可ならずやと云うような事を言つているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないので。どうもこの氣候の逆戻りをするとこはまるでハキキュリスの牛ですよ」と囃に乗つていよいよ変ちきりんな事を言つと、果せるかな細君は分らない。しかし最前の倒行して逆施すで少々懲りているから、今度はただ「へえ」と云つたのみで問ひ返さなかつた。これを問ひ返されないと迷亭はせつかく持ち出した甲斐がない。「奥さん、ハキキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じせんわ」「御存じないですか、ちよつと講釈をしましょうか」と云うと細君もそれには及びませんとも言い兼ねたものだから「ええ」と云つた。「昔ハキキュリスが牛を引つ張つて来たんです」「そのハキキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありません。牛飼やいるのは亭主じゃありません。その節は希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘のお話しなの？」「そんなら、そうおつしやればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心得ている。「だつてハキキュリスじゃありませんか」「ハキキュリスなら希臘なんですか」「ええハキキュリスは希臘の英雄でさあ」「どつりで、知らないと思ひました。それでその男がどつしたんで」「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐう寝ている」「あらいやだ」「寝ている間に、ヴァルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンは鍛冶屋ですよ。この鍛冶屋のせがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の尻尾を持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハキキュリスが眼を覚まして牛やい牛やいと尋ねてあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つたんじやありませんもの、後ろへ後ろへと引きずつて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天氣の話は忘れてゐる。

「時に御主人はどつしました。相変らず午睡ですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありますね。何の事もない毎日少しずつ死んで見るようなものですね。奥さん御手数だがちよつと起していらつしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですがね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。「おやまあ、時分どきだのにちよつとも気が付きませんで、それじゃ何もございませぬが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくとも好いですよ」「それでも、あなた、どうせ御口に合うようなものはございませぬが」と細君少々厭味を並べる。迷亭は悟つたもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を逃らえて来ましたから、そいつを一つこいでいただきますよ」とどうして素人には出来そうもない事を述べる。細君は「たつた一言、まあ」と云つたがそのまあ「#「まあ」に傍点」の中には驚ろいたまあ「#「まあ」に傍点」と、気を悪くしたまあ「#「まあ」に傍点」と、手数が省けてありがたいと云つまあ「#「まあ」に傍点」が合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいので、寝つき掛つた眼をさかに扱かれたよつな心持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかましい男だ。せつかく好い心持に寝ようとしたところを」と欠伸交りに仏頂面をする。「いや御目覚めか。鳳眠を驚かし奉つてはなはだ相済まん。しかしたまには好かるう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だか分らぬ挨拶をする。主人は無言のまま座に着いて寄木細工の巻煙草入から「朝日」を一本出してすばい吸い始めたが、ふと向の隅に転がっている迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買つたね」と云つた。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細かくつて柔らかなんですね」と細君はしきりに撫で廻わす。「奥さんこの帽子は重宝ですよ、どうでも言つ事聞きませぬからね」と拳骨をかためてパナマの横ッ腹をばかりと張り付けるとなるほど意のごとく拳ほごな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間もなく、この度は拳骨を裏側へ入れてうんと突ツ張ると釜の頭がばかりと尖る。次には帽子を取つて鏢と鏢を両側から押し潰して見せる。潰れた帽子は麵棒で延した蕎麦のように平たくなる。それを片端から蓆でも巻くごとくぐるぐる巻む。「どうですこの通り」と丸めた帽子を懐中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」と細君は帰天齋正一の手品でも見物しているように感嘆すると、迷亭もその気になったものと見えて、右から懐中に取めた帽子をわざと左の袖口から引つ張り出して「どこにも傷はありません」と元のごとくに直して、人さし指の先へ釜の底を載せてくるくと廻す。もう休めるかと思つたら最後にぼんと後ろへ放つてその上へ堂つさり尻餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸念らしい顔をする。細君は無論の事心配するに「せつかく見事な帽子をもし壊わしでもしちやあ大変ですから、もう好い加減になすつたら宜うござんしょう」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊われないから妙でしょう」と、くちやくちやになつたのを尻の下から取り出してそのまま頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好にたちまち回復する。「実に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしょう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじやありません、元からこつ云つ帽子なんです」と迷亭は帽子を被つたまま細君に返事をしてる。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。「だつて苦沙弥君は立派な麦藁の奴を持つてるじやありませんか」「ところがあなた、せんだつて小供があれを踏み潰してしまいました」「おやおやそりや惜しい」「#底本では「拙しい」の誤り、235」事をしましたね」「だから今度はあなたのような丈夫で奇麗なのを買つたら善かるうと思ひますんで」と細君はパナマの値段を知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂の中から赤いケース入りの鋏を取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそのくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたすこぶる重宝な奴で、これで十四通りに使えるんです。この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであつたが、幸に細君が女として持つて生れた好奇心のために、この厄運を免かれたのは迷亭の機転と云わんよりむしろ僥倖の仕合せだと吾輩は看破した。その鋏がどうして十四通りに使えます」と聞かぬや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらつしやい。いいですか。ここに三日月形の欠け目がありましよう、ここへ葉巻を入れてぶつりと口を切るんです。それからこの根にちよと細工がありましよう、これで針金をばつばつやりませぬ。次には平たくして紙の上へ横に置くのと定規の用をする。また刃の裏には度盛がしてあるから物指の代用も出来る。こちらの表にはヤスリ「#「ヤスリ」に傍点」が付いているこれで爪を磨りませぬ。ようがすか。この先きを螺旋鋏の頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと金槌にも使えらばらに離すと、ナイフとなる。一番しまいに、さあ奥さん、この一番しまいが大変面白いんです、ここに蠅の眼玉くらいな大きさの球がありましよう、ちよつと、覗いて御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだから」「そう信用がなくなつちや困つたね。だが欺されたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？ 厭ですか、ちよつとでいいから」と鋏を細君に渡す。細君は覚束なげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに覗をつけている。「どうです？ 何だか真黒ですわ」「真黒じゃいけませんね。もう少し障子の方へ向いて、そつ鋏を覗かすに、そつそつそれなら見えるでしょう」「おやまあ写真ですな。どうしてこんな小さな写真を張り付けたんでしよう」「そこが面白いところさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。最前から黙つていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見えて「おい俺にもちよつと覽せよ」と云つと細君は鋏を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですな」と云つてなかなか離さない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待つていらつしやいよ。美しくい髪ですな。腰までありますよ。少し仰向いて恐ろしい背の高い女だ事、しかし美人ですな」「おい御見せと云つたら大抵に見せるがいい」と主人は大に急ぎ込んで細君に食つて掛る。「へえ御待遠さま、たとと御覧遊ばせ」と細君が鋏を主人に渡す時に、勝手から御三が御客さまの御詔が参りましたと、二個の箆蕎麦を座敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自分の御馳走ですよ。ちよつと御蒙つて、こつこつはくつく事に致しますから」と叮嚀に御辞儀をする。真面目なような巫山戯たような動作だから細君も応対に窮したと見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたがり拝見している。主人はようやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦は毒だぜ」と云つた。「なあに大

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなに」ご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つてる事はよく承知しています。実は二三日前行った時にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行つていらつしやるじゃありませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易の体であったが「そりゃ妙ですな、どうしたんだらう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話の途切れた時、極りの悪い時、眠くなつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出して来る。「先月大磯へ行つたものに両三日前東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換だね。相思の情の切な時にはよくさう云う現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋の何物たるを御解しにならん方には、御不審ももつともだが……」「あ、何を証拠にそんな事をおつしやるの。随分軽蔑なされるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩いなんかした事はなさそうじゃありませんか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりゃ僕の艶聞などは、いくら有つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方の記憶には残っていないかも知れないが、実はこれでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻す。「ホホホ水面白い事」と云つたのは細君で、「馬鹿にしていらあ」と庭の方を向いたのは主人である。ただ寒月君だけは「どうかその懐旧談を後学のために伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないんだが、せつかくだから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押してよいよ本文に取り掛ける。「回顧すると今を去る事、ええと、何年前だつたかな、面倒だからほぼ十五六年前とおこつて」「冗談じゃない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが御悪いのね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守つて一言も云わずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡筈谷を通つて、蛸壺峠へかかつて、これからいよいよ会津領へ出ようとするところだ」「妙なところだな」と主人がまた邪魔をする。「だまつて聴いていらつしやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がないから峠の真中にある一軒屋を敲いて、これこれかようかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれと云うと、御安い御用です、さあ御上りなさいと裸蠟燭を僕の顔に差つけた娘の顔を見て僕はふるふると思へたがね。僕はその時から恋と云う曲者の魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山の中にも美しい人があるんでしようか」「山だつて海だつて、奥さん、その娘を一目あなたに見せたいと思つてくらいいですよ、文金の高島田に髪を結いましてね」「へえ」と細君はあつけに取られてはいる。「這入つて見ると八畳の真中に大きな囲炉裏が切つてあつて、その周りに娘と娘の爺さんと婆さんと僕と四人坐つたんでしたがね。さぞ御腹が御減りでしょうと云いますから、何でも善いから早く食わせ給へと請求したんです。すると爺さんがせつかくの御客さまだから蛇飯でも炊いて上げよう云うんです。さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだからしつかりして聴きたまえ」「先生しつかりして聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だつて冬、蛇がいやしますまい」「うん、そりゃ一応もつともな質問だよ。しかしこんな詩的な話になるとさう理窟にばかり拘泥してはられないからね。鏡花の小説にや雪の中から蟹が出てくるじゃないか」と云つたら寒月君は「なるほど」と云つたきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪もの食いの隊長で、蛙、なめくじ、赤蛙などは食ひ厭きていたくらいなところだから、蛇飯は乙だ。早速御馳走になろうと爺さんに返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋をかけて、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。不思議な事にはその鍋の蓋を見ると大小十個ばかりの穴があいている。その穴から湯気がぷうぷう吹くから、旨い工夫をしたものだ、田舎にしては感心だと見ていると、爺さんふと立つて、どこかへ出て行つたがしばらくすると、大きな笹を小脇に抱い込んで帰つて来た。何気なくこれを囲炉裏の傍へ置いたから、その中を覗いて見ると、きくらをやつて塊まつていましたね」「もうそんな御話しは廃しになさいよ。厭らしい」と細君は眉に八の字を寄せる。「どうしてこれが失恋の大原因になるんだからなかなか廃せませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋をとつて、右手に例の塊まつた長い奴を無雑作につかまえて、いきなり鍋の中へ放り込んで、すぐ上から蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははつと息の穴が塞つたかと思つたよ」「もう御やめになさいよ。気味の悪い」と細君しきりに怖がつている。「もう少して失恋になるからしばらく辛抱していらつしやい。すると一分立つた立たないうちに蓋の穴から鎌首がひよいと一つ出ましたのには驚きましたよ。やあ出たなと思つと、隣の穴からもまたひよいと顔を出した。また出たよと云ううち、あちらからも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇の面だらけになつてしまつた」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這い出さうとするのさ。やがて爺さんは、もうよからう、引つ張らうしとか何とか云うと、婆さんははあ」と答える。娘はあいと挨拶をして、名々に蛇の頭を持ってぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出して来る。「蛇の骨抜きですな」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用な事をやるじゃないか。それから蓋を取つて、杓子でもつて飯と肉を矢鱈に掻き交せて、さあ召し上がれと来た」「食つたのかい」と主人が冷淡に尋ねると、細君は苦しい顔をして「もう廃しになさいよ、胸が悪くて御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおつしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりは生涯忘れられませんぜ」「おお、いやだ、誰か食べるもんですか」「そこで充分御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅の労れもある事だから、仰に従つて、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまつた」「それからどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「それから明朝になつて眼を覚してからが失恋でさあ」「どつかなさつたんですか」「いえ別にどうもしやしませんがね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓から見ると、向うの寛の傍で、薬缶頭が顔を洗つていらんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかつたから、しばらく拝見して、その薬缶がこちらを向く段になつて驚いたね。それが僕の初恋をした昨夜の娘なんだもの」「だつて娘は島田に結つているとさつき云つたじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿にしていらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線をそらす。「僕も不思議の極内心少々怖くなつたから、なお余所ながら容子を窺つていると、薬缶はようやく顔を洗ひ了つて、傍えの石の上に置いてあつた高島田の鬘を無雑作に被つて、すましてうちへ這入つたんでなるほどと思つた。なるほどとは思つたようなものその時から、

とうとう失恋の果敢なき運命をかこつ身となつてしまつた。「くだらない失恋もあつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「しかしその娘が丸薬缶でなくつてめでたく東京へでも連れて御歸りになつたら、先生はなお元氣かも知れませんが、とにかくせつかくの娘が禿であつたのは千秋の恨事ですねえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまつたんでしょう」「僕もそれについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせいに相違ないと思つて。蛇飯でえ奴はのぼせるからね」「しかしあなたは、どこも何ともなくて結構でございましたね」「僕は禿にはならずすんだが、その代りにこの通りその時から近眼になりました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで叮嚀に拭いている。しばらくして主人は思い出したように「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞いて見る。「あの髪はどこで買ったのか、拾つたのかどう考えても未だに分らないからそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「まるで嘶し家の話を聞くようでごさすね」とは細君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうやめるかと思ひのほか、先生は猿轡でも嵌められないうちはどうして黙つてゐる事が出来ぬ性と見えて、また次のような事をしゃべり出した。

「僕の失恋も苦しい経験だが、あの時あの薬缶を知らずに貰つたが最後生涯の目障りになるんだから、よく考えないと険呑だよ。結婚なんかは、いざと云う間際になつて、飛んだところに傷口が隠れているのを見出す事がある者だから。寒月君などもそんなに憧憬したり」「#「消」の「さんずい」の代わりに「りっしんべん」、248-101」「#「兄」に「りっしんべん」が付く、248-11」したり独りでむずかしがらないで、篤と氣を落ちつけて珠を磨るがいいよ」といやに異見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠ばかり磨つていたんですが、向うでそうさせないんだから弱切り切ります」とわざと辟易したような顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるんだが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書館へ小便をしに来た老梅君などになるとさぐる奇だからね」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承ねる。「なあに、こつ云う訳さ。先生その昔静岡の東西館へ泊つた事があるのさ。 たつた一と晩だぜ。それでその晩すぐにその下女に結婚を申し込んだのさ。僕も随分呑気だが、まだあれほどには進化しない。もつともその時分には、あの宿屋に御夏さんと云う有名な別嬪がいて老梅君の座敷へ出たのがちよつとその御夏さんだから無理はないがね」「無理がないどころか君の何とかとまるで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅とはそんなに差異はないからな。とにかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜が食いたくなつたんだがね」「何だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねつてちよつと考へて見る。迷亭は構わずどどん話を進ませる。「御夏さんと呼ばれて静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だつて水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持つてくる。そこで老梅君食つたさうだ。山盛りの水瓜をこつと平らげて、御夏さんの返事を待つてゐると、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーんうーんと唸つたが少しも利目がなからまた御夏さんと呼ばれて今度には静岡に医者はあるまいかと聞いたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だつて医者くらいはありますよと云つて、天地玄黄とかいう千字文を盗んだような名前のドクトルを連れて来た。翌朝になつて、腹の痛みも御蔭でとれてありがたいと、出立する十五分前に御夏さんと呼ばれて、昨日申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いながら静岡には水瓜もあり、御医者も御蔭でとれてありがりの御嫁はありませんよと出て行つたさうだ。それから老梅君も僕も同様失恋になつて、図書館へは小便をするほかに来なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云つと主人がいつになく引き受けて、本當にさうだ。せんだつてミユツセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬の詩人を引用してこんな事を云つていた。羽より軽い者は塵である。塵より軽いものは風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは無である。よく穿つてゐるだらう。女なんか仕方がない」と妙なところで力味んで見せる。これを承つた細君は承知しない。「女の軽いのがいけないとおっしゃるけれども、男の重いんだつて好い事はないでしょう」「重い」と妙な事だ。「重い」と云つた重い事ですわ、あなたのようなんです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだつたに違いない」とひやかすのだから賞めるのだから曖昧な事を言つたが、それでやめておいても好い事をまた例の調子で布衍して、下のこつと述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだつて云うが、それなら唾を女房にしてゐると同じ事で僕などは一向ありがたくない。やつぱり奥さんのようにあなたに重いじゃありませんかとか何と云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、たまには喧嘩の一つ二つしなくつちや退屈でしょうがないからな。僕の母など来たら、おやじの前へ出てはい「#「はい」に傍点」とへい「#「へい」に傍点」で持ち切つていたものだ。そうして二十年もいっしょになつてゐるうちに寺参りよりほか外へ出た事がないと云うんだから情けないじゃないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名はこつとく暗記してゐる。男女間の交際だつてそうさ、僕の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、靈の交換をやつて朦朧体で出合つて見たりする事はどうして出来なかつた」「御氣の毒様で」と寒月君が頭を下げる。「実に御氣の毒さ。しかもその時分の女が必ずしも今の女より品行がいいと限らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何だのとやかましく云いますがね。なに昔はこれより烈しかったんですよ」「そつてしようか」と細君は真面目である。「そつてですとも、出鱈目じゃない、ちゃんと証拠があるから仕方ありませんや。苦沙弥君、君も覚えてゐるかも知れんが僕等の五六歳の時までは女の子を唐茄子のように籠へ入れて天秤棒で担いで売つてあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそんな事は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知らないが、静岡じゃたしかにそつたつた」「まさか」と細君が小さい声を出すと、「本當ですか」と寒月君が本當らしからぬ様子で聞く。

「本當さ。現に僕のおやじが価を付けた事がある。その時僕は何でも六つくらいだつたらう。おやじといつしよに油町から通町へ散歩に出ると、向うから大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよしかなと怒鳴つてくる。僕等がちよつと二丁目の角へ来ると、伊勢源と云う呉服屋の前でその男に出つ食わした。伊勢源と云うのは間口が十間で蔵が五つ戸前あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来給え。今でも歴然と残つてゐる。立派なうちだ。その番頭が甚兵衛と云つてね。いつても御袋が三日前に亡くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ控へてゐる。甚兵衛君の隣には初さんという二十四五の若い衆が坐つてゐるが、この初さんがまた雲照律師に帰依

して三七二十一日の間蕎麦湯だけで通したと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが長どんでこれは昨日火事で焚き出されたかのごとく愁然と算盤に身を凭している。長どんと併んで……」「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をするのか」「そうそう人売りの話しをやっていたんだっけ。実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚があるんだが、それは割愛して今日は人売りだけにしておこう」「人売りもついでにやめるがいい」「どうしてこれが二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品性の比較について大なる参考になる材料だから、そんなに容易くやめられるものか。それで僕がおやじと伊勢源の前までくると、例の人売りがおやじを見て旦那女子の品の仕舞物はどうです、安く負けておから買っておくんさいと云いながら天秤棒をおろして汗を拭いているのさ。見ると籠の中には前に一人後ろに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れている。おやじはこの男に向つて安ければ買ってもいいが、もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎今日はみんな売り尽してたつた二つになつちました。どっちでも好いから取つとくんさいなと女の子を両手で持つて唐茄子か何ぞのようによやじの鼻の先へ出すと、おやじはほんぼんと頭を叩いて見て、ははあかなりな音だと云つた。それからいよいよ談判が始まって散々価値切つた末おやじが、買ってもいいが品はたしかだるうなと聞くと、ええ前の奴は始終見ているから間違はありませぬがね後ろに担いでいる方は、何しろ眼がないんですから、ことによるとひびが入つてくるかも知れませぬ。こいつの方なら受け合えない代りに値段を引いておきますと云つた。僕はこの問答を未だに記憶しているんだがその時小供心に女と云うものはなるほど油断のならないものだと思つたよ。しかし明治三十八年の今日こんな馬鹿な真似をして女の子を売つてあるくものもなし、眼を放して後ろへ担いだ方は陳呑だなどと云う事も聞かないようだ。だから、僕の考ではやはり泰西文明の御蔭で女の品行もよほど進歩したものだらうと断定するのだが、どうだらう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つして見せたが、それからわざと落ちついた低い声で、こんな觀察を述べられた。「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや? などと自分で自分を売りにあっているから、そんな八百屋のお余りを雇つて、女の子はよし、か、なつて下品な依託販売をやる必要はないですよ。人間に独立心が発達してくると自然こんな風になるものです。老人なんぞはいらぬ取越苦勞をして何とかかか云います、實際を云うとこれが文明の趨勢ですから、私などは大に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表しているのです。買つ方だつて頭を敲いて品物は確かかなくて聞くような野暮は一人もいないんですからその辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に、そんな手数を省く日によあ、際限がありませんから。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持つ事も嫁に行く事も出来やしません。寒月君は二十世紀の青年だけであつて、大に当世流の考を開陳しておいて、敷島の煙をふうと迷亭先生の顔の方へ吹き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易する男ではない。「仰せの通り方今の女生徒、令嬢などは自尊自信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえらいものだぜ。筒袖を穿いて鉄棒へぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の体操を目撃するたびに古代希臘の婦人を追懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように云い放つと、「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を發しているから仕方がない。美学者と希臘とはどうい離れられないやね。ことにあの色の黒い女學生が一心不乱に体操をしているところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君は依然としてにやにやせず。「Agnodice はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時亜典の法律で女が産婆を営業する事を禁じてあつた。不便な事さ。Agnodice だつてその不便を感じるだろつじやないか」「何だい、その 何とか云つのは」「女さ、女の名前だよ。この女がつらつら考えるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱いて考え込んだね。ちよつと三日目の暁方に、隣の家で赤ん坊がおぎやあど泣いた声を聞いて、うんそうだと豁然大悟して、それから早速長い髪を切つて男の着物をきて Hierophilus の講義をききに行つた。首尾よく講義をきき終せて、もう大丈夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を開業した。ところが、奥さん流行りましたね。あちらでもおぎやあ「#「おぎやあ」に傍点」と生れるこちらでもおぎやあ「#「おぎやあ」に傍点」と生れる。それがみんな Agnodice の世話なんだから大変儲かつた。ところが人間万事塞翁の馬、七転び八起き、弱り目に祟り目、ついでこの秘密が露見に及んでついに御上の御法度を破つたと云うところで、重き御仕置に仰せつければそうになりました。「まるで講釈見たようです事」「なかなか旨いでしよう。ところが亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだから、時の御奉行もそう木で鼻を括つたような挨拶も出来ず、ついに当人は無罪放免、これからはたとい女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令さえ出さえてめでたく落着を告げました」「よくいるいるな事を知つていらつしやるのね、感心ねえ」「ええ大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知っています」「ホホホホ面白い事ばかり……」と細君相形を崩して笑つていて、格子戸のベルが相変わらず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ這入つて来たものは誰かと思つたら「存じの越智東風君であつた。」

ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入する変人はことごとく網羅し尽したとまで行かずとも、少なくとも吾輩の無聊を慰むるに足るほどの頭数は御揃になつたと云わねばならぬ。これで不足を云つては勿体ない。運悪くほかの家へ飼われたが最後、生涯人間中にかかる先生方が一人でもあつたとさえ気が付かずに死んでしまつても知れない。幸にして苦沙弥先生門下の猫児となつて朝夕虎皮の前に侍べるので先生は無論の事迷亭、寒月乃至東風などと云う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連の举止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千載一遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせこれだけ集まれば只事ではすまない。何か持ち上げるだろつと襖の陰から謹んで拝見する。

「ういふ無沙汰を致しました。しばらく」と御辞儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者のようにも見え、白い小倉の袴のゴウゴウするのを御苦勞にも鹿爪らしく穿いているところは神原健吉の内弟子としか思えない。従つて東風君の身体で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけである。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあずつと、こつちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家らしい挨拶をする。「先生には大分久しく御目にかかりませぬ」「そうさ、たしかこの春の朗読会きりだつたね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛かね。その後御宮にやなりませんか。あれは旨かつたよ。僕は大きに拍手したぜ、君気が付いてたかい」「ええ御蔭で大きに勇気が出まして、どうつしまいまで漕ぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」と主人が口を出す。「七八両月は

休んで九月には何か賑やかにやりたいと思つております。何か面白い趣向は「ございますまいか」「さよう」と主人が気の無い返事をする。「東風君僕の創作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちよつと毒気をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返つて、「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新劇とか大部やかましいから、僕も一つ新機軸を出して俳劇と云うのを作つて見たのさ」「俳劇たどんなものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙に捲かれて控えている。「それでその趣向と云うのは？」と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくつて、毒悪なのはよくないと思つて一幕物にしておいた」「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも極簡単な方がいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌツと出させて、その枝へ鳥を一羽とまらせる」「鳥がじつとしていればいい」と主人が独り言のように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を糸で枝へ縛り付けておくんです。でその下へ行水盥を出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使つてゐるんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ませぬ。美術学校のモデルを雇つてくるんです」「そりや監視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だつて興行さえしなければ構わんじやありませんか。そんな事をとやかく云つた日にはや学校で裸体画の写生なんぞ出来つておられません」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見ているのは少し違つよ」「先生方がそんな事を云つた日には日本もまだ駄目です。絵画だつて、演劇だつて、おんなじ芸術です」と寒月君大いに気焔を吹く。「まあ議論はいいが、それからどうするのだい」と東風君、ことによると、やる了見と見えて筋を聞きたがる。「ところへ花道から俳人高浜虚子がステッキを持って、白い灯心入りの帽子を被つて、透綾の羽織に、薩摩飛白の尻端折りの半靴と云うこしらえて出てくる。着付けは陸軍の御用達見たようだけれども俳人だからなるべく悠々として腹の中では句案に余念のない体であるかなくつちやいけな。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本舞台に懸つた時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びている、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚子先生大に俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ばかりあつて、行水の女に惚れる鳥かな」「#「行水の女に惚れる鳥かな」と大きな声で一句朗吟するのを合図に、拍子木を入れて幕を引く。どうだろつ、こつ云う趣向は、御氣に入りますか。君御宮になるより虚子になる方がよほどいいぜ」「東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あんまり、あつけないようだ。もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今まで比較のおとなしくしていた迷亭はさういつまでもだまつているような男ではない。「たつたそれだけで俳劇はすさまじいね。上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云うものは消極的で亡国の音ださうだが、敏君だけあつてうまい事を云つたよ。そんなつまらない物をやつて見給え。それこそ上田君から笑われるばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないじやないか。失礼だが寒月君はやはり実験室で珠を磨いてる方がいい。俳劇なんぞ自作つたつて二百作つたつて、亡国の音じゃ駄目だ」「寒月君は少々憤として、「そんなに消極的でしょうか。私はなかなか積極的なつもりなんです。どつちでも構わん事を弁解しかける。虚子がですね。虚子先生が女に惚れる鳥かな」「#「女に惚れる鳥かな」に傍点」と鳥を捕えて女に惚れさせたところが大に積極的だろつと思ひます」「こりや新説だね。是非御講釈を伺がいませう」「理学士として考へて見ると鳥が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「こもつとも」「その不合理な事を無雑作に言い放つて少しも無理に聞えませぬ」「さうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で鳥とは没交渉の沙汰であります。しかるところあの鳥は惚れてるなと感ずるのは、つまり鳥がどうのこつのと云う訳じやない、必竟自分が惚れてゐるんでさあ。虚子自身が美しい女の行水してゐるところを見てはつと思つ途端にずつと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で鳥が枝の上で動きもしないで下を見つめてゐるのを見たものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参つてゐるなと癡違ひをしたのです。癡違ひには相違ないですがそこが文学的にかつ積極的なところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく鳥の上に拡張して知らん顔をしてすましてゐるところなんぞは、よほど積極主義じやありませんか。どつです先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違ひない。説明だけは積極だが、實際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるよに思ひます」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どつです、東風さん、近頃は傑作もありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして、稿本を幸ひ持つて参りましたから御批評を願ひませう」と懐から紫の袱紗包を出して、その中から五六十枚ほどの原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一頁に

世の人に似ずあえかに見え給つ

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔をしてしばらく一頁を無言のまま眺めてゐるので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切つて富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞める。主人はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞く。「へえ、この前迷亭先生とこいつしよに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよつと寄つて参りましたが、生憎先月から大磯へ避暑に行つて留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この捧げ方は少しまずかつたね。このあえかに「#「あえかに」に傍点」と云う雅言は全体何と言つ意味だと思つてゐるかね」「蚊弱いかたよわく」「#「たよわく」に傍点」と云う字だと思ひます。「なるほどそつも取れん事はないが本来の字義を云うと危う氣に」「#「危う氣に」に傍点」と云う事だぜ。だから僕ならこつは書かないね」「こつ書いたらもつと詩的になりませう」「僕ならこつさ。世の人に似ずあえかに見え給つ富子嬢の鼻の下」「#「鼻の下」に傍点」に捧ぐ

とするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下」#「鼻の下」に傍点」があるのとないのとは大変感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は解しかねたところを無理に納得した体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていよいよ巻頭第一章を読み出す。

倦んじて薫する香裏に君の

霊が相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛きこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎて」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならないのはごもつともで、十年前の詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではどうてい分りようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や訓義は学究のやる事で私共の方では頓と構いません。せんだつても私の友人で送籍と云う男が一夜」#「一夜」に傍点」という短篇をかきました。誰が読んでも朦朧として取り留めがつかないので、当人に逢つて篤と主意のあるところを糺して見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云つて取り合いません。全くその辺が詩人の特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」と主人が云つと、迷亭が「馬鹿だよ」と単簡に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけではまだ弁じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取除けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んでいただきたいのだからき」#「からき」に傍点」この世と、あまき」#「あまき」に傍点」口づけと対をとつたところが私の苦心です」「よほど苦心をなすつた痕迹が見えます」「あまい」#「あまい」に傍点」とからい」#「からい」に傍点」と参照するところなんか十七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでゐる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書齋の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といささか本気の沙汰である。「天然居士の墓碑銘ならもう二三遍拝聴したよ」「まあ、だまつていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「大和魂！ と叫んで日本人が肺病やみのような咳をした」

「起し得て突兀ですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！ と新聞屋が云う。大和魂！ と掏摸が云う。大和魂が一躍して海を渡つた。英国で大和魂の演説をする。独逸で大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返つて見せる。

「東郷大將が大和魂を有つてゐる。着屋の銀さんも大和魂を有つてゐる。詐偽師、山師、人殺しも大和魂を有つてゐる」

「先生そこへ寒月も有つてゐるとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたなら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示すごとく魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいが面白つございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か」

主人は一結沓然と云つつもりで読み終つたが、さすがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事と思つて待つてゐる。いくら待つていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は軽く「うん」と答えた。うんは少し気楽過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかつたが、やがて向き直つて、「君も短篇を集めて一巻として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやるうか」と聴くと迷亭は「真平だ」と答えた。先刻細君に見せびらかした缺をちよきちよき云わして爪をとつてい

る。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令嬢を知つてゐるのかい」と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意になつてそれから始終交際をしてゐる。僕はあの令嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、自分のうちは詩を作つても歌を詠んでも愉快に興が乗つて出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くあつた。僕の異性の朋友からインスピレーションを受けるからだろうと思つて、それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならぬからこの機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔から婦人に親友のないもので立派な詩をかけたものはないぞうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談話の火の手は大分下火になつた。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務もないから、失敬して庭へ蠅螂を探しに出た。梧桐の縁を綴る間から西に傾く日が斑らに洩れて、幹にはつくつく法師が懸命になつてゐる。晩はことによると一雨かかるかも知れない。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合にちよつと申し聞けるが、そう云う人間だつてつい近年までは運動の何者たるを解せず、食つて寝るのを天職のように心得てゐたではないか。無事は貴人とか称えて、懐手をして座布団から腐れかかつた尻を離さざるをもつて旦那の名譽と脂下つて暮したのは覚えてゐるはずだ。運動をしるの、牛乳を飲めぬ冷水を浴びるの、海の中へ飛び込めぬ、夏になつたら山の中へ籠つて半分露を食ふのとくだらぬ注文を連発するようになったのは、西洋から神国へ伝染した最近の病気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていくらいた。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とつて一歳だから人間がこんな病気に罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその砌りは浮世の風中にふわつておらなかつたに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合つて云つてもよしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに係らず、その短日月の間に猫一疋の発達は十分仕るところをもつて推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に計算するのはなほだしき誤謬である。第一、一歳何カ月に足らぬ吾輩がこのくらの見識を有してゐるのも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云つと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかは何にも知らない。世を憂い時を憤る吾輩などに較べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、輒地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたつて毫も驚くに足りない。これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない野呂間に極つてゐる。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の機能を吹聴したり、海水浴の利益を喋々して大発明のように考へるのである。吾輩などは生れない前からそのくらのいな事はちゃんと心得てゐる。第一海水がなぜ薬になるかと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何疋おるか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして医者にかかつた試しがない。みんな健全に泳いでゐる。病氣をすれば、からだか利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがる「#「あがる」に傍点」と云つて、鳥の薨去を、落ちる「#「落ちる」に傍点」と唱へ、人間の寂滅をこねる「#「こねる」に傍点」と号してゐる。洋行をして印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがい、誰でもいいと答えるに極つてゐる。それはそう答える訳だ。いくら往復したつて一匹も波の上は今呼吸を引き取つた。呼吸ではいかに、魚の事だから潮を引き取つたと云わなければならぬ。潮を引き取つて浮いてゐるのを見た者はないからだ。あの漫々たる、大海を日となく夜となく続けざまに石炭を焚いて探がしてゐるいても古往今来一匹も魚が上がつ「#「上がつ」に傍点」ておらんところをもつて推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待つてしかる後に知らざるなりで、訳はない。すぐ分る。全く潮水を呑んで始終海水浴をやつてゐるからだ。海水浴の機能はしかく魚に取つて顯著である以上は人間に取つても顯著でなくてはならぬ。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な広告を出したのは遅い遅いと笑つてもよしい。猫といへども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでゐる。但し今はいけない。物には時機がある。御維新前の日本人が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだごとく、今日の猫はいまだ裸体で海の中へ飛び込む機会に遭遇しておらん。せいては事を仕損ずる、今日のように築地へ打つちやられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗に飛び込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは、換言すれば猫が死「#「死」に傍点」んだと云う代りに猫が上「#「上」に傍点」がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは、容易に海水浴は出来ぬ。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。どうも二十世紀の今日運動せんのはいかに貧民のようである。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出来ぬのである。運動をする時間がないのである。余裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折助と笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と見做されてゐる。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さくなつたり大きくなつたりするばかりだが、人間の品隆とくると真逆かさまにひっくり返る。ひっくり返つても差し支へはない。物には両面がある。両端を叩いて黒白の変化を同一物の上起こすところが人間の融通のきくところである。方寸「#「方寸」に傍点」を逆かさまにして見ると寸方「#「寸方」に傍点」となるところに愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見るとまた格別な趣がある。セクスピアも千古古セクスピアではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわくるく云つた連中が急に運動がしたくなつて、女までがラケットを持って往來をあるき廻つたつて一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利いた風など笑ひさしななければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一応説明しようと思つて、御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ぬ。だからボールもバットも取り扱ひ方に困窮する。次には金がないから買つて行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文いらず器械なしと名づくべき種類に属する者と思つて、そんなら、のそのそ歩くか、あるいは鮪の切身を啣えて馳け出す事と考へるかも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動させて、地球の引力に順つて、大地を横行するのは、あまり単簡で興味がない。いくら運動と名がついても、主人の時々実行するような、読んて字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚がす者だろうと思つて、勿論ただの運動でもある刺激の下にはやらんとは限らん。鯉節競争、鯉探しなどは結構だがこれは肝心の対象物があつての上の事で、この刺激を取り去ると索然として没趣味なものになつてしまふ。懸賞の興奮剤がないとすれば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろいろ考へた。台所の廂から

家根に飛び上がる方、家根の天辺にある梅花形の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事、これはとうい成功しない、竹がつかつる滑べつて爪が立たない。後ろから不意に小供に飛びつく事、これはすこぶる興味のある運動の一だが滅多にやるとひどい目に逢うから、高々月に三度くらいしか試みない。紙袋を頭へかぶせらるる事、これは苦しいばかりではなはだ興味のない方法である。ことに人間の相手があらんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き掻く事、これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新式のうちにはなかなか興味深いものがある。第一に蟻螂狩り。蟻螂狩りは鼠狩りほどの大運動でない代りにそれほどの危険がない。夏の半から秋の始めにかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のものだ。その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蟻螂をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは雑作もない。さて見付け出した蟻螂君の傍へはつと風を切つて馳けて行く。するとすわこそと云う身構をして鎌首をふり上げる。蟻螂でもなかなか健気なもので、相手の力量を知らんうちに抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちよつと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。この時の蟻螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云う思い入れが充分ある。ところを一足飛びに君の後ろへ廻つて今度は背面から君の羽根を軽く引き掻く。あの羽根は平生大事に畳んであるが、引き掻き方が烈しいと、ぱつと乱れて中から吉野紙のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦勞千万に二枚重ねで乙に極まつている。この時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向つてくるが、大概の場合には首だけぬつと立てて立っている。こつちから手出しをするのを待ち構えて見える。先方がいつまでもこの態度でいては運動にならんから、あまり長くなるもまたちよいと一本参る。これだけ参ると眼識のある蟻螂なら必ず逃げ出す。それを我無洒落に向つてくるのはよほど無教育な野蠻的蟻螂である。もし相手がこの野蠻な振舞をやると、向つて来たところを覗いすまして、いやと云うほど張り付けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である。しかし敵がおとなしく背面に前進すると、こつちは気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻つてくる。蟻螂君はまだ五六寸しか逃げ延びておらん。もう吾輩の力量を知つたから手向いをする勇氣はない。ただ右往左往へ逃げ惑つのみである。しかし吾輩も右往左往へ追つかけるから、君はしまいに苦しがつて羽根を振つて一大活躍を試みる事がある。元来蟻螂の羽根は彼と首と調和して、すこぶる細長く出来上がったものだが、聞いて見ると全く裝飾用だ。それで、人間の英語、仏語、独逸語のごとく毫も実用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事実は地面の上を引きずつてあると云うに過ぎん。こうなると少々気の毒な感はあるが運動のためだから仕方がない。御免蒙つてたちまち前面へ馳け抜ける。君は情性で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進して行く。その鼻をなくりつける。この時蟻螂君は必ず羽根を広げたまま仆れる。その上をうんと前足で抑えて少しく休息する。それからまた放す。放しておいてまた抑える。七擒七縱孔明の軍略で攻めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなつたところを見すましてちよつと口へ啣えて振つて見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たがり動かないから、こつちの手で突つ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいやになつてから、最後の手段としてむしやむしや食つてしまふ。ついでだから蟻螂を食つた事のない人に話しておくが、蟻螂はあまり旨い物ではない。そうして滋養分も存外少ないようである。蟻螂狩りに次いで蟻取りと云う運動をやする。単に蟻と云つたところが同じ物ばかりではない。人間にも油野郎、みんみん野郎、おしいつくつく野郎があるごとく、蟻にも油蟻、みんみん、おしいつくつくがある。油蟻はしつこくて行かん。みんみんは横風で困る。ただ取つて面白いのはおしいつくつくである。これは夏の末にならないと出て来ない。八つ口の綻びから秋風が断わりなしに膚を撫でてはつくしよ風邪を引いたと云う頃蟻に尾を掉り立ててなく。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われくるくらいだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蟻取り運動と云う。ちよつと諸君に話しておくがいやくも蟻と名のつく以上は、地面の上に転がつてはおらん。地面の上に落ちてゐるものには必ず蟻がついてゐる。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んでゐる奴ではない。高い木の枝にとまつて、おしいつくつくと鳴いてゐる連中を捕えるのである。これもついでだから博学なる人間に聞きたいがあれはおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、その解釈次第によつては蟻の研究上少なからざる関係があると思う。人間の猫に優るところはこんなところにも存するので、人間の自ら誇る点もまたかような点にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えておいたらよかる。もっとも蟻取り運動上はどつちにしても差支えはない。ただ声をしるべに木を上つて行つて、先方が夢中になつて鳴いてゐるところをうんと捕えるばかりだ。これはもっとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事においてはあえて他の動物には劣ると思われない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には負けないつもりである。しかし木登りに至つては大分吾輩より巧者な奴がいる。本職の猿は別物として、猿の末孫たる人間にもなかなか悔るべからざる手合がある。元来が引力に逆らつての無理な事業だから出来なくても別段の恥辱とは思わんけれども、蟻取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どうかこうか登りはするものの、はたで見ると楽ではござらん。のみならず蟻は飛ぶものである。蟻螂君と違つて一たび飛んでしまつたが最後、せつかくの木登りも、木登らずと何の折むところなしと云う悲運に際会する事がないとも限らん。最後に時々蟻から小便をかけられる危険がある。あの小便がややとすると眼を覗つてしよぐつてくるよつだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばかりは垂れんように致したい。飛ぶ間に溺れるのとは一体どう云う心理的狀態の生理的器械に及ぼす影響たる。やはりせつなさのあまりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、ちよつと逃げ出す余裕を作るための方が知らん。そうすると烏賊の墨を吐き、ペランメーの刺物を見せ、主人が羅旬語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項となる。これも蟻学上忍かせにすべからざる問題である。充分研究すればこれだけで十分に博士論文の価値はある。それは余事だから、そのくらいにしてまた本題に帰る。蟻のもつとも集注するのは、集注がおかしければ集合だが、集合は陳腐だからやはり集注にする。蟻のもつとも集注するのは青桐である。漢名を梧桐と号するそつだ。ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかもその葉は皆團扇くらいな大きさであるから、彼等が生き重なる枝がまるで見えないくらい茂つてゐる。これがなはだ蟻取り運動の妨害になる。声はすれども姿は見えずと云う俗語はとくに吾輩のために作つた者ではなかるうかと怪しまれるくらいである。吾輩は仕方がないからただ声を知るべに行く。下から一間ばかりのところまで梧桐は注文通り二又になつてゐるから、ここで一休息して葉裏から蟻の所在地を探偵する。もっともここまで来るうちに、がさがと音を立てて、飛び出す気早な連中がゐる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点において蟻は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。漸々二又に到着する時分には満樹寂として片声をとどめざる事がある。かつてここまで登つて来て、どこをどう見廻わしても、耳をどう振つても蟻気がないので、出直すのも面倒だからしばらく休息しよう、又の上

に陣取つて第二の機会を待ち合せていたら、いつの間にか眠くなつて、つい黒甜郷裡に遊んだ。おやと思つて眼が醒めたら、二又の黒甜郷裡から庭の敷石の上へどたりと落ちていた。しかし大概は登る度に一つは取つて来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に啣えてしまわなくてはならぬ。だから下へ持つて来て吐き出す時は大方死んでゐる。いくらじやらしても引つ掻いても確然たる手筈がない。蟬取りの妙味はじつと忍んで行つておしい君が一生懸命に尻尾を延ばしたり縮ましたりしてゐるところを、わつと前足で抑える時がある。この時つづく君は悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は言語道断、実に蟬世界の偉観である。余はつづく君を抑える度にいつでも、つづく君に請求してこの美術的演芸を見せてもらつて、それがいやになるとご免を蒙つて口の内へ頬張つてしまつて、蟬による口の内へ這入つてまで演芸をつづけてゐるのがある。蟬取りの次にやる運動は松滑りである。これは長くかかると必要もないから、ちよつと述べておく。松滑りと云つと松を滑るように思ふかも知れんが、そうではないやはり木登りの一種である。ただ蟬取りは蟬を取るために登り、松滑りは、登る事を目的として登る。これが両者の差である。元来松は常盤にて最明寺の御馳走をしてから以来今日に至るまで、いやにこつこつしてゐる。従つて松の幹ほど滑らないものはない。手懸りのいいものはない。足懸りのいいものはない。換言すれば爪懸りのいいものはない。その爪懸りのいい幹へ一気呵成に駆け上る。駆け上つておいて駆け下がる。駆け下がるには二法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下りてくる。一は上つたままの姿勢をくずさず尾を下にして降りる。人間に問うがどつちがむずかしいか知つてるか。人間のあさはかな見では、どうせ降りるのだから下向に駆け下りる方が楽だと思つたろう。それが間違つてゐる。君等は義経が鶴越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下向きでなくさんだと思つたのだから。そう軽蔑するものではない。猫の爪はどつちへ向いて生えてゐると思つて。みんな後ろへ折れてゐる。それだから驚くように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく駆け登つたとする。すると吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔に留まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。しかし手放して落ちては、あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもつてこの自然の傾向を幾分かゆるめなければならぬ。これ即ち降りるのである。落ちるのと降りるのは、ちとり「#」と「リ」に傍点の差である。吾輩は松の木の上から落ちるのを遅くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとり「#」と「リ」に傍点の差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。即ちあるものをもつて落ちる速度に抵抗しなければならぬ。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆つて利用出来る訳である。従つて落ちるが変じて降りるになる。実に見易き道理である。しかるにまた身を逆にして義経流に松の木越をやつて見給え。爪はあつても役には立たぬ。ずるずる滑つて、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいてかせつかく降りようと企てた者が変化して落ちる事になる。この通り鶴越はむずかしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾輩のみである。それだから吾輩はこの運動を稱して松滑りと云うのである。最後に垣巡りについて一言する。主人の庭は竹垣をもつて四角にしきられてゐる。椽側と平行してゐる一片は八九間もある。左右は双方共四間に過ぎぬ。今吾輩の云つた垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないように一周するのである。これはやり損つ事もままあるが、首尾よく行くとお慰になる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちよつと休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので朝から昼までに三返やつて見たが、やるたびにうまくなる。ことに所々に面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分ほど巡りかけたから、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一問ばかり向うに列を止してとまつた。これは推参な奴だ。人の運動の妨をする、ことにこの鳥だが籍もない分在で、人の堀へとまるといふ法があるもんかと思つたから、通るんだお除きたまえと声をかけた。真先の鳥はこつちを見てにやにや笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて来たに違ない。吾輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶予を与えて、垣の上に立つてゐた。鳥は通称を勘左衛門と云うそだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても挨拶もしなれば、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなどと思つたら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！地面の上ならその分に捨てておくのではないが、いかにせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる余裕がない。といつてまた立留まつて三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一そう待つてゐる足がつかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけてゐる。従つて気に入ればいつまでも逗留するだろう。こつちはこれで四回目だたださ大分勞れてゐる。いよいよや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは保証が出来ぬのに、こんな黒装束が、三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れぬ人体である。口嘴が乙に尖がつて何だか天狗の啓し子のようなだ。どうせ質のいい奴でないには極つてゐる。退却が安全だろう、あまり深入りをして万一落ちてもしたらななおさら恥辱だ。と思つて左向をした鳥が阿呆と云つた。次のも真似をして阿呆と云つた。最後の奴は御鄭寧にも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに濃厚なる吾輩でもこれは看過出来ない。第一自己の邸内で鳥に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わりようがなからうと云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。諺にも鳥合の衆と云うから三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据えて、のそのそ歩き出す。鳥は知らん顔をして何か御互に話をしてゐる様子だ。いよいよ肝癪に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残念な事にはいくら怒つても、のそのそしかあるかれない。ようやくの事先鋒を去る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思つと、勘左衛門は申し合せてように、いきなり羽搏をして一二尺飛び上がった。その風が突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外して、すとんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にたまつて上から嘴を揃えて吾輩の顔を見下してゐる。凶太い奴だ。睨めつけてやつたが一向利がない。背を丸くして、少々唸つたが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向つて示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。考えて見ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱つてゐた。それが悪い。猫ならこのくらいやればたしかに応えるのだが生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦沙弥先生を圧倒しようと思つて、西行に銀製の吾輩を進呈するごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞をひるようなものである。機を見るに敏なる吾輩はとうてい駄目と見て取つたから、奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいよいよ度を過ぐすと行かぬ者で、からだ全体が何となく緊りがない、ぐたくたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ころもは、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。毛穴から染み

出す汗が、流れればと思うのに毛の根に膏のようにねばり付く。背中がむずむずする。汗でむずむずするのは判然と区別が出来る。口の届く所なら嘔む事も出来る、足の達する領分は引き掻く事も心得にあるが、脊髄の縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限でない。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行うか、二者その一を拵ばんと不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は愚なものであるから、猫なで声で、猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安にして考えれば猫なで声ではない、なでられ声である。よろしい、とにかく人間は愚なものであるから撫でられ声で膝の傍へ寄って行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、わが為すままに任せるのみか折々は頭さえ撫でてくれるものだ。しかるに近來吾輩の毛中のみと号する一種の寄生虫が繁殖したので滅多に寄り添うと、必ず頸筋を持って向うへ抛り出される。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ虫のために愛想をつかしたと見える。手を翻せば雨、手を覆せば雲とはこの事だ。高がのみの千疋や二千疋でよくまあこんな現金な真似が出来たものだ。人間世界を通じて行われる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。

自己の利益になる間は、すべからず人を愛すべし。

人間の取り扱が俄然豹変したので、いくら痒ゆくても人力を利用して行われる愛の法則の第一条にはこの方法によつて松皮摩擦術をやるよりほかに分別はない。しからばちよつとこすつて参ろうかとまた橡側から降りかけたが、いやこれも利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には脂がある。この脂たるすこぶる執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくっ付けようものなら、雷が鳴つてもバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しかもみならず五本の毛へこびりつくが早い、十本に蔓延する。十本やられたなと気が付くと、もう三十本引つ懸つて居る。吾輩は淡泊を愛する茶人的猫である。こんな、しつこい、毒悪な、ねちねちした、執念深い奴は大嫌だ。たとい天下の美猫といえどもご免蒙る。いわんや松脂においてをやだ。車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞と拵ぶところなき身分をもつて、この淡灰色の毛衣を大なしにするとは怪しからん。少しは考えて見るがいい。といったところできつなかなか考える気遣はない。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いか必ずべたりとおいでになるに極つて居る。こんな無分別な頓痴奇を相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず、引いて吾輩の毛並に関する訳だ。いくら、むずむずしたつて我慢するよりほかに致し方はない。しかしこの二方法共実行出来るとはなはだ心細い。今において一工夫しておかんとしまいにはむずむず、ねちねちの結果病気に罹るかも知れない。何か分別はあるまいかと、後と足を折つて思案したが、ふと思ひ出した事がある。うちの主人は時々手拭と石鹸をもつて飄然といずれへか出て行く事がある、二四十分して帰つたところを見ると彼の朦朧たる顔色が少しは活気を帯びて、晴れやかに見える。主人のような汚苦しい男にこのくらいな影響を与えるなら吾輩にはもう少し利目があるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これより色男になる必要はないようなものの、万一病気に罹つて一歳何が月で天折するような事があつては天下の蒼生に対して申し訳がない。聞いて見るとこれも人間のひま潰しに案出した洗湯なるものださうだ。どうせ人間の作つたものだから碌なものでないに極つて居るがこの際の事だから試しに這入つて見るのもよからう。やつて見て功験がなければよすまでの事だ。しかし人間が自己のために設備した浴場へ異類の猫を入れるだけの分量があるさうか。これが疑問である。主人がすまして這入るくらのところだから、よもや吾輩を断わる事もなからうけれども万一お気の毒様を食つような事があつては外聞がわるい。これは一先ず容子を見に行くに越した事はない。見た上でこれならよいと当りが付いたら、手拭を啣えて飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなものが屹立して先から薄い煙を吐いて居る。これ即ち洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏口から忍び込むのを卑怯とか未練とか云うが、あれは表からでなくては訪問する事が出来ぬものが嫉妬半分には離し立てる縁り言である。昔から利口な人は裏口から不意を襲う事にきまつて居る。紳士養成方の第二巻第一章の五ページにそう出ているさうだ。その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑してはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割つて八寸くらいにしたのが山のように積んであつて、その隣りには石炭が岡のように盛つてある。なぜ松薪が山のように、石炭が岡のようにかと聞く人があつても知れないが、別に意味も何もない、ただちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も米を食つたり、鳥を食つたり、肴を食つたり、獸を食つたりいろいろの悪も食いをしつくりしたあげくついに石炭まで食つようになつたのは不憫である。行き当りを見ると一問ほどの入口が明け放しになつて、中を覗くとがらがんのがあんと物静かである。その向側で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗湯はこの声の発する辺に相違ないと断定したから、松薪と石炭の間に出て来る谷あいを通り抜けて左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓があつて、そのそとに丸い小桶が三角形即ちピラミッドのごとく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不本意千万さうと、ひそかに小桶諸君の意を諒とした。小桶の南側は四五尺の間板が余つて、あたかも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御誂えの上等である。よろしいと云いながらひらりと身を躍らすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらつて居る。天下に何が面白いと云つて、未だ食わざるものを食ひ、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。諸君もうちの主人のごとく一週三度くらい、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮すならいいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がないなら、早く見るがいい。親の死目に逢わなくてもいいから、これだけは是非見物するがいい。世界広しといえどもこんな奇観はまたとあるまい。

何が奇観だ？ 何が奇観だつて吾輩はこれを口にすることを憚るほどの奇観だ。この硝子窓の中にうじゃうじゃ、があが騒いで居る人間はことごとく裸体である。台湾の生番である。二十世紀のアダムである。そもそも衣装の歴史を緝けば、長い事だからこれはトイフェルスドレック君に譲つて、緝くだけはやめてやるが、人間は全く服装で持つて居るのだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてポー・ナツシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいである。今を去る事六十年前これも英国の去る都て図案学校を設立した事がある。図案学校の事であるから、裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、かしこに陳列したのはよかつたが、いざ開校式を挙行する一段になつて当局者を初め学校の職員が大困却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人の方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思つて居た。人間としては着物をつけなければならぬ。生徒なきがごとく、兵隊の勇氣なきがごとく全くその本体を失して居る。いやしくも本体を失して居る以上は人間としては通用しない、獸類である。仮令模写模型にせよ獸類の人間と伍するのは貴女の品位を害する訳である。でありますから妾等は出席御断わり申すと云われた。そこで職員共は話せない連中だとは思つたが、何しる女は

東西両国を通じて一種の裝飾品である。米春にもなれん志願兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる化粧道具である。と云うところから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布を三十五反八分七買つて来て例の獣類の人間にことごとく着物をさせた。失礼があつてはならんと念を入れて顔まで着物をさせた。かようにしてようやくの事滞りなく式をすましたと云う話がある。そのくらい衣服は人間にとつて大切なものである。近頃は裸体画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生もあるがあれはあやまつてゐる。生れてから今日に至るまで一日も裸体になつた事がない吾輩から見ると、どうしても間違つてゐる。裸体は希臘、羅馬の遺風が文芸復興時代の淫靡の風に誘われてから流行りだしたもので、希臘人や、羅馬人は平常から裸体を見做れてゐたのだから、これをもつて風教上の利害の關係があるなどは毫も思い及ばなかつたのだから北歐は寒い所だ。日本でさえ裸で道中がなるものかと云うくらいだから独逸や英吉利で裸になつておれば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらないから着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服装の動物になる。一たび服装の動物となつた後に、突然裸体動物に出逢えば人間とは認めない、獣と思つ。それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸体画、裸体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫に劣る獣と認定していいのである。美しい？ 美しくても構わんから、美しい獣と見做せばいいのである。こつ云うと西洋婦人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事はない。聞くところによると彼等は胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわしてこれを礼服と稱してゐるさうだ。怪しからん事だ。十四世紀頃までは彼等の出立ちはいさか滑稽ではなかつた、やはり普通の人間の着るものを着ておつた。それがなぜこんな下等な藝術師流に転化してきたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとにかく彼等はかかる異様な風態をして夜間だけは得々たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩をすばめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまふのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考へてゐる。これで考へても彼等の礼服なるものは一種の頓珍漢的作用によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言ふ事が分る。それが口惜しければ日中でも肩と胸と腕を出してゐるがいい。裸体信者だつてその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、できない？ 出来ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのさうだ。現にこの不合理極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸けるではないか。その因縁を尋ねると何にもない。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事さうだ。西洋人は強いから無理でも馬鹿氣でいても真似なければやり切れないのさうだ。長いものには捲かれる、強いものには折れる、重いものには圧されると、それら「#」れる」に「傍点」尽しては氣が利かんではないか。氣が利かんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。學問といえどもその通りだがこれは服装に關係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物に邂逅したやうだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えなくなる訳だから構わんが、それでは人間自身が大に困却する事になるばかりだ。その昔し自然は人間を平等なるものに製造して世の中に抛り出した。だからどんな人間でも生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性が平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のままで生長してしかるべきさうだ。しかるに赤裸の一人が云うにはこゝろ誰も彼も同じでは勉強する甲斐がない。骨を折つた結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰が見てもおれだと言ふところが目につくようにしたい。それについては何か人が見てあつた魂消る物からだにつけて見たい。何か工夫はあるまいかと十年間考へてようやく猿股を發明してすぐさまこれを穿いて、どうだ恐れ入つたさうと威張つてそこいらを歩いた。これが今日の車夫の先祖である。単純なる猿股を發明するの十年の長日月を費やしたのはいささか異な感もあるが、それは今日から古代に溯つて身を蒙昧の世界に置いて断定した結論と云うもので、その当時にこれくらいの大發明はなかつたのである。デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」という三つ子にでも分るやうな真理を考へ出すのに十何年か懸つたさうだ。すべて考へ出す時には骨の折れるものであるから猿股の發明に十年を費やしたつて車夫の智慧には出来過ぎると云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて天下の大道を我物顔に横行濶歩するのを憎らしいと思つて負けん氣の化物が六年間工夫して羽織と云う無用の長物を發明した。すると猿股の勢力は頓に衰えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生薬屋、呉服屋は皆この大發明家の末流である。猿股期、羽織期の後に來るのが袴期である。これは、何だ羽織の癖にと癩癩を起した化物の考案になつたもので、昔の武士今の官員などは皆この種属である。かように化物共がわれもわれも異を銜い新を競つて、ついに燕の尾にかたどつた畸形まで出現したが、退いてその由来を案すると、何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝つてさまさまの新形となつたもので、おれは手前じやないぞと振れてあるく代りに被つてゐるのである。して見るとこの心理からして一大発見が出来る。それはほかでもない。自然は真空を忌むごとく、人間は平等を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌つてやむを得ず衣服を骨肉のごとくかようにつけ纏う今日において、この本質の一部分たる、これ等を打ちやつて、元の空阿弥の公平時代に歸るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名称を甘んじても歸る事は到底出来ない。歸つた連中を開明人の目から見れば化物である。仮令世界何億万人の人口を挙げて化物の域に引ずりおろしてこれなら平等さうだ、みんなが化物だから恥ずかしい事はないと安心してもやつぱり駄目である。世界が化物になつた翌日からまた化物の競争が始まる。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争をやる。赤裸は赤裸でどこまでも差別を立ててくる。この点から見ても衣服はとつてい脱ぐ事は出来ないものになつてゐる。

しかるに今吾輩が眼下に見下した人間の一団は、この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴もことごとく柵の上へ上げて、無遠慮にも本来の狂態を衆目環視の裡に露出して平々然と談笑を縦まにしている。吾輩が先刻一大奇觀と云つたのはこの事である。吾輩は文明の諸君子のためにここに謹んでその一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちゃごちゃして何にから記述していいか分らない。化物のやる事には規律がないから秩序立つた証明をするのに骨が折れる。まず湯槽から述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽というものさうだと思つておけばかきである。幅が三尺くらい、長は一問半もあるか、それを二つに仕切つて一つには白い湯が這入つてゐる。何でも薬湯とか号するのださうで、石灰を溶かし込んだよくな色に濁つてゐる。もつともたまた濁つてゐるのではない。膏ぎつて、重た氣に濁つてゐる。よく聞くと腐つて

見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を易えないのだそつだ。その隣りは普通一般の湯の由だがこれまたもつて透明、瑩徹などとは誓つて申されぬ。天水桶を攪き混ぜたくらいの価値はその色の上において充分あらわれている。これからが化物の記述だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突つ立っている若造が二人いる。立つたまま、向い合つて湯をさぶさぶ腹の上へかけている。いい慰みだ。双方共色の黒い点において愕然するところなきまでに発達している。この化物は大分逞ましいと見てみると、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫で廻しながら「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろ」と聞く。と金さんは「そりゃ胃さ、胃て云う奴は命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心に忠告を加える。「だつてこの左の方だぜ」左肺の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺だよ」「そりゃ、おらあまた胃はここいらかと思つた」と今度は腰の辺を叩いて見せると、金さんは「そりゃ痴気だあな」と云つた。ところへ二十五六の薄い髯を生やした男がどぶんと飛び込んだ。すると、からだに付いていた石鱈が垢と共に浮きあがる。鉄気のある水を透かして見た時のようにきらきらと光る。その隣りに頭の禿げた爺さんが五分刈を捕えて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているのみだ。「いやこつ年をとつては駄目さな。人間もやきが廻つちや若い者には叶わないよ。しかし湯だけは今でも熱いのでないと心持が悪くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。そのくらい元気がありや結構だ」「元気もないのさ。ただ病気をしないだけさ。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるも百二十までは受け合つ。御維新前牛込に曲淵と云う旗本があつて、そこにいた下男は百三十三だつたよ」「そいつは、よく生きたもんですね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘れてね。百までは覚えていましたけれど忘れてしまいましたと云つたよ。それでわしの知つていたのが百二十の時だつたが、それで死んだんじやない。それからどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽から上る。髯を生やしている男は雲母のようなものを自分の廻りに蒔き散らしながら独りでにやにや笑つていた。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違つて背中に模様画をほり付けている。岩見重太郎が大刀を振り翳して蟒を退治するところのようだが、惜しい事に未だ竣功の期に達せんので、蟒はどこにも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜けの気味に見える。飛び込みながら「笹棒に温るいや」と云つた。するとまた一人続いて乗り込んだのが「こりやどうも……もう少し熱くなくつちやあ」と顔をしかめながら熱いのを我慢する気色とも見えたが、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶をする。重太郎は「やあ」と云つたが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃんじゃんが好きだからね」「じゃんじゃんばかりじゃねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。どう云うもんか人に好かれねえ、どう云うものか、どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ。民さんなんざあ腰が低いんじやねえ、頭が高けえんだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれで一ぱし腕があるつもりだから、つまり自分の損だあな」「白銀町にも古い人が亡くなつてね、今じゃ桶屋の元さんと煉瓦屋の大將と親方ぐれえな者だあな。こちとらあこつしてここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分りやしねえ」「そつよ。しかしよくあれだけになつたよ」「うん。どう云うもんか人に好かれねえ。人が交際わねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見るとこれはまた非常な大入で、湯の中に人が這入つてると云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適當である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々たる物で、先刻から這入るものはあるが出る物は一人もない。こつ這入つた上に、一週間もとめておいたら湯もよこれるはずだと感心してなおよく槽の中を見渡すと、左の隅に圧しつけられて苦沙弥先生が真赤になつてすくんでいる。可哀そうに誰か路をあけて出してやればいいのにと思つのに誰も動きそうにもしなれば、主人も出ようとする気色も見せない。ただじつとして赤くなつていけるばかりである。これは苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯銭を活用しようとする精神からして、かように赤くなるのだから、早く上がらんと湯気にあがるがと主思ひの吾輩は窓の棚から少なからず心配した。すると主人の一軒置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「これはちと利き過ぎるようだ、どうも背中の方から熱い奴がじりじり湧いてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。「なあにこれがちよつどいい加減です。葉湯はこのくらいでないと利きません。わたしの国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利くんじやう」と手拭を畳んで凸頭をかいた男が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きますよ。何でもいいてえんだからね。豪気だあな」と云つたのは瘡せられた黄瓜のような色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少しは丈夫そうになれそうなものだ。「薬を入れ立てより、三日目か四日目がちよつどいいよつです。今日等は這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見ると、膨れ返つた男である。これは多分垢肥りだろつ。「飲んでもしきましようか」とどこからか知らないが黄色い声を出す者がある。「冷えた後などは一杯飲んで寝ると、奇体に小便に起きないから、まあやつて御覽なさい」と答えたのは、どの顔から出た声か分らない。

湯槽の方はこれくらいにして板間を見渡すと、いろいろわいるわいる絵にもならないアダムがずらりと並んで各勝手次第な姿勢で、勝手次第なところを洗つている。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けに寝て、高い明かり取を眺めているのと、腹這いになつて、溝の中を覗き込んでる面アダムである。これはよほど閑なアダムと見える。坊主が石壁を向いてしゃがんでると後ろから、小坊主がしきりに肩を叩いている。これは師弟の關係上三介の代理を務めるのである。本當の三介もいる。風邪を引いたと見えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小判形の桶からざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股に呉組の垢擦りを挟んでいる。こちらの方では小桶を慾張つて三つ抱え込んだ男が、隣りの人に石鱈を使えと云いながらしきりに長談議をしている。何だろつと聞いて見るとこんな事を言つていた。「鉄砲は外国から渡つたもんだね。昔は斬り合ひばかりさ。外国は卑怯だからね、それであんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえよつだ、やつぱり外国のようだ。和唐内の時にならなかつたね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が蝦夷から満洲へ渡つた時に、蝦夷の男で大変学のできる人がくつ付いて行つたてえ話したね。それでその義経のむすこが大明を攻めたんだが大明じゃ困るから、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借してくれと云うと、三代様がそいつを留めておいて帰さねえ。何と云つたつて。何でも何とか云つ使だ。それでその使を二年とめておいてしまいに長崎で女郎を見せたんだがね。その女郎に出来た子が和唐内さ。それから国へ帰つて見ると大明は国賊に亡ぼされてた……」何を云うのかさつぱり分らない。その後ろに二十五六の陰気な顔をした男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりにたでている。腫物か何かで苦しんでいると見える。その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋舌つてるのはこの近所の書生だろつ。そのまた次に妙な背中が見える。尻の中から寒竹を押し込んだように背骨の節が歴々と出ている。そうしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行儀よく並んでいる。その十六む

さしが赤く爛れて周囲に膿をもっているものもある。こう順々に書いてくると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際にはその一斑さえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をやり始めた者だと少々辟易していると入口の方に浅黄木綿の着物をきた七十ばかりの坊主がぬつと見られた。坊主は恭しくこれらの裸体の化物に一礼して「へい、どなた様も、毎日相変らずありがとう存じます。今日は少々御寒うございませうから、どうぞ御緩くり。どうぞ白い湯へ出たり這入ったりして、ゆるりと御あつたまり下さい。番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立てた。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「愛嬌ものだね。あれでなくては商買は出来ないよ」と大に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異なる爺さんに逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専門に観察する事にした。爺さんはやがて今上り立ての四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大変だと思つたか、わーと悲鳴を揚げてなき出す。爺さんは少しく本意の気味で「いや、御泣きか、なに？ 爺さんが悪い？ いや、これはこれは」と感嘆した。仕方がないものだからたちまち機鋒を転じて、小供の親に向つた。「や、これは源さん。今日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋へ這入つた泥棒は何と云う馬鹿な奴じゃの。あの戸の潜りの所を四角に切り破つての。そうしてお前の。何も取らずに行んだげな。御巡りさんか夜番でも見えたものであろう」と大に泥棒の無謀を憫笑したがまた一人を捉らまえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がつている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦しうにすくんでいた主人さえ記憶の中から消え去つた時突然流しと板の間の間で大きな声を出すものがある。見ると紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜けて大いなるのと、その濁つて聴き苦しいのは今日に始まつた事ではないが場所が場所だけに吾輩は少からず驚ろいた。これは正しく熱湯の中に長時間のあいだ我慢をして浸つておつたため逆上したに相違ないと咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病気の所為なら咎むる事もないが、彼は逆上しながらも充分本心を有しているに相違ない事は、何のためにこの法外の胸間声を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも足らぬ生意氣書生を相手に大人気もない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれの小桶に湯が這入つていかん」と怒鳴るのは無論主人である。物は見ようどうでもなるものだから、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。万人のうち一人くらいは高山彦九郎が山賊を叱つたようだからに解釈してくれるかも知れん。当人自身もそのつもりでやつた芝居かも分らんが、相手が山賊をもつて自らおらん以上は予期する結果は出て来ないに極つている。書生は後を振り返つて「僕は何もとからここにいたのです」とおとなしく答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならぬので、その態度と云い言語と云い、山賊として罵り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分つてはいるはずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻からこの両人は少年に似合わず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり併べたので、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものに見える。だから先方でおとなしい挨拶をしたも黙つて板の間へ上がりせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶へ汚ない水をびちやびちや跳ねかす奴があるか」と喝し去つた。吾輩もこの小僧を少々心憎く思つていたから、この時心中にはちよつと快哉を呼んだが、学校教員たる主人の言動としては穩かならぬ事と思つた。元来主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻見たようにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニバルがアルプス山を超える時に、路の真中に當つて大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな岩へ醋をかけて火を焚いて、柔かにしておいて、それから鋸でこの大岩を蒲鋒のように切つて滞りなく通行をした。そつた。主人のごとくこんな利目のある薬湯へ煮だるほど這入つても少しも功能のない男はやはり醋をかけて火炙りにするに限ると思つた。しからずんば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かかつたつて主人の頑固は癒りつこない。この湯槽に浮いているもの、この流しにごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論常規道をもつて律する訳にはいかん。何をしたらつて構わない。肺の所に胃が陣取つて、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない。普通の人類の生息する娑婆へ出たのだ、文明に必要な着物をきるのだ。従つて人間らしい行動をとらなければならぬはずである。今主人が踏んでおられるところは敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であつて、当人はこれから歡言愉色、円転滑脱の世界に逆戻りをしようとする間際である。その間際ですらかくのごとく頑固であるなら、この頑固は本人にとつて牢として抜くべからざる病気に相違ない。病気なら容易に矯正する事は出来まい。この病気を癒す方法は愚考によるとただ一つある。校長に依頼して免職して貰つ事即ちこれなり。免職になれば融通の利かぬ主人の事だからきつと路頭に迷うに極つて。路頭に迷う結果はのたれ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主人にとつて死の遠因になるのである。主人は好んで病氣をして喜んでいるけれど、死ぬのは大嫌である。死なない程度において病氣と云う一種の贅沢がしたいのである。それだからそんなに病氣をしていようと殺すぞと嚇かせば臆病なる主人の事だからびりびりと悸え上がるに相違ない。この悸え上がる時に病氣は奇麗に落ちるだらうと思つた。それでも落ちなければそれまでの事だ。

いかに馬鹿でも病氣でも主人に変わりはない。一飯君恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だつて主人の身の上を思わぬ事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になつたため、ついそちらに気が取られて、流しの方の觀察を怠つたつていると、突然白い湯槽の方面に向つて口々に罵る声が聞える。ここにも喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口に一寸の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のある脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折から初秋の日は暮るるになんなんと流しの上は天井まで一面の湯気が立て籠める。かの化物の癖の様がその間から朦朧と見える。熱い熱いと云う声が吾輩の耳を貫ぬいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。その声には黄なのも、青いのも、赤いのも、黒いのもあるが互に曇りかかつて一種名状すべからざる音響を浴場内に漲らす。ただ混雑と迷乱とを形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の役にも立たない声である。吾輩は茫然としてこの光景に魅入られたばかり立ちすくんでいた。やがてわーわーと云う声が混乱の極度に達して、これよりはいち歩も進めぬと云う点まで張り詰められた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群の中から一大長漢がぬつと立ち上がった。彼の身の丈を見ると他の先生方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみならず顔から鬚が生えているのか鬚の中に顔が同居しているのか分らない赤つらを反り返して、日盛りに破れ鐘をつくような声を出して「うめろうめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの紛々と纏れ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間には浴場全体がこの男一人になつたと思わるるほどである。超人だ。二丁チエのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁だ。と思つて見ていると湯槽の後ろで「おーい」と答えたものがある。おやとまたもそ

「どつちですか、そんな馬鹿気た事はどつてもいいじゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配している大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。比較研究と云うんだ」

「そつ」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どつちだか分つたんですか」

「重要な問題だからそつ急には分らんさ」と例の肴をむしゃむしゃ食う。ついでにその隣にある豚と芋のころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚でござんす」「ふん」と大軽蔑の調子をもって飲み込んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯を出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分赤くなつていらつしやいますよ」

「飲むとも 御前世界で一番長い字を知つてるか」

「ええ、前の関白太政大臣でしよつ」

「それは名前だ。長い字を知つてるか」

「字つて横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、 御酒はもういいでしよつ、これで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやるうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaionemesidonophrunicherata ヲニナ(字だ)」

「出鱈目でしよつ」

「出鱈目なものか、希臘語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴りだけ知つてるんだ。長く書くと六寸三分くらいにかけろ」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云つてるところがすぐぶる奇観である。もつとも今夜に限つて酒を無暗にのむ。平生なら猪口に二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。「二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が焼火箸のよつにほつて、さも苦しそつだ。それでもまだやめない。もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになつたら、いいでしよつ。苦しいばかりですわ」と苦々しい顔をする。

「なに苦しつてもこれから少し稽古するんだ。大町桂月が飲めと云つた」

「桂月つて何です」さすがの桂月も細君に逢つては一文の価値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極つているぞ」

「馬鹿をおつしやい。桂月だつて、梅月だつて、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしるといつた」

「なおわるいじゃありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくつて仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちゃあ大変ですよ」

「大変だと云つたらよしてやるから、その代りもう少し夫を大事にして、そうして晩に、もつと御馳走を食わせろ」
 「これが精一杯のところですよ」

「そつかしらん。それじゃ道楽は追つて金が這入り次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食つたようだ。吾輩はその夜豚肉三片と塩焼の頭を頂戴した。

八

垣巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結び繞らしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣の次郎ちゃんこと思つては誤解である。家賃は安いがそこは苦沙弥先生である。与つちゃんや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結んでおらぬ。この垣の外は五六間の空地であつて、その尽くるところに檜が蒼然と五六本併んでゐる。椽側から拜見すると、向うは茂つた森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を送る江湖の処士であるかのとき感がある。但し檜の枝は吹聴することく密生しておらんで、その間から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するにはよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな価値はある。名前に税はかからんから御互にえらうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち鉤の手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでゐる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を歩き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側を包んでゐるのだが、臥竜窟の主人は無論窟内の霊猫たる吾輩すらこのあき地には手こずつてゐる。南側に檜が幅を利かしてゐることく、北側には桐の木が七八本行列してゐる。もう周囲一尺くらいにびてゐるから下駄屋さえ連れてくればいい佃になるんだが、借家の悲しさには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。せんだつて学校の小使が来て枝を一本切つて行つたが、そのつぎに来た時は新しい桐の俎下駄を穿いて、この間の枝でこしらへましたと、聞きもせんに吹聴してゐた。ずるい奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いて罪ありと云う古語があるそうだが、これは桐を生やして銭なしと云つてもしかるべきもので、いわゆる宝の持ち腐れである。愚なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主の伝兵衛である。いないな、いないな、下駄屋はいないかなと桐の方で催促してゐるのに知らん面をして屋簷ばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に恨もないから彼の悪口をこのくらいにして、本題に戻つてこの空地が騒動の種であることく珍譚を紹介するが、決して主人にいつてはいけない。これぎりの話である。そもそもこの空地に關して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。ある「#」ある「に傍点」と云うと嘘をつくようである。実を云うとあつた「#」あつた「に傍点」のである。しかし話しは過去へ溯らんと原因が分からぬ。原因が分らないと、医者でも処方方に迷惑する。だからここへ引き越して来た当時からゆつくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心だつて金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる塀、垣、乃至は乱杭、逆茂木の類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向うに住居する人間もしくは動物の種類如何によつて決せらるる問題であらうと思つて従つてこの問題を決するためには勢い向う側に陣取つてゐる君子の性質を明かにせんければならぬ。人間だか動物だか分らない先に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君子で間違はない。梁上の君子など云つて泥棒さえ君子と云う世の中である。但しこの場合における君子は決して警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこなした者と見えて沢山いる。うじゃうじゃいる。落雲館と称する私立の中学校。八百の君子をいやが上に君子に養成するため毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思つと、それがそもその間違になる。その信用すべからざる事は群鶴館に鶴の下りざることく、臥竜窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のとき気違のある事を知つた以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないこと云う事がわかる訳だ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ宿りに来て見るがいい。

前申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと桐鼠に這入り込んで、話を、弁当を食つ、笹の上に寝転ぶ。いろいろの事をやつたものだ。それから弁当の死骸即ち竹の皮、古新聞、あるいは古草履、古下駄、ふるると云う名のつくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外平気に構えて、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎたのは、知らなかつたのか、知つても咎めんつもりであつたのか分らない。ところが彼等諸君子は学校で教育を受けるに従つて、だんだん君子らしくなつたものと見えて、次第に北側から南側の方面へ向けて蚕食を企だてて来た。蚕食と云う語が君子に不似合ならやめてもよらしい。但しほかに言葉がないのである。彼等は水草を追うて居る沙漠の住民のごとく、桐の木を去つて檜の方に進んで来た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる君子でなければこれほどの行動は取れんはずである。一兩日の後彼等の大胆はさらに一層の大を加えて大々胆となつた。教育の結果ほど恐ろしいものはない。彼等は単に座敷の正面に通るのみならず、この正面において歌をうたひだした。何と云う歌か忘れてしまつたが、決して三十一文字の類ではない、もつと活潑で、もつと俗耳に入り易い歌であつた。驚ろいたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼等君子の才芸に嘆服して覚えず耳を傾けたくらいである。しかし読者もご案内であるうが、嘆服と云う事と邪魔と云う事は時として両立する場合がある。この両者がこの際なら合して一となつたのは、今から考へて見ても返す返す残念である。主人も残念であつたろうが、やむを得ず書齋から飛び出して行つて、ここは君等の這入る所ではない、出給えと云つて、二三度追い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞かぬ。追い出されればすく這入る。這入れば活潑なる歌をうたつ。高声に談話をする。しかも君子の談話だから一風違つて、おめえ「#」おめえ「に傍点」だの知らねえ「#」知らねえ「に傍点」のとなつて、そんな言葉は御維新前は折助と雲助と三助の専門的知識に属してゐたそうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるそつだ。一般から軽蔑せられたる運動が、かくのごとく今日歓迎せらるるようになったのと同じ現象だと説明した人がある。主人はまた書齋から飛び出してこの君子流の言葉にもつとも堪能なる一人を捉まえて、なぜここへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ」#

心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っぱらいのように管を捲いてると、いつの間にか酒飲みのような心持になる、坐禅をして線香一本の間我慢してるとどことなく坊主らしい気分になれる。だから昔からインスピレーションを受けた有名の大家の所作を真似れば必ず逆上するに相違ない。聞くところによればユーゴーは快走船の上へ寝転んで文章の趣向を考えたそうだから、船へ乗って青空を見つめていれば必ず逆上受合である。スチーヴンソンは腹這に寝て小説を書いたそうだから、打つ伏しになって筆を持ってきつと血が逆かさに上つてくる。かようにいろいろいる人がいるの事を考え出したが、まだ誰も成功しない。まず今日のところでは人為的逆上は不可能の事となつてゐる。残念だが致し方がない。早晚随意にインスピレーションを起し得る時機の到来するは疑もない事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べ、小事件を逸するのは古来から歴史家の常に陥る弊竇である。主人の逆上も小事件に逢う度に一層の劇甚を加えて、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に帰して、世間からはよもやそれほどもなかつと見くびられるかも知れない。せつかく逆上して主人から天晴な逆上と謳われなくては張り合がないだろう。これから述べる事件は大小に係らず主人に取つて名譽な者ではない。事件その物が不名譽であるならば、責めて逆上なりとも、正銘の逆上であつて、決して人に劣るものでないと言ふ事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、十分の休暇、もしくは放課後に至つて熾に北側の空地に向つて砲火を浴びせかける。このダムダム弾は通称をボールと称えて、播粉木の大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発射するのだから、書齋に立て籠つてる主人に中る氣遣はない。敵といへども弾道あまり遠過ぎるのを自覚せん事はないのだけれど、そこが軍略である。旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功を奏したと云う話であれば、空地へこるがり落つるボールといへども相当の効果を収め得ぬ事はない。いわんや一発を送る度に総軍力を合せてわーと威嚇性大音声を発すにおいてをやである。主人は恐縮の結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない。煩悶の極そこいらを迷付いて血が逆さに上るはずである。敵の計はなかなか巧妙と云うてよらしい。昔し希臘にイスキラスと云う作家があつたそうだ。この男は学者作家に共通なる頭を有していたと云う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿と云う意味である。なぜ頭が禿げると云へば頭の營養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて大概は貧乏に極つてゐる。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿げてゐる。さてイスキラスも作家であるから自然の勢禿げなくてはならぬ。彼はつるつる然たる金柑頭を有しておつた。ところがある日の事、先生例の頭、頭に外行も普段着もないから例の頭に極つてゐるが、その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往來をあるいてゐた。これが間違ひのものである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木には風があたる、光る頭にも何かあたらなくてはならぬ。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷲が舞つてゐたが、見るとどこかで生捕つた一疋の鷲を爪の先に攫んだままである。鷲、スッポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけてゐる。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ぬ。海老の鬼殻焼はあるが鷲の子の甲羅煮は今でさえないから、当時は無論なかつたに極つてゐる。さすがの鷲も少々持て余した折柄、遙かの下界にぴかぴか光つた者がある。その時鷲はしめたと思つた。あの光つたものの上へ鷲の子を落したなら、甲羅は正しく砕けるに極つた。砕けたあとから舞い下りて中味を頂戴すれば訳はない。そうだそうだと親を定めて、かの鷲の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落した。生憎作家の頭の方が鷲の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちやめちやに砕けて有名なるイスキラスはここに無惨の最後を遂げた。それはそうと、解しかねるのは鷲の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落したのか、または禿岩と間違えて落したのか、解決しよう次第で、落雲館の敵とこの鷲とを比較する事も出来るし、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのごとく、また御歴々の学者のごとくぴかぴか光つてはおらん。しかし六畳敷にせよいやしくも書齋と号する一室を控えて、居眠りをしながらも、むずかしい書物の上へ顔を翳す以上は、学者作家の同類と見做さなければならぬ。そうすると主人の頭の禿げておらんのは、まだ禿げるべき資格がないからで、その内に禿げるだろつとは近々この頭の上に落ちかかるべき運命である。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目標して例のダムダム丸を集注するのは策のもつとも時宜に適したものと云わねばならぬ。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、主人の頭は畏怖と煩悶のため必ず營養の不足を訴えて、金柑とも菓缶とも銅壺とも変化するだろう。なお二週間の砲撃を食べば金柑は潰れるに相違ない。菓缶は潰れるに相違ない。銅壺ならびびが入るにきまつてゐる。この睹易き結果を予想せんで、あくまでも敵と戦闘を継続しようとするのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡をして虎になつた夢を見てゐた。主人に鶏肉を持つて来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持つて出る。迷亭が来たから、迷亭に雁が食いたい、雁鍋へ行つて逃らえて来いと云うと、蕪の香の物と、塩煎餅といつしよに召し上がりませと雁の味が致しますと例のごとく茶羅ッ鉢を云うから、大きな口をあいて、うーと唸つて嚇してやつたら、迷亭は奮くなつて山下の雁鍋は廃業致しましたがいかが取り計いませうかと云つた。それなら牛肉で勘弁するから早く西川へ行つて口スを一斤取つて来い、早くせんと責めから食ひ殺すぞと云つたら、迷亭は尻を端折つて馳け出した。吾輩は急いだからだが大きくなつたので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の帰るのを待ち受けてゐると、たちまち家中に響く大きな声かしてせつかくの牛も食わぬ間に夢がさめて吾に帰つた。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏してゐたと思ひのほかの主人が、いきなり後架から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴たから、おやと思つうち、たちまち庭下駄をつつかけて木戸から廻つて、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから何となく極りが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまつた。同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白いわいと、痛いのを我慢して、後を慕つて裏口へ出た。同時に主人がぬすつと「#ぬすつと」に傍点」と怒鳴る声が聞える、見ると制帽をつけた十八九になる倔強な奴が一人、四ツ目垣を向うへ乗り越えつた。やあ遅かつたと思つうち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとつて根拠地の方へ韋駄天のごとく逃げて行く。主人はぬすつと「#ぬすつと」に傍点」が大に成功したので、またもぬすつと

側に縦列を形づくった一隊がある。これは主人を戦闘線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわん」「わんわん」「わんわんわんわん」これから先は縦隊総がかりとなつて呐喊の声を揚げる。縦隊を少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を布いている。臥竜窟に面して一人の将官が播粉木の大きな奴を持つて控える。これと相對して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、播粉木のあとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突つ立っている。かくのごとく一直線にならんで向い合つて居るのが砲手である。ある人の説によるとこれはベースボールの練習であつて、決して戦闘準備ではないのだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文盲漢である。しかし聞くところによればこれは米國から輸入された遊戯で、今日中学程度以上の学校に行われる運動のうちでもっとも流行するものだぞうだ。米國は突飛な事ばかり考え出す國柄であるから、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたかも知れない。また米國人はこれをもつて真に一種の運動遊戯と心得ているのだらう。しかし純粹の遊戯でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼をもつて觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われない。物は云いようでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽を働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボールなる遊戯の下に戦争をなさんと制限されない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であらう。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボール即ち攻城的砲術である。これからダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線に布かれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の手に握つて播粉木の所有者に抛りつける。ダムダム弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の団子のようなものを御丁寧に皮でくるんで縫い合せたものである。前申す通りこの弾丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切つて飛んで行くと、向うに立つた一人が例の播粉木をやつと振り上げて、これを敲き返す。たまには敲き損なつた弾丸が流れてしまふ事もあるが、大概はポカんと大きな音を立てて弾ね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神経性胃弱なる主人の頭を潰すくらいは容易に出来る。砲手はこれだけで事足るのだが、その周囲附近には弥次馬兼援兵が雲霞のごとく付き添つて居る。ポカんと播粉木が団子に中るや否やわ、ばちばちばちと、わめく、手を拍つ、やれやれと云う。中つたらうと云う。これでも利かねえかと云う。恐れ入らねえかと云う。降参かと云う。これだけならまだしもであるが、敲き返された弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達せられぬのである。ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かない。そこで彼等はたま拾と称する一部隊を設けて落弾を拾つてくる。落ち場所がよければ拾うのに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそう容易くは戻つて来ない。だから平生ならなるべく労力を避けるため、拾い易い所へ打ち落すはずであるが、この際は反對に出る。目的が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入つて拾わなければならぬ。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。四つ目垣のうちで騒動すれば主人が怒り出さなければならぬ。しからずんば兜を脱いで降参しなければならぬ。苦心のあまり頭がだんだん赤けて来なければならぬ。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、照準誤らず、四つ目垣を通り越して桐の下葉を振り落して、第二の城壁即ち竹垣に命中した。随分大きな音である。ニュートンの運動律第一に曰くもし他の力を加ふるにらざれば、一度び動き出したる物体は均一の速度をもつて直線に動くものとす。もしこの律のみによつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭はこの時にイスキラスと運命を同じくしたのであらう。幸にしてニュートンは第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く直線の方角において起るものとす。これは何の事だか少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突き通して、障子を裂き破つて主人の頭を破壊しなかつたところをもつて見ると、ニュートンの御蔭に相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に入り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もつと左の方か」などと棒でもつて笹の葉を敲き廻る音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こつそり這入つて、こつそり拾つては肝心の目的が達せられぬ。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾以上に大事である。この時のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹垣に中つた音も知つて居る。中つた場所も分つて居る、しかしてその落ちた地面も心得ている。だからおとなしく拾へば、いくらでもおとなしく拾える。ライプニッツの定義によると空間は出来得べき同現象の秩序である。いるにはほへと毎日毎日ボールを人の邸内に抛り込む者の眼に映する空間はたしかにこの排列に慣れている。一眼見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒ぎ立てるのは必竟するに主人に戦争を挑む策略である。

こうなつてはいかに消極的なる主人といえども応戦しなければならぬ。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳け出した。轟然として敵の一人を生捕つた。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。髯の生えている主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで沢山だと思つたのだらう。詫び入るのを無理に引つ張つて椽側の前まで連れて来た。ここにちよつと敵の策略について一言する必要がある。敵は主人が昨日の権幕を見てこの様子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時万一逃げ損じて大僧がつまつては事面倒になる。こは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやつて危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供をつらまえて愚愚図理窟を捏ね廻したつて、落雲館の名譽には関係しない、こんなものを大人気もなく相手にする主人の恥辱になるばかりだ。敵の考はこうであつた。これが普通の人間の考で至極もつともなところである。ただ敵は相手が普通の人間でないと言ふ事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらい常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境いのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のごとく相手にならぬ中学一年生を生捕つて戦争の人間とするほどの了見でなくては逆上家の仲間入りは出来ないのである。可哀そうなのは捕虜である。単に上級生の命令によつて玉拾いなる雑兵の役を勤めたるころ、運わるく非常識の敵將、逆上の天才に追い詰められて、垣越える間もあらばこそ、庭前に引き据え

られた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣もちよつ着もつけておらん。白シャツの腕をまくって、腕組をしたのがある。綿ネルの洗いざらしを申し訳に背中だけへ乗せているのがある。そうかと思うと白の帆布綿に黒い縁をとって胸の真中に花文字を、同じ色に縫いつけた洒落者もある。いずれも一騎当千の猛将と見えて、丹波の国は笹山から昨夜着し立てでござると云わぬばかりに、黒く逞しく筋肉が発達している。中学などへ入れて学問をさせるのは惜しいものだ。漁師か船頭にしたら定めし国家のためになるだろうと思われぬくらいである。彼等は申し合せたごとく、素足に股引を高くまくって、近火の手伝にでも行きそうな風体に見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然として一言も発しない。主人も口を開かない。しばらくの間双方共睨めくらをしてるなかにちよつと殺気がある。

「貴様等はぬすつとつ」#「ぬすつとつ」に傍点「か」と主人は尋問した。大気「#「炎」に「鮎」の右部分が「へん」に付く、337-14」である。奥歯で嚙み潰した癩癩玉が炎となつて鼻の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく怒つて見える。越後獅子の鼻は人間が怒つた時の恰好を形どつて作つたものである。それでなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章のついている帽子を被っています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものだから」

「なぜボールを飛び込みました」

「つい飛び込んだんです」

「怪しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入するのを、そう容易く許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を顧みながら、おい「うら」らと云つ。

埼玉生れの御三が襖をあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行って誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さつきからの事件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りもせず、やにや笑っている。主人はこれでも大戦争をしているつもりである。逆上の敏腕を大に振っているつもりである。しかるところ自分の召し使たる当然こつちの肩を持つべきものが、真面目な態度をもって事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

「ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか、「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲み込めないのである。小使でも引張つて来はせんかと心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使ったが、「本当に御校の生徒でしょうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前にならんでいる勇士を一通り見廻わした上、もとのごとく瞳を主人の方にかえして、下のごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事のないように始終訓戒を加えておきますが……どうも困つたもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もないと見えて何とも云うものはない。おとなしく庭の隅にかたまつて羊の群が雪に逢つたように控えている。

「丸が這入るのも仕方がないでしょう。こうして学校の隣りに住んでいる以上は、時々ボールも飛んで来ましよう。しかし……あまり乱暴ですからな。仮令垣を乗り越えるにしても知れないように、そつと拾つて行くなら、まだ勸弁のしようもありますが……」

「ごもつとでも、よく注意は致しますが何分多人数の事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御断りをして取らなければいけません。いいか。広い学校の事ですからどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運動は教育上必要なものでありますから、どうもこれを禁ずる訳には参りかねるの。これを許すといつ御迷惑になるような事が出来ませんが、これは是非御容赦を願いたいと思ひます。その代り向後はきつと表門から廻つて御断りを致した上で取らせますから」

「いや、その事が分かればよろしいです。球はいくら御投げになつても差支へないです。表からきてちよつと断つて下されば構いません。ではこの生徒はあなたに御引き渡し申しますからお連れ帰りを願ひます。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾の挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれで一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑うなら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。吾輩は主人の「# 主人の」に「傍点」大事件を写したので、そんな人の「# 主人の」に「傍点」大事件を記したのではない。尻が切れて強弩の末勢だなどと悪口するものがあるなら、これが主人の特色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまえて未だ稚氣を免がれずと云つて居る。

吾輩はすでに小事件を叙し了り、今また大事件を述べ了つたから、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。すべて吾輩の書く事は、口から出任せのいい加減と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうっかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出して五行ごとに一度に読むのなどと云う無礼を演じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むことに薔薇の水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買つて来て、友人の御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはしない事に致したい。これから述べるのは、吾輩自ら余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつたらんに極つて居る、読まんでもよかるうなどと思つて飛んだ後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がるうと云う角で金田の旦那と鈴木藤さんがしきりに立ちながら話をしている。金田君は車で自宅へ帰るところ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で兩人がばつたりと出逢つたのである。近來は金田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて見ると、何となく御懐かしい。鈴木にも久々だから余所ながら拝顔の榮を得ておこつ。こう決心してのそのそ御両君の佇立しておられる傍近く歩み寄つて見ると、自然両君の談話が耳に入る。これは吾輩の罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金田君は探偵さへ付けて主人の動静を窺がうくらいの程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の談話を拝聴したつて怒らるる氣遣はあるまい。もし怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたとござるので、ちよつとよい所で御目にかかりました」と藤さんは鄭寧に頭をびよこつかせせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかつた」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましよう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。いつが宜しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。それじゃせつかくだから頼もつか」

「どつか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞がわるくってね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ とか何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。こないだから大分弱らしているんだが、やっぱり頑張っているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う觀念の乏しい奴ですから無暗に我慢を張るんでしよう。昔からああ云う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんですから度し難いです」

「あはははほんとに度し難い。いろいろ手を易え品を易えてやって見るんだがね。とうとうしまいに学校の生徒にやられた」

「そいつは妙案ですな。利目がございましたか」

「これにやあ、奴も大分困つたようだ。もう遠からず落城するに極っている」

「そりゃ結構です。いくら威張つても多勢に無勢ですからな」

「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大分弱つたようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来てもらおうと云うのさ」

「はあ、そうですか。なに訳はありません。すぐ行つて見ましょう。容子は帰りがけに御報知を致す事にして。面白いでしょう、あの頑固なのが意氣銷沈しているところは、きつと見物ですよ」

「ああ、それじゃ帰りに御寄り、待つているから」

「それでは御免蒙ります」

おや今度もまた魂胆だ、なるほど実業家の勢力はえらいものだ、石炭の燃殻のような主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥るのも皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものはたしかに金である。この金の功力を心得て、この金の威光を自由に發揮するものは実業家諸君をおいてほかに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今までわからずやの窮措大の家に養なわれて実業家の御利益を知らなかつたのは、我ながら不覚である。それにしても冥頑不靈の主人も今度は少し悟らずばなるまい。これでも冥頑不靈で押し通す見たと危ない。主人のもつとも貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。その模様で彼の悟り具合も自から分明になる。愚図愚図してはおられん、猫だつて主人の事だから大に心配になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当り障りのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだが、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありませんか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配して、何を……」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑つのも毒だからな。無暗に笑つと死ぬ事があるぜ」

「冗談云つちやいけない。笑つ門には福来るさ」

「昔し希臘にクリシッパスと云う哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえ、そいつは不思議だね、しかしそりゃ昔の事だから……」

「昔しだつて今だつて変りがあるものか。驢馬が銀の井から無花果を食つのを見て、おかしくつてたまらなくなつて無暗に笑つたんだ。ところがどうしても笑いがとまらない。とつと笑い死にに死んだんだあね」

「はははしかしそんなに留め度もなく笑わなくつてもいいさ。少し笑つ　適宜に、　そうするといいい心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらとあく、客来かと思つとそつでない。

「ちよつとボールが這入りましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云つ学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のつて。碌々勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「八八八大分怒つたね。何か癪に障る事でも有るのかい」

「あるのないので、朝から晩まで癪に障り続けた」

「そんなに癪に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒つたつて仕方がない。なあに小供だあね、打ちやっておけばいいさ」

「君はよかろうが僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやった」

「それは面白かつたね。恐れ入つたらう」

「うん」

「この時また門口をあけて、ちよつとボールが這入りましたから取らして下さい」と云つ声がある。

「いや大分来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうか、分つた」

「何が分つたんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六回目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするつたつて、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固にしていなくてもよかるう。人間は角があると世の中を転がって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろごろこへでも苦なしに行けるが四角なものはころがるに骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じゃなし、そう自分の思うように人はならないさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちゃ損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐つて人を使ひさえすればすむんだから。多勢に無勢どつせ、叶わないのは知れているさ。頑固もいいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障ったり、毎日の業務に煩を及ぼしたり、とどのつまりが骨折り損の草臥儲けだからね」

「ご免なさい。今ちょっとボールが飛びましたから、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」

「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真赤になっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思つたから、それじゃ失敬と来たまえと帰つて行く。

入れ代つてやつて来たのが甘木先生である。逆上家が自分で逆上家だと名乗る者は昔から例が少ない、これは少々変だなと覺つた時は逆上の峠はもう越している。主人の逆上は昨日の重大事件の際に最高度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たるに係らず、どうかこうか始末がついたのでその晩書齋でつくづく考えて見ると少し変だといふ気が付いた。もつとも落雲館が変なのか、自分が変なのか疑を存する余地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら中学校の隣に居を構えたつて、かくのごとく年が年中肝癰を起しつづけはちと変だと気が付いた。変であつて見ればどうかしななければならぬ。どうするつたつて仕方がない、やはり医者も飲んで肝癰の源に賄賂でも使つて慰撫するよりほかに道はない。こう覺つたから平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を受けて見ようと言ふ量見を起したのである。賢か愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上に気が付いただけは殊勝の志、奇特の心得と云わなければならぬ。甘木先生は例のごとくにここに落ちて落つき払つて、「どうです」と云う。医者は大抵どうですと云うに極まつてる。吾輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利くものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者だから、別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と穏かに答えた。

「私の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、癒りません、だんだん利きます。今でももとより大分よくなっています」

「そつですか」

「やはり肝癰が起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癰を起します」

「運動でも、少しなさつたらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返つたものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来るって書いてあったんですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやってみましょうか。誰でも懸らなければならん理窟のものです。あなたさえ善ければ懸けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私もとうから懸かって見たいと思っただんです。しかし懸かりきりで眼が覚めないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらる事となった。吾輩は今までこんな事を見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ始めた。その方法を見てみると、両眼の上瞼を上から下へと撫でて、主人がすでに眼を眠っているにも係らず、しきりに同じ方向へくせを付けたがっている。しばらくすると先生は主人に向かって、「こつやつて、瞼を撫でてみると、だんだん眼が重たくなるでしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなりますな」と答える。先生はなお同じように撫でおろし、撫でおろし、「だんだん重くなりますよ、ようござんすか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は、「さあもう開きませぬ」と云われた。「可哀想に主人の眼はとうとう潰れてしまった。もう開かないのですか」「ええもうあきませぬ」主人は黙然として目を眠っている。吾輩は主人がもう盲目になったものと思ひ込んでしまった。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覧なさい。とうていあけないから」と云われる。「そうですか」と云うが早いか主人は普通の通り両眼を開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりませぬ」と云うと甘木先生も同じく笑いながら「ええ、懸りませぬ」と云う。催眠術はついに不成功に了る。甘木先生も帰る。

その次に来たのが 主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘のようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言でも記述するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先刻申す通り大事件の余瀾を描きつつある。しかしてこの珍客はこの余瀾を描くに方って逸すべからざる材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、山羊のような鬚を生やしている四十前後の男と云えばよかる。迷亭の美学者たるに對して、吾輩はこの男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と對話する時の様子を拝見しているといかにも哲学者らしく思われるからである。これも昔しの同窓と見えて兩人共応対振りには至極打ち解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚鯨のようにふわふわしているね。せんだって友人を連れて一面識もない華族の門前を通行した時、ちょっと寄って茶でも飲んで行こうと云って引つ張り込んだぞつだが随分呑気だね」

「それでどうした」

「どうしたか聞いても見なかったが、そうさ、まあ天稟の奇人だろう、その代り考も何も全く金魚鯨だ。鈴木か、あれがくるのかい、へえ、あれは理窟はわからんが世間的には利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがないから落ちつきがなくて駄目だ。円滑円滑と云うが、円滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚鯨ならあれは藁で括った弱弱だね。ただわるく滑かでぶるぶる振えているばかりだ」

主人はこの奇警な比喻を聞いて、大に感心したものらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは まあ自然薯くらいなところだろう。長くなって泥の中に埋ってるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨ましいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。別に羨まれるに足るほどの事もない。ただありがたい事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食つてゐるから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癪が起つてたまらん。どつちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、そう自分のように人にまなれと勧めたつて、なれるものではない。箸は人と同じように持たんと飯が食いにくい、自分の麵麩は自分の勝手に切るのが一番都合がいいよ。上手な仕立屋で着物をこしらえれば、着たてから、からだに合ったのを持つてくるが、下手の裁縫屋に誂えたら当分は我慢しないと駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着ているうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてくるから。今の世に合つように上等な両親が手際よく生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし出来損こなつたら世の中に合わないで我慢するか、または世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はないさ」

「しかし僕なんか、いつまで立つても合ひそうにないぜ、心細いね」

「あまり合わない背広を無理にきると綻びる。喧嘩をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だつてやつた事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくつても怒つておれば喧嘩だらう」

「なるほど一人喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになつた」

「そんならよすや」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今戸焼の狸から、ぴん助、きしゃごそのほかあらゆる不平を挙げて滔々と哲学者の前に述べ立てた。哲学者先生はだまつて聞いていたが、ようやく口を開いて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしゃごが何を云つたつて知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だつて談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西洋人より昔の日本人の方がよほどえらいと思つ。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃大分流行るが、あれは大なる欠点を持つてゐるよ。第一積極的と云つたつて際限がない話だ。いつまで積極的になり通したつて、満足と云う域とか完全と云う境にいけるものじゃない。向に槍があるだらう。あれが目障りになるから取り払う。とその向うの下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その次の家が癪に觸る。どこまで行つても際限のない話さ。西洋人の遣り口はみんなこれさ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて満足したものは一人もないんだよ。人が氣に喰わん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法庭へ訴える、法庭で勝つ、それで落着くと思つのは間違さ。心の落着は死ぬまで焦つたつて片付く事があるものか。寡人政治がいかんから、代議政体にする。代議政体がいかにから、また何かにしたくなる。川が生意氣だつて橋をかける、山が氣に喰わんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鉄道を布く。それで永久満足が出来るものじゃない。さればと云つて人間だものどこまで積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり満足で一生をくらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と大に違つところは、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云う一大仮定の下に發達してゐるのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人のようにこの關係を改良して落ちつきをとろつとするのではない。親子の關係は在來のままどうい動かす事が出来るものとして、その關係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の區別もその通り、自然その物を觀るのもその通り。山があつて隣国へ行かねければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。禅家でも儒家でもきつと根本的にこの問題をつらまえる。いくら自分がえらくも世の中はとうてい意のごくなるものではない、落日を回らす事も、加茂川を逆に流す事も出来ない。ただ出来るものは自分の心だけだからね。心さえ自由にすれば修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なものではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうなものだ。ぴん助なんか愚な事を云つたらこの馬鹿野郎とすましておれば仔細なからう。何でも昔の坊主は人に斬り付けられた時電光影裏に香風を斬るとか、何とか洒落れた事を云つたと云う話だ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出来るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義ばかりがいいと思つのは少々誤まつてゐるよ。現に君がいくら積極主義に働いたつて、生徒が君をひやかしかしにくるのをどうする事も出来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもなければ以上は、どんなに積極的に出たつたて勝つてこないよ。もし積極的になるとすれば金の問題になる。多勢に無勢の問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆を恃む小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたつた一人で積極的喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰つたあとで書齋へ這入つて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木藤さんは金と衆とに従えと主人に教えたのである。甘木先生は催眠術で神経を沈めると助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ると説法したのである。主人がいずれを扱ふかは主人の随意である。ただこのままでは通されないに極まっている。

九

主人は痘痕面である。御維新前はあばた「#」あばた「」に傍点「」も大分流行つたものだそうだが日英同盟の今日から見ると、こんな顔はいささか時候後れの感がある。あばた「#」あばた「」に傍点「」の衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くその迹を絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫といえども毫も疑を挟む余地のないほどの名論である。現今地球上にあばた「」面を有して生息している人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区域内において打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたつた一人ある。しかしてその一人が即ち主人である。はなはだ気の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空気を呼吸しているのだらう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばた「#」あばた「」に傍点「」が二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて頑として動かぬのは自慢にならんのみか、かえつてあばた「#」あばた「」に傍点「」の体面に関する訳だ。出来る事なら今のうち取り払つたらよさそうなものだ。あばた「#」あばた「」に傍点「」自身だつて心細いに違ひない。それとも党勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せよと云う意気込みで、あんなに横風に顔一面を占領しているのか知らん。そうするとこのあばた「#」あばた「」に傍点「」は決して輕蔑の意をもつて視るべきものでない。滔々たる流俗に抗する万古不磨の穴の集合体であつて、大に吾人の尊敬に値する凸凹と云つて宜しい。ただきたならしいのが欠点である。

主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯と云う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞うときには必ずか「#」か「」に傍点「」に乗つてそりそり参られたそうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の代になつたら、か「#」か「」に傍点「」がたちまち人力車に變じた。だから養子が死んでそのまた養子が跡を継いだら葛根湯がアンチピリンに化けるかも知れない。か「#」か「」に傍点「」に乗つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですらあまり見つともいいものでは無かつた。こんな真似をして澄していたものは旧弊な亡者と、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばた「#」あばた「」に傍点「」もその振わざる事においては宗伯老のか「#」か「」に傍点「」と一般で、はたから見ると気の毒なくらいだが、漢法医にも劣らざる頑固な主人は依然として孤城落日のあばた「#」あばた「」に傍点「」を天下に曝露しつゝ毎日登校してリードルを教えている。

かくのごとき前世の紀念を満面に刻して教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大なる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばた「#」あばた「」に傍点「」の顔面に及ぼす影響」と云う大問題を造作もなく解釈して、不言の間にその答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間が教師として存在しなくなつた暁には彼等生徒はこの問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳けつけて、吾人がミイラによつて埃及人を髣髴すると同程度の労力を費やさねばならぬ。この点から見ると主人の痘痕も冥々の裡に妙な功徳を施している。

もつとも主人はこの功徳を施すために顔一面に痘瘡を種え付けたのではない。これでも実は種え痘瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思つたのが、いつの間にか顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事のように色気もなにもなかつたものだから、痒い痒いと云いながら無暗に顔中引き掻いたのである。ちよつど噴火山が破裂してラヴァが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向つて痘瘡をせぬうちは玉のような男子であつたと云つてゐる。浅草の観音様で西洋人が振り反つて見たくらい奇麗だつたなどと自慢する事さえある。なるほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないのが残念である。

いくら功徳になつても訓戒になつても、きたない者はやつぱりきたないものだから、物心がついて以来と云うもの主人は大にあばた「#」あばた「」に傍点「」について心配し出して、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰そうとした。ところが宗伯老のか「#」か「」に傍点「」と違つて、いやになつたからと云つてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残つてゐる。この歴然が多少気にかかると見えて、主人は往來をあるく度毎にあばた「#」あばた「」に傍点「」面を勘定してあるくそうだ。今日何人あばた「#」あばた「」に傍点「」に出逢つて、その主は男か女か、その場所は小川町の勤工場であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあばた「#」あばた「」に傍点「」に関する智識においては決して誰にも譲るまいと確信している。せんだつてある洋行帰りの友人が来た折なぞは、「君西洋人にはあばた「#」あばた「」に傍点「」があるかな」と聞いたくらいだ。するとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多にないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返した。友人は気のない顔で「あつてももぞ食か立ん坊だよ。教育のある人にはないようだ」と答へたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違つた」と云つた。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つた主人はその後書齋に立て籠つてしきりに何か考へてゐる。彼の忠告を容れて静坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が気の小さな人間の癖に、ああ陰気な懐手ばかりしてゐる碌な結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者から喇叭節でも習つた方が遙かにましだとまでは気が付いたが、あんな偏屈な男はとうてい猫の忠告などを聴く氣遣はないから、まあ勝手にさせたらよからうと五六日は近寄りもせず暮らした。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こつして見ると大変自立つ。やつぱりまともにも日の向いてる方が平に見える。奇体な物だなあ」と大分感心した様子であつた。それから右の手をうんと伸して、出来るだけ鏡を遠距離に持つて行つて静かに熟視している。「このくらい離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかん。顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟つたようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度にこの中心に向つてくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な容貌が出来上つたと思つたら「いやこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々やめてしまつた。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不審の体で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せた。右の人指しゆびで小鼻を撫でて、撫でた指の頭を机の上にあつた吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸い取られた鼻の膏が丸く紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を転じてぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗に云うべつかんこつ「#べつかんこつ」に「傍点」を見事にやつて退けた。あばた「#あばた」に「傍点」を研究しているのか、鏡と睨め競をしているのかその辺は少々不明である。氣の多い主人の事だから見ていられるうちにいろいろになると思える。それどころではない。もし善意をもつて蒞弱問答的に解釈してやれば主人は見性自覚の方便としてかように鏡を相手にいろいろな仕事をしていくのかもしれない。すべて人間の研究と云うものは自己を研究するのである。天地と云い山川と云い日月と云い星辰と云うも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を措いて他に研究すべき事項は誰にも見出し得ぬ訳だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなつてしまふ。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくる者はない。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだから古来の豪傑はみんな自力で豪傑になつた。人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代理に牛肉を喰わして、堅いか柔かいか判断の出来る訳だ。朝に法を聴き、夕に道を聴き、梧桐灯下に書巻を手にするのは皆この自証を挑撥するの方便の具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他は弁ずる道のうち、乃至は五車にあまる靈紙堆裏に自己が存在する所以がない。あれば自己の幽霊である。もつともある場合において幽霊は無霊より優るかも知れない。影を追えば本体に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひねくつて見ているなら大分話せる男だ。エビクタラスなどを鵜呑にして学者ぶるよりも遙かにましだと思つた。

鏡は己惚の醸造器であるごとく、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虚栄の念をもつてこれに對する時はこれほど愚物を煽動する道具はない。昔から増上慢をもつて己を害し他を「#「戈」に「片へん」が付く、*sois*」つた事蹟の三分の二はたしかに鏡の所作である。仏国革命の當時物好きな御医者さんが改良首きり器械を發明して飛んだ罪をつくつたように、始めて鏡をこしらへた人も定めし寢覺のわるい事だろう。しかし自分に愛想の尽きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど薬になる事はない。妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で候と反りかえつて今日まで暮らされたものだと思つてきまつている。そこへ気がついた時が人間の生涯中もつともありがたい期節である。自分で自分の馬鹿を承知しているほど尊とく見える事はない。この自覚性馬鹿の前にはあらゆるところが恐れ入つて頭を下げていられる。主人は鏡を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然として吾を軽侮嘲笑しているつもりでも、こちらから見るとその昂然たるところが恐れ入つて頭を下げていられる。主人は鏡を見て己れの愚を悟るほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられる痘痕の銘くらは公平に読み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の賤しきを會得する階梯にもなる。たのもしい男だ。これも哲學者からやり込められた結果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をつかっている。それとも知らぬ主人は思つて存分あかんべえ「#あかんべえ」に「傍点」をしたあとで「大分充血しているよつだ。やつぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、人さし指の横つらでぐいぐい充血した臉をこすり始めた。大方痒いのだろうけれども、たださえあんなに赤くなつていっているものを、こつ擦つてはたまるまい。遠からぬうちに塩鯛の眼玉のごとく腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて鏡に向つたところを見ると、果せるかなどんよりとして北国の冬空のように曇つていた。もつとも平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞を用いると混沌として黒眼と白眼が割判しないくらい漠然としている。彼の精神が朦朧として不得要領底に一貫しているごとく、彼の眼も曖々然味々前として長えに眼窩の奥に漂うている。これは胎毒のためだとも云つし、あるいは疱瘡の余波だとも解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になつた事もあるそうだが、せつかく母親の丹精も、あるにその甲斐あらばこそ、今日まで生れた当時のままでぼんやりしている。吾輩ひそかに思つてこの状態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼玉がかように晦澁濁濁の悲境に彷徨しているのは、とりも直さず彼の頭脳が不透不明の實質から構成されていて、その作用が暗愴溟濛の極に達しているから、自然とこれが形体の上にあらわれて、知らぬ母親にいらぬ心配を掛けたんだろう。煙たつて火あるを知り、まなこ濁つて愚なるを証す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。

今度は髭をねじり始めた。元来から行儀のよくない髭でみんな思ひ思ひの姿勢をとつて生えている。いくら個人主義が流行る世の中だつて、こつ町々に我儘を尽くされては持主の迷惑はさこそと思ひやられる、主人もここに鑑みるところあつて近頃はだに訓練を与えて、出来る限り系統的に按排するように尽力している。その熱心の功果は空しくならずして昨今ようやく歩調が少しとのうようになつて来た。今までは髭が生えておつたのであるが、この頃は髭を生やしているのだと自慢するくらいになつた。熱心は成効の度に応じて鼓舞せられるものであるから、吾が髭の前途有望なりと見てとつて主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髭に向つて鞭撻を加える。彼のアムビションは独逸皇帝陛下のように、向上の念の熾な髭を蓄えるにある。それだから毛孔が横向であるつとも、下向であるつとも聊か頓着なく十把一とからげに握つては、上の方へ引つ張り上げる。髭もさぞかし難儀であるつ、所有主たる主人すら時々痛い事もある。がそこが訓練である。否でも応でもさかかき扱上げる。門外漢から見ると氣の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の本性を撓めて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので毫も非難すべき理由はない。

主人が満腔の熱誠をもつて鬚を訓練していると、台所から多角性の御三が郵便が参りましたと、例のごとく赤い手をぬつと書齋の中へ出した。右手に鬚をつかみ、左手に鏡を持った主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字の尾に逆か立ちを命じたような鬚を見るや否や御多角はいきなり台所へ引き戻して、八八八八と御釜の蓋へ身をもたして笑った。主人は平気なものである。悠々と鏡をおろして郵便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめしい文字が並べてある。読んで見ると

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

拜啓愈御多祥奉賀候回顧すれば日露の戦役は連戦連勝の勢に乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裡に凱歌を奏し国民の歡喜何ものか之に若かん曩に宣戦の大詔煥発せらるるや義勇公に奉じたる将士は久しく万里の異境に在りて克く寒暑の苦難を忍び一意戦闘に従事し命を国家に捧げたるの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而して軍隊の凱旋は本月を以て殆んど終了を告げんとす依つて本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出征將校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉せんが為め熱誠之を迎え聊感謝の微衷を表し度就ては各位の御協賛を仰ぎ此盛典を挙行するの幸を得ば本会の面目不過之と存候間何卒御成奮つて義捐あらんことを只管希望の至に堪えず候敬具

「#引用文(一)まで」

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔をしている。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、逢う人毎に義捐をとられた、とられたと吹聴しているくらいである。義捐とある以上は差し出すもので、とられるものではないには極つていゝ。泥棒にあつたのではあるまいし、とられたとは不穩当である。しかるにも聞せず、盗難にでも罹つたかのごとくに思つてゐるらしい主人がいかに軍隊の歡迎だと云つて、いかに華族様の勧誘だと云つて、強談で持ちかけたらいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すような人間とは思われぬ。主人から云えば軍隊を歡迎する前にまず自分を歡迎したのである。自分を歡迎した後なら大抵のものは歡迎しそつであるが、自分が朝夕に差し支える間は、歡迎は華族様に任せておく見らしい。主人は第二信を取り上げたが「ヤ、これも活版だ」と云つた。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

時下秋冷の候に候処貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳れば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家の為めに妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所あり臥薪嘗胆其の苦辛の結果漸く茲に独力以て我が理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候具は別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる書冊出版の義に御座候本書は不肖針作が多年苦心研究せる工芸上の原理原則に法とり真に肉を裂き血を絞るの思を為して著述せるものに御座候因つて本書を普く一般の家庭へ製本実費に些少の利潤を附して御購求を願ひ一面道達の一助となすと同時に又一面には僅少の利潤を蓄積して校舎建築費に當つる心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候えども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分与被成下候て御替同の意を御表章被成下度伏して懇願仕候 「#「タ」に「つ」みかまえ(「」)「374-12」々敬具

「#引用文(一)まで」

大日本女子裁縫最高等大学院「#行末より5字上げ」

校長 縫田針作 九拜「#行末より2字上げ」

とある。主人はこの鄭重なる書面を、冷淡に丸めてぼんと屑籠の中へ抛り込んだ。せつかくの針作君の九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変りの光彩を放つている。状袋が紅白のんだらで、飴ん棒の看板のごとくはなやかなる真中に珍野苦沙弥先生虎皮下と八分体で肉太に認めてある。中からお太さんが出るかどうか受け合はないが表だけはすこぶる立派なものだ。

「#(一)より引用文、本文より2字下げ」

若し我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸いつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什麼の交渉かある。……始めて海鼠を食い出せる人は其胆力に於て敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其勇氣に於て重んずべし。海鼠を食べるものは親鸞の再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。苦沙弥先生の如きに至つては只干瓢の酔味嚙を知るのみ。干瓢の酔味嚙を食つて天下の士たるものは、われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。父母も汝に私あるべし。愛人も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には微が生えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神? 神は人間の苦しきまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃んで安しと云つ。咄々、醉漢漫りに胡亂の言辞を弄して、蹣跚として墓に向つ。油尽きて灯自ら滅す。業尽きて何物をか遺す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上げれ。……

人を人と思わざれば畏るる所なし。人を人と思わざるものが、吾を吾と思わざる世を憤るは如何。権貴栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。只他の吾を吾と思わぬ時に於て怫然として色を作す。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思つとき、他の吾を吾と思わぬ時、不平家は発作的に天降る。此発作的活動を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人參多し先生何が故に服せざる。

「#引用文(こ)まで」

在巢鴨 天道公平《てんどうこうへい》 再拜「#行末より2字上げ」

針作君は九拜であつたが、この男は単に再拜だけである。寄附金の依頼でないだけに七拜ほど横風に構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても投書になる価値は充分あるのだから、頭腦の不透明をもつて鳴る主人は必ず寸断寸断に引き裂いてしまつたろうと思のほか、打ち返し打ち返し読み直している。こんな手紙に意味があると考へて、あくまでその意味を究めようという決心かも知れない。およそ天地の間にわからんものは沢山あるが意味をつけつかないものは一つもない。どんなむずかしい文章でも解釈しようとするれば容易に解釈の出来るものだ。人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。それどころではない。人間は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つても構わん、宇宙は狭いと云つても差し支へはない。鳥が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とかか蚊とか理窟さえつければどうも意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ付けて説明し通して来た男はおさら意味をつけたがるのである。天気の悪るいになぜグード・モーニングですかと生徒に問われて七日間考へたり、コロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日三晩かかつて答を工夫するくらいな男には、干瓢の酢味噌が天下の士であるつと、朝鮮の仁参を食つて革命を起そうと随意な意味は随処に湧き出る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこの難解な言句を呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ない。天晴な見識だ」と大變賞賛した。この一言でも主人の愚なところはよく分るが、翻つて考へて見るといささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限つた事でもなからう。分らぬところには馬鹿に出来ないうものが潜伏して、測るべからざる辺には何だか氣高い心持が起るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかつたように吹聴するにも係らず、学者はわかつた事をわからぬように講釈する。大学の講義でもわからん事を喋舌る人は評判がよくつてわかる事を説明する者は人望がないのもよく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。その主旨が那邊に存するかほとんど捕え難いからである。急に海鼠が出て来たり、せつな糞が出てくるからである。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道德経を尊敬し、儒家で易経を尊敬し、禅家で臨済録を尊敬すると一般で全く分らんからである。但し全然分らんで気がすまんから勝手に註釈をつけてわかつた顔だけはする。わからんものをわかつたつもりで尊敬するのは昔から愉快なものである。主人は恭しく八分体の名筆を巻き納めて、これを机上に置いたまま懐手をして冥想に沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄關から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書齋のうちでその声を聞いているのだが懐手のまま毫も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義か、この主人は決して書齋から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹸を買いに出た。細君は憚りである。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人は沓脱から敷台へ飛び上がつて障子を開放つてつかつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行つたなと思つと襖を三度あけたり閉てたりして、今度は書齋の方へやつてくる。

「おい冗談じゃない。何をしているんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこにいるなら何とか云えばいいのに、まるで空家のようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考へていたつて通れ」「#「通れ」に傍点」くらいは云えるだろつ」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだつてから精神の修養を力めているんだもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなつた日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじゃないよ。大變な御客さんを連れて来たんだよ。ちよつと出て違つてくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て違つてくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懐手のままぬつと立ちながら「また人を担ぐつもりだろう」と椽側へ出て何の気もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然と端坐して控えている。主人は思わず懐から両手を出してべたりと唐紙の傍へ尻を片つけてしまった。これでは老人と同じく西向きであるから双方共挨拶のしようがない。昔堅気の人は礼儀はやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を促がす。主人は兩三年前までは座敷はどこへ坐つても構わんものと心得ていたのだが、その後ある人から床の間の講釈を聞いて、あれは上段の間の變化したもので、上使が坐わる所だと悟つて以来決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が頑と構えているのだから上座どころではない。挨拶さえ碌には出来ない。「一応頭をさげて」

「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜では恐れ入る。かえって手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は真赤になって口をもごもご云わせている。精神修養もあまり効果がないようである。迷亭君は襖の影から笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと思つて、後ろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙へくつついては僕が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い今日は御近所を通行致したもので、御礼旁伺つた訳で、どうぞ御見知りおかれまして今後共宜しく」と昔し風な口上を淀みなく述べた。主人は交際の狭い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとはほとんど出会つた事がないのだから、最初から多少場つての気味で辟易していたところへ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮仁参も飴ん棒の状袋もすっかり忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私毛……私毛……ちよつと何がうはずでありましたところ……何分よろしく」と云い終つて頭を少々豊から上げて見ると老人は未だに平伏しているので、はつと恐縮してまた頭をびたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私毛もとはこちらに屋敷も在つて、永らく御膝元でくらししたものがすが、瓦解の折にあちらへ参つてからとんと出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らんくらいで、迷亭にでも伴れてあるいてもらわんと、とても用達も出来ません。滄桑の変とは申しながら、御入国以来三百年もあの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御代でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り今日の總會にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の總會があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けたんだが今その帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロックコートを着ている。フロックコートは着ているがすこしもからだに合わない。袖が長過ぎて、襟がおつ開いて、背中へ池が出来て、腋の下が釣るし上がっている。いくら不恰好に作るうと云つたつて、こうまで念を入れて形を崩す訳にはゆかないだろう。その上白シャツと白襟が離れ離れになって、仰むくと間から咽喉仏が見える。第一黒い襟飾りが襟に属しているのか、シャツに属しているのか判然しない。フロックはまだ我慢が出来ることが白髪の手ヨシ鬚はなはだ奇観である。評判の鉄扇はどうかと目を注げると膝の横にちやんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返つて、精神修養の結果を存分に老人の服装に應用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではなからうと思つていたが、逢つて見ると話以上である。もし自分のあばた「# あばた」に「傍点」が歴史的研究の材料になるならば、この老人の手ヨシ鬚や鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云つて話を途切らすのも礼に欠けると思つて

「だいぶ人が出ましたらう」と極めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので どうも近来は人間が物見高くなつたようだがすな。昔しはあんなではなかったが」

「ええ、さよつ、昔はそんなではなかったですな」と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知つ高振りをした訳ではない。ただ朦朧たる頭脳から好い加減に流れ出す言語と見れば差し支えない。

「それにな。皆この甲割りへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分重いものでございませう」

「苦沙弥君、ちよつと持って見たまえ。なかなか重いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と主人に渡す。京都の黒谷で参詣人が蓮生坊の太刀を戴くようなかたで、苦沙弥先生しばらく持っていたが「なるほど」と云つたまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割と称えて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございませう」

「兜を割るので、敵の目がくらむ所を撃ちとつたものですが。楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりゃ正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていました。苦沙弥君、今日帰りにちよつどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄つて、物理の実験室を見せて貰つたところがね。」この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂つて大騒ぎや」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、性のいい鉄だから決してそんな虞れはない」

「いくら性のいい鉄だつてそうはいきませんよ。現に寒月がそう云つたから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球を磨つている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事がありそうなものだ」

「可愛想に、あれだつて研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を漢士では玉人と称したもので至つて身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形而下の学でちよつと結構なようだが、いざとなるとさしこも役には立ちません。昔はそれと違つて侍は皆命懸けの商賈だから、いざと云う時に狼狽せぬよつに心の修業を致したもので、御承知でもあらうがなかなかな玉を磨つたり針金を縋つたりするよつな容易いものではなかったのですよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懐手をして坐り込んでるんでしよつ」

「それだから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は求放心と云われたくらいだ。邵康節は心要放と説いた事もある。また仏家では中峯和尚と云うのが具不退転と云う事を教えている。なかなか容易には分らん」

「とつてい分りつこありませんね。全体どうすればいいんです」

「御前は沢庵禅師の不動智神妙録というものを讀んだ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こつぞ。敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を取らるるなり。敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと思つところを心を取らるるなり。敵を切らんと思つところを心を取らるるなり。わが太刀に心を取らるるなり。われ切られじと思つところを心を取らるるなり。われ切られじと思つところを心を取らるるなり。人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに暗誦したものです。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじゃありませんか。苦沙弥君分つたかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりしているんですから。客があつても取次に出ないくらい心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇特的な事で　御前などもちとこいつしよにやつたらよかるつ」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思つていらつしやるんですよ」

「実際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中自から忙ありでね」

「そう、粗忽だから修業をせんといかないと云つたよ、忙中自ら閑ありと云う成句はあるが、閑中自ら忙ありと云つたのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「八八八八そうなつちやあ敵わない。時に伯父さんどうです。久し振りで東京の鰻でも食つちやあ。竹葉でも奢りましょう。これから電車で行くとすぐです」

「鰻も結構だが、今日はこれからすい」#「すい」に傍点「原へ行く約束があるから、わしはこれで御免を蒙ろう」

「ああ杉原ですか、あの爺さんも達者ですね」

「杉原ではない、すい」#「すい」に傍点「原さ。御前はよく間違ばかり云つて困る。他人の姓名を取り違えるのは失礼だ。よく気をつけんといけない」

「だって杉原とかいてあるじゃありませんか」

「杉原と書いてすい」#「すい」に傍点「原と読むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目読みと云つて昔からある事さ。蚯蚓を和名でみみず」#「みみず」に傍点」と云つ。あれは目見ず」#「目見ず」に傍点」の名目よみで。蚯蚓の事をかいる」#「かいる」に傍点」と云つたのと同じ事だ」

「へえ、驚ろいたな」

「蚯蚓を打ち殺すと仰向きにかえる」#「かえる」に傍点。それを名目読みにかいる」#「かいる」に傍点」と云つ。透垣をすい」#「すい」に傍点」垣、茎立をくく

「#「くく」に傍点」立、皆同じ事だ。杉原をすぎ原などと云つたのは田舎もの言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい」#「すい」に傍点「原へこれから行くんですか。困つたな」

「なに厭なら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇つて頂いて、ここから乗つて行」

主人は畏まつて直ちに御三を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチヨン鬚頭へ山高帽をいただいて帰つて行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団の上に坐つたなり懷手をして考え込んでいる。

「八八八豪傑だろつ。僕もああ云う伯父さんを持つて仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろつ」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで大に喜んでゐる。

「なにそんなに驚ろかしいない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据つたもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神の修養を主張するところなぞは大に敬服している」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやっぱりの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しっかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利かないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらい」#「えらい」に傍点」んだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際は限はありゃしない。とつてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に味がある。心そのものの修業をするのだからとせんだつて哲学者から承わつた通りを自説のように述べ立てる。

「えらい事になつて来たぜ。何だか八木独仙君のような事を云つてるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははつと驚ろいた。実はせんだつて臥竜窟を訪問して主人を説服に及んで悠然と立ち帰つた哲学者と云うのが取も直さずこの八木独仙君であつて、今主人が鹿爪らしく述べ立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なのであるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を聞不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの仮鼻を挫いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのつて、あの男の説ときたら、十年前学校にいた時分と今日と少しも変りゃしない」

「真理はそう変わるものじゃないから、変らないところがたのもしいかも知れない」

「まあそんな鼻負があるから独仙もあれで立ち行くんだね。第一八木と云う名からして、よく出来てるよ。あの髭が君全く山羊だからね。そうしてあれも寄宿舍時代からあの通りの恰好で生えていたんだ。名前の独仙なども振つたものさ。昔し僕のところへ泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。いつまで立つても同じ事を繰り返してやめないから、僕が君もう寝ようじゃないかと云うと、先生気なものさ、いや僕は眠くないとすまし切つて、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなかつてくれども、僕の方は大變眠いだから、どうか寝てくれたまえと頼むようにして寝かしたまではよかつたが、その晩鼠が出て独仙君の鼻のあたを噛つてね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟つたような事を云うけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が総身にまわると大變だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行つて紙片へ飯粒を貼つてこまかしてやつたあね」

「やうつた」

「これは舶来の膏藥で、近來独逸の名医が發明したので、印度人などの毒蛇に噛まれた時に用いると即効があるんだから、これさえ貼つておけば大丈夫だと云つてね」

「君はその時分からこまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまったのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑がぶらさがつて例の山羊髭に引つかかっていたのは滑稽だつたよ」

「しかしあの時分より大分えらく」#「えらく」に傍点」なつたようだよ」

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い問話しをして行つた」

「どつりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大に感心してしまつたから、僕も大に奮発して修養をやるうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真に受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言つた事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだが、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知つてらう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人大分説があるよつじやないか」

「そうさ、当人に云わせるとさこぶるありがたいものさ。禅の機鋒は峻峭なもので、いわゆる石火の機となると怖いくらい早く物に應ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云つて狼狽しているところを自分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効があらわれて嬉しいと云つて、跛を引きながらうれしがつていた。負惜みの強い男だ。一体禅とか仏とか云つて騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはいないぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の寝言見たような事を何か云ってつたろ？」

「うん電光影裏に春風をきるとか云う句を教えて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱なんだからおかしいよ。無覚禪師の電光ときたら寄宿舎中誰も知らないものはないくらいだった。それに先生時々せき込むと間違えて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきると云うから面白い。今度ためして見たまえ。向で落ちつき払って述べたてているところを、こつちでいるいる反対するんだね。するとすぐ顛倒して妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢つちや叶わない」

「どつちがいたずら者だか分りゃしない。僕は禅坊主だの、悟つたのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院と云う寺があるが、あそこは八十ばかりの隠居がいる。それでこの間の白雨の時寺内へ雷が落ちて隠居のいる庭先の松の木を割ってしまった。ところが和尚泰然として平気だと云うから、よく聞き合わせて見るとから騒んだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そんなものさ。独仙も一人で悟つていれればいいのだが、ややとすると人を誘い出すから悪い。現に独仙の御蔭で二人ばかり気狂にされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野陶然さ。独仙の御蔭で大に禅学に凝り固まって鎌倉へ出掛けて行つて、とうとう出先で気狂になってしまった。円覚寺の前に汽車の踏切りがあるだろ、あの踏切り内へ飛び込んでレールの上で座禅をするんだね。それで向うから来る汽車をとめて見せると云う大気焔さ。もっとも汽車の方で留つてくれたから一命だけはとりとめたが、その代り今度は火に入つて焼けず、水に入つて溺れぬ金剛不壊のからだだと号して寺内の蓮池へ這入つてぶくぶくあるき廻つたもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸、道場の坊主が通りかかつて助けてくれたが、その後東京へ帰つてから、とうとう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になつた原因は僧堂で麦飯や万年漬を食つたせいだから、つまるところは間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するのも善し悪ししだね」と主人はちよつと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものももう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「立町老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされて鰻が天上するような事ばかり言っていたが、とうとう君本物になつてしまった」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚仙さ、あのくらい食い意地のきたない男はなかつたが、あの食意地と禅坊主のわる意地が併発したのだから助からない。始めは僕らも気がつかなくつたが今から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国では蒲鉾が板へ乗つて泳いでいますのつて、しきりに警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよかつたが君表のどぶ「#」どぶ」に傍点」へ金とん「#」とん」に傍点」を掘りに行きましようつと促がすに至つては僕も降参したね。それから二三日するついに豚仙になつて巢鴨へ収容されてしまった。元来豚なんぞが気狂になる資格はないんだが、全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたんだね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいらぬのかい」

「いるだんじやない。自大狂で大気焔を吐いている。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云うので、自ら天道公平と号して、天道の権化をもつて任じている。すさまじいものだよ。まあちよつと行つて見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。気狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々孔平とも書く事がある。それで何でも世人が迷つてゐるからせひ救つてやりたいと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰つたが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の所へ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やつぱり赤い状袋だろつ」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変わった状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそつだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在って赤しと云う豚仙の格言を示したんだつて……」

「なかなか因縁のある状袋だね」

「気狂だけに大に凝ったものさ。そうして気狂になつても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて来たろつ」

「うん、海鼠の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。それから？」

「それから河豚と朝鮮仁参か何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨いね。おおかた河豚を食つて中つたら朝鮮仁参を煎じて飲めども云つてもりなんだろう」

「そつでもないよつだ」

「そつでなくても構わないさ。どうせ気狂だもの。それつきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上げれと云う句がある」

「アハハ八御茶でも上げればきびし過ぎる。それで大に君をやり込めたつもりに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がつて、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆誦した書翰の差出人が金箔つき狂人の狂人であると知つてから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹立たしくもあり、また癡癡病者の文章をさほど心労して詠味したかと思つと恥ずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多少神経に異状がありせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧と、心配の合併した状態で何だか落ちつかない顔付をして控えている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が二た足ほど沓脱に響いたと思つたら「ちよつと頼みます、ちよつと頼みます」と大きな声が出る。主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男であるから、御三の取次に出るのも待たず、通れ「#「通れ」に傍点」と云いながら隔ての間を二た足ばかりに飛び越えて玄關に躍り出した。人のうちへ案内も乞わずにつつかつか這入り込むところは迷惑のようだが、人のうちへ這入つた以上は書生同様取次を務めるからはなはだ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客さんが玄關へ出張するのに主人たる苦沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ちつけている。但し落ちつけているのは、その趣は大分似ているが、その実質はよほど違つた。

玄關へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくつちや、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ず懐手のままのそのりそのりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握つたままじやがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警視庁刑事巡查吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立つているのは二五六の背の高い、いなせ「#「いなせ」に傍点」な唐棧すくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐手をしたまま、無言で突立っている。何だか見たような顔だと思つてよくよく観察すると、見たよつなどころじやない。この間深夜御來訪になつて山の芋を持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄關からおいでになつたな。

「おいこの方は刑事巡查でせんだつての泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいでになつたんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭重に御辞儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こつちが刑事だと早合点をしたのだらう。泥棒も驚いたに相違ないが、まさか私が泥棒ですと断わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立つている。やはり懐手のままである。もつとも手錠をはめているのだから、出そうと云つても出る氣遣はない。通例のものならこの様子でたいていはわかるはずだが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上の御威光となると非常に恐いものど心得ている。もつとも理論上から云つと、巡查などは自分達が金を出して番人に雇つておくのだからの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にびよこびよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかよつに子に酬つたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

「巡查はおかしかつたと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時まで日本堤の分署まで来て下さい。」

「盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れていた。ただ覚えていたのは多々良三平の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わんと思つたが、盗難品は……と云いかけてあとが出ないのはいかにも与太郎のよつで体裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない証拠だと、思い切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟へあごを入れた。迷亭はアハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云つた。巡查だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻つたようです。まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡したら請書が入るから、印形を忘れずに持つておいでなさい。九時までに来なくてはいいかん。日本堤分署です。浅草警察署の管轄内の日本堤分署です。それじゃ、さようなら」と独りで弁じて歸つて行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないのので、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行つてしまつた。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらし、ぴしやりと立て切つた。

「アハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにああ云う恭謙な態度を持つてるといい男だが、君は巡查だけに鄭寧なんだから困る」

「だってせつかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るつたつて、先は商売だよ。当り前にあしらつてりゃ沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云つと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハ八それじゃ刑事の悪口はやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかつて君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たつた今平身低頭したじゃないか」

「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」

「刑事があんななり」「#」「なり」「に傍点」をするものか」

「刑事だからあんななり」「#」「なり」「に傍点」をするんじゃないか」

「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懐手なんかして、突立つてゐるものかね」

「刑事だつて懐手をしないと限るまい」

「そう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君がお辞儀をする間あいつは始終あのまま立っていたのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云つてるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた訳じゃないんだから。ただそう思つて独りで強情を張つてゐるんだ」

迷亭もここにおいてとつてい済度すべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙ってしまった。主人は久し振りで迷亭を凹ましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つただけ下落したつもりであるが、主人から云つと強情を張つただけ迷亭よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢な事はままある。強情さえ張り通せば勝つた気でいるうちに、当人の人物としての相場は遙かに下落してしまふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬまで自分は面目を施こしたつもりかになにかで、その時以後人が輕蔑して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそつた。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云つから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲きつけるように云つたのは壮なものだった。

「えらい勢だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる気遣はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまつた。ずるい」「#」「ずるい」「に傍点」事もずるい」「#」「ずるい」「に傍点」が、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知つてるかい」

「知るものか。車に乗つて行けば訳はないだろう」とぶつぶんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「八八八日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そつさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行つて見る気かい」と迷亭君またからかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつは「#」「そいつは」に傍点」と少々逡巡の体であつたが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行く」と入らざるところに力味で見た。愚人は得てこんなところ意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白がるう、見て来たまえ」と云つたのみである。一波瀾を生じた刑事事件はこれで一先ず落着を告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁を弄して日暮れ方、あまり遅くなると伯父に怒られると云つて帰つて行つた。

迷亭が帰つてから、そこそこに晩飯をすまして、また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手して下のように考え始めた。

「自分が感服して、大に見習おつとした八木独仙君も迷亭の話によつて見ると、別段見習つにも及ばない人間のようである。のみならず彼の唱道するところの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋癲的系統に属してもおりそつだ。いわんや彼は歴史とした二人の気狂の自分を有している。はなはだ危険である。滅多に近寄ると同系統内に引き摺り込まれそつである。自分が文章の上において驚嘆の余、これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事実名立町老梅は純然たる狂人であつて、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中に盛名を擅ままして天道の主宰をもつて自ら任ずるは恐らく事実である。こつ云う自分もことによると少々ござつていても知れない。同気相求め、同類相集まると云うから、気狂の説に感服する以上は、少なくともその文章言辞に同情を表する以上は、自分もまた気狂に縁の近い者であるだろう。よし同型中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せて居るとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見るとこのほどじゅうから自分の脳的作用は我ながら驚くくらい奇上に妙を点じ変傍に珍を添えている。脳漿一勺の化学的变化はとにかく意志の動いて行為となるところ、発して言辞と化する辺には不思議にも中庸を失した点が多い。舌上に竜泉なく、腋下に清風を生ぜざるも、齒根に狂臭あり、筋頭に瘋味あるをいかんせん。いよいよ大変だ。ことによるともつすでに立派な患者になつていゝのかしらん。まだ幸に人を傷けたり、世間の邪魔になる事をし出かさんからやはり町内を追われず、東京市民として存在しているのではなかつたか。こいつは消極の積極の云う段じゃない。まず脈搏からして検査しなくてはならん。しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でもない。しかしどうも心配だ。」

「こつ自分と気狂ばかりを比較して類似の点ばかり勘定しては、どうしても気狂の領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわるかった。気狂を標準にして自分をそつちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。もし健康な人を本位にしてその傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手近から始めなくてはいいかん。第一に今日来たフロックコート伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩まで弁当持参で球ばかり磨いている。これも棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の気狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒悪な根性は全く常識をはずれている。純然たる気じるしに極つてゐる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に懸つた事はないが、まずあの細君を恭しくおつ立てて、琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と見立てて差支えあるまい。非凡は気狂の異名であるから、まずこれも同類にしておいて構わない。それからと、まだあるある。落雲館の諸君子だ、年齢から云うとまだ芽生えだが、躁狂の点においては一世を空しゅうするに足る天晴な豪のものである。こつ数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫になつて来た。こつによると社会はみんな気狂の寄り合ひかも知れない。気狂が集合して鎗を削つてつかみ合ひ、いがみ合ひ、罵り合ひ、奪い合つて、その全体が団体として細胞のように崩れたり、持ち上つたり、崩れたりして暮して行くのを社会と云うのではないかも知らん。その中で多少理窟がわかつて、分別のある奴はかえつて邪魔になるから、瘋癲院というものを作つて、こつこつ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあればいるものはかえつて気狂である。気狂も孤立している間はこつこつまで気狂にされてしまつたが、団体となつて勢力が出ると、健全の人間になつてしまつたのかも知れない。大きな気狂が金力や威力を濫用して多くの小気狂を使役して乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少なくない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜瑣々たる孤灯の下で沈思熟慮した時の心的作用をありのままに描き出したものである。彼の頭脳の不透明なる事はこつこつにも著しくあらわれている。彼はカイゼルに似た八字鬚を蓄うるにもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬくらい凡庸である。のみならず彼はせつかくこの問題を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず彼は徹底的に考える脳力のない男である。彼の結論の茫漠として、彼の鼻孔から迸出する朝日の煙のごとく、捕捉しがたきは、彼の議論における唯一の特色として記憶すべき事である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとつて何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝の上へ乗つて眠つて居るうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中のいきさつが手にとるやうに吾輩の心眼に映ずる。せんだつてなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら、突然この猫の皮を剥いでちゃんちゃん「#「ちゃんちゃん」に傍点」にしたらさぞあたたかよかるうと飛んでもない見をむらむらと起したのを即座に氣取つて覚えさすひやつとした事さえある。怖い事だ。当夜主人の頭のなかに起つた以上の思想もそんな誤合で幸にも諸君にご報道する事が出来るやうに相成つたのは吾輩の大に榮譽とするところである。但し主人は「何が何だか分らなくなつた」まで考へてそのあととくうう寝てしまつたのである、あすになれば何をどこまで考へたかまるで忘れてしまつて違ひない。向後もし主人が気狂について考へる事があるとすれば、もう一返直して頭から考へ始めなければならぬ。そうすると果してこんな径路を取つて、こんな風に「何が何だか分らなくなる」かどうだか保証出来ない。しかし何返考へ直しても、何条の径路をとつて進もうとも、ついに「何が何だか分らなくなる」だけはたしかである。

十

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しに細君が声を掛けた。主人は眼がさめて居るのだから、寝ているのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうん「#「うん」に傍点」と云う。このうん「#「うん」に傍点」も容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるくらい無精になると、どことなく趣があるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、その他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に、可愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさえ持てない主人が、世間一般の淑女に氣に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人において存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれなれないのだなどと理窟をつけていると、迷の種であるから、自覚の一助にもなるうかた親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、向をむいてうん「#「うん」に傍点」さえ発せざる以上は、その曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんと云う姿勢で等とはたき「#「はたき」に傍点」を担いで書齋の方へ行つてしまつた。やがてばたばた書齋中を叩き散らす音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたのである。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支えないやうなもの、ここの細君の掃除法のごときに至つてはすこぶる無意義のものとなつてゐるを得ない。何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたき「#「はたき」に傍点」を一通り障子へかけて、箒を一応置の上へ滑らせる。それで掃除は完成した者と解釈している。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに背負つておらん。かるが故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみ「#「ごみ」に傍点」のある所、ほこり「#「ほこり」に傍点」の積つて居る所はいつでもごみ「#「ごみ」に傍点」が溜つてほこり「#「ほこり」に傍点」が積つて居る。告朔の「#「饋」の「貴」の代わりに「氣」、「羊」と云う故事もある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやつても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづつて頑として結びつけられているにもかかわらず、掃除

の実に至つては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたき」#「はたき」に傍点」と篇が發明せられざる昔のごとく、毫も挙つておらん。思つにこの両者の關係は形式論理の命題における名辭のごとくその内容のいかにかわらざる結合せられたものである。

吾輩は主人と違つて、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になつて参つた。とうていうちのものさへ膳に向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めしに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅ましきで、もしや煙の立つた汁の香が鮑貝の中から、うまそうに立ち上つておりはすまいかと思つと、じつとしていらなくなつた。はかない事を、はかないと知りながら頼みにするときは、ただその頼みだけを頭の中に描いて、動かずに落ちついておる方が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、合うか合わぬか是非とも試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつて居る事ですら、最後の失望を自ら事実の上を受取るまでは承知出来んものである。吾輩はたまらなくなつて台所へ這出した。まずへつつい「#「へつつい」に傍点」の影にある鮑貝の中を覗いて見ると案に違わず、夕べ舐め尽したまま、闐然として、怪しき光が引窓を洩る初秋の日影にかがやいて居る。御三はすでに炊き立の飯を、御櫃に移して、今や七輪にかけた鍋の中をかきまぜつた。釜の周囲には沸き上がつて流れだした米の汁が、かさかさの幾条となくこびりついて、あるものは吉野紙を貼りつけたごとくに見える。もう飯も汁も出来ているのだから食わせてもよさうなものだと思つた。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りにならなかつた元々で損は行かないのだから、思い切つて朝飯の催促をしてやろう、いくら居候の身分だつてひもじいに変りはない。と考へ定めた吾輩はにやあにやあといふごとく、訴つるがごとく、あるいはまた怨ずるがごとく泣いて見た。御三はいつこゝろ顧みる景色がない。生れついでのお多角だから人情に疎いのはどうも承知の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させるのが、こつちの手際である。今度はにやごにやごとして見た。その泣き声は吾ながら悲壯の音を帯びて天涯の遊子をして断腸の思あらしむるに足ると信ずる。御三は恬として顧みない。この女は鬻なかも知れない。鬻では下女が勤まる訳がないが、ことによると猫の声だけに鬻なのだろう。世の中には色盲といふのがあつて、当人は完全な視力を具えているつもりでも、医者から云わせると片輪だそうだが、この御三は声言なのだろう。声言だつて片輪に違いない。片輪のくせにいやに横風なものだ。夜中なぞでも、いくらこつちが用があるから開けてくれると云つても決して開けてくれな事がない。たまに出してくれたと思つても入れてくれない。夏だつて夜露は毒だ。いわんや霜においてをやで、軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに辛いかとうてい想像が出来るものではない。この間しめ出しを食つた時などは野良犬の襲撃を蒙つて、すでに危うく見えたところを、ようやくの事で物置の家根へかけ上つて、終夜顛えつづけた事さへある。これ等は皆御三の不人情から胚胎した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感応のあるはずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいの事ならやゝの氣になる。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起するためにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではペトヴエンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音と確信しているのだが御三には何等の影響も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除けて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪の角でぼんぼんと敲いたら、長いのが三つほどに砕けて近所は炭の粉で真黒なつた。少々は汁の中へも這入つたらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにもない。仕方がないから悄然と茶の間の方へ引きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、こゝは今女の子が三人で顔を洗つて居る最中で、なかなか繁昌している。

顔を洗つと云つたところで、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさへ行かれないくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来はるはずがない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾を引きずり出してしきりに顔中撫で廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわるかるうけれども、地震がゆるむたにおもちろいわ「#「おもちろいわ」に傍点」と云う子だからこのくらしい事はあつても驚ろくに足らん。ことによると八木独仙君より悟つて居るかも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をもつて自ら任じて居るから、うがい茶碗をからからかんと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかかると、坊やちゃんもなかなか自信家だから容易に姉の云う事なんか聞きそつにしない。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引つ張り返した。このばぶ「#「ばぶ」に傍点」なる語はいかなる意義で、いかなる語源を有しているか、誰も知つて居るものがない。ただこの坊やちゃんが癩癩を起した時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾はこの姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引つ張られるから、水を含んだ真中からぼたぼた音が垂れて、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。坊やはこれでも元禄を着ているのである。元禄とは何の事だどんだん聞いて見ると、中形の模様なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教つて来たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云う。その癖この姉はいつの間まで元禄と双六とを間違えていた物識りである。

元禄で思い出したからついでに喋舌つてしまふが、この子供の言葉ちがいをする事は夥しいもので、折々人を馬鹿にしたよつな間違を云つて居る。火事で茸が飛んで来た時、御茶の味噌の女学校へ行つたり、恵比寿、台所と並べたり、或る時などは「わたしや菓店の子じやないわ」と云うから、よくよく聞き糺して見ると菓店と菓店を混同してたりする。主人はこんな間違を聞くたびに笑つて居るが、自分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な誤謬を真面目になつて、生徒に聞かせるのである。

坊やは 当人は坊やとは云わない。いつでも坊ば「#「坊ば」に傍点」と云う 元禄が濡れたのを見て「元どこ」#「どこ」に傍点」がべたい「#「べたい」に傍点」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。この騒動中比較的静かであつたのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向うむきになつて棚の上からころがり落ちた、お白粉の瓶をあけて、しきりに御化粧を施している。第一に突つ込んだ指をもつて鼻の頭をキョーと撫でたから豎に一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分明になつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたまりが出来上つた。これだけ装飾がととのつたところへ、下女がはいつて来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寢室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがって見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾から一本食み出している。頭が出ては起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のような男である。ところへ書斎の掃除をしてしまつた妻君がまた箒とはたき「#「はたき」に傍点」を担いでやってくる。最初のように襖の入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立つて、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚めていた。覚めているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立て籠つたのである。首さえ出さなければ、見逃してくれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まず安心と腹のうちで思つていたら、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追つて来たのはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覺悟をして、小さな声でうん「#「うん」に傍点」と返事をした。

「九時までにはいらつしやるのでしょつ。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着の袖口から答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食つて、起きるかと思つて安心して居ると、また寢込まれつけているから、油断は出来ない」と、さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云つのに、なお起きると責めるのは気に食わんものだ。主人のとき我儘者にはなおお気に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭から被つていた夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも開いている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおつしやつてもお起きなさんじゃありませんか」

「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どつちが馬鹿だか分りゃしない」と妻君ぶんとして箒を突いて枕元に立つて居るところは勇ましかつた。この時裏の車屋の子供、八つちゃんが急に大きな声をして「ウー」と泣き出す。八つちゃんは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたびに八つちゃんを泣かして小遣になるかも知れんが、八つちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋を持つたが最後朝から晩まで泣き通しに泣いてはなくてはならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少々怒るのを差し控えてやつたら、八つちゃんの寿命が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれたつて、こんな愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしくおいでになつて居る方だと鑑定してもよからう。怒るたびに泣かせられるだけなら、まだ余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを傭つて今戸焼をきめ込むたびに、八つちゃんは泣かねばならぬのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、早手廻しに八つちゃんは泣いて居るのである。こうなると主人が八つちゃんだか、八つちゃんが主人だか判然しなくなる。主人にあてつけに手数は掛らない、ちよつと八つちゃんに剣突を食わせれば何の苦もな、主人の横つ面を張つた訳になる。昔し西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡して、捕えられん時は、偶像をつくつて人間の代りに火あぶり「#「あぶり」に傍点」にしたと云うが、彼等のうちにも西洋の故事に通曉する軍師があると見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館と云い、八つちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとつては定めし苦手であらう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町内中ごとく苦手かも知れんが、ただいまは關係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八つちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝つばらからよほど癩癩が起つたと見えて、たちまちがばと布団の上に起き直つた。こうなると精神修養も八木独仙も何もあつたものじゃない。起き直りながら両方の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き掻き廻す。「カ月も溜つて居るフケは遠慮なく、頸筋やら、寝巻の襟へ飛んでくる。非常な壯観である。鬚はどうだと見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん然とおつ立っている。持主が怒つて居るのに鬚だけ落ちついてはすまないでも心得たものか、一本一本に癩癩を起して、勝手次第の方角へ猛烈なる勢をもつて突進している。これとてもなかなかの見物である。昨日は鏡の手前もある事だから、おとなしく独乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが、一晚寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに本来の面目に帰つて思い思いの出で立に居るのである。あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる日になると拭うがごとく奇麗に消え去つて、生れついで野猪的本領が直ちに全面を暴露し来るのと同じである。こんな乱暴な鬚をもつて居る、こんな乱暴な男が、よくまあ今まで免職にもならず教師が勤まつたものだと思つと、始めて日本の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信して居るらしい。いざとなれば巢鴨へ端書を飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日紹介した混沌たる太古の眼を精一杯に見張つて、向うの戸棚をきつと見た。これは高さ一間を横に仕切つて上下共各一枚の袋戸をはめたものであつた。下の方の戸棚は、布団の裾とすれすれの距離にあるから、起き直つた主人が眼をあきさえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れて妙な腸があらさまに見える。腸にはいろいろながある。あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さ

まである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕えて、鼻づらを松の木へこすりつけてやるうくらいにまで怒っていた主人が、突然この反古紙を読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くときに最中の一つもあてがえばすぐ笑うと一般である。主人が昔し去る所の御寺に下宿していた時、襖一と重を隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは元来意地のわるい女のうちでもつとも意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋をたたきながら、今泣いた鳥がもう笑つた、今泣いた鳥がもう笑つたと拍子を取つて歌つたそうだが、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌にせよ全くそれに違ない。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつたり、悲しがつたり人一倍もする代りにいずれも長く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機がむやみに転ずるのだから、これを俗語に翻訳してやさしく云えば興行のない、薄っぺらの鼻っ張だけ強いだつ子である。すでにだつ子である以上は、喧嘩をする勢で、むつくと刎ね起きた主人が急に気をかえて袋戸の腸を読みにかかるとももつともと云わねばなるまい。第一に眼にとまつたのが伊藤博文の逆か立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓国統監もこの時代から御布令の尻尾を追つ懸けてあるいていたと見える。大将この時分は何をしていたんだらうと、読めそうにないところを無理によむと大蔵卿とある。なるほどえらいものだ、いくら逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方を見ると今度は大蔵卿になつて昼寝をしている。もつともだ。逆か立ちではそう長く続く氣遣はない。下の方に大きな木板で汝は「#「汝は」に傍点」と二字だけ見える、あとが見たいがあいにく露出しておらん。次の行には早く「#「早く」に傍点」の二字だけ出ている。こいつも読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも構わずに引っぱがすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事実を挙げるためには何でもする。あれは始末に行かないものだ。願くばもう少し遠慮してもらいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせない事にしたらよからう。聞くところによると彼等は羅織虚構をもつて良民を罪に陥れる事さえあるそうだが、良民が金を出して雇つておく者が、雇主を罪にするなどときはこれまた立派な氣狂である。次に眼を転じて真中を見ると真中には大分県が宙返りをしている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから、大分県が宙返りをするのは当然である。主人はここまで読んで来て、双方へ握り拳をこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた鯨の遠吠のようによこぶる変調を極めた者であつたが、それが一段落を告げると、主人はそのそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり布団をまくつて夜着を畳んで、例の通り掃除をはじめめる。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をしたごとく依然として「#「早く」に傍点」を持続している。やがて頭を分け終つて、西洋手拭を肩へかけて、茶の間へ出御になると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云うと擲の如輪木か、銅の総落しで、洗髪の姉御が立膝で、長煙管を黒柿の縁へ叩きつける様を想見する諸君もないと限らないが、わが苦沙弥先生の長火鉢に至つては決して、そんな意気なものであるではない、何ぞ造つたものか素人には見当のつかんくらい古雅なものである。長火鉢は拭き込んでてらから光るところが身上なのだが、この代物は擲か桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど布巾をかけた事がないのだから陰気で引き立たざる事夥しい。こんなものをどこから買つて来たかと云うと、決して買つた覚はない。そんなら買つたかと聞くと、誰もくれた人はないそうだが、しかば盗んだのかと糾つて見ると、何だかその辺が曖昧である。昔し親類に隠居があつて、その隠居が死んだ時、当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のもののように使つていた火鉢を何の気もなく、つい持つて来てしまったのだそうだが、少々たちが悪いようだが、考えるとたちが悪いようだが、こんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家などは毎日人の金をあつかひつけているうちに人の金が、自分の金のように見えてくるそうだが、役人は人民の召使である。用事を弁じさせるために、ある権限を委託した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠に毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力で、人民などはこれについて何らの喙を容るる理由がないものだと狂つてくる。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもつて主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍に陣取つて、食卓を前に控えたる主人の三面には、先刻雑巾で顔を洗つた坊ば「#「坊ば」に傍点」と御茶の味噌「#「味噌」に傍点」の学校へ行くといふ「#「とん」に傍点」子と、お白粉に指を突き込んだ「#「すん」に傍点」子が、すでに勢揃をして朝飯を食つている。主人は一応この三女子の顔を公平に見渡し、たんと子の顔は南蛮鉄の刀の鐔のような輪廓を有している。すん子も妹だけに多少姉の面影を存して琉球塗の朱盆くらいな資格はある。ただ坊ば「#「坊ば」に傍点」に至つては独り異彩を放つて、面長に出来上つてゐる。但し豎に長いのなら世間にその例もすくなくないが、この子の横に長いのである。いかに流行が変化し易かつたつて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つくづく考へる事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するどころではない、その生長の速かなる事は禅寺の筍が若竹に変化する勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思つたんに、後ろから追手にせまられるような気がしてひやひやする。いかに空漠なる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上はどうにか片付けなくてはならぬ承知している。承知しているだけで片付ける手腕のない事も自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。人間の定義を云うとほかに何にもない。ただ入らざる事を捏造して自ら苦しんでいる者だと云えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年とつて三歳であるから、細君が気を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉の茶碗を奪ひ、姉の箸を引つたつて、持ちあつかひ悪い奴を無理に持ちあつかつてゐる。世の中を見渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全くこの坊ば時代から萌芽しているのである。その困つて来るところはかくのごとく深いから、決して教育や薫陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕った偉大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威を擅にしている。使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、勢暴威を逞しくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根元を二本いっしょに握ったままうんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、その上に味噌汁が一面に漲っている。箸の力が茶碗へ伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあたりへこぼれた。坊ばはそのくらいな事で辟易する訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎ね上げた。同時に小さな口を縁まで持つて行って、刎ね上げられた米粒を這入るだけ口の中へ受納した。打ち洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと類ったと願つた。同時に小さな口を飛びついた。飛びつき損じて置の上へこぼれたものは打算の限りでない。随分無分別な飯の食い方である。吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等の他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとくんば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて僅少のものである。必然の勢をもつて飛び込むにあらざ、戸迷をして飛び込むのである。どうか御再考を煩わしたい。世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

姉のとな子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪されて、不相応に小さな奴をもつてさつきから我慢していたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口ほど食つてしまふ。したがって頻りに御はちの方へ手が出る。もう四膳かえて、今度は五杯目である。とな子は御はちの蓋をあけて大きなしゃもじ「#」しゃもじに「傍点」を取り上げて、しばらく眺めていた。これは食おうか、よそうかと迷つていたものらしいが、ついに決心したものと見えて、焦げのなさそうなところを見計つて一掬いしゃもじの上へ乗せたままでは無難であったが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入りきらん飯は塊まったまま豊の上へ転がり出した。とな子は驚ろく景色もなく、こぼれた飯を鄭重に拾い始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎ね上げた時は、ちようどとな子が飯をよそいすつた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御せん粒だらけよ」と云いながら、早速坊ばの顔の掃除にとりかかる。第一に鼻のあたまとに寄りかかると思のほか、すぐ自分の口のなかへ入れてしまつたのには驚ろいた。それから頬つべたにかかると、ここには大分群をなして数にしたら、両方を合せて約二十粒もあつたらう。姉は丹念に一粒ずつ取つては食い、取つては食い、とうとう妹の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまつた。この時ただ今まではおとなしく沢庵をかじつていたすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくずれたのをしゃくい出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱したのほど口中にこたえる者はない。大人ですら注意しないと火傷をしたような心持ちがする。ましてすん子のごとき、薩摩芋に経験の乏しい者は無論狼狽する訳である。すん子はワツと云いながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片がどう云う拍子か、坊ばの前まですべつて来て、ちようどいい加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしゃむしゃ食つてしまつた。

先刻からこの体たらくを目撃していた主人は、一言も云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲んで、この時はすでに楊枝を使つて最中であつた。主人は娘の教育に関して絶対的放任主義を執るつもりと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合せたように情夫をこしらえて出奔しても、やはり自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見ているだらう。働きのない事だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を隔れる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが見様見真似に、こうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本来なら赤面してしかるべきのを得々と履行して未来の紳士だと思つてゐる。これは働き手と云うのではない。ころつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲つてやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば国家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う。日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情ない事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙かに上等な人間と云わなくてはならぬ。意気地のないところが上等なのである。無能なところが上等なのである。猪口才でないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ乗つて、日本堤分署へ出頭し及んだ。格子をあけた時、車夫に日本堤という所を知つてるとか聞いたたら、車夫はへへへと笑つた。あの遊廓のある吉原の近辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽であつた。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻君は例のごとく食事を済ませて、「さあ学校へおいで。遅くなりませよ」と催促すると、小供は平気なもので「あら、でも今日は御休みよ」と支度をする景色がない。「御休みなもんですか、早くなさい」と叱るように言つて聞かせると、「それでも昨日、先生が御休だつて、おつしやつてよ」と姉はなかなか動じない。妻君もここに至つて多少変に思つたものか、戸棚から曆を出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛り込んだのだらう。ただし迷亭に至つては実際知らなかつたのか、知つて知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後二十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。踵のまがった靴を履いて、紫色の袴を引きずつて、髪を算盤珠のようにふくらまして勝手口から案内も乞わずに上つて來た。これは主人の姪である。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をして歸つて行く雪江とか云う奇麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ出て二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入つて來て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早く来た……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちちよつと上がると思つて、八時半頃から家を出て急いで来たの」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がったの」

「ちよつとでなくつていいから、緩くり遊んでいらつしやい。今に叔父さんが帰つて来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「この春這入つた泥棒がつらまつたんだつて」

「それで引き合に出されるの？ いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのでよ。取られたものが出たから取りに来て、昨日巡査がわざわざ来たもんですから」

「おや、そう、それでなくつちや、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらつしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうして起こすとぶんぶん怒るのよ。今朝なんか七時までには是非おこせと云つから、起したんでしよう。すると夜具の中へ潜つて返事もしないんですもの。」つちが心配だから二度目にまたおこすと、夜着の袖から何か云つたのよ。本当にあきれ返つてしまつたの

「なぜそんなに眠いんでしょう。きつと神経衰弱なんでしょう」

「何ですか」

「本當にむやみに怒る方ね。あれでよく学校が勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですつて」

「じゃなお悪るいわ。まるで蒟蒻閻魔ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だつて蒟蒻閻魔のようじゃありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言つ通りにした事がない、そりや強情ですよ」

「天探女でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思つたら、うら」#「うら」に傍点を云つと、こつちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘を買つてもうつ時にも、いらぬ、いらぬ、わぎと云つたら、いらぬ事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」

「ホホホホ旨いのね。わたしもこれからそうしよう」

「そうなさいよ。それでなくつちや損だわ」

「こないだ保険会社の人が来て、是非御這入んなさいつて、勧めているんでしよう。いろいろ訳を言つて、こつち利益があるの、ああ云つ利益があるのつて、何でも一時間も話をしたんですが、どつしても這入らないの。うちだつて貯蓄はなし、こつちして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入つてくれるとよつほど心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構わないんですもの」

「そつね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染みたことを云つ。

「その談判を陰で聞いてみると、本當に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだらう。しかし死なない以上は保険に這入る必要はないぢやないかつて強情を張つています」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うものは丈夫なようで脆いもので、知らないうちに、いつ危険が逼つてくるか分りませんと云つとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているつて、まあ無法な事を云つんですよ」

「決心したつて、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第するつもりだったけれど、とうとう落第してしまつたわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長が生きが出来るものなら、誰も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が至当ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓つて死なないつて威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、大妙ですわ。保険の掛金を出すくらいなら銀行へ貯金する方が遙かにましだつてすまし切つていらっしゃるんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考なんかありませんよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらつしやる方だつて、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云う穏やかな人だとよつほど楽ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判がわるいのよ」

「みんな逆なのね。それじゃ、あの方がいいでしょう　ほらあの落ちついてる　」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分閉口しているんですがね。昨日迷亭さんが来て悪口をいったものだから、思ったほど利かないかも知れない」

「だつていいじゃありませんか。あんな風に鷹揚に落ちついていれば、　こないだ学校で演説をなすつたわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、淑徳婦人会のときに招待して、演説をして頂いたの」

「面白かつて？」

「そつね、そんなに面白くもなかつたわ。けども、あの先生が、あんな長い顔なんですよ。そうして天神様のような髯を生やしているもんだから、みんな感心して聞
こつてゐるよ」

「御話して、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると椽側の方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の空地へ出て遊んでいたものであつた。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隔へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云つたのはとん子で「やっぱりかちかち」#「かちかち」に傍点「山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云い出した二女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。ただしこれは御話を承わると云うのではない、坊ばもまた御話を仕ると云う意味である。「あら、また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑つと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と賺かして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「おお、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？」と雪江さんは謙遜した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのつて」

「面白いのね。それから？」

「私たちは田圃へ稲刈いに」

「そつ、よく知ってる事」

「御前がくつと邪魔になる」

「あら、くつ」#「くつ」に傍点」とじゃないわ、くる」#「くる」に傍点」とだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝して直ちに姉を辟易させる。しかし中途で口を出されたものだから、続きを忘れてしまって、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免だよ。ぶつ、ぶつぶつ」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

「御三」

「わるい御三ね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊ばはおとなしく聞いていますですよ」と云うと、さすがの暴君も納得したと見えて、それぎり当分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなのよ」と雪江さんがとうとう口を切った。「昔ある辻の真中に大きな石地蔵があつたんですってね。ところがそこがあいにく馬や車が通る大変賑やかな場所だもんだから邪魔になつて仕様がないうでね、町内のものが大勢寄つて、相談をして、どうしてこの石地蔵を隅の方へ片づけたらよからうって考えたんですって」

「そりや本当にあつた話なの？」

「どつですか、そんな事は何ともおつしやらなくつてよ。でみんながいろいろ相談をしたら、その町内で一番強い男が、そりや訳はありません、わたしがきつと片づけて見せますって、一人でその辻へ行つて、両肌を抜いで汗を流して引張つたけれども、どうしても動かないんですって」

「よっぽど重い石地蔵なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまつて、うちへ帰つて寝てしまつたから、町内のものはまた相談をしたんです。すると今度は町内で一番利口な男が、私に任せて御覧なさい、一番やつて見ますからつて、重箱のなかへ牡丹餅を一杯入れて、地蔵の前へ来て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せびらかしたんだつて、地蔵だつて食欲地が張つてるから牡丹餅で釣れるだろうと思つたら、少しも動かないんだつて。利口な男はこれではいけないと思つてね。今度は瓢箪へお酒を入れて、その瓢箪を片手へぶら下げて、片手へ猪口を持ってまた地蔵さんの前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければここまでおいでと三時間はかり、からかつて見たがやはり動かないんですって」

「雪江さん、地蔵様は御腹が減らないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云つた。

「利口な人は一度共しくじつたから、その次には贖札を沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、欲しければ取りにおいでと札を出したり引つ込ましたりしたがこれもまるで益に立たないんですって。よっぽど頑固な地蔵様なのよ」

「そつね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想をつかしてやめてしまつたんです。それでそのあとからね、大きな法螺を吹く人が出て、私ならきつと片づけて見せますから安心なさいとさも容易い事のように受言つたそつです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、付け髭をして、地蔵様の前へきて、こらこら、動かんとその方のためにならんぞ、警察で棄てておかんぞと威張つて見せたんです。今の世に警察の仮面なんか使つたつて誰も聞きやしないわね」

「本当ね、それで地蔵様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入つて居るのよ」

「あらそつ、あんな顔をして？ それじゃ、そんなに怖い事はないわね。けれども地蔵様は動かないんですって、平気でいるんです。それで法螺吹は大変怒つて、巡査の服を脱いで、付け髭を紙屑籠へ抛り込んで、今度は大金持ちの服装をして出て来たそつです。今の世で云つと岩崎男爵のような顔をするんです。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしないで、また何も云わないで地蔵の周りを、大きな巻煙草をふかしながら歩いているんですよ」

「それが何になるの？」

「地蔵様を煙に捲くんです」

「まるで嘶し家の洒落のようね。首尾よく煙に捲いたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしてもたいていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃってよ。たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だが化けて来たって 第一不敬じゃありませんか、法螺吹きの方

殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬ですわ」

「そつね」

「殿下さまでも利かないでしょう。法螺吹きもしようがないから、とても私の手際では、あの地蔵はどうする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに懲役にやればいいのに。でも町内のものは大層気を揉んで、また相談を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱ったそうです」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大勢雇って、地蔵様の周りをわいわい騒いであるいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないようにすればいいと云って、夜昼交替で騒ぐんだって」

「御苦勞様ですこと」

「それでも取り合わないんですとさ。地蔵様の方も随分強情ね」

「それから、どうして？」ととん「#」とん「に傍点」子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも騒が見えないので、大分みんなが厭になって来たんですが、車夫やゴロツキは幾日でも日当になる事だから喜んで騒いでいましたわ」

「雪江さん、日当ってなに？」とすん「#」すん「に傍点」子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらって何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホホいやなすん」#「すん」に傍点」子さんだ。それで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎをしていますとね。その時町内に馬鹿竹と云って、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿がいたんですってね。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方は何でそんなに騒ぐんだ、何年かかっても地蔵一つ動かす事が出来ないのか、可哀想なものだ、と云ったそうですって」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云う事を聞いて、物はためした、どつせ駄目だろうが、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹に頼むと、竹は「も」もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引き込まして飄然と地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然」#「飄然」に傍点」て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が肝心なところで奇問を放ったので、細君と雪江さんはどっと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云つのはね。云いようがないわ」

「飄然で、云いようがないの？」

「そつじやないのよ、飄然と云つのはね」

「ええ」

「そら多々良三平さんを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云つよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそつよ。それで馬鹿竹が地蔵様の前へ来て懐手をして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云つから動いてやんなさいと云つたら、地蔵様はたちまちそつか、そんなら早くそつ云えばいいのに、とのこの動き出したそつです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日は御婦人の会であります、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻りくどい手段をとる弊がある。もつともこれは御婦人に限つた事でない。明治の代は男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になつてゐるから、よくいらざる手数と労力を費やして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解しているものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸形児である。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に在つてはなるべくただいま申した昔話を御記憶になつて、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な見で物事を処理していただきたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑の間に起る忌わしき葛藤の三分一はたしかに減ぜられるに相違ない。人間は魂胆があればあるほど、その魂胆が崇つて不幸の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたくはないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大変怒つてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町の？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまつわ」

「でも大変いい器量だつて云うじやありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじやありませんよ。あんなに御化粧をすればたいいの人はよく見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそれのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、あの方は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があつたつて」

「つくり過ぎてても御金のある方がいいじやありませんか」

「それもそつだけれども」

「あの方こそ、少し馬鹿竹になつた方がいいでしょう。無暗に威張るんですもの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げたつて、みんなに吹聴してゐるんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よっぽど物数奇ね」

「でも東風さんは大変真面目なんです。自分じゃ、あんな事をするのが当前だとまで思ってるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんです。それからまだ面白い事があるの。此間だけか、あの方の所へ艶書を送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけど聞いた事もない人だって、そうしてそれが長い長い一問ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんです。私
があなたを恋っているのは、ちょうど宗教家が神にあがられているようなものなの、あなたのためならば祭壇に供える小羊となって屠られるのが無上の名誉であるの、心
臓の形が三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢なら大当たりであるの……」

「そりゃ真面目なの？」

「真面目なんです。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのとこへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るところですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らして上げたらいいでしょう。寒月さんはまるで御存じないでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行つて球ばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでしょう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫になる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があつて、いざつて時に力になって、いいじゃありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品がわるいのね。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そつ、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もありませんもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論を逞しくしていると、さつきから、分らないなりに謹聴していると「#とん」に傍点「子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。この無鉄砲な希望には、さすが青春の氣に満ちて、大に同情を寄すべき雪江さんもちよつと毒気を抜かれた体であったが、細君の方は比較的平氣に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、招魂社へ御嫁に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思つてるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇氣もなく、どつと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向つてかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？ わたしも大すき。いっしょに招魂社へ御嫁に行きましよう。ね？ いや？ いやなら好いわ。わたし一人で車へ乗つてさつさと行つちまうわ」

「坊ばも行くの」とついに坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ樂であるつ。

ところへ車の音ががらと門前に留つたと思つたら、たちまち威勢のいい御歸りと云う声が出た。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入つて来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名な長火鉢の傍へ、ばかりと手に携えた徳利様のものを抛り出した。徳利様と云つのは純然たる徳利では無論ない、と云つて花活けとも思われぬ、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰つていらつしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好だろつ」と自慢する。

「いい恰好なの？ それが？ あんまりよかあないわ？ 油壺なんか何で持つていらつしたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活々」

「花活にしちゃ、口が小さい過ぎて、いやに胸が張ってるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔母さんと扱ふところなした。困ったものだな」と独りで油壺を取り上げて、障子の方へ向けて眺めている。

「どつせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくるような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんはそれどころではない、風呂敷包を解いて皿眼になって、盗難品を検べている。「おや驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待ってるのが退屈だから、あすこいらを散歩しているうちに掘り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの」

「どつて日本境界隈さ。吉原へも這入って見た。なかなか盛な所だ。あの鉄の門を観た事があるかい。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦のいる所へ行く因縁がありませんわ。叔父さんは教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当に驚ろいてしまつわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そつね。どうも品数が足りないようだ事。これでみんな戻ったんでしょつか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭すると云いながら十一時まで待たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないつて、吉原を散歩しちやなおいけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ。ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側がないんです。何だか足りないと思つたら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こつちは三時間も待たされて、大切な時間を半日潰してしまつた」と日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺めている。細君も仕方がないと諦めて、戻つた品をそのまま戸棚へしまい込んで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたないじゃありませんか」

「それを吉原で買つていらしたの？ まあ」

「何がまあ」「まあ」に傍点」だ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくても、どこにだつてあるじゃありませんか」

「ところが無いんだよ。滅多に有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地藏ね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女学生は口が悪くつていかん。ちと女大学でも読むがいい」

「叔父さんは保険が嫌でしょう。女学生と保険とどつちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の考のあるものは、誰でも這入る。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入つてもいい癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸金で何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはやにや笑っている。主人は真面目になつて

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑気な事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ、保険の必要を感じるに至るのは当前だ。ぜひ来月から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのように蝙蝠傘を買って下さる御金があるなら、保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理に買つて下さるんですもの」

「そんなにいらなかつたのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら還すがいい。ちょうど」#「ちょうど」に傍点」とん子が欲しがってるから、あれをこつちへ廻してやるつ。今日持つて来たか」

「あら、そりゃ、あんまりだわ。だつて苛いじゃありませんか、せつかく買って下さつておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらぬ事はいらぬんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらぬいと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だつて」

「だつて、どうしたんだ」

「だつて苛いわ」

「愚だな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだつて同じ事ばかり繰り返しているじゃありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらぬいと云つたじゃないか」

「そりゃ云いましたわ。いらぬ事はいらぬんですけれども、還すのは厭ですもの」

「驚ろいたな。没分曉で強情なんだから仕方がない。御前の学校じゃ論理学を教えないのか」

「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおっしゃい。人のものを還せだなんて、他人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹の真似でもなさ

い」

「何の真似をしる？」

「ちと正直に淡泊になさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したつて叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言ひこに至つて感に堪えざるものごとく、潸然として一掬の涙を紫の袴の上に落した。主人は茫乎として、その涙がいかなる心理作用に起因するかを研究するものごとく、袴の上と、俯つ向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御三が台所から赤い手を敷居越に揃えて「お客さまがいらつしやいました」と云つ。「誰が来たんだ」と主人が聞くと、「学校の生徒さんでございます」と御三は雪江さんの泣顔を横目に睨めながら答えた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人間研究のため、主人に尾して忍びやかに椽へ廻つた。人間を研究するには何か波瀾がある時を択ばないと一向結果が出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。しかしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作用のためにむくむくと持ち上がった奇なもの、変なもの、妙なものの、一と口に云えば吾輩猫共から見ても不可解の後学になるような事件が至るところに横風にあらわれてくる。雪江さんの紅涙のごときはまさしくその現象の一つである。かくのごとく不可思議、不可測の心を有している雪江さんも、細君と話をしているうちにはさほどとも思わなかつたが、主人が帰つてきて油壺を抛り出すやいなや、たちまち死竜に蒸汽脚筒を注ぎかけたごとく、勃然としてその深奥にして窺知すべからざる、巧妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜気もなく発揚し了つた。しかしてその麗質は天下の女性に共通なる麗質である。ただ惜しい事には容易にあらわれて来ない。否あらわれる事は二六時中間断なくあらわれているが、かくのごとく顕著に灼然炳乎として遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫でたがる旋毛曲りの奇特家があつたから、かかる狂言も拝見が

出来たのである。主人のあとさえついてあるけば、どこへ行つても舞台の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を旦那様に載いて、短かい猫の命のうちにも、大分多くの経験が出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であろう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追つ、返つたの書生である。大きな頭を地の隙いて見えるほど刈り込んで団子つ鼻を顔の真中にかためて、座敷の隅の方に控えている。別にこれと云う特徴もないが頭蓋骨だけはすこぶる大きい。青坊主に刈つてさえ、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を惹く事だろう。こんな顔にかぎつて学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はそうかも知れないがちよつと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。着物は通例の書生のごとく、薩摩緋か、久留米がすりかまた伊予緋か分らないが、ともかくも緋と名づけられたる袷を袖短かに着こなして、下には襦袢も襦袢もないようだ。素裕や素足は意気なものであるが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで印しているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡の上へちやんと坐つて、さも窮屈そうに畏しこまつている。一体かしまるべきものがおとなしく控えるのは別段気にするにも及ばんが、毬栗頭のつんつるてんの乱暴者が恐縮しているところは何となく不調和なものである。途中で先生に逢つてさえ礼をしないのを自慢にするくらい連中が、たとい三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。ところを生れ得て恭謙の君子、盛徳の長者であるかのごとく構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍から見ると大分おかしいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうしてかのように自己を箝束する力を見ているかと思うと、憐れにもあるが滑稽でもある。こちやつて一人ずつ相對になると、いかに愚。「#馬へん」に「矣、矣」となる主人といえども生徒に対して幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし得意であろう。塵積つて山をなすと云うから、微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮るべからざる団体となつて、排斥運動やストライキをしないでかすかも知れない。これはちよつど臆病者が酒を飲んで大胆になるような現象である。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔つた結果、正気を取り落したるものと認めて差支えあるまい。それでなければかように恐れ入ると云わんよりむしる悄然として、自ら襖に押し付けられているくらいな薩摩緋が、いかに老朽だと云つて、苟めにも先生と名のつく主人を軽蔑しようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団を押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが毬栗先生はかたくなつたまま「へえ」と云つて動かない。鼻の先に剥げかかった更紗の座布団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席している後ろに、生きた大頭がつくねんと着席しているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるために細君が勤工場から仕入れて来たのではない。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名譽を毀損せられたるもので、これを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰してまで、布団と睨めくらをしてゐる毬栗君は決して布団その物が嫌なのではない。実を云つと、正式に坐つた事は祖父さんの法事の時のほかは生れてから滅多にないのだ。先つきからすでにしびれ「#しびれ」に傍点「が切れかかつて少々足の先は困難を訴えているのである。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に控えているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷きと云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら多人数集まつた時もう少し遠慮すればいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきところへ気兼ねをして、すべき時には謙遜しない、否大に狼藉を働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

ところへ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭しく坊主に供した。平生なら、そらサウエジ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対してすら痛み入っている上へ、妙齡の女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙に氣取つた手つきをして茶碗を突きつけたのだから、坊主は大に苦悶の体に見える。雪江さんは襖をしめる時に後ろからにやにやと笑つた。して見ると女は同年輩でもなかなかえらいものだ。坊主に比すれば遥かに度胸が据わつてゐる。ことに先刻の無念にはらはらと流した一滴の紅涙のあとだから、このにやにやがさらに目立つて見えた。

雪江さんの引き込んだあととは、双方無言のまま、しばらくの間は辛防していたが、これでは業をするようなものだと思つた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云つたけな」

「古井……」

「古井? 古井何とかだ。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門 なるほど、だいぶ長い名だ。今の名じゃない、昔の名だ。四年生だつたね」

「いいえ」

「三年生か?」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙組」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れられるところではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気な主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年乙組に連結する事が出来なかつたのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうか「#「そうか」に傍点」と心の裏で手を拍つたのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やつて来たのか頓と推諒出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門君をもって嚆矢とするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人も大に閉口しているらしい。こんな面白くない人の家へただ遊びにくる訳もなからうし、また辞職勧告ならもう少し昂然と構え込みそうだし、と云つて武右衛門君などが一身上の用事相談があるはずがないし、どつちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参つたのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとつとつ表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云つと武右衛門君下を向いたぎり何にも言わない。元来武右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁する方で、頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋舌る事においては乙組中鏘々たるものである。現にせんだつてコロンバスの日本訳を教えると云つて大に主人を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その鏘々たる先生が、最前から吃の御姫様のようにもじもじしているのは、何か云わくのある事ではなくてはならん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。主人も少々不審に思つた。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話にくい事だ……」

「話にくい？」と云いながら主人は武右衛門君の顔を見たが、先方は依然として俯向になつてゐるから、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も聞いていやしない。わたしも他言はしないから」と穏やかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷つてゐる。

「いいだろつ」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、稗栗頭をむくりと持ち上げて主人の方をちよつとまぼしそうに見た。その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困つた事になつちまつて……」

「何が？」

「何がつて、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかつたんですけれども、浜田が借せ借せと云つもんですから……」

「浜田と云つのは浜田平助かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「艶書を送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃して、投函役になると云ったんです」

「何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をしたんだい」

「艶書を送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だつて、何の事だかちつとも分らんじやないか。もつと糸理を立てて話すがいい。元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田つて向横丁にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。 浜田が名前がなくちゃいけないって云いますから、君の名前をかけて云ったら、僕のじゃつまらない。古井武右衛門の方がいいって、それで、とうとう僕の名を借してしまつたんです」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありやしません。顔なんか見た事ありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云つて見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張つてて云うから、からかつてやつたんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送つたんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行って投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやつたんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか茫やりしてしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どつてしよう退校になるでしょうか」

「そつさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんが継母ですから、もし退校にでもなるうもんなら、僕あ困つちまつです。本当に退校になるでしょうか」

「だから滅多な真似をしないがいい」

「する気でもなかつたんですが、ついやってしまつたんです。退校にならないように出来ないでしょうか」と武右衛門君は泣き出しそんな声をしてしきりに哀願に及んでゐる。襖の蔭では前から細君と雪江さんがくすくす笑つてゐる。主人は飽くまでももつたいぶつて「そつさな」を繰り返してゐる。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。己を知る事が出来さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこんなはずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめてしまつてもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見当つき悪くいと見えて、平生から軽蔑している猫に向つてさえかような質問をかけるのである。人間は生意気なやうでもやはり、どこか抜けている。万物の霊だなどどこへでも万物の霊を担ひであるくかと思つと、これしきの事実が理解出来ない。しかも恬として平然たるに至つてはちと「#」據の「手へん」の代わりに「口へん」、「あひん」を催したくなる。彼は万物の霊を背中へ担いで、おれの鼻はどこにあるか教えしてくれ、教えてくれと騒ぎ立ててゐる。それなら万物の霊を辞職するかと思つと、どう致して死んでも放しそうちにしない。このくらい公然と矛盾をして平気でいられれば愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘んじなくてはならぬ。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。実はその鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一主人はこの事件に対してむしる冷淡である。武右衛門君のおやじさんがいかにやかましくつて、おつかさんがいかに君を継子あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのは大に趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になつたら、教師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう変化しようとも、主人の朝夕にはほとんど関係がない。関係の薄いとくには同情も自から薄い訳である。見ず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物であるとはなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生れて来た賦税として、時々交際のために涙を流して見たり、気の毒な顔を作つて見せたりするばかりである。云わばごまかし性表情で、実を云うと大分骨が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云つて、これは世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしる拙な部類に属すると云つてよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表してゐる。彼が武右衛門君に対して「そつさな」を繰り返してゐるのも這裏の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、けつして主人のよきな善人を嫌つてはいけぬ。冷淡は人間の本来の性質であつて、その性質をかくそうと力めぬのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人間を買ひ被つたと云わなければならぬ。正直ですら私底な世にそれ以上を予期するのは、馬琴の小説から志乃や小文吾が抜けだして、向う三軒両隣へ八犬伝が引き越した時でなくては、あてにならない無理な注文である。主人はまずこのくらいにして、次には茶の間で笑つてゐる女連に取りかかるが、これは主人の冷淡を一步向へ跨いで、滑稽の領分に躍り込んで嬉しがつてゐる。この女連には武右衛門君が頭痛に病んでゐる艶書事件が、仏陀の福音のごとくありがたく思われる。理由はないただありがたい。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがたいのである。諸君女に向つて聞いて御覧、「あなたは人が困るのを面白がつて笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思つるのは事実かも知れないが、人の困るのを笑つのも事実である。であるとすれば、これから私の品性を侮辱するよきな事を自分でお目にかけますから、何とか云つちやいやと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけつして不道德と云つてはならぬ。もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗つたものである。僕を侮辱したものである。と主張するよきなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立つてゐる。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり、蹴たり、どやされたりして、しかも人が振りむきせぬ時、平気でゐる覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快く思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたはずみから、とんだ間違をして大に恐れ入つてはいるよきなものの、かように恐れ入つてゐるものを陰で笑つるのは失敬だとくらいは思つても知れないが、それは年が行かない稚氣といふもので、人が失礼をした時に怒るの気が小さいと先方では名づけるそうだから、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちよつと紹介する。君は心配の権化である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもつて充滿せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとしてゐる。時々その団子っ鼻がびくびく動くのは心配が顔面神経に伝つて、反射作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きな鉄砲丸を飲み下したごとく、腹の中にいかんとすべからざる塊まりを抱いて、この両三日処置に窮してゐる。その切なさの余り、別に分別の出所もないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろつと思つて、いやな人の家へ大き

な頭を下げにまかり越したのである。彼は平生学校で主人にからかったり、同級生を煽動して、主人を困らしたりした事はまるで忘れていた。いかにからかおうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと信じているらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつてやむを得ずいただいてゐる、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来た訳だ。武右衛門君はただに我儘なるのみならず、他人は己れに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被つた仮定から出立してゐる。笑われるなどは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は監督の家へ来て、きつと人間について、一の真理を發明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもつて充たされるであろう。金田君及び金田令夫人をもつて充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時早く自覚して真人間になられん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られぬのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであろう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つてゐると、格子ががらがらとあいて、玄關の障子の蔭から顔が半分めつと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返してゐたところへ、先生と玄關から呼ばれたので、誰だろうとそつちを見ると半分ほど筋違に障子から食み出している顔はまさしく寒月君である。「おい、御道入り」と云つたぎり坐つてゐる。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御上がり」

「実はちよつと先生を誘ひに来たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては無間にあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行って虎の鳴き声を聞こうと思つんです」

「つまらんじゃないか、それよりちよつと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思つたものが、靴を脱いでそのそのそ上がつて来た。例のごとく鼠色の、尻につぎの中つたずばんを穿いているが、これは時代のため、もしくは尻の重いために破れたのではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもつて矚目された本人へ文をつけた恋の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右衛門君に軽く会釈をして椽側へ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたつて話らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々として物凄いでしょう」

「そつさな、昼間より少しは淋しいだろう」

「それで何でもなるべく樹の茂つた、昼でも人の通らない所を択つてあるといつて、いつの間にか紅塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらく佇んでゐるとたちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「そつ旨く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんですから、深夜闐寂として、四望人なく、鬼気肌に逼つて、魑魅鼻を衝く際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじゃありませんか、怖い時に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉の葉をことごとく振り落すような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりゃ物凄いだらう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きつと愉快だらうと思つんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに聞かなくなっちゃ、聞いたとはいわれなだらうと思つんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であることく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで黙然として虎の話を羨ましそくに聞いていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配なんです、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た。吾輩は思う仔細あつてちよつと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々と注いで、アンチモニーの茶托の上へ載せて、

「雪江さん、憚りさま、これを出して来て下さい」

「わたし、いやよ」

「どつして」と細君は少々驚ろいた体で笑いはたと留める。

「どつしてでも」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、傍にあつた読売新聞の上へのしかかるように眼を落した。細君はもつと心協商を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるものではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた泣き出すだらう。

「ちつとも恥かしい事はないじゃありませんか」と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托に引きかかつて、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳け出して行った。雑巾でも持つてくるの見だらう。吾輩にはこの狂言がちよつと面白かつた。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話している。

「先生障子を張り易えましたね。誰が張つたんです」

「女が張つたんだ。よく張れているだらう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになつたんですか」

「うんあれも手伝つたのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云つて威張つてるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こつちの方は平ですが、右の端は紙が余つて波が出来ていますね」

「あそこが張りたてのところで、もつとも経験の乏しい時に出来上つたところさ」

「なるほど、少し御手際が落ちますね。あの表面は超絶的曲線でどうい普通ファンクションではあわせません」と、理学者だけにむずかしい事を云つと、主人は

「そつさな」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とつてい見込がないと思ひ切つた武右衛門君は突然かの偉大なる頭蓋骨を畳の上に押しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「帰るかい」と云つた。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可愛想に。打ちやつて置くかと巖頭の吟でも書いて華厳滝から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令嬢のハイカラと生意気から起つた事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰つがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだコロンバスを訳して下さいって大に弱った」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をするんでしょう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？ なあに好い加減な事を云って訳してやった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりゃえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくなつて、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱つてるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非常に可哀想になりました。全体どうしたんです」

「なに愚な事さ。金田の娘に艶書を送つたんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえつて面白いです。いくら、艶書が降り込んだつて大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかつてやろうつて、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやつたんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函する、一人が名前を借す。で今来たのが名前を借した奴なんだがね。これが一番愚だね。しかも金田の娘の顔も見た事がないつて云つたんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりゃ、近來の大出来ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文をやるなんて面白いじゃありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、金田なんか、構やしません」

「君は構わなくても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになつて、急に良心に責められて、恐ろしくなつたものだから、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」

「へえ、それであんなに悄悄としているんですか、気の小さい子と見えますね。先生何とか云つておやんなすつたんでしょう」

「本人は退校になるでしょうかつて、それを一番心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道徳な事をしたから」

「何、不道德と云つほどでもありませんやね。構やしません。金田じゃ名譽に思つてきつと吹聴していますよ」

「まさか」

「とにかく可愛想ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちゃ、若い男を一人殺してしまいますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかびくびくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭見たように呑気な事を云つね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔し風だから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚じゃないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書を送るなんて、まるで常識をかいてるじゃないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいていませう。救つておやんなさい。功德になりますよ。あの容子じゃ華蔵の滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大僧共がそれどころじゃない、わるいいたずらをして知らん面をしていますよ。あんな子を退校させるくらいなら、そんな奴らを片っ端から放逐でもしなくっちゃ不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にちょっと帰国しなければならぬ事が出来ましたから、当分どこへも御伴は出来ませんから、今日は是非いっしょに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。ともかくも出ようじゃありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

「さあ行きましよう。今日は私が晚餐を奢りますから、それから運動をして上野へ行くところとちよつど好い刻限です」としきりに促がすものだから、主人もその氣になつて、いっしょに出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけらけらからからと笑つていた。

十一

床の間の前に碁盤を中に据えて迷亭君と独仙君が対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢るんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごとく山羊髯を引っ張りながら、こつ云つた。

「そんな事をするよ、せつかくの清戯を俗了してしまう。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない。成敗を度外において、白雲の自然に岫を出でて再々たることき心持ちで一局を」してこそ、個中の味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちゃ少々骨が折れ過ぎる。宛然たる列仙伝中の人物だね」

「無絃の素琴を弾じや」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やるじ」

「君が白を持つのかい」

「どつちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからば謙遜して、定石に「こいらから行く」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩むほどこたごたと黒白の石をならべる。そうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。高が一尺四方くらい面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結ばば草の庵にて、解ければもとの野原なりけり。入らざるいたずらだ。懐手をして盤を眺めている方が遙かに気楽である。それも最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う間際に覗いて見ると、いやはや御気の毒な様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて、御互にギューギュー云つてゐる。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じつとして身動きもせず、すくんでゐるよりほかに、どうする事も出来ない。碁を発明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらわれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質を代表していると云つても差支えない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出来るものとすれば、人間とは天空海潤の世界を、我からと縮めて、己れの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せぬように、小刀細工で自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑気なる迷亭君と、禅機ある独仙君とは、どう云つて見か、今日に限つて戸棚から古碁盤を引きずり出して、この暑苦しいたずらを始めたのである。さすがに御兩人御揃いの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとつて、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあつて、横豎の目盛りは一手ごと埋つて行くのだから、いかに呑気でも、いかに禅機があつても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這入つてくる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんや「＃」の間に「矢」が入り、その上に「けいがしら（弓）」が付く、478」肩をやと、一つ、こつ行くかな」

「そうおいでになつたと、よろしい。薫風南より来つて、殿閣微涼を生ず。こつ、ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つぐ気遣はなかつたと思つた。ついで、くりやるな八幡鐘をと、こつやったら、どうするかね」

「どうするも、こつするもないさ。一剣天に倚つて寒し。ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしまふ。おい冗談じゃない。ちよつと待つた」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こつなつてるところへは這入れるものじゃないんだ」

「這入つて失敬仕り候。ちよつとこの白をとつてくれたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「ずいぶんういせ、おい」

「Do you see the boy か。なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合だ。しばらく、しばらくつて花道から馳け出しつくるよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返待つたをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向後は旧に倍し待つたを仕り候。だからちよつとどけたまえと云うのだあね。君もよつほど強情だね。座禅なんかしたら、もう少し捌けそうなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じゃないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない」

「飛んだ悟道だ。相変わらず春風影裏に電光をきつてるね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは逆だ」

「八八八八もうたいてい逆かになっていい時分だと思つたら、やはりたしかなところがあるね。それじゃ仕方がないあきらめるかな」

「生死事大、無常迅速、あきらめるな」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へぴしゃりと一石を下した。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に輸贏を争っている、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんでその傍に主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に鯉節が二本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鯉節の出処は寒月君の懐で、取り出した時は暖たかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鯉節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日はかり前に国から帰つて来たのですが、いろいろ用事があつて、方々馳けあるいていたものですから、つい上がられなかったのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のごとく無愛嬌な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみやげを早く献上しないと心配ですから」

「鯉節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭いをかいで見る。

「かいだつて、鯉節の善悪はわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以かね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持つて来ないと心配だと云うのです」

「なぜ？」

「なぜつて、そりゃ鼠が食つたのです」

「そいつは危険だ。滅多に食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいいかじつたつて害はありません」

「全体どこで噛つたんだい」

「船の中です」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっしょに袋のなかへ入れて、船へ乗つたら、その晩にやられました。鯉節だけなら、いいのですけれども、大切なヴァイオリンの胴を鯉節と間違えてやはり少々噛りました」

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう見境がなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云つて依然として鯉節を眺めている。

「なに鼠だから、どこに住んでもそそっかしいのでしょう。だから下宿へ持って来てもまたやられそうだね。剣呑だから夜は寝床の中へ入れて寝ました」

「少しきたくないよ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじゃ綺麗にやなりそうもない」

「それじゃ灰汁でもつけて、こしこし磨いたらいいでしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだって？ ヴァイオリンを抱いて寝たって？ それは風流だ。行く春や重たき琵琶のだき心と云う句もあるが、それは遠きその上の事だ。明治の秀才はヴァイオリンを抱いて寝なくっちゃ古人を凌ぐ訳には行かないよ。かい巻に長き夜守るやヴァイオリンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこつちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で、新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た時にはもう少し生霊の機微に触れた妙音が出ます」

「そつかね、生霊はおがら」#「おがら」に傍点」を焚いて迎え奉るものと思つてたが、やっぱり新体詩の力でも御来臨になるかい」と迷亭はまだ暮をそつちのけにして調戲している。

「そんな無駄口を叩くとまた負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないのだから、僕も無聊でやむを得ずヴァイオリンの御仲間を仕るのさ」と云つと、相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こつちで待つてるんだ」と云い放つた。

「え？ もう打つたのかい」

「打つたとも、とうに打つたさ」

「どくく」

「この白をはずに延ばした」

「なめるほど。この白をはずに延ばして負けにけりか、そんならこつちはと」こつちは「こつちはこつちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目打ちたまえ」

「そんな暮があるものか」

「そんな暮があるものかなら打ちましよう。それじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置けかな。寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして噛るんだよ、もう少しいいのを奮発して買つたさ、僕が以太利亜から三百年前の古物を取り寄せてやるつか」

「どつか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は一喝にして迷亭君を極めつけた。

「君は人間の古物とヴァイオリンの古物と同一視しているんだらう。人間の古物でも金田某のときものは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのぞ。」さあ、独仙君どつか御早く願おう。けいませのせりぶじやないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と暮を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありません。仕方がないから、ここへ一目入れて目にしておこつ」

「おやおや、とうとう生かしてしまつた。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いささか駄弁を振つて肝胆を砕いていたが、やっぱり駄目か」

「当り前ぞ。君は打つたのじゃない。こまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。おい苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年漬を食つただけあつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。暮はずい、度胸は据つてる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が後ろ向のまま答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌をべろりと出した。独仙君は毫も聞せざるものごとく、「さあ君の番だ」とまた相手を促した。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思つのだが、よっぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「つむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌の趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃むところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。先生私しのヴァイオリンを習い出した顛末をお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい」

「なめに先生も何もあやしめない。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限つた事もなかるう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりゃ、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などがあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやつたものはほとんどなかつたのです。こ

とに私のおつた学校は田舎の田舎で麻裏草履さえないと云うくらいな質朴な所でしたから、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものはもちろん一人もありません

……」

「何だか面白い話が向つて始まつたようだ。独仙君いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あつてもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云つたつて、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わん几帳面な男だ。それじゃ一気呵成にやつちまおう。寒月君何だかよっぽど面白そうだね。あの高等学校だろう、生徒が裸足で登校するの

は……」

「そんな事はありません」

「でも、皆なはだして兵式体操をして、廻れ右をやるんで足の皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り飯を一個、夏蜜柑のように腰へぶら下げて来て、それを食つんだつて云うじゃないか。食つと云うよりむしる食いつくんだね。すると中心から梅干が一個出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩気のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと云うが、なるほど元気旺盛なも

のだね。独仙君、君の気に入りそつな話だぜ」

「質朴剛健でたのもしい気風だ」

「まだたのもしい事がある。あすこには灰吹きがないそつだ。僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐月峰の印のある灰吹きを買いに出たところが、吐月峰どころか、灰吹と名づくべきものが一個もない。不思議に思って、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の藪へ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、売る必要はないと澄まして答えたそつだ。これも質朴剛健の氣風をあらわす美譚だろつ、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、こゝへ駄目を一つ入れなくちゃいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。」「#「悻」の「禾」の代わりに「旬」488」独にして不羣なりと楚辞にあるが寒月君は全く明治の屈原だよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウエルテルさ。なに石を上げて勘定をしる？ やに物堅い性質だね。勘定しなくつても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし極りがつかないから……」

「それじゃ君やつてくれたまえ。僕は勘定所じゃない。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくつちや、先祖へ濟まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取つては白の穴を埋め、黒石を取つては黒の穴を埋めて、しきりに口の内で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に頑固なので、少しでも柔弱なものがおつては、他県の生徒に外間がわるいと云つて、むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来何だつて、紺の無地の袴なんぞ穿くんたい。第一あれからして乙だね。そうして塩風に吹かれつけているせいか、どうも、色が黒いね。男だからあれで済むが女があれば、さぞかし困るだろつ」と迷亭君が一人這入ると肝心の話はどうかへ飛んで行つてしまふ。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だつて一國中ごとく黒いものだから仕方がありません」

「因果だね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろつ。生じ白いと鏡を見るたんびに己惚が出ていけない。女と云うものは始末におえない物件だからなあ」と主人は喟然として大息を洩らした。

「だつて一國中ごとく黒ければ、黒い方で己惚はしませんか」と東風君がもつともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云つと、

「そんな事を云つと妻君が後でこ機嫌がわるいぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思つた。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそつだ。君は独身でいいなあ」と云つと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑つ。迷亭君は

「妻を持つとみんなそつ云う氣になるのさ。ねえ独仙君、君なども妻君難の方だろつ」

「ええ？ ちよつと待つた。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狭いと思つたら、四十六目あるか。もう少し勝つたつもりだったが、こしらえて見ると、たった十八目の差か。何だつて……」

「君も妻君難だろつと云つたや」

「アハハハ別段難でもないさ。僕の妻は元來僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代つてちよつと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の域に入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸福を完つしななければ天意に背く訳だと思つんだ。 がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはどうい絶対の境に這入れそうもない」

「妻を買えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分らないですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おうと思つて寒月君にさつきから経験譚をきいてゐるのです」

「そうそう、ウエルテル君のヴァイオリン物語を拝聴するはずだつたね。さあ話し給え。もう邪魔はしないから」と迷亭君がようやく鋒銚を収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな遊戯三昧で宇宙の真理が知れては大変だ。這裡の消息を知ろうと思えばやはり懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇える底の氣魄がなければ駄目だ」と独仙君はもつたい振つて、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかつたが、東風君は禅宗のぜの字も知らない男だから頓と感心したよつすもな

「へえ、そつかも知れませんが、やはり芸術は人間の渴仰の極致を表わしたものだと思ひますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめのまでには大分苦心をしたよ。第一買つのに困りましたよ先生」

「そつだろつ麻裏草履がない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支えないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買つておればすぐ見つかります。見つければ、すぐ生意氣だと云つので制裁を加えられます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と東風君は大に同情を表した。

「また天才か、どつか天才呼ばわりだけは御免蒙りたいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれを手に抱えた心持はどんなだろつ、ああ欲しい、ああ欲しいと思わない日は一日もなかつたのです」

「もつとまだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝つたものだね」と解しかねたのが主人で、「やはり君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙君ばかりは超然として鬚を撚している。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一」不審かも知れないですが、これは考えて見ると当り前の事です。なぜと云つとこの地方でも女学校があつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならぬのですから、あるはずですよ。無論いいのはありません。ただヴァイオリンと云つ名が辛うじてつくくらいのものであります。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ吊るしておくのです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、小僧の手が障つたりして、そら音を出す事があります。その音を聞くと急に心臓が破裂しそんな心持で、いても立ってもいらなくなるんです」

「危険だね。水癲癩、人癲癩と癲癩にもいるいる種類があるが君のはウエルテルだけあつて、ヴァイオリン癲癩だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ實際癲癩かも知れませんが、しかしあの音色だけは奇体ですよ。その後今日まで随分ひきましたがああのくらい美しい音が出た事がありません。そうさ何と形容していいでしょう。うううい言ひあらわせないですよ」

「琳琅」「#」「鏐」の「金へん」の代わりに「王へん」493「5」鏘として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出したのは独仙君であつたが、誰も取り合なかつたのは氣の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとうこの靈異な音を三度ききました。二度目にどうあってもこれは買わなければならぬと決心しました。仮令国のものから譴責されても、他県のものから軽蔑されても、よし鉄拳制裁のために絶息しても、まかり間違つて退校の処分を受けても、こればかりは買わずにいられないと思ひました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い込める訳のものじゃない。羨しい。僕もどうかして、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けているが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほど感興が乗らない」と東風君はしきりに羨やましがっている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すようなもののその時の苦しみはとうてい想像が出来るような種類のものではなかった。それから先生とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちよと十一月の天長節の前の晩でした。国のものは揃つて泊りがけに温泉に行きましたから、一人もいません。私は病氣だと云つて、その日は学校も休んで寝ていました。今晚こそ一つ出て行つて兼て望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でその事はかり考えていました」

「偽病をつかつて学校まで休んだのかい」

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりゃ」と迷亭君も少々恐れ入つた様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠でたまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を眠つて待つて見ましたが、やはり駄目です。首を出すと烈しい秋の日は、六尺の障子へ一面にあたつて、かんかんするには癩癩が起りました。上の方に細長い影がかたまって、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云ふのは」

「渋柿の皮を剥いて、軒へ吊るしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床を出て障子をあけて椽側へ出て、渋柿の甘干しを一つ取つて食いました」

「うまかつたかい」と主人は小供みたような事を聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐつて眼をふさいで、早く日が暮ればいいかと、ひそかに神仏に念じて見た。約三四時間も立つたと思つ頃、もうよかろうと、首を出すとあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまって、ふわふわする」

「そりゃ、聞いたよ」

「何返もあるんだよ。それから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食つて、また寢床へ這入つて、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やつぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦がずに聞いて下さい。それから約三四時間夜具の中で辛抱して、今度こそもうよかろうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたつて、上の方に細長い影がかたまって、ふわふわしている」

「いつまで行つても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、椽側へ出て甘干しの柿を一つ食つて……」

「また柿を食つたのかい。どうもいつまで行つても柿ばかり食つてて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いている方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも性急だから、話がしにくくて困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗に不平を洩らした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たいていにして切り上げましょう。要するに私は甘干しの柿を食ってはもぐり、もぐっては食い、とうとう軒端に吊るした奴をみんな食ってしまった」

「みんな食ったら日も暮れたらう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食って、もうよかるうと首を出して見ると、相変わらず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたって……」

「僕あ、もう御免だ。いつまで行っても果てしがない」

「話す私も飽き飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいの事業は成就するよ。だまってたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだらう。全体いつ頃にヴァイオリンを買おう気なんだい」とさすがの迷亭君も少し辛抱し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然として、あしたの朝まででも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色はさらさない。寒月君も落ちつき払つたもので

「いつ買おう気だとおっしゃるが、晩になりさえすれば、すぐ買ひに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものから、いえその時の私しの苦しみと云つたら、とうてい今あなた方の御じれになるどころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干しを食つても、まだ日が暮れないのを見て、#「さんずい」に「玄」、497.15」然として思わず泣きました。東風君、僕は実に情けなくって泣いたよ」

「そうだらう、芸術家は本来多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話はもっと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽な挨拶をしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「その日が暮れなくちゃ聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見えて云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境に入るところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよからう」

「では、少し無理なご注文ですが、先生の事ですから、枉げて、ここは日が暮れた事に致しましょう」

「それは都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと噴き出した。

「いよいよ夜に入ったので、まず安心とほつと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。私は性来騒々しい所が嫌ですから、わざと便利な市内を避けて、人迹稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛の庵を結んでいたので……」

「人迹の稀な#「人迹の稀な」に傍点」はあんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと、蝸牛の庵も仰山だよ。床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事實はどうでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だらう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたつた四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいが宿をとってるんでしょ」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰わせる。

「ええ学校がなかつたら、全く人迹は稀ですよ。……で当夜の服装と云うと、手織木綿の綿入の上へ金釦の制服外套を着て、外套の頭巾をすぼりと被つてなるべく人の目につかないような注意をしました。折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出るまでは木の葉で路が一杯です。一步運ぶごとにがさがさするのが気にかかります。誰かあとをつけて来そうでしたりません。振り向いて見ると東嶺寺の森がこんもりと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺寺と云うのは松平家の菩提所で、庚申山の麓にあつて、私の宿とは一丁くらいしか隔つていない、すこぶる幽邃な梵刹です。森から上はのべつ幕なしの星月夜で、例の天の河が長瀬川を筋違に横切つて末は、そうです、まず布哇の方へ流れています……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

「南郷街道をついに二丁来て、鷹台町から市内に這入って、古城町を通って、仙石町を曲って、喰代町を横に見て、通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に通り返して、それから尾張町、名古屋町、鯨鉾町、蒲鉾町……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と主人がじれったそうに聞く。

「楽器のある店は金善即ち金子善兵衛方ですから、まだなかなかです」

「なかなかでもないから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、店にはランプがかんかんもって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済まないんだから難渋するよ」と今度は迷亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかんかんですから、別段御心配には及びません。……灯影にすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った琴線の一部だけがきらきらと白く眼に映ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に動悸がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず駆け込んで、隠袋から蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中から五円札を二枚出して……」

「とつとつ買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、ましてばし、ここが肝心のところだ。滅多な事をしては失敗する。まあよそうと、際どいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか人を引つ張るじゃないか」

「引つ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方がありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ宵の口で人が大勢通るんですもの」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、君はよっぽど妙な男だ」と主人はぶんぶんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊しているんだから容易に手を出せませんよ。中には沈黙党などと号して、いつまでもクラススの底に溜まって喜んでるのがありますからね。そんなのに限って柔道は強いのですよ。滅多にヴァイオリンなどに手出しは出来ません。どんな目に逢うかわかりません。私だってヴァイオリンは欲しいに相違ないですけども、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾いて殺されるよりも、弾かずに生きてる方が楽ですよ」

「それじゃ、とつとつ買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買つさ。いやならいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうなものだ」

「えへへへ、世の中の事はそう、こつちの思うように埒があくもんじゃありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になったと見えて、ついと立って書斎へ這入ったと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと腹這になつて読み始めた。独仙君はいつの間にか、床の間の前へ退去して、独りで碁石を並べて一人相撲をとっている。せつかくの逸話もあり長くかかるので聴手が一人減り二人減つて、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い事にかつて辟易した事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて前同様の速度をもつて談話をつづける。

「東風君、僕はその時こう思ったね。とつていこりや宵の口は駄目だ、と云つて真夜中に来れば金善は寝てしまつからな駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そつて金善がまだ寝ない時を見計らつて来なければ、せつかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計つのがむずかしい」

「なるほどいこりやむずかしがる」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積つたね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰つて出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が咎めるようで面白くないし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間はぶらぶらあるいているうちに、いつの間にか経つてしまふのだがその夜に限つて、時間のたつのが遅いの何のつて、千秋の思とはあんな事を云つのだらうと、しみじみ感じました」とさも感じたらしい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき置炬燵と云われた事があるからね、また待たる身より待つ身はつらいともあつて軒に吊られたヴァイオリンもつらかつたつが、あてのない探偵のようにつらつら、まごつている君はなあさらつらいだらう。累々として喪家の犬のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは實際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔しの芸術家の伝を読むような気がして同情の念に堪えない。犬に比較したのは先生の冗談だから気に掛けずに話を進行したまえ」と東風君は慰藉した。慰藉されなくても寒月君は無論話をつづけるつもりである。

「それから徒町から百騎町を通つて、両替町から鷹匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の灯を計算して、紺屋橋の上で巻煙草を二本ふかして、そつして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。 紺屋橋を渡り切つて川添に東へ上つて行くと、按摩に三人あつた。そつして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝居がかりだね。君は落人と云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと思つたらね」

「可哀相にヴァイオリンを買うのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんな悪い事しても罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶穌もあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人はいいですが十時にならないのは弱りました」

「もつ一返、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかかんさせさ。それでもあつつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞かから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑つた。

「そつ先を越されては降参するよりほかはありません。それじゃ一足飛びに十時にしてしまひましょう。さて御約束の十時になつて金善の前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすが目貫の両替町もほとんど人通りが絶えて、向からくる下駄の音さえ淋しい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに潜り戸だけを障子にしています。私は何となく犬に尾けられたような心持で、障子をあけて這入るのに少々薄気味がわるかつたです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をはずして、「おいもうヴァイオリンを買つたかい」と聞いた。「これから買つところですよ」と東風君が答えると、「まだ買わないのか、実に永いな」と独り言のように云つてまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半埋めてしまつた。

「思い切つて飛び込んで、頭巾を被つたままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周囲に四五人小僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云つと、一番前にいて、私の顔を覗き込むようにしていた小僧がへえと覚束ない返事をして、立ち上がつて例の店先に吊るしてあつたのを三四挺一度に卸して来ました。いくらかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじゃないか」

「みんな同価格と聞くと、へえ、どれでも変りはございません。みんな丈夫に念を入れて拵らえてございますと云いますから、蝦蟇口のなかから五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この間、店のものは話を中止してじつと私の顔を見ています。顔は頭巾でかくしてあるから分る気遣はないのですけれども何だか気がせいで一刻も早く往来へ出たたくて堪りません。ようやくの事風呂敷包を外套の下へ入れて、店を出たら、番頭が声を揃えてありがとと大きな声を出したのにはひやっとしました。往来へ出てちよつと見廻して見ると、幸誰もいないようですが、一丁ばかり向から三三人して町内中に響けとばかり詩吟をします。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて濠端を薬王師道へ出て、はんの木村から庚申山の裾へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰って見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が気の毒そうに云つと、「やつと上がった。やれやれ長い道中双六だ」と迷亭君はほつと一息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢つちや根気負けをするね」

「根気はとにかく、ここでやめちや仏作つて魂入れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論隨意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買つてしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくつてもいい」

「まだ売るとこじゃありません」

「そんならなお聞かなくつてもいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざつと話してしまおう」

「ざつとでなくつてもいいから緩くり話したまえ。大変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、まず第一に困つたのは置き所だね。僕の所へは大分人が遊びにくるから滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまふ。穴を掘つて埋めちや掘り出すのが面倒だらう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家なもの」

「そりや困つたらう。どこへ入れたい」

「どこへ入れたと思つ」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家についてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「やど」

「この行ね」

「何だこの、 Quid aliud est mulier nisi amicitiae inimica」 # 「amicitiae」の最後の ae は繋がつていふ 508-4】 # 「amicitiae」は原本では「amicitiae」の誤植】……、このやど君羅旬語じゃなにか」

「羅旬語は分つてるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅旬語が読めると云つてるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取つて、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりゃ何だい」

「読める事は読めるが、こりゃ何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見る」

「見るは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だい」

「まあ羅旬語などはあとにして、ちよつと寒月君のこの高話を拝聴仕ろうじゃないか。今大変なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う安宅の関へかかってくるんだ。ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乗気になって、またヴァイオリンの仲間入りをする。主人は情けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて来たものだそうです」

「そいつは古物だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だつて調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。秋淋しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

「先生今日は大分俳句が出来ますね」

「今日に限つた事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣と云つたら、故子規子も舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。

「なにつき合わなくても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云つので、東風先生あきれて黙つてしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困つた。ただ出すだけなら人目を掠めて眺めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。弾かなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちよつと木槿垣を一重隔つて南隣りは沈瀬組の頭領が下宿しているんだから剣呑だね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりゃ困る。論より証拠音が出るんだから、小督の局も全くこれでしくじつたんだからね。これがぬすみ食をするとか、贖札を造るとか云うなら、まだ始末がいいが、音曲は人に隠しちや出来ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待つた。音さえ出なけりやと云うが、音が出なくても隠したくないのがあるよ。昔し僕等が小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木藤さんと云う人がいてね、この藤さんが大変味淋がすきで、ビールの徳利へ味淋を買つて来ては一人で楽しみに飲んでたのさ。ある日藤さんが散歩に出たあとで、よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲んだところが……」

「おれが鈴木味淋などを飲むものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。

「おや本を読んてるから大丈夫かと思つたら、やはり聞いてるね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。西君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中真赤にはれ上つてね。いやもう二目とは見られないありさま……」

「黙っている。羅旬語も読めない癖に」

「八八八八、それで藤さんが帰つて来てビールの徳利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅の方に朱泥を練りかためた人形のようにかたくなっていらあね……」

三人は思わず哄然と笑い出した。主人も本をよみながら、くすくすと笑った。独り独仙君に至っては機外の機を弄し過ぎて、少々疲労したと見えて、碁盤の上へのしかかって、いつの間にもやら、ぐうぐう寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔し姥子の温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつた事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつたがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが、ただ困つた事が一つ出来てしまった。と云つのは僕は姥子へ着いてから三日目に煙草を切らしてしまつたのさ。諸君も知つてるだろうが、あの姥子と云つのは山の中の一軒屋でただ温泉に這入つて飯を食うよりほかにもこつも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がないなと思つていなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前で胡坐をかいて呑みたいだろうと云われないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勸弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、豎に吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢の枕と逆に吹いたり、または鼻から獅子の洞入り、洞返りに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云つのは」

「衣装道具なら見せびらかすのだが、煙草だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰つたらいいでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰つちやいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで愉んだ」

「おやおや」

「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだと思つて一心不乱立つづけに呑んで、ああ愉快だと思つてもなく、障子がかかりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主ね」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着を忘れたのに気がついて、廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやしまいし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませんか。煙草の御手際じゃ」

「ハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあげると二日間の溜め呑みをやつた煙草の煙りがむつとするほど室のなかに籠つてるじゃないか、悪事千里とはよく云つたものだね。たちまち露見してしまつた」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草を五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉でよろしければどうぞお呑み下さいませと云つて、また湯壺へ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云つのでしょうか」

「江戸趣味だが、呉服屋趣味だか知らないが、それから僕は爺さんと大に肝胆相照らして、二週間の間面白く逗留して帰つて来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になつたんですか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちよつどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生、何とか云いましたね、え、独仙先生、独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちゃ、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちゃ毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯を伝わって垂涎が一筋長々と流れて、蝸牛の這った迹のように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わが懶きに似たりか。ああ、いい心持ちに寝たよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちつと起きちゃどうだい」

「もつ、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを どうするんだったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当がつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃の素琴を弾する連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きいきいびいびい近所合壁へ聞えるのだから大に困ってるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオリンを弾く方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地の白牛を見ればすぐ分るはずだが」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだろうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちにおいて、つづらの蓋をとって見たり、かぶせて見たり一日そわそわして暮らしてしまいたがいよいよ日が暮れて、つづらの底で「#」の「蟋」の「悉」の代わりに「車」、S.S.S.I.」が鳴き出した時思い切って例のヴァイオリンと弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先から鏝元までしらべて見る……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が冷評した。

「実際これが自分の魂だと思つと、侍が研ぎ澄した名刀を、長夜の灯影で鞘拵をする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるとふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癪癪だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかるつ」と云う。独仙君は困ったものだと言つ顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの傍へ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この間約五分間、つづらの底では始終「#」の「蟋」の「悉」の代わりに「車」が鳴いていると思つて下せよ……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。幸いヴァイオリンも疵がない。これなら大丈夫とぬつく立ち上がる……」

「どっかへ行くのかい」

「まあ少し黙つて聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない……」

「おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱い込んで、草履を突かけたまま二三歩草の戸を出たが、ましては……」

「そらおいでなすつた。何でも、どっかで停電するに違ないと思つた」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御ませ返しになってははなはだ遺憾の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方がない。いいかね東風君、二三歩出たがまた引き返して、国を出るとき二円二十銭で買った赤毛布を頭から被ってね、ふっとランプを消すと君真暗闇になって今度は草履の所在地が判然しなくなった」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリン。右へ右へと爪先上りに庚申山へ差しかかっていると、東嶺寺の鐘がボーンと毛布を通して、耳を通して、頭の中へ響き渡った。何時だと思つ、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道八丁を大平と云う所まで登るのだが、平生なら臆病な僕の事だから、恐しくってたまらないところだけれども、一心不乱となると不思議なもので、怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸が一杯になってるんだから妙なもさ。この大平と云う所は庚申山の南側で天気の良い日に登って見ると赤松の間から城下が一目に見下せる眺望佳絶の平地で、そうさ広さはまあ百坪もあるうかね、真中に八畳敷ほどの一枚岩があつて、北側は鵜の沼と云う池つづきで、池のまわりは三抱えもあるうと云う樟ばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟脳を採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でもあまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布を敷いて、ともかくもその上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第次第に腹の底へ沁み渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖いと云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜くと、余るところは皎々冽々たる空霊の気だけになる。二十分ほど茫然としているうちに何だか水晶で造つた御殿のなかに、たった一人住んでるような気になった。しかもその一人住んでる僕の中から、いやからだがかりじゃない、心も魂もことごとく寒天か何かで製造されたことく、不思議に透き徹してしまつて、自分が水晶の御殿の中にいるのだが、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだが、わからなくなつて来た……」

「飛んだ事になつて来たね」と迷亭君が真面目にからかうあとに付いて、独仙君が「面白い境界だ」と少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝まで、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫やり一枚岩の上に坐つてたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きてるか死んでるか方角のつかない時に、突然後ろの古沼の奥でギヤーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢を、野分と共に渡つたと思つたら、はつと我に帰つた……」

「やつと安心した」と迷亭君が胸を撫でおろす真似をする。

「大死一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする。寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰つてあたりを見廻わすと、庚申山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。はてな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声にしては、この辺によもや猿はおるまい。何だろう？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これを解釈しようと云うので今まで静まり返っていたやからが、紛然雑然然然としてあたかもコンノート殿下歓迎の当時に於ける都人士狂乱の態度を以て脳裏を駆け廻る。そのうちに総身の毛穴が急にありのよう地震動をはじめめる。これはたまらん。いきなり、毛布を頭からかぶつて、ヴァイオリンを小脇に掻い込んでひよると一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁を麓の方へかけ下りて、宿へ帰つて布団へくるまつて寝てしまった。今考えてもあんな気味のわるかつた事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギヤーだもの。君だつてきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻わして大得意のようすである。

「なに沢山のうちを二本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかるう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないで済むところをわざわざ鉢合せるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦歌を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によって、こちらへ向け易くてもよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあって自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、黙ってれば沢山です。なあに黙っても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかって一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔をして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽き足らなかったと見えて、なお探偵について下のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間に雨戸をはずして人の所有品を偷むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑らして人の心を読むのが探偵だ。ダンピラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとつてい人の風上に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したって怖くはありません。珠磨りの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあつて元氣旺盛なものだね。しかし苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金田君のときものは何の同類だらう」

「熊坂長範くらいなものだらう」

「熊坂はよかつたね。一つと見えたる長範が二つになってぞ失せにけりと云つが、あんな烏金で身代をつくつた向横丁の長範なんかは業つく張りの、慾張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣はないぜ。あんな奴につかまつたら因果だよ。生涯たたるよ、寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああら物々し盗人よ。手並はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち入るかつて、ひどい目に合せてやりませあ」と寒月君は自若として宝生流に氣「#「炎」に「館」の右部分が「へん」に付く、SS-12」を吐いて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいい探偵のようになる傾向があるが、どう云つ訳だらう」と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしよう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答える。

「人間に文明の角が生えて、金米糖のよつにいららすからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもつたい振つた口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の類ではない。……」

「おや大分むずかしくなつて来たよ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云ふよ。」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に。」

「ところがあつた。大にある。君なぞはせんだつては刑事巡査を神のごとく敬い、また今日は探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾の変怪だが、僕などは終始一貫父母未生前からただ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男だ。」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせんだつてで今日は今日だ。自説が変らないのは發達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともになると可愛いと云うところがある。」

「おれが探偵。」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう。」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云う事を知り過ぎていてと云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評して彼は鏡のかかつた部屋に入つて、鏡の前を通る毎に自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬時とも自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、よく今日の趨勢を言いあらわしている。寝てもおれ、覚めてもおれ、このおれが至るところにつつまつてゐるから、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちよつど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくらさなければならぬ。悠々とか従容とか云う字は劃があつて意味のない言葉になつてしまふ。この点において現代の人は探偵的である。泥棒的である。探偵は人の目を掠めて自分だけうまい事をしようとする商売だから、勢自覚心が強くならなくては出来ぬ。泥棒も捕まるか、見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己れの利になるか、損になるかと寝ても醒めても考えつづけだから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソして墓に入るまで一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の咒詛だ。馬鹿馬鹿しい。」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。こんな問題になると独仙君はなかなか引込んでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく我意を得ている。昔しの人己れを忘れると教えたものだ。今の人は己れを忘れるなと教えるからまるで違つて。二六時中己れと云う意識をもつて充滿している。それだから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な事はない。三更月下入無我とはこの至境を詠じたものさ。今の人は親切をしても自然をかいてゐる。英吉利のナイフなどと自慢する行為も存外自覚心が張り切れそつになつてゐる。英国の天子が印度へ遊びに行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、その王族が天子の前とも心づかずに、つい自国の我流を出して馬鈴薯を手攫みで皿へとつて、あとから真赤になつて愧じ入つたら、天子は知らん顔をしてやはり二本指で馬鈴薯を皿へとつたそつだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後をつける。「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗つ水を硝子鉢へ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐつと飲んでしまつた。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフリンガー・ボール「#」は下付き小文字」の水を一息に飲み干したそつだ。そこで並みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ。」

「こんな癖もあるよ」とだまつてる事の嫌な迷亭君が云つた。「カーライルが始めて女皇に謁した時、宮廷の礼に嫺わぬ変物の事だから、先生突然どうですと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の後ろに立つていた大勢の侍従や官女がみんなくすくす笑い出した。出したのではない、出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ちよつと何か相図をしたら、多勢の侍従官女がいつの間にかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失わなかつたと云うんだが随分御念の入つた親切もあつたもんだ。」

「カーライルの事なら、みんなが立つても平気だつたかも知れませぬよ」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従つて殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くつて、どうしておだやかになれるものか。なるほどちよつと見るとごくしづかで無事なよつだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちよつど相撲が土俵の真中で四つに組んで動かないようなものだらう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか。」

「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえって罪はなかつたが、近頃じゃなかなか巧妙になつてくるからなおお自覚心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上を廻つて来る。「ベーコンの言葉に自然の力に従つて始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上つてくるから不思議だ。ちよつど柔術のよくなものさ。敵の力を利用して敵を斃す事を考える……」

「または水力電気のようなものですね。水の力に逆らわれないでかえつてこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取つた。「だから貧時には貧に縛せられ、富時には富に縛せられ、憂時には憂に縛せられ、喜時には喜に縛せられるのさ。才人は才に斃れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩持ちは癩癩を利用してさえずればすぐに飛び出して敵のぺてんに罹る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君はにやにや笑いながら「これでなかなかそう甘くは行かないのだよ」と答へたら、みんな一度に笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業で斃れ、自分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は 娘は見た事がないから何とも云えないが まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑んだくれの類だろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから心無所住而生其心と云うのは大事な言葉だ、そう云う境界に至らんと人間は苦しくてならん」と独仙君しきりに独り悟つたよつな事を云つた。

「そう威張るもんじゃないよ。君などはことによると電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言下に道破する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であることく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は超然として出世間である。

「君のように云つとつまり図太いのが悟つたのだね」

「そつさ、禅語に鉄牛面の鉄牛心、牛鉄面の牛鉄心と云つのがある」

「そつして君はその標本と云う訳かね」

「そつでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云つ病気が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

「迷亭と独仙が妙な掛合をのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。」

「どつして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちゃなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまつて聞くがいい。どつして借りた金を返さずに済ますかが問題であることく、どつしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であつた。錬金術はこれである。すべての錬金術は失敗した。人間はどつしても死ななければならん事が分明になつた」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまつて聞いている。いいかい。どつしても死ななければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよからう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きて居る事が死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである。ただたいいのものは智慧が足りないから自然のままに放擲しておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間から崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方に付いて種々考究の結果、斬新な名案を呈出するに違ない。だからして世界向後の趨勢は自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法をもってこの世を去るに違ない」

「大分物騒な事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の後には死と云えば自殺よりほかに存在しないもののように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になつて、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公徳などと云う野蛮の遺風を墨守してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己れの好むところは人に施して可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にしてもよるしい。ことに表の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進めるのが諸君の義務である。もっとも昔と違つて今日は開明の時節であるから槍、薙刀もしくは飛道具の類を用いるような卑怯な振舞をしてはなりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつて、からかい殺すのが本人のため功徳にもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒をもって天下の公民を撲殺してある。……」

「なぜです」

「なぜつて今の人間は生命が大事だから警察で保護するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺してくれるのさ。もっとも少し気の利いたものは大概自殺してしまつから、巡査に打殺されるような奴はよくよく意気地なしが、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。それで殺されたい人間は門口へ張札しておくのだね。なにただ、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけておけば巡査が都合のいい時に巡つてきて、すぐ志望通り取計ってくれるのさ。死骸かね。死骸はやっぱり巡査が車を引いて拾つてあるのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の冗談は際限がありませんね」と東風君は大に感心している。すると独仙君は例の通り山羊髯を気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫の夢幻を永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云つと、すぐ冗談にしてしまつ」

「燕雀焉んぞ大鵬の志を知らんやですね」と寒月君が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔付で話を進める。

「昔しスペインにコルドヴァと云う所があつた……」

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、その風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女がごとく出て来て河へ這入つて水泳をやる……」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若の別なく河へ飛び込む。但し男子は一人も交らない。ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮色蒼然たる波の上に、白い肌が模糊として動いている……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体が出さえすれば前へ乗り出して来る。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といっしょに泳ぐ事も出来ず、さればと云って遠くから判然その姿を見る事も許されないのを残念に思つて、ちよつといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は大に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に賄賂を使つて、日没を合図に撞く鐘を一時前前に鳴らした。すると女などは浅墓なものだから、そら鐘が鳴つたと云うので、めいめい河岸へあつまつて半褌袴、半股引の服装でさぶりさぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものの、いつもと違って日が暮れない」

「烈しい秋の日がかんかんしやしなやか」

「橋の上を見ると男が大勢立って眺めている。恥ずかしいがどうする事も出来ない。大に赤面したそつだ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだから気をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こつ云う詐欺師の小説があつた。僕がまあここで書画骨董店を開くとする。で店頭に大家の幅や、名人の道具類を並べておく。無論贗物じゃない、正直正銘、うそいつわりのない上等品ばかり並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる。そこへ物数奇な御客さんが来て、この元信の幅はいくらだねと聞く。六百円なら六百円と僕が云うと、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよ」

「そつ云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝居気のない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云つとしておくんだ。そこで僕がなに代は構いませんから、お氣に入つたら持つていらつしやいと云う。客はそうも行かないからと躊躇する。それじゃ月賦でいただきますましよう、月賦も細く、長く、どつせこれから御鼻肩になるんですから。いえ、ちつとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらいじゃ。何なら月に五円でも構いませんと僕が極きさく「# きさく」に傍点」に云つんだ。それから僕と客の間に二三の問答があつて、とど僕が狩野法眼元信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たよつですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥だよ。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるのだけ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年で皆済になると思つ、寒月君」

「無論五年でしよう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思つるか短かいと思つるか、独仙君」

「一念万年、万年一念。短かくもあり、短かくもなしだ」

「何だそりや道歌か、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返してると、六十一回にもやはり十円払う氣になる。六十二回にも十円払う氣になる。六十三回、回を重ねるにしたがつてどつしても期日がくれば十円払わなくては氣が済まないようになる。人間は利口のようなだが、習慣に迷つて、根本を忘れると云う大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのわ」

「八八八八八八八八、それほど忘れっぽくもならないでしよう」と寒月君が笑つと、主人はいささか真面目で、

「いやそつ云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費を毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向から断わられた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そつ云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の先刻述べた文明の未来記を聞いて冗談などと笑つものは、六十回でいい月賦を生涯払つて正当だと考える連中だ。ことに寒月君や、東風君のような経験の乏しい青年諸君は、よく僕らの云つ事を聞いてたまされないうつしなくちやいけな」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ、寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえばですね。今苦沙弥君が迷亭君が、君が無断で結婚したのが穩当でないから、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおなお御免蒙ります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変つてゐる。昔は御上の御威光なら」#「なら」に傍点「何でも出来た時代です。その次には御上の御威光でも」#「でも」に傍点「出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上のしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかられるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔しと違って、御上の御威光だから」#「だから」に傍点「出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です。昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味があるじゃないですか」

「そう云う知己が出てくると是非未来記の続きが述べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上の御威光を笠にきたり、竹槍の二三本を恃にして無理を押し通そうとするのは、ちょうどカゴへ乗って何でも蚊でも汽車と競争しようとおせる、時代後れの頑物。まあわからずやの張本、烏金の長範先生くらいのもので、黙って御手際を拝見していればいいが、僕の未来記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して、遠き将来の趨勢を卜すると結婚が不可能の事になる。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一國を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかつた。あつても認められなかつた。それががらりと変ると、あらゆる生存者がごとごと個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だと心の中で喧嘩を買いながら行き違ふ。それだけ個人が強くなつた。個人が平等に弱くなつた。人がおのれを害する事が出来なくなつた点において、たしかに自分は強くなつたのだが、滅多に人の身の上に手出しがなくなつた点においては、明かに昔より弱くなつた。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もありがたくないから、人から一毫も犯されまいと、強い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやろうと、弱いところは無理にも拵げたくなる。こうなると人と人の間に空間がなくなつて、生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかりにふくれ返つて苦しがつて生存している。苦しいから色々な方法で個人と個人との間に余裕を求め、かくのごとく人間が自業自得で苦しんで、その苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入つて見給え。一家一門ごとごとく一軒のうちにござるしてゐる。主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間でもお互に我儘を張れるだけ張らなければ損になるから勢い両者の安全を保持するためには別居しなければならぬ。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われてゐる。たまたま親子同居するものがあつても、息子がおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払つたりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晩日本へも是非輸入しなければならぬ。親類はとくに離れ、親子は今日に離れて、やつと我慢しているようなもの個性の発展と、発展につれて夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいつしよに在るから夫婦だと思つてゐる。それが大きな見違ひさ。いつしよに在るためにはいつしよに在るに充分なだけ個性が合わなければならぬ。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云つて、目には夫婦二人に見えるが、内実は一人前なんだからね。それだから借老同穴とか号して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蛮なもののさ。今はそうは行かないやね。夫はあくまで夫で妻はどうしたつて妻だからね。その妻が女学校で行灯袴を穿いて牢平たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら妻じゃやない人形だからね。賢夫人になれば個性は凄いほど発達する。発達すればするほど夫と合わなくなる。合わなければ自然の勢夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截然たるしきりがあつて、それも落ちついて、しきりが水平線を保つていれればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のようになつたり下がつたりする。ここにおいて夫婦雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分つてくる。……」

「それで夫婦がわかるんですか。心配だな」と寒月君が云つた。

「わかる。きつとわかる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいつしよにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲してゐるものは夫婦の資格がないように世間から目されてくね」

「すると私などは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は際どいところでのろけを云つた。

「明治の御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているからちゃんとして今から独身でいるんだよ。人は失恋の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視るところは実に憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記の続きを話すところさ。その時一人の哲学者が天降って破天荒の真理を唱道する。その説に曰くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると結果に陥る。いやしくも人間の意義を完からしめんためには、いかなる価を払うとも構わなからこの個性を保持すると同時に発達せしめなければならん。かの陋習に縛せられて、いやいやながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であって、個性の発達せざる蒙昧の時代はいざ知らず、文明の今日なおこの弊害に陥って恬として顧みないのはなほだしき謬見である。開化の高潮度に達せる今代において二個の個性が普通以上に親密の程度をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがない。この親易き理由はあるにも関わらず無教育の青年男女が一時の劣情に駆られて、漫に合「丞」の下に「D」、5453」の式を挙ぐるは悖徳没倫のはなほだしき所為である。吾人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思い切った調子でびたりと平手で膝頭を叩いた。「私の考では世の中に何が尊いと云って愛と美ほど尊いものはないと思います。吾々を慰藉し、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗練するのは全く両者の御蔭であります。だから吾人はいつの世いずくに生れてもこの二つのものを忘れることが出来ません。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になります。美は詩歌、音楽の形式に分れます。それだからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなからうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云つた通りちゃんと滅してしまつたら仕方がないと、あきらめるさ。なに芸術だ？ 芸術だつて夫婦と同じ運命に帰着するのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。君がいくら新体詩家だつて踏張つても、君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくつちや、君の新体詩も御気の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろう。鴛鴦歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸いに明治の今日に生れたから、天下が挙つて愛読するのだから……」

「いえそれほどありません」

「今でさえそれほどなければ、人文の発達した未来即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読まないのじゃない。人々々々のおの特別な個性をもつてから、人の作つた詩文などは一向面白くないのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃんとあらわれている。現今英国の小説家中でもっとも個性のいちじらしい作品にあらわれた、メレヅスを見給え、ジエームスを見給え。読み手は極めて少ないじゃないか。少ない訳さ。あんな作品はあんな個性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道徳になる時分には芸術も完く滅亡さ。そうだろう君のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなつた日にや、君と僕の間には芸術も糞もないじゃないか」

「そりやそつですけれども私はどうも直覺的にそつ思われないうです」

「君が直覺的にそつ思われなければ、僕は曲覺的にそつ思つまでぞ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか担ぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころがなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちよつと見るとあれがあんな男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅多に寝返りも打てないから、大将少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむしろ毒の毒になる。あの声は勇猛精進の声じゃない、どうしても怨恨痛憤の音だ。それもそのはず昔は一人えらい人があれば天下翕然としてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホームマーでもチエヴィ・チエーズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違つたらね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実があつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから、苦味はないはずだ。ニーチェの時代はそつは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰も英雄と立てやしない。昔は孔子がたつた一人だつたから、孔子も幅を利かしたのだが、今は孔子が幾人もいる。ことによると天下がごとごとく孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張つても圧が利かない。利かないから不平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちよつといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなつた時、王者の民蕩々たりと云う句の価値を始めて発見するから。無為にして化すと云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟つたつてその時はもつしようがない。アルコール中毒に罹つて、ああ酒を飲まなければよかつたと考えるよつなものさ」

「先生方は大分厭世的な御説のようだが、私は妙ですね。いろいろ伺つても何とも感じません。どう云うものでしょう」と寒月君が云つ。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出した。

「妻を持って、女はいいものだななどと思つて飛んだ間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前書齋から持つて来た古い本を取り上げて「この本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分つて」と云つて、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマス・ナッシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻の悪口を云つたものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻も這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いてるかね」

「みんな聞いてるよ。独身の僕まで聞いてるよ」

「アリストートル曰く女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「八八八八、こりゃ面白い本だ。さああとを読んだ」

「或る人問う、いかなるかこれ最大奇蹟。賢者答えて曰く、貞婦……」

「賢者つてだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出てくる。或る人問う、妻を娶るいずれの時にしておすべきか。ダイオジニス答えて曰く青年は未だし、老年はすでに遅し。とある」

「先生樽の中で考えたね」

「ピサゴラス曰く天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

「希臘の哲学者などは存外迂濶な事を云うものだね。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入って焼けず、水に入つて溺れず……」だけで独仙君ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとるけずだろ」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無字をもつて世界における一大厄とし、マールカス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅を飾るの性癖をもつてその天稟の醜を蔽うの陋策にもとづくものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某におくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし得ざるものあらず。願わくは皇天憐を垂れて、君をして彼等の術中に陥らしむるなかれと。彼また曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責と云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの刻限だろ」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」と云つた。

「奥さん、奥さん。いつの間に御帰りでですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」
答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハ」と迷亭君は遠慮なく笑っていると、門口をあらあらしくあけて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がしたと思ったら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、多々良三平君の顔がその間からあらわれた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸立てのフロックを着て、すでに幾分か相場を狂わせてる上へ、右の手へ重そつに下げた四本の麦酒を纏ぐるみ、鯉節の傍へ置くと同時に挨拶もせず、どっかと腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚ましい武者振である。

「先生胃病は近來いいですか。こうやって、うちにはかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばつてんが、顔色はよかなかごたる。先生顔色が黄ですばい。近頃は釣がいいです。品川から舟を一艘雇つて 私はこの前の日曜に行きました」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくつても面白いのかい」

「浩然の気を養つたい、あなた。どうですあなたがた。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乗り廻してあるくのですからね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、鯨か人魚でも釣らなくつちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないですね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そつですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近來よつぽど常識に言んで来ました。どうしてもあんな所にゐると、傍が傍だから、おのずから、そつなつてしまつてす」

「どつなつてしまつのだ」

「煙草でもですね、朝日や、敷島をふかしては幅が利かんです」と云いながら、吸口に金箔のついた埃及煙草を出して、すばすば吸い出した、

「そんな贅沢をする金があるのかい」

「金はなかつてんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸つてると、大変信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも楽な信用でいい、手数がかからない。軽便信用だね」と迷亭が寒月にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうならんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と思つたですたい。しかし先方で是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極めました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配してします」

「どつか御遠慮なく」と寒月君が云つと、主人は

「貰いたければ貰つたら、いいだろう」と曖昧な返事をする。

「それはおめでたい話だ。だからどんな娘を持って心配するものはないんだよ。だれか貰つと、さつき僕が云つた通り、ちゃんとこんな立派な紳士の御智さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例の「ごとく調子づく」と三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃御入用ですか」

「いつでもいいです。今まで作つたうちでもいいです。その代りです。披露のとき呼んで御馳走するです。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲んだ事がありますか。シャンパンは旨いです。先生披露会のために楽隊を呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。しつかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらいじゃ承知しそもない男だ」

「シャンパンもですね。一瓶四円や五円のじゃよくないです。私の御馳走するのはそんな安いじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、こつ云つ御礼はどうです」と云いながら上着の隠袋のなかから七八枚の写真を出してはらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立っているのがある。坐っているのがある。袴を穿いているのがある。振袖がある。高島田がある。「ごとく妙齡の女子ばかりである。」

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりゃどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願ひましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪です」

「そつか」

「この方は性質が極いいです。年も若いです。これで十七です。これなら持参金が千円あります。こつちのは知事の娘です」と一人で弁じ立てる。

「それをみんな貰つ訳にやいかないでしょうが」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君一夫多妻主義ですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者です」

「何でもいから、そんなものは早くしまつたら、よかるう」と主人は叱りつけるように言い放つたので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。前祝に角の酒屋で買って来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を拍つて下女を呼んで栓を抜かせる。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は恭しくコップを捧げて、三平君の艶福を祝した。三平君は大に愉快的な様子で「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云つ。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大礼ですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がありませんか。羽織と袴くらいどうでもしますたい。ちと人中へも出るがよかたい先生。有名な人に紹介して上げます」

「真平ご免だ」

「胃病が癒りますばい」

「癒らんでも差支えない」

「そげん頑固張りなさるならやむを得ません。あなたはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るなら媒酌人たるの栄を得たいくらいものだ。シャンパンの三々九度や春の宵。なに仲人は鈴木藤さんだつて？なるほどそこいらだろつと思つた。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろつ。ただの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうです」

「僕ですか、一竿風月閑生計、人釣白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作つた曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですね。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御両人の前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んで真赤になつた。

短かい秋の日はよつやく暮れて、巻煙草の死骸が算を乱す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えている。さすが呑気の連中も少しく興が尽きたと見えて、「大分遅くなつた。もう帰るつか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄関に出る。寄席がはねたあとのように座敷は淋しくなつた。

主人は夕飯をすまして書齋に入る。妻君は肌寒の襦袢の襟をかき合せて、洗い晒しの不到着を縫つ。小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行つた。

呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つたようでも独仙君の足はやはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめてとうとうお国から奥さんを連れて来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定めし退屈だろつ。東風君も今十年したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだろつ。三平君に至つては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい。生涯三鞭酒を御馳走して得意と思つ事が出来れば結構だ。鈴木藤さんはどこまでも転がって行く。転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものよりも幅が利く。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになつた。自分ではこれほどの見識家はまたあるまいと思つていたが、先達てカール・ムルと云う見ず知らずの同族が突然大氣「#「炎」に「餡」の右部分が「へん」に付く、S.S.G.T.」を揚げたので、ちよつと吃驚した。よくよく聞いて見たら、実は百年前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊になつて吾輩を驚かせるために、遠い冥土から出張したのだらうだ。この猫は母と対面をするとき、挨拶のしるしとして、一匹の肴を啣えて出掛けたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分で食つてしまつたと云うほどの不孝ものだけあつて、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作つて主人を驚かした事もあるらうだ。こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌でなしはとうに御暇を頂戴して無何有郷に帰臥してもいいはずであつた。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでゐる。秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するらうだ。油断すると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやるつ。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。硝子の中のもの湯でも冷たい気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静かに火消壺とならんでいるこの液体の事だから、唇をつけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかしものは試した。三平などはあれを飲んでから、真赤になって、熱苦しい息遣いをした。猫だつて飲めば陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにおく事だ。死んでからあんな残念だと墓場の影から悔やんでもおつつかない。思いつて飲んで見ると、勢よく舌を入れてびちゃびちゃやっつて見ると驚いた。何だか舌の先を針でさされたようにびりりとした。人間は何の酔興でこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れぬ。どうしても猫とビールは性が合わない。これは大変だと一度は出した舌を引込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のように良薬口に苦しと言つて風邪などをひくと、顔をしかめて変なもの飲む。飲むから癒るのか、癒るのに飲むのか、今まで疑問であつたがちよつどいい幸だ。この問題をビールで解決してやる。飲んで腹の中までになくなつたらそれまでの事、もし三平のように前後を忘れるほど愉快になれば空前の儲け者で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やっつける決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しつかり眠つて、またびちゃびちゃ始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールの飲み干した時、妙な現象が起つた。始めは舌がびりびりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従つてようやく楽になつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやっつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも拭うがごとく腹内に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動靜を伺つたため、じつとすくんでいた。次第にからだか暖かになる。眼のふちがぼつとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を食えと云う気になる。金田のじいさんを引掻いてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起つたらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだらうと思ひながら、あてもなく、そこかしこ散歩するようになつた。しんないような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだから、あるいてるのだから判然しない。眼はあけるつもりだが重い事夥しい。こつなればそれまでだ。海だろつが、山だろつが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思つ途端ぼちやんと音がして、はつと云ううち、やられた。どうやられたのか考える間がない。ただやられたなと気がつくか、つかないのには滅茶苦茶になつてしまつた。

我に帰つたときは水の上に浮いている。苦しいから爪でもつて矢鱈に掻いたが、掻けるものは水ばかりで、掻くとすぐもぐつてしまふ。仕方がないから後足で飛び上つておいて、前足で掻いたら、がりりと音がしてわずかに手応があつた。ようやく頭だけ浮くからどこだろつと見廻すと、吾輩は大きな糞の中に落ちてゐる。この糞は夏まで水菜と称する水草が茂つていたがその後鳥の勘公が来て菜を食い尽した上行水を使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近頃は半分減つて鳥が見えないなと先刻思つたが、吾輩自身が鳥の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁までは四寸余もある。足をのばしても届かない。飛び上つても出られない。呑気にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりりと糞に爪があたるのみで、あつた時は、少し浮く気味だが、すべればたちまちくつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりりをやる。そのうちからだか疲れてくる。気は焦るが、足はさほど利かなくなる。ついににはもぐるために糞を掻くのか、掻くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こつ考えた。こんな呵責に逢うのはつまり糞から上へあがりたければかりの願である。あがりたければ山々であるが上がれないのは知れ切つてゐる。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面からだが浮いて、浮いた所から思つ存分前足をのばしたつて五寸にあまる糞の縁に爪のかかりようがない。糞のふちに爪のかかりようがないけれども掻いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られつこない。出られないと分り切つてゐるものを出ようとするのは無理だ。無理を通せつとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つてゐるのは馬鹿氣でゐる。

「もつとぞつ。勝手にするがいい。がりりはこれぎりご免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になつてくる。苦しいのだからありがたいのだから見当つかない。水の中にいるのだから、座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどうしていても差支えはない。ただ楽である。吾輩そのものすらも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉塵して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

底本：「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年12月1日第一刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月に刊行

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二）、五）、田尻幹二（三）、高橋真也（四）、七、八、十、十一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）
1999年9月17日公開
2001年1月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。